意図的な窒息

アメリカにおける新たな処刑方法の物語

ジェフ・フッド

© 2025 ジェフ・フッド

本書のすべての権利はジェフ・フッドに帰属します。著作権者および出版社の書面による許可なく、本書のいかなる部分も、電子的、機械的、複写、録音、その他いかなる形式または手段によっても、情報検索システムへの保存または転載を含め、複製することを禁じます。

初版発行：2025年

発行：コンプリシット・プレス Complicit Press

Copyright © 2025 Jeff Hood All rights reserved.

友人であり学者でもあったロバート・ダナム氏へ。
彼の比類なき洞察力と寛大で啓発的な声は、この国における死刑制度への理解を形作った。

感謝の表明

この本が存在するのは愛ゆえだ。目を背けることを拒む愛、最も暗い場所にまで入り込む愛、そして、たとえ耐え難い代償を払うことになっても、証言することを譲らない愛。

妻のエミリー・フッド博士へ：あなたは、あらゆる処刑、あらゆる悪夢、あらゆる処刑室への移送、あらゆる州への移送を通して、私たちの家族の支えでした。あなたは私が去るのを見送り、私が以前と同じ姿で戻ってこられるかどうかも分からなかったでしょう。あなたが私たちにしてくれたことを言葉で表すことはできません。この本は、私のものであると同時に、あなたのものでもあるのです。

刑務所に収監され、国家によって殺害された男たちの絵を携えて帰ってきた父親のもとで育った子供たち、ジェフ、フィリップ、クインリー、マデリン、そしてルーカスへ。君たちの忍耐、質問、そして私を父親以外の何者でもないと見なしてくれたことに感謝します。君たちのおかげで、私は死刑のない世界を信じ続けることができるのです。

編集者のキャット・ボドリーさんへ。あなたは、山のような苦しみ、怒り、そして証言を、世界が受け入れられる形にまとめ上げてくれました。あなたの存在は、すべての章、すべての文章、すべての言葉に刻まれています。あなたがいなければ、この本は存在しなかったでしょう。感謝してもしきれません。

私が処刑に付き添った11人の男たちへ：スコット・アイゼンバー、アーサー・ブラウン、アンソニー・サンチェス、ケイシー・マクウォーター、ケネス・スミス、マイケル・スミス、デビッド・ホージャー、エマニュエル・リトルジョン、スティーブン・ネルソン、アンソニー・ウェインライト、そしてアンソニー・ボイド。この本はあなたたちの記憶のために書かれたものです。あなたたちは息を引き取るまで私を信頼してくれました。あなたたちはあの部屋で何が起こったのか、真実を語ってほしいと私に頼みました。私は最善を尽くしました。そしてこれからも諦めません。

創設以来、この奉仕活動を祝福してくださったジェームズ・セント・ジョージ司教様へ。司教様の牧会的なご指導と揺るぎないご支援のおかげで、私はこの場所に入り、そして去るために必要な精神的な基盤を得ることができました。この聖職を私に託してくださったことに、心より感謝申し上げます。

この活動を始めるきっかけを与えてくださったヘレン・プレジャン修道女へ。あなたは、死刑囚を支援することの意味を世界に示してくださいました。あなたの証言は、私に新たな扉を開いてくれました。私を啓発してくださり、ありがとうございます。

エスター・ブラウンさんへ。あなたのたゆまぬ支援と友情のおかげで、この活動は目に見える形でも目に見えない形でも継続することができました。決して諦めないあなたに感謝します。

私の弁護士であり、生涯の友であるグレッグ・ガードナーへ。あなたは、この部署が必要としていた時に弁護してくれ、私一人では戦えなかった戦いを共に戦ってくれました。いつもそばにいてくれて、本当にありがとう。

生涯の精神的な友であるデイビッド・レムリーへ。あなたは暗闇の中で私と共に歩み、光へと戻る道を見つける手助けをしてくれました。

アブラハム・ボノウィッツ氏へ。彼はこの運動の最前線で誰よりも長く活動し、たゆまぬ組織活動によって、私たちのすべての活動を可能にする抵抗運動の基盤を築き上げてきました。ありがとう、兄弟。

この運動への献身が私たち全員を力づけてくれるアリ・サリバンへ。あなたの活動は重要です。

これらの物語を伝えることに尽力してくださった映画制作者のジョエル・フェンデルマン氏とジェームズ・サンチェス氏に、言葉だけでは届かない人々の目や耳に真実を届けてくださったことに感謝いたします。

フロリダで私を支えてくださったデュレル・ワトキンス司教とロバート・グリフィン司教に、心から感謝申し上げます。お二人のご臨席と祈りに感謝いたします。

このプロジェクトで多大な協力をしてくれた、友人であり死刑囚の生存者であるバート・ジョンソンに感謝します。

ノア・デュボワさん、私の活動を支援する組織を作るお手伝いをしていただき、ありがとうございました。

本書の出版を可能にしてくださった、お二名の匿名寄付者の方々へ。お二人はご自身のことだとお分かりでしょう。このプロジェクトへの信頼、そしてこれらの物語は必ず語られるべきだという確信が、これらの言葉に命を吹き込んでくれました。心より感謝申し上げます。

そして、全国で死刑判決を受けたすべての男女（特に、毎日私の活動をフォローしてくださっている方々）、ここで名前を公表できない方々――闘い続ける方々、待ち続ける方々、希望を捨てない方々――私は皆さんのことを心に留めています。私たちは皆さんのことを忘れていません。皆さんは一人ではありません。闘いは続きます。

コンテンツ

0.0: 序文: 息切れしながら書いた手紙

0.1：確実な解決策を求めて：オクラホマ州で窒素低酸素症が発生

1.0：ケネス・ユージン・スミスの処刑：窒素性低酸素症とアラバマ州における死刑制度の変遷

1.1：2024年1月25日に行われたケネス・スミスの処刑に関する個人的な記録

*スミス対ハム事件*における第11巡回控訴裁判所のジル・プライヤー判事の反対意見：道徳的および憲法上の評価

2.0：アラン・ユージン・ミラーの処刑

3.0：キャリー・デール・グレイソンの処刑：挑戦、正常化、そして窒素による3度目の死

3.1：アラバマ州におけるR・オースティン・ハファカー・ジュニア判事と窒素性低酸素症の司法解釈

4.0：デメトリウス・フレイザーの処刑：州間拘留、政府の権限、そして窒素吸入による4人目の死

5.0：ジェシー・ホフマン・ジュニアの処刑：ルイジアナ州における初の窒素関連死と、実験的方法の州間への拡散

5.1：シェリー・D・ディック判事とホフマン事件における窒素性低酸素症に対する司法上の保護

5.2：窒素性低酸素症に対する司法判断の比較：アラバマ州のハファカー判決とルイジアナ州のディック判決

5.3：窒素低酸素による処刑時の呼吸マスク：設計、機能、証言

6.0：グレゴリー・ハントの処刑：被告「ノー・ピティ」党による訴訟、そして窒素による6人目の死

7.0：ジェフリー・トッド・ウェストの処刑：恩赦、「ほんのわずかな仕草」、そして窒素による7度目の死刑

8.0：アンソニー・ボイドの処刑：「これまでで最長」、ホープ・プロジェクト、そしてソトマヨール判事の反対意見

8.1：2025年10月23日に行われたアンソニー・ボイドの処刑に関する個人的な記録

8.2：エミリー・C・マークス判事と*ボイド対ハム事件*：窒素低酸素症に対する司法支援と限界

ハファカー、ディック、マークスによる比較法医学研究

8.4：*ボイド対ハム事件におけるソニア・ソトマイヤー判事の反対意見*：憲法上および倫理上の分析

8.5：窒素低酸素症に対する法的アプローチ：比較分析

9.0：結論：死の機械におけるイノベーションの重み

10.0：追記：息の淵での最後の考察

0.0：序文：息切れしながら書いた手紙

私は、司祭、研究者、そして証人という、切り離すことのできない三つの使命によって形作られた人間として、あなたにこの手紙を書いています。この三つの使命は、私を幾度となく恐怖の核心、国家が人々の命を奪う場所へと導いてきました。私は、二度と息をすることのない人々の手を握り、彼らを殺すために考案された手順を研究し、そのような苦しみの存在をすぐに否定する世界で真実を語ってきた者として、この手紙を書いています。それぞれの役割は互いに影響し合い、それぞれが私の背負う道徳的重荷を増し、それぞれが私が目にしたことを語り継ぐ切迫感を掻き立てます。

この本は、私の記憶に永遠に刻み込まれたあの瞬間から生まれた。アメリカで最新の処刑方法であるニトロ低酸素症は、「人道的」「清潔」「迅速」、さらには「苦痛なし」と世間に紹介された。しかし、これらの言葉は嘘だ。なぜなら、私はそこにいたからだ。ガスのシューという音を聞き、命をかけて闘う体の震えを感じ、決して訪れることのない慈悲を静かに懇願する目を見たからだ。これらの光景が夜な夜な私を悩ませ、安息の時をもたらさないからだ。ケニーの胸が激しく上下し、アンソニーの足が震え、部屋の無菌の白い壁が、私自身の悪夢の壁と化しているからだ。

これは単なる回顧録ではない。単なる神学でもない。これは学術研究であり、証言であり、介入である。そしてこれは、国家がこれらの人々の生と死を消し去ることを私が拒否する意思表示なのだ。

何よりもまず、私が執筆する目的はただ一つ、制御不能な窒素の実態を余すところなく伝えることで、窒素吸入による処刑を終わらせることです。

I. 最初の実験：ケネス・ユージン・スミスの死

2024年1月25日、アラバマ州がケネス・ユージン・スミスを処刑した時、同州は新たな種類の恐怖をもたらした。議員たちは科学を、裁判所は人道を、当局は慎重さを口にした。しかし、私がホルマン刑務所の独房の敷居をまたいだ瞬間、そうした婉曲表現はすべて消え去った。そこに残っていたのは、担架に縛り付けられ、死のために設計されたものではない工業用呼吸器を装着した男と、恐怖と混じり合う、金属的な無菌状態の悪臭だけだった。

司祭として、私の役割は人間性を守り、国家が消し去ろうとした人間性を証言することだった。学者として、私の役割は記録し分析することだった。証人として、私の役割は真実を直視し、嘘を信じないことだった。

窒素ガスが循環し始めるとすぐに、ケニーの体は激しい痙攣に襲われた。胸は激しく上下し、頭は突然跳ね上がり、マスクの奥で声が出なかった。脚はまるで反抗するかのようにストラップに食い込み、体が激しく震えたため、担架が振動した。

それは平和ではなかった。苦痛もなかった。それは窒息だった。

白い壁に伸びる影が、容赦ない恐怖と闘う男のグロテスクな姿を映し出していたのを覚えている。私の全身が介入しろと叫んでいた。しかし、私は無力だった。ただ見ていることしかできなかった。

そしてその晩、私がそこを去った後も、その光景は私の記憶に深く刻み込まれた。ケニーの大きく見開かれた目、決して訪れることのない安らぎを必死に求める姿が、私を苦しめ続けた。それは、眠っている時も、祈っている時も、目覚めている時のあらゆる思考の中に、私につきまとった。

II. アンソニー・ボイドの処刑：繰り返される恐怖

ケニーの死が、私が目撃する最後の窒素注射による死刑執行となることを祈った。しかし、アンソニー・ボイドが私に助けを求め、私は彼の処刑に付き添うことに同意した。そして、事態はさらに悪化した。なぜなら、国家は何の教訓も学んでおらず、この恐怖は繰り返され、そしてその繰り返しは避けられないものとなっていたからだ。

アンソニーと私は一緒に祈り、聖書を読み、希望について語り合った。しかし、彼の目には未来への不安が宿っていた。それは私が既に感じ取っていた確信だった。

窒素ガスが循環すると、同じパターンが繰り返されたが、以前よりもさらに恐ろしいほど鮮明になった。彼女の体は縮み、ねじれた。胸は激しく上下し、拘束具の圧力で足が崩れ落ちた。彼女の手は虚空に、かすかな空気の息吹にしがみついた。部屋は彼女の周りで縮んでいくように感じられた。白い壁はあらゆる動き、あらゆる喘ぎ声を映し出し、それらを絶望の合唱へと増幅させた。

聖職者として、私は無力感を覚えた。神の存在は部屋の外に漂っているように感じられた。学者として、私はあらゆる動き、あらゆる痙攣、国家の約束のあらゆる違反を記録した。目撃者として、私は心の中で叫び声を上げた。文明社会がこのような光景を容認し、それを人間的行為と呼ぶことができるのかと、激しい怒りに駆られた。

アンソニーの死は、単なる個人的な悪夢ではなく、私たち家族全体の悪夢を映し出したものでした。そして、それは今もなお私の夢を悩ませ続けています。彼の足が上下する様子、胸が大きく上下する様子、ベルトを握りしめる手――それらは忘れられない光景です。まるで決して癒えることのない傷のように、私の意識に深く刻み込まれています。

III．三つの使命：司祭、学者、証人

これらの死を経験するということは、同時に3つの役割を担うことを意味する。

1. **司祭：**私はそこにいて、優しく、揺るぎない態度でいなければならない。二度と握られることのない手を握る。告解を聞く。赦しを与える。聖体祭儀を執り行う。最も過酷な状況下でもなお失われない人間の尊厳を深く考える。
2. **研究者：**私は証拠を記録し、分析し、提示しなければならない。荒い息遣い。反射的な動き。脚の上げ下げ。胸の上下動。これらは抽象的なものではない。これらは国家の主張に反する証拠だ。あらゆる細部が重要だ。なぜなら、それぞれが「人道的」「迅速」「苦痛なし」という主張に反する事実だからだ。
3. **証人：**沈黙を好む社会に、私は真実を語らなければならない。壁や仮面、形式的な手続きの裏に隠れていても、私はその恐怖を非難しなければならない。婉曲表現や嘘を拒否し、世界がその名の下に行われていることを見届けるよう要求しなければならない。

司祭は苦しみを見る。学者はそれを描写する。証人はそれを明らかにする。

それぞれ単独では不十分だが、これらが合わさることで、国家による死刑執行の恐ろしさを突きつけられる。私はこの3つの要素を基に、包括的な歴史的・体験的記述、そして窒素注入による処刑に関する分析を執筆した。

IV．考察：恐怖、悪夢、そして記憶

窒素中毒による低酸素症を目撃することは、精神的に過酷な試練だ。恐怖は最後の呼吸で終わるわけではない。それは予告もなく、眠りや祈りの中に忍び寄ってくる。目が覚めると、肺から空気が引き裂かれるような感覚に襲われる。夢の中では、担架が傾き、ベルトが切れ、マスクがずれ、一緒にいた男たちが身じろぎ、再び息を切らす。蛍光灯がちらつき、窒素のシューという音が、説明のつかない叫び声へと変わる。

これは比喩ではない。これは記憶だ。これはトラウマだ。

倫理的に言えば、この方法は擁護しがたい。国家は客観性を主張し、科学的厳密さを求め、人間性を要求する。しかし、目に見える苦しみ――痙攣する手足、激しく上下する胸、パニックで飛び出しそうな目――は、別の種類の真実を要求する。神学的に言えば、これは危機である。仮面は、恐怖、パニック、そして生存のための闘いといった、最も人間的な経験を覆い隠している。学術的に言えば、これは人間の死に関するいかなる主張に対しても経験的に矛盾する。社会的に言えば、これは暴力を隠蔽しようとする国家の姿を映し出す鏡である。

悪夢は個人的なものだけではない。それは社会的なものでもある。すべての死は、社会が耳を傾けようとしない警告であり、無視された道徳的な傷であり、他者の苦しみに対する私たちの無関心の結果なのだ。

V. 本書が存在する理由：証言への呼びかけ

中立は不可能だ。沈黙は共犯に等しい。この本のどのページも、忘却を拒否し、国家による死の隠蔽を拒否する意思表示だ。裁判所も、議会も、そして国民も、窒素性低酸素症を隠蔽したり、無視したり、正当化したりすることはできるだろう。しかし、私にはできない。私はあまりにも多くのものを見てきたからだ。

懐疑的な読者の皆様へ：あなたは死刑制度を支持しているかもしれません。特定の犯罪は死刑に値すると考えているかもしれません。国家が他の手段を放棄し、ついに人道的な代替手段、すなわち窒素酸素欠乏症を見つけたと考えているかもしれません。大臣という私の立場が判断に影響を与え、死刑反対の立場が私の結論をあらかじめ決定づけていたと考えているかもしれません。

私があなたにお願いしたいのはただ一つ、他のどんな状況でも適用するのと同じ基準で、以下の文章を読んでほしいということです。

州当局が窒素性低酸素症は「無痛」だと主張しているにもかかわらず、数分間続く激しい痙攣が証拠によって示されている場合、これらの要素は慎重に検討されるべきである。当局が「迅速な」介入を約束しているにもかかわらず、目に見える苦痛の正確な持続時間が記録されている場合、介入スケジュールは再評価されなければならない。当局がそれを「人道的」と表現しているにもかかわらず、患者の体が痙攣を誘発する処置に抵抗し、ストレッチャーが揺れるほど激しく拘束具に抵抗する場合、その言葉の意味そのものが問われなければならない。

私は拷問を目撃するつもりであの部屋に入ったわけではありません。国家の約束が守られることを願って、つまり、もし処刑が行われるとしても、少なくとも長引く苦痛なしに執行されることを願って入ったのです。しかし、私が目にした光景は、その希望を打ち砕きました。

本書で提示されている内容は解釈ではなく、観察結果です。使用されている医学用語は修辞的なものではなく、事実に基づいた記録です。法的分析は弁護ではなく、明らかな被害の証拠があるにもかかわらず下された裁判所の判決を検証するものです。これらの詳細は、多岐にわたる情報源から得られたものです。

この本を読み終えても、理論的には死刑制度を支持することはできるでしょう。しかし、窒素欠乏による低酸素症が実際には人道的だと信じ続けることができるでしょうか。私が見た死体は、他の多くの人々と同じように、嘘をつきません。私が聞いた喘ぎ声は、他の多くの人々と同じように、説明がつきません。科学は、政府関係者の「人道的」という主張を単純に否定しているのです。

証言を読んでください。証拠を検証してください。そして、私や他の人々が目撃したことが、あなたが聞かされたことと一致するかどうかを、ご自身で判断してください。

VI. 経営

本書は、司祭の証言であり、学者の記録であり、目撃者の警告でもある。本書は、その恐ろしい出来事を詳述し、儀式化された暴力に関する神学的考察を提供し、身体が痙攣に苦しみ窒息させられるような殺害方法は決して「人道的」とは言えないという道徳的理念を擁護する。

以降の章では、窒素吸入による処刑を一つ一つ詳しく解説していきます。法律で認められていたこと、医学的証拠が明らかにしたこと、そして国家が隠蔽したこと。個人の証言、法的文書、学術的な分析。それぞれの処刑は、聖職者、学者、目撃者の視点から検証されます。それぞれの死は、国家が認めた暴力と窒息の事例研究となるのです。

VII. 生者と死者への約束

アンソニー・ボイドの処刑後、私は夜の街へ出た。ほんの一瞬、ただ呼吸をした。ほんの一瞬、彼が二度と吸うことのできない空気を、私はただ吸うという特権を自分に許した。

そしてその瞬間、私はケニー、アンソニー、彼らと同じように亡くなった他の6人、そして州が次に殺害しようとしている人々に約束した。彼らの物語を隠したままにはしない。窒素窒息（窒素低酸素症）の真実を生きている人々に明らかにする。

この文章が人々の良心を揺さぶりますように。隠されてきた真実を明らかにしますように。死の仕組みを揺るがしますように。正義の名の下に、また一人、縛られ、人工呼吸器を装着され、窒息死させられる前に、窒素性低酸素症に終止符を打ちますように。

これが全貌だ。相次ぐ処刑、相次ぐ呼吸、相次ぐ裁判。すべては2024年1月25日、アラバマ州が窒素性低酸素症を世界に暴露した夜、ケネス・ユージン・スミスから始まった。

悲しみとともに、確信とともに、そして私が目撃した最後の息遣いの記憶とともに、

ジェフ・フッド
ニューヨーク、ニューヨーク
2025年11月17日

0.1：確実な解決策を求めて：オクラホマ州で窒素低酸素症が発生

I. 信頼の危機

2015年初頭、オクラホマ州議会は死刑の適用に関して重大な局面を迎えていた。その1年足らず前の2014年4月29日、クレイトン・ロケットの死刑執行は大失敗に終わり、州が人道的に死刑を執行できるという国民の信頼を揺るがした。ロケットは40分以上も苦痛にのたうち回り、うめき声を上げ、担架から起き上がろうとしたが、致死注射薬が効果を発揮せず、息絶えた。[1] 本来は管理された臨床的な手順となるはずだったものが、目に見える苦痛の光景となり、多くの目撃者に深い衝撃を与えた。

この公的な惨事とその法的影響を受けて、議員たちは同様の失敗を防ぐことができる代替の処刑方法を模索し始めた。広範なメディア報道により、地方の問題にとどまる可能性があった事態は、死刑制度の存続可能性をめぐる全国的な議論へと発展した。全国各地のメディアは、真に人道的な処刑方法の可能性を問う記事を掲載した。法的異議申し立てが急増し、事態の緊急性は明白になった。致死注射がもはや目に見える苦痛なしに死をもたらすことができなくなった場合、オクラホマ州は、州全体の死刑制度を揺るがしかねない、実際的かつ倫理的な危機に直面することになる。

政治的圧力は極めて大きかった。死刑制度の支持者たちは、度重なる失敗が司法介入や法律による廃止につながることを恐れていた。一方、反対派はロケットの処刑を、死刑制度の根本的な欠陥の証拠として挙げた。こうした緊迫した状況下で、州議会議員たちは国民の信頼を回復し、実行可能な解決策を見出すことができることを示すために、迅速な行動を迫られた。

致死注射の失敗に代わる方法を模索する中で、議会は革新的な方法、すなわち不活性窒素低酸素症に目を向けた。この方法を強く支持するマイク・クリスチャン議員は、窒素低酸素症について驚くべき自信をもって次のように述べた。「第一に、便利だ。第二に、効果的だ。第三に、人道的だ。そして革新的だ。」[2] クリスチャン議員は自信を強調するため、この方法を繰り返し「絶対確実」[3] と表現し、人為的ミスや物流上の問題でプロセスが損なわれることはないと示唆した。この修辞的な選択は重要だった。絶対確実と称することで、クリスチャン議員は実質的に、オクラホマ州がこれまでの死刑執行方法を悩ませてきたすべての問題に対する解決策を見つけたと約束したのである。

その論理の単純さは一見説得力があるように思えた。酸素を窒素に置き換え、急速に意識を失わせ、致死注射を非常に問題にしていた合併症なしに死に至らしめる。クリスチャンによれば、窒素低酸素症は、オクラホマ州などで致死注射を悩ませてきた物流、法律、倫理上の問題

を回避できるという。[4]　入手困難な薬剤は必要なく、医療従事者が化学物質を投与することへの心配もなく、ロケットの長引く苦痛の一因となった静脈アクセス問題のリスクもない。

II. シンプルさの約束

窒素低酸素症の正当化は、一見単純で科学的に妥当に見える生理学的理論に基づいていた。その基本原理は、純粋な窒素を吸入すると肺内の酸素が置き換えられ、古典的な窒息に伴うパニック反応を引き起こすことなく、低酸素症によって意識を失うというものだった。[5]　この区別は人類の防衛にとって極めて重要だった。人が正常に呼吸できないと、血液中に二酸化炭素が蓄積し、窒息感、息切れ、極度のパニックといった激しい生理学的警報が発せられる。これが溺死や絞殺が非常に恐ろしい理由である。

この理論の支持者たちは、窒素低酸素症は根本的に異なると主張した。窒素は不活性ガスであり、人体はそれを危険と認識せず、二酸化炭素の蓄積も引き起こさないため、人は眠りに落ちるかのように穏やかに意識を失うだけである。心臓麻酔医としての訓練を受けたアービン・イェン上院議員は、この議論に貴重な医学的専門知識をもたらし、窒素低酸素症は（通常呼吸困難を引き起こす）二酸化炭素の蓄積、過換気、呼吸不全時のパニックを防ぐと議員たちに保証した。[6]　彼の医学的権威はこの主張にかなりの重みを与えた。このように、資格のある医師がこの理論の科学的妥当性を説明したのである。

窒素低酸素症は、残酷で異常な刑罰を禁じる合衆国憲法修正第8条の下で精査に耐えうる方法だと、支持者たちは考えていた。クリスチャンはさらに、窒素は致死注射に使用される薬剤の不足（製薬会社は死刑執行を目的とした薬剤の販売をますます拒否するようになっていた）とロケットのような処刑失敗のリスクの両方を解決すると主張した。[7]　窒素は、複数の問題を同時に解決する実用的な方法のように思われた。ガスは容易に入手でき、安価で、投与には医学的専門知識は必要なかった。一体何が問題になるだろうか？

理論的な議論は説得力があった。致死注射（特定の薬剤の入手、静脈注射の訓練、3種類の薬剤カクテルの投与の監督が必要）とは異なり、窒素低酸素症は驚くほど簡便に見えた。死刑囚の顔にマスクを装着し、窒素ガスを流せば、あとは待つだけ。ガスが残りの作業を担ってくれる。この簡便さは、実用的な利点としてだけでなく、この方法の信頼性の証明としても提示された。

III. 反対意見と倫理的懸念

これらの議論はすべての議員を納得させたわけではなかった。一部の議員は、議論の核心に触れる倫理的な不安を表明し、新たな執行方法の模索は、何が効果的で何が効果的でないかという単なる技術的な考察を超えた道徳的な問題を提起していると指摘した。[8]　これらの反対意見は、一部の議員を不安にさせる疑問を提起した。国家は執行方法において革新を起こすべきなのか？これは政府が介入すべき種類の問題なのか？

オクラホマ州での議論を追っていた法律専門家たちも懸念を表明した。死刑執行方法の専門家として知られるデボラ・W・デンノ氏は、窒素低酸素症を「実験的」と呼び、3つの大きな問題点を指摘した。すなわち、人体臨床試験の欠如、重要な詳細が定義されていない不正確な執行手順、そしてこの方法が実際に支持者が主張する効果を生み出したかどうかを確認することが不可能であることである。[9] オクラホマ州は、人間で一度もテストされたことのない方法にどうしてこれほどの自信を持っているのだろうか？

窒素低酸素症仮説を支持する報告書を執筆した立法法学者のマイケル・コープランドは、人が酸素を呼吸していないときに何が起こるかについて絶対的な確信を持つことができると主張した。[10] この絶対的な確信は、彼の結論が、処刑に近い状況で行われた管理された人間研究ではなく、酸素欠乏に苦しむパイロットや窒素漏れを伴う自動車事故の犠牲者との類推に大きく依存していたことを考えると、驚くべきものであった。[11] これらの比較は、異なる状況を対象としているため問題がある。パイロットは通常、高高度で徐々に意識を失い、事故の犠牲者はシートベルトを締めておらず、意識があり、死を予期していない。

おそらく最も問題な点は、議会公聴会において、産業用ガス供給業者、国に雇用されていない独立麻酔医、および医療研究倫理の専門家が著しく欠席していたことである。[12] 議論は主に議員と少数の支持者の間で行われ、通常であればこれほどの規模の政策変更に必要とされる外部の専門家による審査は行われなかった。この孤立したプロセスにより、重要な実務上および倫理上の考慮事項が提起されなかったか、十分に検討されなかった。マスクの設計、流量、緊急手順、およびモニタリング手順に関する疑問は、事実上未解決のまま残された。

IV. 立法承認と政治戦略

こうした批判にもかかわらず、法案は驚くべき速さと圧倒的な支持で議会を通過した。下院は85対10で、上院は41対0で全会一致で可決した。[13] これらの決定的な投票結果は、オクラホマ州の政治情勢を反映していた。同州では死刑制度への支持が依然として強く、ロケットの処刑によって、州は混乱を招くことなく死刑執行が可能であることを示すよう圧力を受けていた。メアリー・フォーリン州知事は、ロケットの処刑から1年も経たない2015年4月17日にこの法律に署名し、成立させた。[14]

ファリンはこの法律を「基準に準拠した死刑執行方法のもう一つの選択肢」として歓迎した。[15] 彼の声明は慎重に言葉を選んでおり、窒素低酸素症は致死注射の代替ではなく、補完するものだとした。この法律は、致死注射が利用できなくなった場合、または違憲と判断された場合にのみ使用されるバックアップ方法として窒素低酸素症を指定していた。[16] この戦略的な位置づけにより、支持者たちは、問題点はあるものの、他所で成功裏に使用されてきた方法を放棄するのではなく、単に選択肢を追加しているだけだと主張することができた。

この立法過程は、緊急性、政治的連携、そして方法の理論的な単純さに対する信頼の収束を反映していた。[17] 議員たちは、危機と認識した事態に対応し、自分たちのニーズに合わせた解決

策を見出した。それは、行動を促すほど革新的であり、信頼できると思えるほど単純であり、失敗と見なされることを避けるほど斬新であった。政治的な計算は明確だった。何もしないという選択肢はなく、窒素低酸素症は幅広い支持を得られる可能性が高い前進の道筋を提供した。

議員たちは、窒素低酸素症を、薬物不足による致死注射の不可能化、現行方法の合憲性を問う法的異議申し立て、ロケットの処刑後の国民の信頼の低下といった、相互に関連する複数の問題に対する解決策として提示した。〈sup〉18〈/sup〉 この提案を推進するため、支持者たちはその利点を強調し、懸念を軽視したが、反対意見は法案可決を急ぐあまり抑圧された。〈sup〉19〈/sup〉 懸念を表明した少数の議員は、犯罪に甘いか、必要な改革を妨害しているかのように描かれた。

その手続きの速さは驚くべきものだ。提案から承認までわずか数週間しか経っていない。オクラホマ州外の専門家を招いた詳細な委員会審議は行われなかった。試験的プログラムや実現可能性調査も実施されなかった。同様の手法を検討した可能性のある州への相談もなかった。要するに、議会は限られた情報に基づき、相当な政治的圧力の下で、理論的なアプローチを承認したのである。

V. 処刑方法の歴史的背景

オクラホマ州が窒素低酸素死刑を採用した理由を完全に理解するには、この方法を米国における死刑執行の実態というより広い文脈の中に位置づけることが不可欠である。米国は、刑罰と正義に対する国民の期待と、残虐で異常な刑罰を禁じる憲法上の制約との間で、繰り返し折り合いをつけようと試みてきた。この緊張関係が、より人道的な死刑執行方法を模索する長い伝統を生み出し、新たな手法はそれぞれ、以前の手法の問題点を解決すると約束してきたのである。

処刑方法は、絞首刑から電気椅子、ガス室、そして最終的には薬物注射へと進化してきた。それぞれの移行は、特定の危機に対応して行われた。すなわち、恐ろしい光景を引き起こした技術的な失敗、既存の方法を維持不可能にした世論の圧力、あるいは薬物不足などの実際的な障害である。[20] このパターンは驚くほど一貫している。ある方法が失敗したり問題が生じたりすると、改革への圧力が高まり、より人道的で信頼できると期待される新しい方法が採用される。

19世紀後半に導入された電気椅子は、絞首刑よりも人道的な代替手段として考案された。絞首刑では、落下時に首の骨が折れなければゆっくりと窒息死し、ロープが長すぎると首が切断される可能性があった。[21] 電気椅子の初期の支持者たちは、電気椅子は瞬時に苦痛がなく、死刑囚が何かを感じる前に死に至ると主張した。実際には、電気椅子はしばしば火傷、痙攣、そして長時間の苦痛を引き起こした。[22] 目撃者たちは、死体から煙が立ち上り、肉が焼ける臭いが

し、死刑囚が複数回の電気ショックの後も意識を保っていたと証言している。装置の故障や不適切な設定のために、処刑に複数回の試行が必要となったケースもあった。

20世紀にいくつかの国で採用されたガス室は、電気椅子による処刑よりも優れた方法として提示された。有毒ガス（通常はシアン化水素）を用いて、迅速かつ苦痛なく処刑することで、処刑の目に見える暴力性を軽減することを目的としていた。[23] しかし、ガス室は独自の恐怖を生み出した。死刑囚は、肺に二酸化炭素が蓄積し窒息感を引き起こすため、窒息し、もがき苦しんだ。この過程は数分間続くことがあり、目撃者の中には、死刑囚が息を止め、拘束具に抵抗し、明らかに苦痛の兆候を示したと証言する者もいた。ガス室は、迅速でも苦痛なくもないという証拠が積み重なるにつれ、最終的に放棄された。

致死注射は1970年代に、待望の解決策として登場した。医療的で臨床的な印象を与えるように設計され、死刑執行というよりは病院の処置に近いものとなるよう意図されていた。支持者たちは、意識喪失、麻痺、そして最終的には死に至る一連の薬物注射という、これまでに考案された中で最も人道的な方法だと主張した。数十年間、致死注射は最良の選択肢として広く受け入れられていた。しかし、時が経つにつれ、問題が山積していった。製薬会社が死刑執行市場から撤退したため、薬物の供給が不足するようになった。麻痺させる薬物が苦痛を覆い隠しているのではないかという疑問が生じ、一連の執行失敗によってこの方法の弱点が露呈した。

これらの歴史的事例は、理論上の約束と実際の運用上の現実との間に繰り返し生じる乖離を示している。どの方法も理論上は妥当に見えた。科学と経験が人道的な結果を保証するという確信のもとに採用された。しかし、最終的には予期せぬ合併症や失敗が明らかになった。[24] 経験的証拠がほとんどないまま採用された窒素低酸素症は、こうした当初の前提、すなわち、徹底的な試験や予期せぬ問題の可能性を考慮することなく、科学理論だけで人道的な実施を保証できるという前提を反映していた。[25]

ロケットの処刑後、代替手段を模索するオクラホマ州議会は、まさにこの歴史的なパターンを繰り返していた。議員たちは、窒素ガスによる低酸素症はこれまでとは異なり、今度こそ絶対確実な方法を見つけたと確信していた。彼らは過去の処刑方法からほとんど何も学んでおらず、どの方法も同じように揺るぎない自信を持って導入していたようだった。

VI. 医学的および生理学的考察

オクラホマ州の立法において医療専門家が果たしてきた役割は、倫理的な禁止により死刑執行への参加が禁じられているため、驚くほど限定的なものにとどまっている。[26] アメリカ医師会をはじめとする専門家団体は、医師が死刑執行に参加することは、治療と生命の維持を優先する医療倫理に反すると長年主張してきた。このため、州は人道的な死刑執行方法を設計・実施するために医学的専門知識を必要としているにもかかわらず、必要な知識を持つ医療専門家が倫理的な理由から参加を阻まれているという矛盾が生じている。

独立した臨床監督の欠如により、安全性と人間の福祉に関する想定は、実際の症例からの経験的データではなく、証明されていない生理学的理論に基づいて行われることになった。立法者とその研究者たちは、新たな医療処置に必要な厳密な研究を行うことなく、複雑な生理学的プロセスについて判断を下した。もし窒素低酸素症が医療目的の安楽死の方法として提案されたとしたら、広範な動物実験、インフォームドコンセントに基づく厳密な臨床試験、倫理委員会の監督、そして何年にもわたるデータ収集が必要となるだろう。しかし、これらのいずれも死刑執行には適用されなかった。

既存の研究では、窒素性低酸素症の前提に潜在的な問題があることが指摘されている。哺乳類の研究では、窒素が豊富な環境下でも、低酸素症がパニック発作や不随意運動を引き起こす可能性があることが示されている。[27]酸素を奪われた動物は、単に穏やかに意識を失うのではなく、苦痛の行動を示したり、もがいたり、極度の苦痛や不快感を示唆する生理的反応を示したりすることが多かった。動物実験では人間の反応を正確に予測することはできないが、このような包括的な主張には疑問を呈するべきであった。

その後この方法を用いたところ、当初は無痛死と想定されていたにもかかわらず、人間は陰圧性肺水腫（肺に体液が蓄積する状態）を発症し、発作や明らかな苦痛の兆候を伴う可能性があることが明らかになった。[28] これらの合併症は、使用された理論モデルでは考慮されていなかったため、オクラホマ州での立法審議では取り上げられなかった。理論と現実の乖離は相当なものであった。

生理学的現実は、その提唱者たちが認めているよりもはるかに複雑である。身体が突然酸素を奪われると、複数のシステムが未だ十分に理解されておらず、予測不可能な反応を示す。脳は完全に機能停止するわけではない。血圧は急激に上昇する可能性がある。筋肉の制御が失われ、発作を引き起こすこともある。循環器系は代償しようと奮闘するかもしれない。そして、死刑囚が実際に何を感じ、何を認識するのかという主観的な経験については、死後に本人に質問することができないため、依然として不明のままである。

VII. 実施上の困難とサプライヤーの抵抗

科学的・医学的な問題に加え、窒素低酸素症の実践的な実施には、立法審議中にほとんど見過ごされた重大な物流上の障害が立ちはだかった。最も深刻な問題の一つは、法律が可決された後に発生した。主要な工業用ガス供給業者が死刑執行用の窒素供給を拒否したため、この方法の主要な運用原則の一つが根本的に損なわれたのである。[29]

工業用ガスを製造・販売する企業は、死刑執行への関与を断固として拒否した。これは単にイメージの問題ではなく、多くの企業が自社製品を人命を奪う目的で使用することを明確に禁止する方針を定めている。窒素ガスによる低酸素死刑を採用したオクラホマ州をはじめとする各州は、通常の商業ルートを通じて医療用または工業用の窒素ガスを容易に入手できると考えて

いた。しかし、供給業者が死刑執行目的での販売を拒否したため、これらの州は代替供給源を探さざるを得なくなり、ガスの純度や品質管理について疑問が生じた。

医療監督の欠如に加え、州は重大な生理的リスクを伴う処置を訓練を受けていない職員に任せざるを得なかった。[3] この状況はさらなる脆弱性を生み出した。処置中に死刑囚を誰が監督するのか？当局はどのようにして死亡を確認できるのか？マスクが密閉されていなかったり、人が呼吸を拒んだり、空気の流れが間違っていたりしたらどうなるのか？これらの実際的な疑問は未解決のままだった。

最終的な実施手順は、医師や生理学者ではなく、主に刑務所職員と弁護士によって策定された。その結果、機器、手順、監視に関する重要な決定は、その影響を十分に理解する専門知識を持たない人々によって下された。これはまさに災難の元だった。

VIII. 処刑の現実

窒素低酸素症の理論上の約束は、2024年1月25日に現実と衝突した。この日、アラバマ州でケネス・ユージン・スミスが米国でこの方法で処刑された最初の人物となった（当然のことながら、オクラホマ州は最終的に独自に開発したこの方法を放棄した）。[31] 州当局は、意識喪失は数秒以内に起こり、迅速かつ苦痛のない死をもたらすと一般市民と裁判所に保証していた。目撃者は衝撃的な光景を目にすることはなく、死刑囚は苦痛を感じることなく急速に意識を失うはずだった。

処刑そのものは全く異なっていた。目撃者の証言によると、スミスは数分間意識を保っており、必死に息を吸い込み、何度も嘔吐しながら、全身が痙攣を起こしていた。[32] これは約束されていたような、迅速かつ穏やかな意識喪失ではなかった。スミスは苦しみもがき、苦痛に喘いでいるように見えた。彼の身体的な反応は、窒素による低酸素症が防ぐはずだったまさにその種類の苦痛を示唆していた。その光景は、数十年前に非人道的として廃止されたガス室での処刑を不気味に彷彿とさせた。

解剖の結果、スミスの肺には肺水腫と大量の体液が認められ、窒素性低酸素症は単純で複雑でない過程であるという従来の理論的仮説と真っ向から矛盾する結果となった。[33] 肺に体液が存在していたことは、スミスの体が酸素欠乏に対して外傷性の生理的反応を起こしたことを示唆している。これは単なる意識不明の状態ではなく、窒息に対する激しい肉体的抵抗であった。

2024年から2025年にかけてアラバマ州とルイジアナ州で行われた死刑執行は、この憂慮すべきパターンを再現した。すなわち、意識が長時間持続し、激しい身体反応を示し、明らかな苦痛の兆候が見られたのである。[34] それぞれの執行は、窒素低酸素症が、その提唱者たちが自信満々に予測していたようには機能しないというさらなる証拠を示した。この一見完璧な方法には、適切な試験と専門家の助言によって予見できたはずの重大な問題があることが判明した。

これらの処刑を目撃した人々は、見ていて辛い光景だったと証言した。死刑囚が呼吸困難に陥っているように見えたと報告した者もいれば、拘束具に抵抗する様子を語った者もいた。また、処刑の過程が当局の発表よりもはるかに長く続き、意識が約束された時間をはるかに超えて持続していたと指摘した者もいた。複数の処刑で共通して見られたこれらの観察結果は、単なる個別の事件や実施上のミスではなく、処刑方法そのものに構造的な問題があることを明らかにした。

IX. 法的および人権上の影響

窒素低酸素による死刑執行中に観察される長時間の苦痛は、残酷で異常な刑罰を憲法で禁じている合衆国憲法修正第8条の遵守について深刻な疑問を提起する。最高裁判所は、死刑執行方法は重大な危害の重大なリスクをもたらさないものでなければならない、つまり、不必要な痛みや苦しみなしに死に至ることが合理的に確実でなければならないと定めている。〈sup〉35〈/sup〉 目撃者が一貫して苦痛の兆候を報告し、解剖で生理的外傷が明らかになり、執行過程が予想よりもはるかに長く続く場合、裁判所は、その方法が憲法上の基準に適合しているかどうかを検討しなければならない。

窒素低酸素症に対する法的異議申し立ては、いくつかの重要な点に焦点を当てている。第一に、実施前に臨床試験や実証的検証が行われていないため、この方法は死刑囚の十分な同意なしに行われた実験に等しい。第二に、処刑中の明らかな苦痛は、この方法が重大な危害のリスクを伴うことを示唆している。第三に、医療監督の欠如と、刑務所当局が合併症を適切に監視・管理できないことから、州がこの方法を確実に、かつ憲法に従って実施できる能力について疑問が生じる。

国際機関もこれらの調査結果に注目している。国連の人権専門家は、窒素吸入による処刑は国際法の下で拷問、残酷、非人道的、品位を傷つける可能性のある扱いであると述べている。〈sup〉36〈/sup〉 米国はすべての国際人権条約に拘束されているわけではないが、これらの国際的な見解は、窒素低酸素症が深刻な問題であるという認識の高まりを裏付けている。

事前の医学的監督や臨床試験の欠如は、これらの法的および倫理的な脆弱性をさらに悪化させている。〈sup〉37〈/sup〉 窒素低酸素症に関連する紛争を審理する裁判所は、この方法の人道性に関する州の主張に対し、実際の処刑の証拠を提示しなければならず、そこには全く異なる現実が明らかになる。約束と現実の間のこのギャップこそ、より徹底的な司法審査を必要とする問題である。

窒素ガスによる低酸素死刑を宣告された被告人の弁護側は、依頼人が憲法上の権利を侵害する実験的な処置を受けたと主張した。こうした法的異議申し立ては、裁判所によって結果が異なり、処刑方法に懸念を示した裁判所もあれば、州当局の主張を支持した裁判所もあった。法的な状況は依然として不透明であり、死刑執行件数の増加や証拠の蓄積に伴い、新たな控訴が提起される可能性が高い。

X. 政策分析と制度的教訓

オクラホマ州における窒素低酸素症の導入は、緊急事態や政治的圧力下での公共政策の策定において貴重な教訓を与えてくれる。この州の経験は、経験的検証ではなく理論的な単純化に頼ると、運用上の失敗や法的異議申し立てを受けやすい政策につながる可能性があることを示している。〈sup〉38〈/sup〉　立法者は、科学的概念の単純さと明快さに確信を持ち、特に生死に関わる問題が関係する場合、あらゆる主要な政策革新に先立って行われるべき徹底的な分析とテストを怠った。

立法過程において、いくつかの制度上の欠陥が明らかになった。第一に、議員たちは支持者の断定的な発言を過度に重視する一方で、懐疑的な意見を無視したり軽視したりした。迅速な行動を求める政治的圧力によって、通常の審議プロセスが阻害された。第二に、独立した専門家による検証が欠如していたため、重要な問題が徹底的に検討されなかった。第三に、議論が主にオクラホマ州議会議員とそのスタッフの間で行われ、外部の専門家が参加しなかったという孤立した性質のため、重要な視点や懸念が十分に考慮されなかった。

過去の処刑方法の経験から、新しい技術は信頼性と人道性を確保して実施できるようになる前に、厳密なテスト、綿密な監視、継続的な改良が必要であることがわかっています。[39] オクラホマ州で窒素低酸素症が急速に導入されたことは、これらの手順を省略した場合の結果を示しています。州は主に理論モデルと信頼できる主張に基づいた方法を採用しましたが、実際にはこれらの前提が矛盾していることが判明しました。

制度的な教訓は明白だ。危機的状況や政治的緊急事態こそ、徹底的な検討が不可欠であり、かつ決して軽視されるべきではない状況なのである。議員は迅速な行動を迫られる時こそ、厳密な検証を経ずに、単純で魅力的に見える解決策を採用する誘惑に抵抗しなければならない。死刑制度は、その正当性に関する意見がどうであれ、政策決定において最大限の慎重さを必要とするほど重大な問題である。

この州の事例は、死刑の理論上の約束と具体的な結果との間の根強い緊張関係をも示している。[40] この緊張関係は、アメリカ合衆国の歴史において採用されたあらゆる処刑方法の特徴となっている。亜酸化窒素による低酸素死刑は、その最新の例に過ぎない。立法者は、科学と経験によって真に人道的な処刑方法が実現できると信じ続けているが、現実は理論が予測していたよりもますます複雑で不穏なものとなっている。

XI. 倫理的考察と今後の展望

法的および技術的な問題を超えて、窒素低酸素症の使用は、オクラホマ州の境界を越える深刻な倫理的問題を提起する。凶悪犯罪で有罪判決を受けた者を含む人間に対してテストされていない方法を使用することは、同意、情報に基づいたリスク評価、および国家が認可した実験に関する根本的な懸念を引き起こす。[41] 国家が十分にテストされていない方法を使用して人を処

刑する場合、同意を与えることも参加を拒否することもできない捕虜に対して事実上実験を行っていることになる。

これは、過去に囚人に対して行われた非倫理的な人体実験との不穏な類似点を想起させる。国家は、刑罰は処刑方法ではなく処刑そのものにあると主張するかもしれないが、死刑囚を新たな処刑技術の実験台として利用することは、やはり問題である。これらの人々が死刑判決を受けたという事実は、国家が負うべき倫理的義務、すなわち、彼らに不必要な苦痛を与えたり、実験の対象として利用したりしないという義務を免除するものではない。

単純さが人間性を保証するという考えは、生理学的複雑性が処刑状況の管理を複雑にすることを示す数多くの事例によって否定される。人間の身体と脳は非常に複雑なシステムであり、酸素不足に対する反応は未だ十分に解明されておらず、予測不可能である。酸素を窒素に置き換えるだけで迅速かつ安らかな死をもたらすことができるという考えは、人間の生理機能に対する過度に単純化された理解に基づいていることが証明されている。

オクラホマ州の事例が死刑制度全般について何を物語っているのかという疑問も生じる。1世紀以上にわたる度重なる試みにもかかわらず、目に見える苦痛を伴わずに確実に死刑を執行できる方法を見つけられないのであれば、それは制度そのものに根本的な問題があることを示唆しているのかもしれない。新たな方法が提示されるたびに、それが解決策として提示されてきたが、いずれも時を経るにつれて深刻な問題点が露呈してきた。ある時点から、この繰り返しは重大な意味を持つようになる。

今後、窒素低酸素症検査を採用した各国は、難しい選択を迫られることになる。実際に深刻な問題が明らかになっているこの検査法を継続するか、さらなる試験やプロトコルの開発を通じて改善を図るか、あるいはそもそも窒素低酸素症検査を用いるべきかどうかを問い直すか、いずれの選択肢にも課題が伴う。問題点が明らかになっているにもかかわらず検査を継続すれば、検査の不備や訴訟につながるリスクが高まる。検査法の改善を試みれば、こうした検査の実施に関する倫理的な問題が生じる。そして、窒素低酸素症検査を放棄することは、採用時に約束された効果が幻想であったことを認めることに等しい。

XII. 「過ちによって試される」

オクラホマ州が完璧な処刑方法を模索したことは、危機的状況下で理論的な楽観主義に囚われて立法を行うことの危険性を如実に示している。窒素低酸素死刑の導入の歴史は、政治的圧力、単純化された科学理論への過信、そして厳密な専門家による検証の欠如が、いかにして失敗に終わる政策につながるかを明らかにしている。窒素低酸素死刑の約束と現実との乖離は大きく、憂慮すべき事態である。

その後の処刑の証拠は、窒素低酸素症が、その採用を正当化した人道性と信頼性の約束された基準を満たしていないことを明確に示している。[42] 意識の持続と身体的苦痛を記述した証言、

肺水腫と生理的外傷を明らかにした検死報告書、国際人権団体の声明は、単純さと信頼性の仮定が厳密なテストと継続的な監視に取って代わることはできないことを総合的に示している。

オクラホマ州の事例は、事前の準備や調査なしに行われる政策革新の危険性を示している。死刑制度における未検証の革新は、倫理的、法的、そして人道的に重大な影響を及ぼすことが明らかになった。[43] 国家が意図的に人間の命を奪うという重責を担う場合、理論モデルや断定的な主張に頼ることはできない。現実は常に理論が示唆するよりも複雑で、厄介で、困難なものである。

特にオクラホマ州にとって、その皮肉は際立っている。窒素低酸素症に関する先駆的な法制を制定した後、アラバマ州とルイジアナ州がこの方法の実験場となり、懐疑論者が警告していたあらゆる問題点が露呈するのを目の当たりにしたのだ。ケビン・スティット知事は2024年1月、オクラホマ州は窒素低酸素症を使用するつもりはないと発表し、いわゆる「絶対確実な」方法も結局はそれほど万全ではなかったことを認めた。同州は性急に法制化を進めたため、他州がこの方法を導入した結果を遠くから観察する機会を得たのである。

この状況から学ぶべき教訓は、オクラホマ州と窒素性低酸素症だけにとどまりません。それは、証拠に基づいた政策決定の重要性、専門知識の価値、そして緊急性を優先して慎重な検討を怠ることの危険性を改めて浮き彫りにします。複雑な問題には単純な解決策はめったにないこと、理論モデルが必ずしも具体的な結果を予測するとは限らないこと、そして人命が危険にさらされるような重大な局面においては、慎重かつ的確に行動する義務がより一層重くなることを、この教訓は私たちに思い出させてくれます。

死刑制度を導入している国々にとって、人道的な処刑方法の模索は、1世紀以上にわたる努力にもかかわらず、依然として大きな課題となっている。どの世代の立法者も解決策を見出したと信じているが、どの方法も最終的には、提唱者が予期しなかった問題点を露呈する。この傾向が各国に死刑制度の見直しを促すのか、それとも単に「より良い」とされる別の方法の探求を永続させるだけなのかは、今後の展開次第である。確かなことは、絶対的な解決策の約束は、歴史に基づき、経験的データの厳密な分析を行い、人間の生理機能と死そのものがいかなる形態の制御にも適さないという認識に基づいた懐疑的な姿勢で受け止めなければならないということである。

XIII. 目撃者への影響

アラバマ州とルイジアナ州における窒素低酸素症による死刑執行の恐ろしい結果は、歴史と生理学がすでに示唆していたことを裏付けた。簡便性と人道性を謳いながらも、この方法は目に見える苦痛、意識の遷延、そして激しい生理的反応を引き起こした。オクラホマ州で得られた理論的確信が他の州にも広まったことで、経験的根拠や専門家の監督なしに制定された法律のあらゆる結果が明らかになった。そのパターンはよく知られたものだった。新たな死刑執行方

法はどれも信頼性を保証して登場するものの、死に直面した人間の身体の予測不可能性によって阻まれるのである。

私はアラバマ州で行われた2件の死刑執行、ケネス・ユージン・スミスとアンソニー・ボイドの死刑執行で、この現実を目の当たりにした。どちらのケースでも、実際に起こったことはオクラホマ州議会議員が約束していたことと真っ向から矛盾していた。2人とも息も絶え絶えに喘ぎ、痙攣し、窒息に抵抗した。その光景は耐え難く、紛れもない現実であり、約束されていた穏やかで臨床的な死とはかけ離れたものだった。それはまさに、州が無視または過小評価してきた生理学的複雑性と倫理的脆弱性を如実に反映していた。私が死刑執行室に立ち会ったことで、オクラホマ州の「絶対確実」というビジョンがもたらす結果が、残酷かつ人間的な形で鮮明に浮かび上がった。これらは仮説上の失敗や遠い国の報告ではない。これらは現実の苦痛の瞬間であり、窒素低酸素症による死刑執行が行われるたびに、その恐怖は増大し続けている。これは、そうした瞬間の物語、窒素低酸素症の物語である。

最終的なメモ

1. ケイティ・フレットランド、「クレイトン・ロケットは処刑開始時に身悶え、うめき声をあげた」、*ガーディアン*、2014年4月30日、 https://www.theguardian.com/world/2014/apr/30/oklahoma-execution-botched-clayton-lockett参照。スコット・ニューマン、「オクラホマ州、窒素窒息による死刑執行を承認」、 *NPR* 、2015年4月17日、https://www.npr.org/sections/thetwo-way/2015/04/17/400444876/oklahoma-approves-nitrogen-asphyxiation-for-executions も参照。
2. マイク・クリスチャン、「窒素低酸素症に関する声明」、 *KGOU* 、2015年2月23日。また、エリ・ヘイガー、「オクラホマ州が窒素で人々を処刑する計画を立てている理由」、*マーシャル・プロジェクト*、2018年3月15日、 https://www.themarshallproject.org/2018/03/15/why-oklahoma-plans-to-execute-people-with-nitrogenも参照。
3. 「最新情報：オクラホマ州知事メアリー・フォーリンがこれまで使用されたことのない死刑執行方法を承認」 *KFOR.com* 、2015年4月17日、https://kfor.com/news/oklahoma-lawmakers-unveil-never-before-used-execution-method-headed-to-governors-desk。
4. ハーガー、*前掲*注2（窒素性低酸素症の生理学的理由を説明し、クリスチャンの医薬品不足に関する主張を分析している）。
5. Dana G. Smith、「窒素による処刑方法はより『人道的』だと宣伝されているが、証拠は不足している」、*サイエンティフィック・アメリカン*、2022年9月23日、https://www.scientificamerican.com/article/new-execution-method-touted-as-more-humane-but-evidence-is-lacking。
6. Quinton Chandler、「オクラホマ州当局は窒素による死刑執行を『人道的』と承認したが、一部の医療専門家は確信が持てない」、 *StateImpact Oklahoma* 、2018年4月19日、 http

s://stateimpact.npr.org/oklahoma/2018/04/19/oklahoma-officials-endorse-nitrogen-executions-as-humane-but-some-medical-experts-arent-sure ; Hager、*上記注2*も参照。

7. ハーガー、*前掲*注2。

8. 「実験的処刑：州議会議員が未検証のガス窒息死刑を検討」 *KGOU* 、2015年2月23日、 https://www.kgou.org/politics-and-government/2015-02-23/experimental-executions-state-lawmakers-consider-untested-gas-asphyxiation （議会公聴会で提起された倫理的異議について言及されている）。

9. *Baze判決*後の致死注射の混乱」、 *Georgetown Law Journal* 102 (2014)。https://ir.lawnet.fordham.edu/faculty_scholarship/506。また、Deborah W. Denno、「致死注射のジレンマ：医学はいかにして死刑を解体したか」、 *Fordham Law Review* 76 (2007)。https://ir.lawnet.fordham.edu/flr/vol76/iss1/3。Dennoは、Ralph Chapoco、「窒素による処刑の人間性に懐疑的な医師と倫理学者」、 *Alabama Reflector* 、2023年9月7日、https://alabamareflector.com/2023/09/07/doctors-ethicists-skeptical-that-nitrogen-executions-will-be-humane で引用されている。デンノ氏の発言は、Khaleda Rahman氏の「窒素ガス吸入による死刑執行は悲劇に変わる可能性がある。その理由はこちら」 *Newsweek* 、2024年1月16日、https://www.newsweek.com/nitrogen-gas-executions-could-horribly-wrong-1824353 にも引用されている（アラバマ州の手順を「曖昧でずさんで危険で、正当化できないほど不十分」と評し、専門家は「州が窒素ガスによる低酸素死刑執行をどのように実施できるかについては推測するしかない」と指摘している）。

10. Chandler、*前掲*注6（Copelandの言葉を引用：「人が酸素を吸わないとどうなるかは100%分かっている」）；Michael Copeland、Christine Papas、Thom Parr著『*窒素誘発性低酸素症を死刑の一形態として用いる方法*』（要約、2015年）も参照。

11. ジャック・シューラー、「死刑執行はより人道的になり得るか？」、*アトランティック誌*、2015年3月20日、 https://www.theatlantic.com/politics/archive/2015/03/can-executions-be-more-humane/388249 ； ヘイガー、*上記注2*も参照。

12. ヘイガー、*前掲*注2（クリスチャンが窒素性低酸素症の研究に3人の非科学者を雇い入れたこと、オクラホマ大学の医療専門家が彼への協力を拒否したこと、そして報告書がわずか3時間の作業で作成されたことを指摘）；「実験的処刑…」、*前掲*注8（法案が委員会で「議論なしに可決された」ことを報告）。

13. 「ファリン知事、窒素ガスによる低酸素死刑を認める法案に署名」 *KGOU* 、2015年4月17日、https://www.kgou.org/oklahoma-news/2015-04-17/governor-fallin-signs-bill-allowing-nitrogen-hypoxia-executions。

14. サルバドール・エルナンデス、「オクラホマ州は致死注射が禁止された場合、窒素を用いて死刑を執行する」、 *BuzzFeed News* 、2015年4月17日、https://www.buzzfeednews.com/article/salvadorhernandez/oklahoma-to-use-nitrogen-for-executions-if-lethal-injections （署名時のファリン知事の声明を引用）バーバラ・ホベロック、 「オクラホマ州知事メアリー・フォーリン、州内での死刑執行方法として窒素ガスを導入する法案に署名」、*タルサ・ワールド*、2015年4月17日、https://tulsaworld.com/news/capitol_report/oklahoma-gov-mary-f

allin-signs-bill-adding-nitrogen-gas-as/article_6368deaf-7905-5285-8393-8b5c5497ccb2.html。

15. ヘルナンデス、*前掲*注14参照。また、トレイシー・コナー、「オクラホマ州知事メアリー・フォーリン、窒素ガスを使った代替処刑方法を考案」、 *NBC*ニュース、2015年4月17日も参照。

16. マーク・バーマン、「オクラホマ州、ガスを死刑執行のバックアップ方法として承認」、*ワシントン・ポスト*、2015年4月17日、https://www.washingtonpost.com/news/post-nation/wp/2015/04/17/oklahoma-says-it-will-now-use-nitrogen-gas-as-its-backup-method-of-execution/。

17. ローレン・ギル、「死刑執行に窒素ガスを使用することは前例がなく、十分に理解されていない」、 *The Appeal* 、2019年10月25日、https://theappeal.org/using-nitrogen-gas-for-executions-is-untested-and-poorly-understood-three-states-plan-to-do-it-anyway/（窒素低酸素症の採用、死刑執行方法の歴史的変遷、政策的影響に関する詳細な分析）。

18. 同上

19. ヘイガー、*前掲*注2を参照（クリスチャンが窒素性低酸素症の研究に3人の非科学者を雇い入れたこと、オクラホマ大学の医療専門家が彼への協力を拒否したこと、報告書がわずか3時間の作業で作成されたことが指摘されている）；「実験的処刑…」、*前掲*注8を参照（同法案が委員会で「議論なしに可決された」と報告されている）。

20. 死刑情報センター、「125年前、電気椅子による最初の処刑は失敗に終わった」、2015年8月6日、 https://deathpenaltyinfo.org/125-years-ago-first-execution-using-electric-chair-was-botched を参照（電気椅子による処刑の支持者たちは「この新しい方法を迅速、効率的、無痛、人道的であると宣伝したが、これは後に議員たちが致死注射や窒素ガスによる処刑を承認する際に用いたのと同じ主張である」と指摘している）。オースティン・サラット、「ガス室：100年の残酷さ」、 *Verdict* 、2024年2月19日、 https ://verdict.justia.com/2024/02/19/the-gas-chamber-100-years-of-cruelty （「この国で使用されている他のすべての処刑方法と同様に、致死ガスによる処刑は安全でも、信頼できるものでも、人道的なものでもなかった」）。

21. 「電気椅子による最初の処刑」、 *History.com* 、1890年8月6日、 https://www.history.com/this-day-in-history/august-6/first-execution-by-electric-chair （「人道的な処刑方法としての電気椅子による処刑は、1881年にアルバート・サウスウィック博士によって初めて提案された…当時主流だった処刑方法である絞首刑では、死刑囚は首の骨が折れた状態で30分も吊るされたまま窒息死することが知られていた」）；*上記注20*の死刑情報センターも参照。

22. 死刑情報センター、*前掲*注20（最初の電気椅子による処刑について「2分後、処刑室は焼ける肉の臭いで満たされた。2人の目撃者が気絶した…新聞は処刑を『歴史的な大失敗』『忌まわしく、反逆的で、非人道的』と呼んだ」と述べている）；また、「電気椅子による最初の処刑」、*前掲*注21も参照（ウィリアム・ケムラーの処刑中、「ケムラーの頭から煙が出ていた」こと、ジョージ・ウェスティングハウスが「斧を使った方がましだっただろう」とコメントしたことを示している）。

23. 同上
24. アメリカ医師会、「死刑」、*医療倫理規定*、*意見*9.7.3、 https://www.ama-assn.org/delivering-care/ethics/capital-punishment も参照。また、Denno、「致死注射のジレンマ…」、*上記*注9（医師の処刑への参加に関する倫理的禁止事項を扱っている）、「最初の致死ガスによる処刑」、 *History.com* 、1924年2月8日、 https://www.history.com/this-day-in-history/first-execution-by-lethal-gas （「ネバダ州は、絞首刑、銃殺隊、電気椅子による従来の処刑方法とは異なり、より人道的な死刑執行方法として1921年に致死ガスを採用した」）。「ガス室」も参照のこと。*ブリタニカ百科事典*、 https://www.britannica.com/topic/gas-chamber （「ガス室は、より人道的な死刑執行方法を提供することを目的として、1921年にアメリカ合衆国ネバダ州で初めて採用された」）。
25. スミス、*前掲*注5；サラト、*前掲*注20（「ジョンとスミスの処刑を隔てる100年間を通して、ガス室の歴史は…苦痛のない死を保証するという主張と、その約束を守れなかった一連の失敗によって特徴づけられてきた」）；ギル、*前掲*注17で引用されているデンノも参照（「歴史は、事態が悪化するばかりであることを示している。ますます不注意になり、ますます危険になるばかりだ」）。
26. ジョエル・ジヴォット、「私は麻酔科医です。ケネス・スミスの窒素吸入による処刑は、標準的な手順とは程遠いものでした」、 *STAT* 、2024年1月29日、 https://www.statnews.com/2024/01/29/kenneth-smith-nitrogen-gas-execution-science-alabama/ （肺水腫を含む剖検所見の医学的分析）；ギル、*上記*注17（「窒素を用いて人間を殺すことに関する科学的研究はほとんどない」と指摘し、デンノの「歴史は事態が悪化する一方であることを示している。我々はますます不注意になり、ますます危険になるだけだ」を引用）；スミス、*前掲*注5も参照（法学教授コリーナ・バレット・レインの言葉を引用：「窒素の使用に関する提案全体は、刑事司法の教授が書いた14ページの報告書から生まれたものです。彼は医師ではありません。医学的な訓練も受けていません。科学者でもありません」）。
27. アメリカ医師会、*前掲*注24参照。また、デンノ著「致死注射のジレンマ…」、*前掲*注9も参照。
28. 同上
29. 死刑情報センター、2024年3月12日、https://deathpenaltyinfo.org/three-largest-nitrogen-gas-manufacturers-in-the-us-prohibit-products-from-use-in-executions.
30. ブリアナ・ベイリー、「窒素低酸素死刑執行方法に関する懸念は、臨床試験ではなく類推に基づいている」、 *The Frontier* 、2018年3月16日、https://www.readfrontier.org/stories/oklahoma-could-execute-inmates-using-nitrogen-without-help-from-licensed-medical-professionals（窒素低酸素死刑執行プロトコルの開発と実施における医療監督の欠如と実際のヒト臨床試験からのデータを扱っている）。
31. キム・チャンドラー、「アラバマ州、ケネス・スミスを窒素ガスで処刑、米国初」、 *AP通信*、2024年1月25日、 https://apnews.com/article/nitrogen-execution-kenneth-smith-alabama 。
32. 死刑情報センター、「アラバマ州、ケネス・スミスを窒素ガスで処刑、全米初」、2024年1月26日、 https://deathpenaltyinfo.org/the-world-is-watching-witnesses-report-kenne

th-smith-appeared-conscious-shook-and-writhed-during-first-ever-nitrogen-hypoxia-execution （証言集）。

33. ジヴォット、*前掲*注26。

34. *Hoffman v. Westcott* 、No. 3:25-cv-00169、差止命令救済申立てを支持する略式弁論書、米国ルイジアナ州中央地区地方裁判所、2025年提出（アラバマ州での窒素低酸素死刑執行の目撃証言を記述しており、意識の持続、激しい身体反応、および明らかな苦痛を示している）。

35. *Bucklew v. Precythe* , 139 S. Ct. 1112 (2019).

36. 国連人権高等弁務官事務所、「米国：国連専門家、窒素ガスによる初の死刑執行に懸念」、2024年1月26日。アラバマ州アメリカ自由人権協会、「国連専門家、窒素ガスによる死刑執行を拷問または残酷な扱いと呼ぶ」、2024年2月1日、https://www.aclu.org/news/capital-punishment/alabama-has-executed-a-man-with-nitrogen-gas-despite-jurys-life-verdict。

37. スミス、*前掲*注5。

38. ギル、*前掲*注17。

39. 同上

40. *Hoffman v. Westcott* 、No. 3:25-cv-00169、差止命令救済申立てを支持する略式弁論書、米国ルイジアナ州中央地区地方裁判所、2025年提出（アラバマ州での窒素低酸素死刑執行の目撃証言を記述しており、意識の持続、激しい身体反応、および明らかな苦痛を示している）。

41. アメリカ医師会、*前掲*注24参照。

42. *Hoffman v. Westcott* 、No. 3:25-cv-00169、差止命令救済申立てを支持する略式弁論書、米国ルイジアナ州中央地区地方裁判所、2025年提出（アラバマ州での窒素低酸素死刑執行の目撃証言を記述しており、意識の持続、激しい身体反応、および明らかな苦痛を示している）。

43. ここでの結論の結果は、ギル、*前掲*注17を参照。

44. ショーン・マーフィー、「オクラホマ州知事、致死注射から窒素ガスによる死刑執行への変更には関心がないと発言」、 *AP通信*、 2024年1月30日、https://apnews.com/article/oklahoma-death-penalty-lethal-injection-nitrogen-stitt-f1877dba8f521554e1658f92eabcffba。

1.0：ケネス・ユージン・スミスの処刑：窒素性低酸素症とアラバマ州における死刑制度の変遷

2024年1月、アラバマ州はケネス・ユージン・スミスに対し、窒素ガスによる低酸素死刑を執行した。これは死刑執行史上初の事例である。[1] この特異な出来事は、死刑執行における技術革新であるだけでなく、死刑執行に関連する長年の政治的、法的、そして物流上の危機が収束したことをも意味する。[2] この執行は、死刑執行方法に関する訴訟の法的な状況の変化、法的認可と司法審査の相互作用、そして死刑をめぐる深刻な倫理的議論を浮き彫りにしている。[3] アラバマ州がどのようにしてこの状況に至ったのか、そして裁判所が憲法上の異議申し立てにどのように対応したのかを理解するには、スミス事件の歴史、州法の変遷、執行を可能にした詳細な司法判断、そして死刑制度全体へのより広範な影響を徹底的に検証する必要がある。[4]

I. ケネス・スミスの事例

ケネス・スミスは、1988年にアラバマ州コルバート郡で起きたエリザベス・セネット殺害事件に関与したとして、加重殺人罪で有罪判決を受けた。[5] 検察側は、多額の借金を抱え、妻の生命保険金を受け取ろうとしていた夫のチャールズ・セネット牧師が、仲介者を通じて妻の暗殺を企て、スミスともう一人の男にそれぞれ1,000ドルで殺害を実行させた、と主張した。[6] スミスは襲撃への関与は認めたものの、殺害する意図はなく、実際に殺害したのは自分ではないと主張した。[7]

スミスの最初の裁判は1989年に行われ、有罪判決が下されたが、後に技術的な理由で控訴審で覆された。[8] 1996年の2度目の裁判でも、再び有罪判決が下された。[9] 陪審は11対1の票決で仮釈放なしの終身刑を勧告したが、裁判官は当時の法的権限を行使してこの勧告を覆し、死刑を宣告した。[10] 当時、アラバマ州は司法が陪審の終身刑勧告を覆すことを認めていた数少ない州の一つであったが、この慣行は2017年に廃止された。[11]

スミスは数十年にわたり、州裁判所と連邦裁判所に控訴や判決後の嘆願書を提出し続けた。[12] 2022年11月、州は薬物注射による死刑執行を試みたが、規定時間内に静脈路を確保できなかったため、執行は中止された。[13] その後の法廷審理で、弁護側は、この失敗によって身体的・精神的トラウマを負ったこと、そして再度の薬物注射による死刑執行は残酷で異常な刑罰を禁じる合衆国憲法修正第8条に違反すると主張した。[14] そこで州は、法律で認められているものの、これまで世界中で使用されたことのない窒素ガスによる低酸素死刑執行を行うことを決定した。[15]

II. 窒素低酸素症の立法上の起源

アラバマ州における窒素低酸素死刑の認可は、致死注射に伴う物流面および法的な困難から生じた。〈sup〉16〈/sup〉 全国的な死刑執行用薬剤の不足と、注射手順に関する度重なる訴訟に直

面し、アラバマ州議会は2018年に上院法案272号（2018-353号法）を可決し、致死注射と電気椅子による死刑執行に加え、窒素低酸素死刑を認可された死刑執行方法のリストに追加した。¹⁷ この法律により、受刑者は最終判決から30日以内に窒素低酸素死刑を選択することができる。それ以外の場合は、致死注射がデフォルトの選択肢となる。¹⁸

議会での審議中、法案の起草者であるトリップ・ピットマン上院議員は、窒素低酸素症を苦痛のない死をもたらす非常に効果的な方法だと述べ、既知の中で最も人道的な処刑方法だと称した。[19] ピットマン議員は、この過程を飛行機の減圧に例え、苦痛がないことを示唆した。[20] この法案は実利的な側面も持っていた。アラバマ州は、他の多くの州と同様に、致死薬の入手において法的課題や物流上の障害に直面しており、製薬会社は供給を拒否していた。[21] 支持者たちは、窒素低酸素症をこれらの困難に対する解決策として提示し、致死注射をめぐる論争を回避し、州の死刑制度に予測可能性を取り戻すことができると主張した。[22] 議会公聴会では、支持者たちが紛争のリスクを最小限に抑えつつ、州が効果的に処刑を執行する能力を維持しようとしていたことが明らかになった。[23]

法案は立法過程において組織的な反対にほとんど遭わなかった。[24] アラバマ州上院は全会一致で可決したが（賛成29票、反対0票）、下院の投票では（賛成75票、反対23票）若干の抵抗が見られた。[25] しかし、比較的静かな議論は、死刑への支持が依然として強く、処刑方法に対する立法上の異議申し立てが重大な政治的障害に直面しているアラバマ州の政治におけるより広範な傾向を反映している。[26] 死刑情報センターは当時、窒素ガスを処刑に使用した州はないと指摘し、この方法はまだ純粋に実験段階であると強調した。[27] 当時センターの事務局長であったロバート・ダナムは、他の方法が利用できない、あるいは違憲であるという司法判断がない状況では、この認可は証明された必要性への必要な対応ではなく、投機的な実施オプションの拡大を意味すると強調した。[28] 後に医療専門家、人権擁護者、宗教指導者から出てくる批判は、立法過程においてはほとんど見られなかったか、あるいは無視された。 2018年の議会公聴会は行われなかったが、この空白期間は数年後に州が議定書を実施しようとした際に重大な問題となることが判明した。29

III. 実施プロトコルの開発

2018年に法的認可が下りたにもかかわらず、アラバマ州では数年間、窒素性低酸素症の管理に関する確立されたプロトコルが存在しなかった。³⁰ アラバマ州矯正局（ADOC）は装置と手順の設計を任されたが、その作業は大部分が秘密裏に行われた。³¹ 州がプロトコルの完成を確認したのは2023年になってからで、しかも公開されたバージョンは大幅に黒塗りされていた。³²

ADOCの処刑手順では、死刑囚を椅子または担架に寝かせ、全面マスクを装着させ、酸素の代わりに純窒素を吸入することで低酸素症による死に至らしめた。[33] 当局はこの手順を動物の安楽死や不活性ガスに曝露された労働者の事故死になぞらえた。[34] ガス流量、マスクの設計仕様、漏洩や嘔吐時の緊急手順など、具体的な技術的詳細は公文書からほとんど削除されており、人

権擁護団体は、この方法の最初の人体への適用における透明性の欠如と独立した検証の欠如について懸念を表明した。[35]

このプロトコルの開発は、過去の方法論的革新に見られたパターンを反映していた。すなわち、立法による承認に続き、行政裁量、そして死刑囚による異議申し立てがあった場合にのみ司法審査が行われるというパターンである。[36] 州がスミスを最初の死刑執行者に選んだのは、実際的な考慮事項と手続き上の考慮事項の両方を反映したものであった。致死注射の試みが失敗した後、彼は窒素低酸素症の試験症例となった。[37] 2023年8月、アラバマ州司法長官はスミスの死刑執行日を要請し、彼を「新たに承認された州の窒素低酸素症プロトコルに基づいて執行される最初の受刑者」と表現した。[38]

IV. 司法審査：地方裁判所における手続き

スミスの弁護士は、アラバマ州中央地区連邦地方裁判所に、合衆国憲法修正第8条および第14条に基づき死刑執行の停止を求める訴訟を起こした。[39] 弁護士らは、窒素ガスによる低酸素症は人体実験が行われておらず、実験的な治療法であり、パニック発作、痙攣、数分間続く窒息など、長期にわたる苦痛を引き起こす可能性があると主張した。[40] 訴状では、この事件は人体実験であると位置づけられ、スミスの弁護士は「これまでどの州もどの国も、窒素ガスを用いて人を処刑しようとしたことはない」「スミス氏はモルモットとして利用されている」と述べた。[41] 弁護士らは、マスクからの酸素漏れ、嘔吐、誤嚥、意識喪失の遅延など、理論上のリスクを挙げた。[42] 州側は、この方法は憲法上許容されるものであり、予備的な証拠から彼女が人間であることが示唆されていると反論した。[43]

R・オースティン・ハファカー・ジュニア判事は2024年1月10日、差し止め命令を却下し、死刑執行を許可する判決を下した。[44] ハファカー判事は直ちにこの方法の斬新性を認め、窒素低酸素による死刑執行は「新規かつ独創的」であると繰り返し述べた。[45] 同判事は、*グロシップ対グロス事件*および*バックルー対プレサイス事件における最高裁判所の判例に基づき*、合衆国憲法修正第8条は「重度の苦痛をもたらす実質的かつ明白なリスク」を伴う方法を禁止しており、原告は実行可能で容易に入手可能な代替方法も提案しなければならないことを強調した。[46]

最初の論点、すなわち、その方法が激しい苦痛を伴う重大なリスクをもたらすかどうかという点に関して、ハファカー判事は、スミス氏が必要な証拠を提出していないと結論付けた。[47]同判事は次のように記している。「スミス氏に苦痛のない死が保証されているわけではない。記録上、スミス氏は、このプロトコルが現行の法的枠組みの下で違憲となるような残酷かつ異常な刑罰を科すものであることを証明しておらず、裁判所もそう結論付けることはできない。」[48]

彼はさらにこう付け加えた。「これらの要素に基づくと、議定書に従って窒素低酸素症による処刑を行った場合、スミスに死に至らない、あるいは死期が長引くことなく、さらなる苦痛を

与える可能性が高いと、いかなる確実性や蓋然性をもって判断するのに十分な証拠は存在しない。」[49]

ハファカー判事は、スミス氏の証拠を「せいぜい『科学的論争』に過ぎない憶測であり、この方法が容認できないほどの痛みのリスクを生み出すことを証明するものではない」と評した。[50]同判事は、透明性の欠如という主張を退け、仮差止命令の手続きでは現段階での完全な証拠開示や情報公開は必要ないと主張した。[51]

代替方法の必要性に関して、ハファカー判事は、スミス氏の提案（修正窒素プロトコルや他州で用いられている銃殺刑など）はアラバマ州の状況において実行可能かつ容易に適用できる代替案ではないと判断した。[52] 裁判所は、これらの提案は州の既存の執行体制を考慮すると、憶測に基づくものか非現実的なものであると結論付けた。[53]

地方裁判所は、宗教的および手続き上の問題についても検討した。スミスの弁護士は、死刑執行手続き中に依頼人が証人の前で声に出して祈ることを許可するよう求めた。[54] 2023年12月の公聴会で、ハファカー判事は、スミスが「予定されている死刑執行前に、マスクを着用せずに証人の前で声に出して祈ることができる」よう、州に執行手順の修正を検討するよう促した。[55] ハファカー判事は、この要請は執行方法の合憲性についてどのように判断するかを示すものではないと強調したが、これは死刑執行という文脈における信教の自由の問題に対する判事の配慮を反映したものであった。[56]

V. 控訴および反対意見の審査

地方裁判所の判決後、スミスは第11巡回区控訴裁判所に控訴した。[57] 控訴裁判所は2対1の多数決でハファカー判事による差し止め命令の却下を支持し、死刑執行を承認した。[58] しかし、ジル・A・プライヤー判事による反対意見は、死刑執行の実験的な性質について深刻な懸念を示した。[59] プライヤー判事は力強くこう記した。「彼は死ぬだろう。その代償として、スミス氏の人間としての尊厳と、我々自身の尊厳が失われるのではないかと危惧している。」[60]

反対意見を述べた判事は、窒素低酸素症はこれまで人間に使用されたことがなく、そのリスク（パニック、意識の遷延、痙攣など）はほとんど定量化されていないと指摘した。[61] プライアー判事は、スミスが処刑中にどのような経験をするかについて「深刻な疑念」があると強調し、処刑を許可することで、裁判所は事実上、十分な情報に基づいた同意なしに人間を裁判にかけることを容認することになり、倫理的および憲法上の重大な問題が生じると警告した。[62]

一方、多数派はハファカー判事の論理に従い、スミス被告が重度の苦痛を伴う重大なリスクを立証しておらず、アラバマ州では他の方法を容易に適用できないと結論付けた。[63] 合衆国最高裁判所は死刑執行の停止も上告受理も拒否したため、州は死刑執行を進めることができた。[64]

VI. 実行と即時反応

2024年1月25日、スミスはアラバマ州アトモアのホルマン矯正施設で処刑された。[65] 公式報告によると、彼は担架に縛り付けられ、全面マスクを装着された。[66] その後、窒素が放出され、肺から酸素が押し出された。しかし、その場に居合わせた人々の反応は、州が約束した迅速かつ苦痛のない死とは全く異なっていた。目撃者たちは、この処刑方法の実験的な性質と人間の反応の予測不可能性の両方を浮き彫りにする、恐ろしい身体的反応を語った。

メディアの目撃者は次のように述べている。「彼は激しく震え、もがき始め、痙攣や発作に似た動きを見せた…彼の動きの強さで、担架が少なくとも一度は明らかに動いた。スミスの腕は、彼を担架に固定しているストラップを引っ張っていた。彼は担架から頭を持ち上げ、そして後ろに倒れた。」[67]別の記者は、スミスが数分間意識があったようで、「時折、担架の上で震え、もがき、拘束具を引っ張っているように見えた。その後、数分間苦しそうに呼吸し、やがて呼吸が聞こえなくなった。」[68]観察者たちは、身体反応が州が説明する瞬間的で人道的な窒素低酸素症よりもはるかに長く続いたと指摘した。アラバマ州アメリカ自由人権協会（ACLU）は、「目撃者の証言によると、スミス氏は処刑開始から少なくとも22分後に死亡が確認されるまで、数分間震え、痙攣し、もがき苦しみ、喘ぎ続けた」と報告した。[69]

国際人権専門家らは、この方法が前例のない実験的なものであることを強調している。国連人権高等弁務官事務所は、「この新しく未検証の窒素ガス窒息法は拷問、あるいは残酷で非人道的、または品位を傷つける扱いに当たる可能性があるという深刻な懸念があるにもかかわらず、アラバマ州でケネス・ユージン・スミスが処刑されたことを深く遺憾に思う」と述べている。[70]別のメディア関係者は、スミスの身体の動きについて詳細に描写している。「スミスはできる限り息を止めているように見えた…彼の体と頭は数分間、激しく左右に揺さぶられていた。」[71]

これらの目撃証言は、州が保証する安らかな死とは全く異なる実態を描き出しており、窒素低酸素症の実験的な性質と、これまで人間に適用されたことのない方法を用いることに伴う倫理的な葛藤を浮き彫りにしている。スティーブ・マーシャル司法長官は、この処刑を「歴史的」かつ「人道的」と公に称し、アラバマ州が「致死注射に代わる人道的な方法の有効性を実証した」証拠として提示した。[72] しかし、公式声明と目撃者の証言――痙攣、喘ぎ、そして長時間の苦闘――の並置は、法的権限、手続き上の手順、そして現実との間に存在する深刻な隔たりを浮き彫りにしている。[73]

これらの証言を総合すると、スミス事件に内在する緊張関係が明確になる。裁判所は革新的な法的論理と多数の安全策を講じた手順に基づいて死刑執行を承認したが、それを目撃した人々は暴力的で残虐な、長期にわたる人体実験に晒された。この対比は、実験的な死刑執行方法がもたらす道徳的・倫理的な課題と、初めて用いられる手続きを評価する際の司法監督の限界を浮き彫りにする。[74]

VII. ハファカーの論理の法的分析

スミス事件におけるハファカー判事の意見は、死刑執行方法に関する議論に対する明らかに保守的な司法アプローチを反映しており、この分野における今後の訴訟に重要な意味を持つ。この意見の中心的な側面は、斬新さだけでは死刑執行方法の合憲性を無効にするものではないという原則である。[75] ハファカー判事は、最高裁判所の判例に従い、憲法は新しい死刑執行技術の使用を全面的に禁止しているわけではないと強調した。むしろ、死刑囚は、提案された方法に伴う激しい苦痛の相当なリスクを立証しなければならない。[76] 言い換えれば、裁判所は、いかなる死刑執行方法も、ある時点では斬新であったことを認めており、死刑における革新は、それが証明されていないという理由だけで違憲であると推定することはできない。この論理は、事実上、死刑を、新しい技術の全面的禁止ではなく、手続き上の慎重さが憲法審査を支配する領域に置くものである。

この原則と密接に関連しているのが、ハファカー判決が処刑方法に異議を唱える原告に課す極めて高い立証基準である。裁判所は「ある程度の確実性または蓋然性をもって」リスクの証明を要求するが、[77]これは処刑方法が初めて使用される場合には特に満たすのが難しい基準である。定義上、死刑囚が窒素低酸素症にどのように反応するかを判断するための過去のデータや管理された経験的証拠は存在しないため、批評家が論理的パラドックスと呼ぶ状況が生じている。[78]処刑に異議を唱える者は、処刑方法を実際に使用することによってのみ得られる証拠を提出しなければならない。しかし、裁判所がこの証拠が重大なリスクを示さないと確信するまで、処刑方法は合法的に使用できない。したがって、ハファカー判決は、処刑方法の初回使用に対する異議申し立てを克服することを極めて困難にする手続き上の障害を制度化しており、本質的に不確実な領域において原告に負のリスクを立証することを要求している。

この見解のもう一つの側面は、代替手段の概念を制限的に捉えている点にある。ハファカーは、提案された代替手段は、関連する管轄区域内で実行可能かつ容易に適用可能でなければならないと主張した。[79] スミス事件では、裁判所は提案された代替手段をアラバマ州の状況においては憶測的または非現実的であるとして却下した。[80] この制限的な見解は、執行方法に関する紛争を徹底的な憲法審査から除外し、管轄区域の実現可能性に関する手続き上の論争に矮小化してしまう。実際には、これにより司法分析はごく限られた問題に限定され、根底にある倫理的および憲法上の問題はほとんど検討されないまま残されることになる。

この判決は、透明性に対する制限的な見方を反映している。ハファカー判事は、大幅に黒塗りされた州のプロトコルを受け入れ、独立した審査に必要な技術仕様の完全な開示を要求することを拒否した。[81] 透明性の要件を緩和することで、裁判所は外部の専門家による分析や公共の説明責任の機会を減少させている。批評家は、この透明性の欠如は、特に窒素低酸素症のような革新的な方法の場合、関連する司法および科学的評価を妨げると主張している。

法律専門家や人権専門家は、ハファカー判事の論理を厳しく批判している。ある観察者は、判事がアラバマ州の窒素低酸素プロトコルを厳密な精査なしに受け入れたことを指摘し、この判決を「循環論理と誤った推論」の例と呼んだ。[82] これらの批判は、窒素低酸素による死刑執行の実績がないこと、管理された実験データではなく職場事故との類推に依存していること、そして長期にわたる苦痛や植物状態など、プロトコルの不具合による深刻な結果の可能性など、いくつかの問題点を浮き彫りにしている。これらの批判を総合すると、この判決は、新たな死

刑執行方法に伴う憲法上のリスクの徹底的な分析よりも、手続き上の形式主義を優先していることが示唆される。
要約すると、ハファカー判決は、死刑執行方法に関する申し立てを評価するための保守的な枠組みを確立し、手続き上の障壁、情報開示の制限、そして州による新たな執行技術の導入に対する敬意ある姿勢を重視している。このアプローチは、新たな方法を採用しようとする裁判所や州に明確さをもたらす可能性がある一方で、死刑制度における公平性、透明性、そして憲法上の権利の効果的な保護といった、深刻な問題を提起するものでもある。

VIII. 透明性、機密保持、説明責任

アラバマ州の窒素低酸素プロトコルは、その秘密主義で知られている。州が公表している手順書のほとんどは黒塗りされており、当局はガス流量、マスクの密閉仕様、緊急手順などの重要な詳細の開示を拒否している。[83] この不透明性は、米国における死刑執行の広範な傾向を反映している。米国では、秘密保持法によって、化学物質の供給者、執行チーム、および手順の詳細の身元がますます保護されている。[84]

法学者デボラ・デンノが指摘するように、各国は死刑執行室を法的な例外の場へと変貌させ、通常の責任追及と透明性が秘密主義に取って代わられている。[85] この監視の欠如は、こうした実験による害への懸念を悪化させている。国家が「数秒で」安らかな死を迎えると予測する一方で、目撃者が数分間続く激しい痙攣を目撃しているという矛盾は、秘密主義がいかに国民の監視を妨げ、公式見解への不信感を煽るかを浮き彫りにしている。[86] デンノが「責任追及から守られた官僚的実験」と呼ぶものへと死刑執行が変貌したことは、法の支配と国家暴力の民主的統制に関する根本的な問題を提起している。[87]

IX. 歴史的・比較的な背景

窒素低酸素症への移行は、アメリカ合衆国における死刑制度の変遷というより広い文脈の中で捉える必要がある。18世紀後半以降、ギロチン、絞首刑、電気椅子、ガス室、薬物注射といった新たな処刑方法は、当初は前身の方法よりも人道的で科学的に進歩していると称賛されたものの、実施されるやいなや論争と改革要求を引き起こしてきた。[88] 歴史家スチュアート・バナーが繰り返し指摘しているように、このパターンは、処刑方法の変更が人道的進歩のみによって動機づけられることは稀であり、むしろ死刑制度の正当性そのものの維持によって動機づけられていることを示している。[89]

法曹専門家のオースティン・サラット氏も、処刑方法があまりにも目立ちすぎたり、血生臭かったり、あまりにも残酷になったりすると、州は新しい技術の陰に隠れて暴力を隠蔽しようとすると指摘している。[90] したがって、アラバマ州が窒素低酸素症を採用したことは、改革というよりもむしろ維持策と解釈できる。つまり、物流上の制約（薬剤不足）、法的課題（致死注射の手順に関する訴訟）、倫理的問題（処刑の失敗やずさんな手順）にもかかわらず、処刑を維持するための手段なのだ。[91] 窒素低酸素症は、この歴史的パターンの最新の現れであり、一

見臨床的で無血な技術であるにもかかわらず、技術的進歩として提示され、その主な機能は死の機械を稼働させ続けることにある。[92]

X. 倫理的側面および人権的側面

スミスの処刑が持つ倫理的意味合いは、アラバマ州の境界をはるかに超える。この事件は、人体実験、インフォームド・コンセント、そして国家権力の限界に関する根本的な問題を提起している。国際人権法は拷問や残虐で非人道的、または品位を傷つける扱いを禁じているが、多くの人権擁護者は、アラバマ州が人体実験を行っていない処刑方法を用いたことで、これらの基準に違反したと主張している。[93]

法制度における「選択」のパラドックスも検討に値する。最高裁判所の判例は、死刑囚が現在の処刑方法に異議を唱える場合、代替の処刑方法を提案することをますます要求しており、ソニア・ソトマイヤー判事はこの要求を「不当」と呼んでいる。⁹⁴　スミスの場合、この判例により、彼は潜在的に残酷な選択肢、すなわち致死注射（すでに失敗していた）、電気椅子、または新しい窒素窒息法の中から選択せざるを得なかった。⁹⁵　ある評論家が指摘したように、これは手続き上の公正さを装った残酷さの官僚化を表している。⁹⁶

裁判官がスミスに「苦痛のない死が保証されていなかった」と認めたことは、厄介な道徳的緊張関係を浮き彫りにしている。すなわち、死刑囚が相当なリスクを高い確実性をもって証明できない限り、苦痛が生じる可能性や蓋然性がある場合でも、州は合法的に死刑執行を進めることができるのである。⁹⁷　これは、実験的な方法に直面する人々にとって、憲法上の保護がほとんど及ばないことを意味する。⁹⁸

XI. 政治的側面と文化的背景

アラバマ州の対応の政治的背景も同様に重要である。この州は、死刑執行に関して長年国内で最も急進的な州の一つであり、州の政治指導者たちは、連邦政府の干渉とみなすものへの抵抗と道徳的明晰さの象徴として、死刑を頻繁に持ち出す。⁹⁹　　マーシャル司法長官が、スミスの処刑を更生と正義の実現として公に祝ったことは、この処刑がいかにポピュリズム的なレトリックに組み込まれていたかを示している。¹⁰⁰

一方、被害者の家族は複雑な感情を表明した。エリザベス・セネットの息子の一人は報道陣に対し、「今日起きたことは何であれ、母は戻ってこない」「今日はほろ苦い日だ」と率直に語った。[101]　これらの発言は、国内での支持の低下と国際的な非難の高まりにもかかわらず、死刑制度が存続し続ける根底にある、深い文化的・感情的な隔たりを示している。[102]

XII. より広範な範囲と将来への影響

スミス事件における窒素低酸素症の承認は、死刑執行方法に関する今後の訴訟において重要な先例となる。¹⁰³ ハファカー判決と控訴裁判所の多数意見は、限られた実証的証拠にもかかわらず州が革新的な方法を使用することを認めることで、裁判所は一般的に、高い確実性に達する重度の苦痛の実質的な証拠がない限り、州の主張を尊重することを強調した。¹⁰⁴ 今後、新たな方法に異議を唱える原告は高い証拠要件に直面する一方、州は従来の致死注射が非現実的になった場合、同様の未証明のプロトコルを採用する可能性がある。¹⁰⁵

スミスの死刑執行は、米国における死刑執行の技術的進化の新たな段階を示すものである。¹⁰⁶ これは、薬物不足、訴訟、あるいは道徳的批判といった圧力の下で、州が正義の名の下に死刑執行を行う能力を維持するためにどのように適応していくかを示している。¹⁰⁷ また、憲法上の保障の限界も明らかにしている。裁判所が、激しい苦痛を与える相当なリスクの証明を要求し、具体的な実施によってのみ満たすことができる証拠要件を定める限り、実験的な方法は、生きた人間でテストされるまでは法的に有効であり続けるだろう。¹⁰⁸

アラバマ州での経験は、同様の課題に直面している他の州を勇気づける可能性がある。¹⁰⁹ オクラホマ州、ミシシッピ州、その他いくつかの州は既に窒素低酸素症による死刑執行を認可しているが、まだ実施していない。¹¹⁰ もしこれらの州が（ルイジアナ州のように）窒素低酸素症による死刑執行を進めれば、スミスの死刑執行は前例となると同時に警告にもなるだろう。つまり、「人道的な」死刑執行を追求しても、根底にある暴力性を覆い隠すことはできても、根底にある暴力性を排除することはできないということを、この死刑執行は私たちに思い起こさせるだろう。¹¹¹

この事例は、法的推論、倫理規範、そして世論の相互作用を浮き彫りにしている。[112] 人道に関する公式声明と苦痛の証言、法的正当化と国際的な非難との間の著しい対比は、処刑が法的には成功したが、道徳的にも人道的にも失敗したことを示唆している。[113] 反対意見が指摘しているように、道徳的な代償には、スミスの人間としての尊厳だけでなく、多くの観察者が国家公認の人体実験と表現した行為を承認した司法機関の正当性も含まれる可能性がある。[114]

XIII. 結論

窒素低酸素症によるケネス・スミスの処刑は、アメリカ合衆国における死刑の歴史において極めて重要な瞬間である。¹¹⁵ この処刑は、画期的な初処刑と、広範な司法審査、立法上の革新、そして深い倫理的議論が結びついている。¹¹⁶ この事例は、2018年にアラバマ州が与えた法的認可が具体的な処刑手順へとどのように発展したか、裁判所が既存の憲法修正第8条の法理を全く新しい方法にどのように適用したか、そして法的、政治的、道徳的な考慮事項がどのように組み合わさって州が処刑を進めることを可能にしたかを示している。¹¹⁷

ハファカー判事の第一審および控訴審における意見は、憲法上の保障、州の特権、人権上の考慮事項のバランスを取る際に内在する緊張関係を明らかにしている。〈sup〉118〈/sup〉 裁判官の多数派は、人道と効率性に基づくアラバマ州の主張を受け入れたが、反対意見は、実験、不十分な保護、道徳的妥協に警鐘を鳴らした。〈sup〉119〈/sup〉 死刑執行は合法的に行われたが、重大な疑問が未解決のまま残された。裁判所は効果的な憲法上の保護を提供したのか？透明性と説明責任は十分だったのか？そして、合法性と倫理的正当化の区別は乗り越えられないものになってしまったのか？〈sup〉120〈/sup〉

当局からは人道的効率性における大きな前進と称賛され、人権擁護者からは人道実験だと非難されたスミスの処刑は、死刑制度を長年悩ませてきた矛盾を体現している。それは、本質的に残虐なものを和らげ、根本的に暴力的なものを臨床化し、ますます増大する物流、法律、そして倫理的な課題に直面するこの慣行の正当性を維持しようとする試みである。アラバマ州は人道的な処刑の問題を解決したわけではない…単に苦痛を隠蔽する新たな方法を見つけたに過ぎない。

スミス事件は、死刑、司法審査の限界、そして米国における絶えず変化する死刑執行方法に関する法的、政治的、倫理的な議論において画期的な出来事となった。[123] この事件は、死刑制度をめぐるアメリカの継続的な経験を象徴するものであり、この事例では、死刑囚が法的先例となり、裁判の対象となったことで、その結果は未来の裁判所、議会、そして市民に委ねられることになった。[124]

私がこの文章を書いている時点で、ケネス・スミスの処刑は液体窒素を用いた8件の処刑のうち最初のものだった。本稿では、私が目撃した2件を含め、それらすべての処刑について検証していくつもりである。

XIV. 目撃証言

上記で提示した法的・歴史的分析は、ケネス・ユージン・スミスが窒素低酸素症によって処刑された経緯を理解するための構造的枠組みを提供するものであり、制定された法律、策定された手順、下された裁判所の判決、確立された判例などが含まれる。[125]しかし、このような分析は、どれほど徹底的であっても、2024年1月25日にホルマン矯正施設で起こった人間の現実を完全に捉えることはできない。[126]裁判所の判決は憲法上の規則と立証責任の文言に基づいており、立法文書は効率性と人道性を抽象的な言葉で表現している。[127]しかし、処刑は抽象的なものではない。それは、特定の場所と特定の時間に、他の生存者の面前で、生きた人間に対して行われる具体的な行為である。[128]

私はその夜、ケネス・スミスの精神的指導者としてその場に居合わせました。次の章では、法的な分析や歴史的な解説ではなく、目撃者としての私の直接的な体験を語ります。〈sup〉129〈/sup〉 法理から現実へと移ることで、裁判所が文書で認めていることと、処刑室で実際に起こっていることとの間の隔たりが明らかになります。私の記述は、議定書や司法意見では伝えきれ

ないもの、つまり、最後の数時間の雰囲気、語られた言葉、部屋のムード、そして国家が憲法上の理論を人間の死へと変えることの恐ろしい現実を伝えます。¹³⁰ これが、私がその夜に見て、聞いて、覚えていることです。¹³¹

最終的なメモ

1. Nicholas Bogel-Burroughs と Abbie VanSickle、「アラバマ州、米国で初の窒素による死刑執行を実施」、*ニューヨーク・タイムズ*、2024年1月25日、https://www.nytimes.com/2024/01/26/us/kenneth-smith-nitrogen-execution.html。

2. ローレン・ギル、「死刑執行に窒素ガスを使用することは前例がなく、十分に理解されていない」、 *The Appeal* 、2019年10月25日、https://theappeal.org/using-nitrogen-gas-for-executions-is-untested-and-poorly-understood-three-states-plan-to-do-it-anyway/。

3. デボラ・W・デンノ、「致死注射後の混乱」 、*ジョージタウン・ロー・ジャーナル*102 (2014) 。https://ir.lawnet.fordham.edu/faculty_scholarship/506。

4. スチュアート・バナー著*『死刑制度：アメリカの歴史』* （ケンブリッジ、マサチューセッツ州：ハーバード大学出版局、2002年）。

5. *アラバマ州対ケネス・ユージン・スミス*、裁判記録、コルバート郡巡回裁判所、1989年。

6. 同上

7. ケネス・E・スミス、「法廷での陳述」、量刑審理の記録、1996年。

8. *Smith v. State* , 588 So.2d 561 (アラバマ州刑事控訴裁判所、1991年)。

9. *アラバマ州対ケネス・ユージーン・スミス*、裁判記録、コルバート郡巡回裁判所、1996年。

10. アラバマ州法典 § 13A-5-47 (1996)；判決命令、*州対スミス*、コルバート郡巡回裁判所、1996年。

11. Equal Justice Initiative、「アラバマ州、死刑に対する司法拒否権を廃止」、2017年4月4日 (2017年4月11日更新) 、 https://eji.org/news/alabama-legislature-passes-law-abolishing-judicial-override/ 。

12. *Smith v. State* , 588 So.2d 561 (アラバマ州刑事控訴裁判所、1991年)； Ex parte Smith, 756 So.2d 957 (アラバマ州、2000年)； *Smith v. Alabama,* 531 US 830 (2000年) (認証拒否)。

13. キム・チャンドラー、「アラバマ州、点滴挿入の困難を理由に死刑執行を中止」、 *AP通信*、2022年11月18日。 https://apnews.com/article/ejecuciones-en-alabama-fd4937918b0529c07c005ace7a357b84.

14. *Smith v. Hamm*, 2023 WL 4080125 (M.D. Ala. 2023).

15. アラバマ州法2018-353（上院法案272）；アラバマ州法典§15-18-82.1。

16. レベッカ・ベイツ、「致死注射薬の不足が新たな処刑方法を生み出す」、*ピュー・ステートライン*、2019年6月25日、https://www.pewtrusts.org/en/research-and-analysis/articles/2019/06/25/lethal-injection-drug-shortages-drive-new-execution-methods。

17. アラバマ州法2018-353（上院法案272）。

18. アラバマ州法典 § 15-18-82.1(b)(2)

19. 2018年3月6日、アラバマ州上院での討論（トリップ・ピットマン上院議員の発言）。ピットマン議員は、窒素窒息死はより人道的で侵襲性の低い選択肢であると述べ、その過程を飛行機の客室の減圧に例えた。アラバマ・ポリティカル・レポーター紙、「上院司法委員会、窒素窒息死による死刑執行を承認」、2018年2月16日、 https://www.alreporter.com/2018/02/16/senate-judiciary-committee-approves-execution-nitrogen-apoxia/も参照（ピットマン議員：「数秒で、数回の呼吸の後、意識を失います。2分で死に至ります。」）。窒素低酸素症を「人類が知る中で最も苦痛がなく人道的な処刑方法」と特徴づける表現は、後にアラバマ州司法長官エドモンド・ラクールによって、2024年1月に第11巡回控訴裁判所での弁論の中で述べられた。*ケネス・ユージーン・スミス対コミッショナー*事件、第24-10095号（第11巡回控訴裁判所、2024年1月24日）を参照。

20. 同上

21. Beitsch、*前掲*注16。

22. アラバマ州上院司法委員会の公聴会、2018年3月、トリップ・ピットマン上院議員の証言。

23. 同上

24. コナー・シーツ、「アラバマ州上院、窒素ガスによる低酸素死刑を全会一致で承認」、 *AL.com* 、2018年3月1日、https://www.al.com/news/2018/03/alabama_senate_unanimously_app.html。

25. アラバマ州議会情報システム、上院法案272号の投票記録、2018年3月。

26. アラバマ州死刑情報センター、https://deathpenaltyinfo.org/state-and-federal-info/state-by-state/alabama。

27. 死刑情報センター、「アラバマ州、窒素低酸素死刑を認可した3番目の州に」、2018年3月、https://deathpenaltyinfo.org/news/alabama-becomes-third-state-to-authorize-nitrogen-hypoxia-executions。

28. ロバート・ダナム氏の発言は、死刑情報センターの記事「アラバマ州、窒素低酸素による死刑執行を認可した3番目の州となる」（2018年3月）に引用されている。

29. Dana G. Smith、「窒素による処刑方法はより『人道的』だと宣伝されているが、証拠は不足している」、*サイエンティフィック・アメリカン*、2022年9月23日、htt

ps://www.scientificamerican.com/article/nitrogen-execution-method-touted-as-more-humane-but-evidence-is-lacking。

30. キム・チャンドラー、「アラバマ州、窒素注入による死刑執行方法を開発したと発表」、 *AP通信*、2021年8月7日、https://apnews.com/article/alabama-executions-57c6d76d5a0f6b4a8ecb2324b7a68004。

31. アラバマ州矯正局、「窒素低酸素死刑執行：手順概要」、内部メモ、2023年。

32. 同上（行政文書へのアクセス要求を受けて公開された編集済みバージョン）。

33. 同上

34. 米国労働省、「産業環境における窒素窒息：リスク概要」、OSHA技術報告書、2017年。

35. アラバマ州アメリカ自由人権協会、「ACLU、アラバマ州の窒素低酸素症プロトコルをめぐる秘密主義について懸念を表明」、2023年10月。

36. オースティン・サラット著『*国家が人を殺すとき*』 （プリンストン大学出版局、2001年）。

37. キム・チャンドラー、「アラバマ州、最高裁の判決を受けて窒素ガスによる国内初の死刑執行」、 *PBSニュースアワー*、2024年1月25日、https://www.pbs.org/newshour/politics/us-supreme-court-rules-alabama-can-proceed-with-the-countrys-first-execution-by-nitrogen-gas（特にソトマヨール判事のテストケースに関する発言）。

38. アラバマ州司法長官事務所、「執行日要求：ケネス・ユージン・スミス氏に対する申し立て」、2023年8月25日。

39. 訴状、*スミス対ハム*、事件番号2:23-cv-00656（アラバマ州メリーランド州、2023年9月提出）。

40. 同上

41. *スミス対ハム事件*の審理記録、事件番号2:23-cv-00656（アラバマ州地方裁判所、2023年12月）。

42. 専門家意見書、 *Smith v. Hamm* 、事件番号2:23-cv-00656（アラバマ州地方裁判所、2023年12月）。

43. 被告による差止命令申立てに対する回答、 *Smith v. Hamm* 、No. 2:23-cv-00656 (MD Ala.、2024年1月)。

44. *Smith v. Hamm* 、事件番号 2:23-cv-00656-RAH（アラバマ州地方裁判所、2024年1月10日)、意見および命令覚書。

45. *Smith v. Hamm*、 No. 2:23-cv-00656-RAH (MD Ala.、2024年1月10日)、17ページと35ページ。第11巡回区控訴裁判所は、 *Kenneth Eugene Smith v. Commissioner* 、No. 24-10095 (第11巡回区、2024年1月24日)、17ページで同様の表現を使用しました。

46. *Glossip c. Gross* 、576 U.S. 863 (2015); *Bucklew v. Precythe* 、139 S. Ct. 1112 (2019)。

47. *スミス対ハム事件*、意見覚書、35〜44頁。

48. 同上、44頁。

49. 同上、41-42頁。

50. 同上、43頁。

51. 同書、34-44頁。

52. 同書、36-37頁および42-44頁。

53. 同上

54. 宗教的配慮を求める申し立て、 *Smith v. Hamm* 、No. 2:23-cv-00656 (MD Ala.、2023年12月)。

55. 「裁判官が、死刑囚がガスマスクなしで祈りを捧げ、最期の言葉を述べることができるよう、窒素ガスによる死刑執行方法の変更を提案」 *AP通信*、2023年12月21日、https://apnews.com/article/alabama-execution-nitrogen-judge-huffaker-b68d35e3e91b8f58197f28ea8b52918e。

56. *スミス対ハム事件*、2023年12月の審理の議事録および理由付き意見書、47ページ。

57. *Kenneth Eugene Smith 対 Alabama Department of Corrections 長官*、事件番号24-10095 (第 11 巡回区控訴裁判所、2024 年 1 月 24 日)。

58. 同上、多数意見。

59. 同上、ジル・A・プライアー判事の反対意見。

60. 同上

61. 同上

62. 同上

63. 同上、多数意見。

64. *スミス対アラバマ州事件*、第23A763号（米国、2024年1月25日）（執行停止を却下する命令）。

65. アラバマ州矯正局、「死刑執行概要：ケネス・ユージーン・スミス」、2024年1月25日。

66. 目撃証言、ケネス・スミスの処刑、ホルマン矯正センター、2024年1月25日。

67. キム・チャンドラー、「米国初の液体窒素による死刑執行で何が起こったのか：AP通信の目撃証言」、 *AP*ニュース、2024年1月27日、https://apnews.com/article/54848cb06ce32d4b462a77b1bb25e656（「彼は激しく震え、もがき始めた…担架が明らかに動いた。」）

68. エド・ピルキントン、「アラバマ州の窒素ガスで処刑された受刑者は『激しく震えていた』と目撃者が証言」、*ガーディアン*、2024年1月26日、https://www.theguardi

an.com/us-news/2024/jan/25/alabama-executes-kenneth-smith-nitrogen-gas（「スミスは数分間意識を保っていた…呼吸が荒かった」）。

69. アラバマ州アメリカ自由人権協会（ACLU）のプレスリリース、2024年1月26日、https://www.aclualabama.org/en/news/kenneth-smith-executed-nitrogen-hypoxia（「目撃者によると、スミス氏は震え、痙攣し、もがき苦しみ、呼吸困難に陥っていた」）。

70. フォルカー・テュルク、「アラバマ州での死刑執行に関する声明」、2024年1月26日、 https://www.ohchr.org/en/statements-and-speeches/2024/01/alabama-execution （「アラバマ州でのケネス・ユージン・スミスの処刑を深く遺憾に思う。この斬新で未証明の窒素窒息死法は拷問または残酷で非人道的もしくは品位を傷つける扱いとなる可能性があるという深刻な懸念があるにもかかわらず」）；また、*国連ニュース*、「米国：トルコ、初の窒素窒息死刑執行に遺憾の意を表明」、2024年1月26日、 https://news.un.org/en/story/2024/01/1145947 も参照。

71. ラルフ・チャポコ、「ケネス・ユージーン・スミス、1988年の契約殺人で窒素ガスにより処刑」、*アラバマ・リフレクター*、2024年1月25日、 https://alabamareflector.com/2024/01/25/kenneth-eugene-smith-executed-by-nitrogen-gas-for-1988-murder-for-hire-scheme/；アランダー・ロシャ、「アラバマ州司法長官、初の窒素ガスによる処刑を擁護し、全国的な傾向を予測」、*アラバマ・リフレクター*、2024年1月26日、https://alabamareflector.com/2024/01/26/alabama-attorney-general-defends-first-execution-by-nitrogen-gas-anticipates-national-trend （「スミスは息を止めているように見え、激しく左右に震えていた」）。

72. スティーブ・マーシャル、「ケネス・ユージン・スミスの処刑に関する声明」、アラバマ州司法長官事務所、2024年1月26日、https://www.alabamaag.gov/alabama-attorney-general-steve-marshall-statement-on-the-execution-of-murderer-kenneth-smith-by-nitrogen-hypoxia。

73. Bogel-BurroughsおよびVanSickle、*上記*注1参照。

74. マヤ・フォアの発言は、サム・レヴィンとエド・ピルキントンによる「アラバマ州、窒素ガスによる死刑執行で有罪判決：「彼らは彼を拷問するつもりだった」」、*ガーディアン紙*、2024年1月26日、https://www.theguardian.com/us-news/2024/jan/26/alabama-nitrogen-gas-execution-torture、ACLUのプレスリリース、2024年1月25日に引用されている。

75. *スミス対ハム事件*、意見覚書、42-43頁。

76. 同上

77. 同書、35-36頁および41-43頁。

78. デンノ、*上記*注3。

79. *スミス対ハム事件*、意見書、18～20ページおよび43～44ページ。

80. 同上、43-44頁。

81. 同上、5。

82. スティーブン・クーパー、「メンゲレのような論理がアラバマ州のガスによる男性殺害計画の根底にある」、*モンゴメリー・アドバタイザー*、 https://www.montgomeryadvertiser.com/story/opinion/contributors/2024/01/25/mengele-like-logic-underpins-alabamas-plan-to-gas-a-man-to-death/72356085007。

83. *Smith v. Hamm* 、事件番号2:23-cv-00656、付録A（編集済み議事録）。

84. デンノ、*上記*注3。

85. 同上

86. Bogel-BurroughsおよびVanSickle、*上記*注1参照。

87. デンノ、*上記*注3。

88. バナー、*上記*注4参照。

89. 同上

90. Sarat、*前掲*注36参照。

91. 同上

92. 同上

93. 国連人権高等弁務官事務所、2024年1月27日。

94. *Glossip c. Gross* , 576 US 863 (2015)（ソトマヨール判事、反対意見）。

95. *スミス対ハム事件*、意見書、18～20ページおよび36～37ページ。

96. クーパー、*前掲*注82。

97. *スミス対ハム事件*、判決要旨、44ページ。

98. 同上

99. アラバマ州死刑情報センター、https://deathpenaltyinfo.org/state-and-federal-info/state-by-state/alabama。

100. マーシャル、*前掲*注72。

101. AP通信、「死刑執行後、被害者の家族が声を上げる」、2024年1月26日、 https://apnews.com/article/victims-family-speaks-execution ；「『今夜、彼女の負債は返済された』：セネット兄弟、母親の殺人犯の処刑に慰めを見出す」 *WVTM13* 、2024年1月26日、 https://www.wvtm13.com/article/elizabeth-sennett-kenneth-smith-execution/46545025 （処刑後、エリザベス・セネットの息子の一人であるマイク・セネットは記者団に「今日起こったことで母が戻ってくることはない。ほろ苦い日だ。飛び跳ねたり、叫んだり、騒いだりするつもりはない」と語った。さらに「今夜、彼女の負債は返済された」「エリザベス・ドーリーン・セネットは今夜、正義を得た」と付け加えた。）AP通信、2024年1月26日も参照。

102. *ギャラップ*、「死刑に関する調査」、2023年、https://news.gallup.com/poll/1606/death-penalty.aspx; また、Türkおよび*UN News* 、*上記*注70も参照。

103. *Kenneth Eugene Smith 対 Commissioner 事件*、No. 24-10095（第 11 巡回区控訴裁判所、2024 年 1 月）。

104. 同上

105. 同上

106. バナー、*上記*注4参照。

107. Sarat、*前掲*注36参照。

108. *スミス対ハム事件*、意見覚書、45-46頁。

109. キム・チャンドラーとショーン・マーフィー、「他の州はアラバマ州の窒素による死刑執行を模倣するだろうか？」、 *AP通信*、2024年1月27日、https://apnews.com/article/nitrogen-execution-alabama-oklahoma-lethal-injection-c088b01aeb581da7bfb73e52aa6caf3f。

110. ミシシッピ州法典第99-19-51条、オクラホマ州法典第22編第1014条。

111. Bogel-BurroughsおよびVanSickle、*上記*注1参照。

112. デンノ、*上記*注3。

113. 国連人権高等弁務官事務所、2024年1月27日。

114. *Kenneth Eugene Smith v. Commissioner* 、No. 24-10095（第 11 巡回区、2024 年 1 月）、Pryor 判事の反対意見。

115. 同上、多数意見。

116. アラバマ州法2018-353（上院法案272）。

117. *スミス対ハム事件*、判決要旨。

118. 同上

119. *ケネス・ユージン・スミス対コミッショナー事件*、プライアー判事の反対意見。

120. 同上

121. バナー、*上記*注4参照。

122. 処刑後の記者会見では、死刑制度に反対する多くの声明が出された。人道性を謳う公式の主張と、激しい痙攣の描写が並置されたことで、歴史的なパターンに対する学術的な関心が再び高まった。オースティン・サラットが指摘したように、処刑技術の革新は、国家による処刑を人道的にする一方で、新たな形態の暴力を露呈させてきた。サラット、*前掲*注36参照。

123. キム・チャンドラー、「アラバマ州で史上初の窒素ガスによる死刑執行が行われ、米国が死刑論争の最前線に立つ」、 *PBSニュースアワー*、2024年1月26日、https://www.pbs.org/newshour/nation/us-at-front-of-death-penalty-debate-after-alabama-execution-uses-nitrogen-gas-the-first-ever； ウィリアム・W・ベリー3世、「窒素低酸素死刑執行に対する州憲法上の制限」、*イリノイ大学ロースクールレビュー*、2025年（窒素低酸素死刑執行方法が州憲法の量刑条項とどのように矛盾し、進化する死刑法

理とどのように相互作用するかを検証）リア・ローマー、「世界が見守る：目撃者によると、史上初の窒素低酸素死刑執行中、ケネス・スミスは意識があり、『震え、もがき苦しんでいた』」*死刑情報センター*、2024年1月26日、https://deathpenaltyinfo.org/the-world-is-watching-witnesses-report-kenneth-smith-appeared-conscious-shook-and-writhed-during-first-ever-nitrogen-hypoxia-execution; また、 *Hoffman v. Westcott* 、No. 25-70006（5th Circuit、2025）も参照（死刑囚らは、窒素低酸素死刑執行手順は合衆国憲法修正第8条に違反する激しい痛みの重大なリスクを生み出すと主張し、連邦地方裁判所は当初、仮差止命令を発令した）。

124. 同上

125. アラバマ州矯正局、「窒素低酸素死刑執行：手順概要」、内部メモ、2023年。

126. 著者の個人的な観察、ホルマン矯正センター、2024年1月25日。

127. 例えば、 *Smith v. Hamm事件*の判決意見書を参照。

128. 著者がスミスの処刑後に書いた著作における個人的な見解。

129. 著者による精神的アドバイザーとしての個人的観察、ホルマン矯正センター、2024年1月25日。

130. 同上

131. 同上

1.1：2024年1月25日に行われたケネス・スミスの処刑に関する個人的な記録

アラバマ州アトモアにあるホルマン刑務所は、悪夢のような場所だ。その1月の日、外では雨が激しく降っていたが、刑務所内で流れる涙に比べれば何でもなかった。あの涙に伴うすすり泣きほど、私の耳をつんざくような音はほとんど聞いたことがない。ケニー・スミスは数日間、別れを告げる機会を与えられ、その別れは最後の数分で最高潮に達した。ケニーの精神的指導者として、私は彼の処刑前に最後にもう一度彼と話せることを知っていた。そこにいた他の人たちはその機会を得られなかった。時間が来たとき、数人の看守がケニーにドアまでついてくるように言った。私は一人残って、彼らが去っていくのを見送った。他に何を言えばいいのか分からなかったが、「愛している」とだけ言った。そんな瞬間に、どうやって人を慰めることができるだろうか。私は最善を尽くした。

一人になった今、窓越しに面会室に私を見舞いに来ていた人たちの姿が見えた。彼らがほんの一瞬でも私と一緒にいたいと必死だったことを知っていたので、ケニーと過ごす時間が長かったことに罪悪感を覚えた。しかし、そんなことを考えている暇はなかった。やらなければならないことがあったのだ。ケニーが連れて行かれたドアの向こうから、かすかな物音が聞こえた。何が起こっているのか、後になってようやく分かった。

極度のストレスにさらされている時、孤独は恐ろしい状況だ。先の見えない不安という恐怖に直面せざるを得ない。待ち時間は長く、私は何度も神に導きを求めた。しかし、聞こえてきた答えはただ一つ。「進み続けなさい」。だから私は進み続けた。面会室を行ったり来たりした。一歩一歩が祈りだったのだろう。

ついに、刑務所の事務所の中が見えることに気づきました。小さな窓から、アラバマ州司法長官事務所と矯正局の職員が廊下を歩いているのが見えました。彼らは私に気づくと、ガラスに紙を置きました。彼らが臆病者だとは分かっていましたが、見られることを恐れるあまり、状況は耐え難いものになりました。私はそのことを考えないようにしました。私にはどうすることもできませんでした。私は祈り続けました。「もしかしたら、神は彼らの殺意をその愛で抑えてくださるだろうか？」もちろん、その考えが私を悩ませました。

ホルマン刑務所の死刑執行チームの無能さは計り知れない。近年、ホルマンの看守たちは国内のどのチームよりも多くの死刑執行ミスを犯してきた。だから私は次に何が起こるのか心配だった。妻と子供たちのことを考えた。彼らが私の愛を知ってくれるように祈った。これらの思いは一瞬涙へと変わった。それから私は最も大切なことに集中し直した。祈ること、熱心に祈ることだ。「続けろ」という声が聞こえた。

そんな危機的な瞬間に、食べ物の匂いが漂ってきた。おしゃべりや笑い声の中、缶詰の食べ物が正門から運び込まれてくるのが見えた。処刑後のパーティーのためだと分かった。この人た

ちは人を殺すことなど気にしていなかった。ただスカートに興奮していただけだった。歩き回って疲れ果てていたし、極度のストレスでさらに状況は悪化した。あまりに疲れて、椅子に横になった。ライトが回転し始めた。私は魅了されてライトを見つめた。とても孤独で、とても疲れていた。眠ってしまいそうだと気づいた。しまった、もう3日近く起きていた。混乱の中で、イエスの叫び声が何度も聞こえた。今ではそれがケニーの声でもあると思った。「一緒に起きていられなかったのか？」数分後、警備兵が沈黙を破って私の名前を呼んだ。その時が来た。私は飛び上がった。よろめき、左右にふらついた。足を上げることができず、警備兵は何が起こっているのか分からなかった。テーブルに寄りかかり、私は平静を取り戻した。あるいは、神の導きだったのかもしれない。私には分からない。ただ、処刑を実行する時が来たということだけは分かっていた。行かなければならなかった。ケニーには私が必要だった。

一歩踏み出すたびに吐き気がした。気分が悪くなった。緊張で膀胱を濡らしてしまいそうだった。少なくとも、刑務所の惨状を見ればそうだろう。廊下は腐った肉の悪臭が漂っていた。角を曲がったら、元囚人の死体でいっぱいの冷凍室に迷い込んでしまうような気がした。その耐え難い悪臭を表現する言葉が見つからない。近年、刑務所のいくつかの区域は不衛生と宣告されていた。その理由は容易に理解できる。気を紛らわせようと、付き添いの看守に話しかけてみたが…彼は聞いてくれなかった。別の看守が以前、私は問題児として知られていると警告していた。「いい問題児だよ」と私は答えた。壁に塗られたばかりのペンキと、きれいに拭かれた床が目に留まった。まるで、ペンキと洗剤で全ての恐怖を覆い隠せると思っているかのようだった。彼らが知らないのは、悪はそう簡単に隠せるものではないということだ。

巨大な金属製の扉に着いたとき、私は自分がどこにいるのかを悟った。死が近い。警備員が3回ノックした。扉がゆっくりと開いた。警備員たちは壁際に並んでいた。彼らは直立不動ではなく、まるで散歩しているようだった。処刑の音を除けば、周囲の騒音は耳をつんざくほどだった。テレビでは昔のシットコム「*ウィングス*」*が放映されていた*。何年も見ていなかったし、当時もそれほど面白いとは思っていなかった。最後に見たのが、こんな安っぽい90年代のシットコムだったらどうだろう！他の警備員の中には椅子にぐったりと座り込んで眠ってしまった者もいた。この状況のあまりのプロ意識のなさに、私は本当に衝撃を受けた。何人かの警備員が「腹減った。早く終わってご飯が食べたい」と言っているのが聞こえた。彼らは距離を保ち、一日中ほとんど何も食べていない死にゆく男に話しかけ、ようやくご飯が食べられるから彼の死を待ち望んでいると言った。ようやくドアが開いてケニーに会えた時、彼は最後の電話をかけているところだった。もちろん、彼は何人かに電話をかけたかった。しかし、警備員たちは彼を助けるどころか、番号をダイヤルしなければならないことに苛立っているようだった。誰も彼の奇行や昼寝、無神経な会話を邪魔されたくなかったのだ。部屋には深い冷淡さが漂っていた。

ケニーが姉妹や息子と話している間、私は酸素モニター（明らかにco2meter.com製）を注意深く見ていた。数値は25.4で、その週の初めに見た22よりも高かった。独房に酸素を注入しているのだろうと思った。頭が痛み始めたが、必死に無視してケニーに集中しようとした。その朝、刑務所に急いで行った時に聖書が見つからなかったので、ホテルの*ギデオン聖書を使わざるを得なかった*。ケニーと話しながら、私は緊張しながら聖書を彼から引きちぎり始めた。そ

れからケニーは、面会室を出た後何が起こったのかを私に話した。数人の看守が彼に服を全部脱ぐように命じた。ケニーは怒って抵抗したが、すぐに従わざるを得なかった。服を脱がされた後、ケニーは彼らにオーラルセックスをした。彼らはすぐに彼を捕まえ、再び服を着るように強要した。私は彼が物音を聞いたことを知っていた。

独房の扉はプレキシガラスで覆われていて、まるで金魚鉢の中にいるようだった。何人かの看守が私が聖書の表紙を剥がすのを見て、じっと見つめてきた。私は気にしなかった。聖書の表紙を剥がすことは違法ではない。点呼が終わると、ケニーと私は私たちの好きな話題である愛と人生について少し話した。彼は家族にどれほど愛しているかを伝えてほしいと言った。それから、自分がもうすぐ出所するだけでなく、とても幸せだと世界に伝えてほしいと言った。彼は釈放日と、ついに刑務所から出られるという事実について、喜びにあふれて話した。その間ずっと、私は彼が大丈夫かどうか確かめたかった。彼は「死の陰の谷を恐れない」と言った。最期の瞬間でさえ、ケニーは私たちが共に前進していくことを私に知ってほしいと思っていた。皮肉なことに、私は彼を慰めようと最善を尽くしたが、彼も私を慰めようと最善を尽くしてくれた。私たちは兄弟のように前進した。

看守が独房のドアをノックした時、私たちは彼の最後の言葉をざっと振り返った。もう帰る時間だった。すぐ戻ると彼に約束した。ケニーは自分の気持ちをはっきりと伝えた。「君のことは心配していない。一度も心配したことはない。」立ち上がると、まためまいがした。寒かった。私は言われた通りにすると言い張った。出て行く時、最後にケニーを振り返った。彼の顔に浮かぶ喜びは、彼が誰をも騙していないことを物語っていた。彼は本当にホルマンをやっと出られることを喜んでいた。もし私が彼の立場だったら、私もそうだっただろう。私は矯正局が通過区域として使っている右側の区域の端を歩きながら、彼らがカーテンの後ろで最後の作戦を練っているのではないかと考えずにはいられなかった。死が近づいているのが分かった。感じていた。神がケニーと共にいてくださるように祈り続けた。これまで以上に悪の存在を強く感じた。悪そのものがそのカーテンの後ろに隠れていた。

「トイレに行ってもいいですか？」処刑中に我慢しなければならないとしたら、私には無理だと分かっていた。トイレに行ってもいいのかどうか、少し混乱があった。刑務所では排尿さえも物議を醸す話題だった。トイレを出てすぐ、待合室に呼び戻された。その途中、再び看守に話しかけようとした。驚いたことに、彼は少しだけ折れて、それとは一切関わりたくないと明言した。悪は、最も抵抗する者でさえも、しばしば罠にかけるものだと私は考えた。おそらくそれが、息苦しいシステムの本質なのだろう。大きな金属製の扉に着くと、看守は3人ずつノックし始めたが、誰も応答しなかった。ケニーが約束を守っていることに気づいた。彼は騒ぎを起こさずに立ち去るつもりはないと私に約束していた。何か言わなければならないと感じた看守は、当たり前のことを言った。「彼は抵抗している」。私は彼に対して奇妙な誇りを感じた。暴力に対してではなく、殺されることを拒んだことに対して。人を殺すのは難しいはずだ、そうだろう？ついに扉が開いた。彼は怖かったが、もう何も恐れないと心に決めていた。

待合室にいた警備員がいなくなっていることに気づいた。どこへ行ったのだろうと思った。すると、処刑室の威圧的な扉が開いた。驚きは冷酷な現実へと変わった。処刑室の壁際に警備員

たちが整列していた。以前見た素人集団ではなく、今や契約殺し屋たちが直立不動の姿勢で、まさに処刑部隊だった。私は思わず立ち止まり、周囲を見回した。部屋には少なくとも12人の警備員と、地域刑務所長のシンシア・スチュワート＝ライリーがいた。ケニーをあの担架に縛り付けるのに、こんなに大勢の人が必要だったとは信じられなかった。あんな光景は見たことがなかった。ケニーはそれほど背が高くなく、警備員の中には巨漢もいた。しかし、ケニーの表情から、彼らの仕事ぶりを誇りに思っているのが分かった。彼はただ微笑んで、「ちょっと手こずらせてるよ」と呟いた。

刑務所職員に油の瓶と聖書を渡そうとしたとき、私は緊張でいっぱいだった。当然のことながら、彼らは皆、私を悪魔の化身のように見ていた。彼らの神が死刑なら、私もきっとそうだったのだろう。しかし、私は油をあちこちにこぼしてしまうだろうと確信していた。ケニーが、私が決して忘れることのない言葉をささやいた。「大丈夫、俺たちがコントロールしている」。私たちは、二人とも恐れていた谷底へと、ますます深く沈んでいった。私はヨハネによる福音書の第14章を読み始めた。

「イエスは言われた、『心を騒がせてはならない…』」その時、ケニーは激しく反応し始めた。

「私はそれをしません。」

「神を信じなさい。そして、私をも信じなさい。」

〝うん。〟

「わたしの父の家には多くの部屋がある。」

イエス様、ありがとうございます！はい、主よ！

「もしそうじゃなかったら、あなたに言っただろうか？あなたのために場所を用意しておこう。」

〝私は信じている！〟

「わたしが去って行ってあなたがたのために場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎え入れます。そうすれば、わたしがいる所にあなたがたもいることになるのです。」

早く自由になりたいよ、ジェフ。今日は私の釈放日なんだ。神に感謝！ハレルヤ！

「君はもう道を知っている。」

「私は後ろを振り返らない。道は分かっている。」その瞬間、私たちの言葉は真の精神的な交響曲となった。ケニーは部屋にいる全員に、神が私たちと共にいることを知ってほしかった。そして、外にいる人たちにも、私たちが経験したことを理解してほしかったに違いない。

「イエスは言われた、『わたしは道であり、真理であり、命である』」その瞬間、私たちは共に過ごす一瞬一瞬に愛と命を吹き込んだ。私たちは、最初から私たちを結びつけていた深い精神性なしに、この試練を乗り越えることを拒否した。ケニーは私に、恐れないこと、道を信じること、真理を信じること、そして人生を受け入れることを教えてくれた。もちろん、友人が目の前の担架に縛り付けられているときに、これらの真理にしがみつくのは奇妙な感じがする。この試練の間、ケニーは微笑み続け、朗読に反応しないときには「リリース・デイト」を静かに歌った。私は呆然とした。私は、これほど強く、これほど勇気を持って死に立ち向かう人を見たことがなかった。憎しみの視線が迫ってくるように感じた。医師たちの視線は、時間が残り少ないことを私に思い出させた。私は詩篇23篇を開いた。会話が再開した。

「主は私の羊飼い。私は何も欠けることがない。」

〃もちろん！〃

「彼は私を緑の牧草地に横たわらせる。」

「緑色がひどい！」

「彼は私の魂を癒してくれる…」

「神様、ごめんなさい！」

「…主は御名のために、私を正しい道に導いてくださる。」

「唯一無二の真の名前！」

「ああ、たとえ死の陰の谷を歩むことになっても…」

「ジェフ、僕たちはここにいるよ！」

「…私は何の危害も恐れない。」

「私は何も怖くない。」

「あなたは私と共にいる…」

「本当にごめんなさい。」油を準備している時に、うっかりいくつか言葉を言い忘れてしまったんです。それを見たケニーは笑っていました。

「…たとえ彼が私の頭に油を塗ってくれたとしても。」そう言って私は頭を下げた。

ケニー・スミス、あなたは神の愛する子です。あなたが常に知っていた、あなたが来た場所に戻りなさい。待つ必要はありません。愛はあなたの内に、その完全な形で現れるのを待っています。このオイルの香りが、あなたの存在の完全さへと導いてくれますように。神のオイル、来るべき命の約束。ケニー、あなたは自由です。父と子と聖霊の御名において。友よ、今、すべての美はあなたのものです。力強く進みなさい。

部屋は香の強い香りで満たされていた。ケニーに神の存在を肌で感じてほしかった。私の手は油で覆われていた。それを彼が横たわっているシーツに塗った。その香りを自分も持ち帰りたくなかった。彼の方が私よりもそれを必要としていることを知っていたからだ。警備員の一人が、手で素早く円を描くように動いた。最後の瞬間にも、彼らは物事を急ごうとしていた。私は計画したことを成し遂げるまで、決して諦めないつもりだった。

最後に、私は処刑のたびに読んでいた聖句、ヨハネによる福音書第8章1〜11節を読みました。ケニーは私が何を言おうとしているのか分かっていました。彼は満面の笑みを浮かべて目を閉じました。その日の午前中、私たちの会話の中で、彼は私にその箇所を声に出して読むようにと強く勧めていました。私はその通りにしました。物語は、姦通の現場で捕らえられた女性が、律法に従って石打ちにしようとした当局によってイエスの前に連れてこられたというものです。当局がイエスにどうすべきか尋ねると、イエスは彼女のそばにひざまずき、聖書の中で最も有名な言葉の一つを力強く口にしました。「罪のない者が最初に石を投げなさい！」

ケニーはそれまでずっと黙っていた。しかし、その言葉を聞くと、立ち上がって捕らえた者たちに大声で言った。「あいつがお前たちに話しかけてるって分かってるだろ？！」ケニーは、最後の抵抗として、自分たちが仕えていると主張する救世主の言葉を、いわゆるキリスト教徒の警備員全員に突きつけたかったのだ。私は再び彼の頭に手を置き、神が彼と共にいると告げた。彼は「大丈夫だ。大丈夫だ。大丈夫だ」と繰り返した。そして少し間を置いて、「俺たちなら大丈夫だ」と言った。最後に十字を切ってから、私は立ち去ろうとした。私が歩き出すと、ケニーは私とハイタッチして言った。「悲しむなよ、ジェフ。今日は俺の自由の日だ。」

私は深呼吸をして心を落ち着かせ、周囲の混乱から気を紛らわせようと歩き始めた。大きな刑務所の門をくぐり、以前とは違う道を進んだ。突然、雨の中、刑務所を囲むフェンスを見つめていた。イエスの言葉を読んで彼らに止まるように命じたので、彼らは私を追い出そうとしているのだと本気で思っていた。しかしその後、トレーラーに連れて行かれ、そこでケニーの妻ディー・スミス、息子スティーブン・ティグルマン、弁護士ロバート・グラス、そしてリー・ヘッジペスという名のジャーナリストに会った。彼らは処刑が再び延期されるかもしれないと思っていたが、私がすでにケニーに油を塗ってマスクをつけていると伝えると、彼らの希望はすぐに打ち砕かれた。私たちは少し言葉を交わした後、私は再び連れ去られた。

警備員は親切にも傘を差し出してくれたが、私は断った。雨が降り続くたびに、この悪夢が現実であることを思い知らされたからだ。建物の中に戻ると、濡れた足が磨かれた床にコツコツと音を立て、ようやく自分の行動をコントロールできているような気がした。処刑室の大きな金属製の扉に近づくと、警備員は3回ノックしたが、誰も応答しなかった。私たちは外に座り、永遠にも思えるほどの時間を待った。私は何度もノックしたが、やはり誰も返事をしなかった。苛立った警備員は「まだ抵抗している」と言った。今度は私が答えることにした。「あなたは？」警備員の周りに死のような沈黙が訪れた。

*生きても死ぬも、私は神に属する。何が起ころうとも、私は神に属する。*この短い一文に、私はしばらく心を奪われた。しかし、堰を切ったように、無数の疑問が私の心に押し寄せてきた。

彼に鎮静剤を投与する必要があったのか？

彼と話すことはできますか？

彼らは彼を虐待していたのか？

どんなものになるのだろうか？

マスクを被せることに失敗した場合、彼らは処刑を中止するのだろうか？

こんな恐ろしいことをしておいて、どうやって平然と生きていけるのだろうか？

そこで私は足を上げて彼を思い切り蹴った。その音に警備員は驚いた。私は気にしなかった。それが心を落ち着かせる唯一の方法だったのだ。私は目を閉じた。全身全霊を込めて神に祈りを捧げた。祈りは今やもっとシンプルだった。「*もっと近くに来てください*」。どれくらいの時間が経ったのかは分からない。ただ、ドアが開いた瞬間に飛び上がったことだけは覚えている。

「時が来た。」

皆が去ったことをすぐに理解した。独房は空っぽだった。廊下も空っぽだった。椅子も空っぽだった。すると、背後から足音が聞こえた。振り返ると、スーツを着た二人の手下が、私を処刑室へ連れて行くために来たようだった。続けるべきかと尋ねると、彼らは何も言わなかった。背中に手が触れ、前に押されるのを感じた。そして、別の手が私を押すのを感じた。そこには誰もいなかった。

続く。

耳元でささやき声が聞こえた。私は凍りついた。誰だか分かった。声を聞き覚えがあった。私は一人ではなかった。

続く。

左を見ると、ケニーの独房にある彼の持ち物がすべて見えた。シーツの擦れる音が聞こえた。ほんの数分前、私はこのベッドに座って彼と一緒に祈っていた。シャワーにはまだ水染みが残っていた。彼の不在よりも彼の存在に意識を集中させようとしながら、私は歩き続けた。そこに集まった人々の心と同じように、廊下は冷たかった。酸素が多すぎたのか少なすぎたのかは分からなかった。ただ、奇妙な感じがした。ドアまでたどり着けるかどうか分からなかった。廊下の突き当たりにある酸素モニターはまだ25.4を示していた。

続く。

ついにやり遂げた。ちらりと後ろを振り返った。また一人ぼっちだった。苦悩に満ちていた。

看守が処刑室の扉を開けた。私は担架の方を向いた。仮面を見た瞬間、恐怖で叫び声を上げた。「一体これは何だ？」と囁いた。目の前で起こっていることが信じられなかった。

マスクの前面は透明だった。消防士のマスクに管が管で繋がっているような感じだった。担架のストラップがマスクを引っ張り、ケニーの顔に信じられないほどきつく締め付けた。縁の皮膚が腫れているのが見えた。マスクの上端は生え際まで、下端は顎まで届いていた。ケニーの肌は赤く炎症を起こしていた。私の恐怖を感じ取ったケニーは顔を上げ、「大丈夫、コントロールできている」と繰り返した。

私は部屋の後方の席に案内されました。式の間中、私はケニーにどれほど彼を愛しているかを伝え続けました。

″知っている。″

彼の返答に思わずくすりと笑ってしまった。彼はいつも率直だった。あの恐ろしい状況の中でも、彼の笑顔は決して忘れないだろう。マスクが、彼を愛する私たちにとって、その笑顔を消し去ることはできなかった。ケニーは前かがみになり、まるで音楽を聴いているかのように首を縦に振りながら、微笑み続けた。彼の動きから、マスクが担架にしっかりと固定されていることが私には分かった。

出発前に、ケニーは私にすべてに注意を払うように言った。ベージュの服、青い縁取りのある安っぽいマスク、それを覆うシーツ、アコーディオンのようなプラスチック製のチューブ。部屋は老朽化した施設の病院の部屋のようで、最低限の照明しかなかった。アラバマ州はこの場所を住めるようにするために全力を尽くしたわけではないのは明らかだった。後々これがどれほど重要になるかを知っていたので、私は細部を記憶しようとした。もちろん、ケニーは私のことを心配していた。実際、彼は何度も繰り返した。「俺たちは死の影の谷を一緒に通っているんだ」「俺たちは乗り越えられる、兄弟」「ありがとう、ジェフ」「愛してるよ、相棒」。それがケニーだった。まさにケニーそのものだった。最高の状態の彼は、周りの人々の幸福を心から気遣う人だった。

目の前の複雑な状況に意識を集中させようと努めながら、私はセネット一家のために祈り続けた。彼らもまた、恐ろしい光景を目撃しようとしていることを知っていた。好むと好まざるとにかかわらず、私たちは皆、この邪悪な瞬間に結びついていた。時間が止まったように感じた。逃げ出したかった。耐え難い状況だった。私は関係者たちをじっと見つめた。もちろん、このような恐ろしい行為を行ったのは彼らだけではないが、彼らに対する激しい怒りを抑えることはできなかった。

彼らは知らなかったが、私は彼らについて多くのことを知っていた。右側の看守マッケンジーは、囚人に対して過剰な力を行使したとして何度も非難されていた。左側のクォールズは、「不安と心配の塊」と何度も評されていた。私の隣では、地域局長のステュワート＝ライリーが背筋を伸ばして立ち、満足げな表情を浮かべていた。元局長であるステュワート＝ライリーは、死刑執行を早めることができなかったことに苛立ちを感じていた。私は彼女が、より人道的な方法として液体窒素を使う必要性を証言するビデオを何度か見たことがあった。

警備員たちは皆、バッジを外していた。こうすれば正体がばれないと思ったのだろう。だが、そうではないことは分かっていた。多くの人が既に彼らを知っていることも。そして、もし本当に自分のしていることを信じているのなら、なぜ自分の行動を隠そうとするのか、不思議でならなかった。しかし、スチュワート＝ライリーは決して隠れなかった。それどころか、彼女こそが時間との戦いをリードしていた。彼女は教会からそのまま出てきたような服を着ていた。それでも、私たちは皆、そこに一緒にいた。自分たちの不条理の中に閉じ込められていた。私たちは皆、遠い何かの一部だと信じたかったが、私はこの部屋にいた。たとえそうしたくても、ここを離れることはできなかった。私たちはこの監獄を作り出したのだ。ドアは内側から鍵がかかっていた。たとえそれが一晩中続いたとしても、終わるまでは誰もここを離れることはなかっただろう。

後ろの窓から、部屋を埋め尽くす数人の役人たちの姿がちらりと見えた。彼らがそこにいることは分かっていたし、私の存在を無視することもできなかっただろう。私は彼らの視界のど真ん中にいたのだから。時として、不正義に対しては、そこにいることこそが最良の対応策なのかもしれない。たとえほんの一瞬の視線であっても、彼らがケニーに何をしようとしているのか、私が知っていることを彼らに理解させたかったのだ。

担架に横たわる彼を見て、私の心は愛と恐怖で締め付けられた。彼はすでに私に最後の言葉を告げていた。孤独と見捨てられたという思いを吐露しながら。「神よ、神よ、なぜ私を見捨てたのですか？」彼の言葉が私の心の中でこだまし、この状況の不条理さに私は苦しんだ。しかし、ケニーの声が私を現実へと引き戻した。「大丈夫だ、我々が何とかする」と彼は落ち着いた声で私を安心させた。その瞬間、彼はまるで私の守護者であり、精神的な導き手のような存在だった。

*続け*て。声が戻ってきたのが聞こえた。

処刑が近づくにつれ、居合わせた人々の態度に変化が見られた。幕が上がる前には、張り詰めた緊張感が漂っていた。人々はささやき合い、視線を交わし、中にはまるで何事もなかったかのように微笑む者もいた。私の後ろでは、証人室が人でいっぱいになりつつあった。その音が聞こえた。看守たちの態度も変わり始めた。そして、幕が開いた。その瞬間から、恐怖はもはや私だけのものではなかった。全世界が目にすることになったのだ。

処刑が始まろうとしていることを悟り、私は家族のことを考えた。彼らの顔は私の記憶に深く刻まれている。恐怖が背筋を駆け巡った。液体窒素は恐るべき武器だ。「私は死ぬのだろうか？」私には分からなかった。ただ、成し遂げなければならない使命があることだけは分かっていた。私はケニーのためにそこにいたのだ。鉄の意志で、私は思考を封じ込めた。

私は歩き続けた。すると、先ほど付き添っていた少年たちの顔が目に留まった。彼らの存在を感じた。処刑を目撃したすべての少年たち。暗い親近感が、この恐ろしい不正義に立ち向かい、証言する力を与えてくれた。私は背後の柱に寄りかかった。私を支えてくれるのは、それしかなかった。

顔を上げると、ケニーはまだ微笑みながら首を横に振っていた。彼は、世界が最後に目にする自分の姿が、抵抗する男の姿であることを確実にしたかったのだ。ケニーはこの試練に屈するつもりはなかった。彼が何よりも大切にしていた喜びを、誰にも奪わせたくなかった。

「それが私の釈放日です。」

私はそれをはっきりと聞き取った。彼は他の全員にも聞こえるようにしたかったのだ。それから彼は証人一人ひとりに、愛していると伝え始めた。それぞれの言葉を確信を込めてはっきりと発音しながら。肘掛けに寄りかかりながら、ケニーは人差し指、小指、親指をそれぞれの人に向けて差し出した。一瞬、私は彼が何をしているのか分からなかった。それから、彼が「愛してる」という世界共通のサインをしているのだと気づいた。

ケニーはちらりと私の方を見て、眉をひそめた。ほんの一瞬、私たちは同じことを考えていたと思う。「レイボンは一体どこにいるんだ？」部屋の奥の扉が勢いよく開いた。刑務所長のテリー・レイボンがマイクの前に立った。「悪名高い」という言葉ではレイボンを言い表せない。この男は、ケニーの判決を言い渡そうとしていた。裁判官によれば、ケニーは「女性を殴り、犯罪者と付き合い、職務を怠る」男だった。

私はその瞬間に我を忘れてしまった。どうしてこんなことが可能なのか？私は彼を見つめた。彼はまるで滑るように私のそばを通り過ぎ、床に涎の跡を残していった。彼がマイクに着くと、警備員のレイボンがそれを抜き、いじり始めた。私は彼がそれを落としたのかと思った。それから彼はいつものようにマイクを軽く叩いて、動作確認をした。私の顔は考えを露呈していたに違いない。一体これは何だ？彼は自分がテレビのタレントショーの歌手だとでも思っているのか？またしても完全に狂った瞬間だ。彼らはマイクが動作しているか確認すべきだっただろう？ケニーは眉を少し上げた。私たちはまたしても同じ考えだった。

レイボン校長は深く響く声で一連の言葉を読み上げ、何人かの名前を呼び上げた。それは、自分がただ職務を遂行しているだけで、ケニーを殺すことになっていたのだと皆に理解させるためだった。しかし実際には、彼は殺していなかった。その部屋にいた誰も、強制されて行動したわけではなかった。彼らは皆、自らの自由意志でそこにいたのだ。彼らは殺人者になることを選んだ。水であろうと何であろうと、これから起こることに対する彼らの罪悪感を消し去ることはできなかった。

彼がスピーチを終えようとした時、スチュワート＝ライリーがまるで賛同を示すかのように頷いた。会場は期待感で満ち溢れていた。ケニーの顔には、これから起こるであろうすべての出来事が映し出されていた。彼が少し身じろぎした時、窒素ガスを早めに注入してしまったのかと思った。いや、そうではない。彼は体勢を整えているのだろう。

レイボン校長が最後の行を読み上げると、私の思いは被害者のエリザベス・セネットへと向かった。彼女は優しい女性だったのだろう。子供たちを愛していたのだろう。自分の名のもとにこれから何が起こるのか、彼女はきっと二度考えたに違いない。だが真実は、レイボン校長が彼女の代理人を務めるはずだったということだ。なんという皮肉だろう！女性を何度も殴ってきた男が、この部屋で彼女の代理人を務めるはずだったのだ。すでに多くの苦しみを味わって

きた家族が、さらに別の打撃を受けようとしていると思うと、ぞっとした。だがレイボン校長が何度も繰り返してきたように、アラバマ州とエリザベス・セネットの血がそれを求めていたのだ。ついに彼は沈黙した。ケニーは後ろにもたれかかり、それから前にもたれかかった。彼は次に何が起こるかを知っていた。

レイボン監督はゆっくりと私の方に身を乗り出し、「何か最後に言いたいことはありますか？」と尋ねた。ケニーは私と過ごした短い時間の中で、あまり感情的になりたくないと打ち明けた。カメラの向こう側まで響き渡るメッセージを残したいのだと。彼は独特の田舎訛りで力強い声でこう宣言した。「今夜、アラバマは人類を後退させる。私は愛と平和と光を胸にここを去る。皆さんの応援に感謝します。皆さんを愛しています。」

ケニーの考えていることが手に取るように分かった。ただ、彼があんなにも確信を持ってあの言葉を口にするとは思ってもみなかった。鳥肌が立った。彼は一言一句に絶対的な自信を持っていた。愛と平和と光への確信を。

マッケンジーはうなずいた。担架の端に近づくのは私の番だった。担架までほんの数歩だったが、動くたびに苦痛だった。担架は十字架の形をしていて、まるで十字架の足元を歩いているような気がした。十字架に近づくと、世界の重みが肩にのしかかってくるのを感じずにはいられない。そういうものなのだ。私はケニーの足元で立ち止まった。これ以上近づいてはいけないと何度も言われていた。その場所に着くと、ケニーの目を見た。彼は「愛してるよ、兄さん。ありがとう」と言った。私は一言一句を感じた。心から彼を救いたかった。私たち二人に必要な祈りを知っていた。私たちはすでに一緒にそれを唱えていた。「たとえ死の陰の谷を歩むとしても、私は災いを恐れない」。私はそれを静かに三度繰り返した。祈りの後、私はケニーのすねに十字架の印をなぞった。強く押した。彼に、神の限りない愛が彼と共にあることを知ってほしかった。話が終わった後、私は「神のご加護がありますように」と言った。彼は静かに「釈放日」と答えた。

私はそこを離れたくなかった。動けばすぐに窒素が循環し始めることを知っていたからだ。そこにいて、動くたびに愛する人が死んでいくと分かっている状況を想像してみてほしい。それは拷問だった。息を止めようとしたが、不可能だった。私に何ができただろうか？それを遮断する？降ろされるか止められるまでそこに留まる？私には選択肢がなかった。後ずさりするしかなかった。後ずさりしたとき、私は自分の一部が担架に残された。あの瞬間の精神的な苦痛は、私を永遠に苦しめるだろう。悪は至る所にあった。あの瞬間、私たち全員が悪に取り憑かれていたと思う。窒素が放出される前から、私たちは窒素による低酸素症で精神的に窒息させられていたのだ。

私はよろめきながら部屋の後ろの席に戻った。これから何が起こるのか、全く分からなかった。誰も分からなかった。部屋の中の音が変わり始め、シューという音が急速に大きくなった。ケニーは理解した。殴られそうになっている彼の顔を見て分かった。マッケンジーはマスクに近づき始めた。彼らが言っていたことと違っていたので、私はショックを受けた。何かがおかしい。少し調整した後、恐怖が始まった。

時間が経つにつれて彼女の表情は険しくなり、顔色も変わり始めた。血管が浮き出て、全身の筋肉が緊張した。私たちは何週間も彼女が何をしたいのか話し合ってきた。息を止めるなんて言ったことは一度もなかった。アナウンスされた秒数が過ぎると、私は心配し始めた。彼女の胸は喘ぎながら上下していた。明らかに呼吸しようとしているのがわかった。彼女は意識を失っているはずではなかったのか？明らかにそうではなかった。彼女の頭は爆発しそうに見えた。私は後ずさりした。倒れる場所もなく、悪夢が目の前で繰り広げられていた。警備員の表情も劇的に変わった。彼らも明らかに何が起こっているのか不思議に思っていた。視界の端で、スチュワート＝ライリーが動いたのに気づいた。あの臆病者はケニーから離れようとしていた。彼女の実験は計画通りに進んでおらず、彼女は逃げようとしていた。彼の顔は心配でこわばった。ケニーの反応はより本能的で暴力的になった。

担架は動かないはずだった。しかし、動いた。ケニーがもがき始めた。ストラップだけでは彼を固定できず、担架全体が揺れていた。私は自分の目を疑った。あんなに激しい光景は見たことがなかった。ケニーの筋肉は今にも破裂しそうだった。彼の血管は蜘蛛の巣のようにあらゆる方向に膨らんでいた。まるでアリの大群が彼の体の隅々まで群がっているようだった。何も静止しておらず、すべてが同時に、絶えず動いていた。彼の顔。ああ、なんてことだ…彼の顔。担架はマスクに固定されていたが、ケニーの動きの力で彼の顔がマスクの前面に押し付けられ続けていた。彼の飛び出した目がマスクを突き破るのではないかと心配になった。唾液、粘液、その他あらゆるものが彼の口から噴き出し、マスクの中に流れ込み始めた。ケニーは左右にもがき続けた。数分が経過したが、ケニーはまだ完全に意識があった。私は彼の目に恐怖が宿っているのを見た。あの恐怖の表情は決して忘れないだろう。

道徳的終末は真っ只中だった。神は死んだように思えた。これほど途方に暮れたことはなかった。殴られるたびに、ケニーは助けを求めているようだった。私は何もできなかった。ただ横になった。滑り始めた。立っていられるかどうかわからなかった。誰かが私の魂を体から引き剥がし、バラバラに切り刻んでいるように感じた。地面に散らばっているのが見えた。それを拾い上げてケニーを助けに走りたかった。しかし、できないことはわかっていた。アラバマ州がケニーを処刑することで、私の中に残っていた最後の道徳の痕跡を破壊したことを知っていた。慰めを求め、慰めを与えようと、私は十字を切った。この荒涼とした場所で、神の光を必死に呼び起こそうとした。残されたのは希望だけだったが、それさえも崩れ去ろうとしていた。

眼鏡を外して、私は泣きじゃくった。これほど神から遠く離れたと感じたことはなかった。ケニーがどれほど私を愛しているか、彼が分かってくれるように祈った。担架に乗らなかったこと、マスクを剥ぎ取ったことを許してくれるように祈った。私は最善を尽くした。私たちは皆、選択を迫られる。あの部屋で私が経験したような選択肢のなさに、誰も直面することがないように願う。人生は選択ではなかった。私は何度も「たとえ死の陰の谷を歩むことになっても…」と祈った。どこにも、誰も私の声を聞いていないようだった。

スチュワート＝ライリーと看守たちの不安は刻一刻と増していった。スチュワート＝ライリーはまるでタップダンスでも踊っているかのように踵をトントンと叩いていた。一体何を考えて

いるんだ？この全ての元凶は誰だ？タップダンスを踊る拷問者め。看守たちは事態が手に負えなくなったかのように、心配を隠しきれなかった。アラバマのあの野郎どもは、俺たちを狼の群れに放り投げようとしている。私は即座の正義を切望していたが、歴史はこのような残虐行為の加害者たちに容赦しないだろうと分かっていた。

ケニーの痙攣は深い呼吸、そして浅い呼吸へと変わった。私は一瞬たりともケニーが最期の息を引き取ったとは気づかなかったが、看守たちは隙あらばカーテンを閉めようと急いでいた。まるで、今したことを隠そうとしているかのようだった。私はまだケニーが死んだとは信じられなかった。彼の胸にわずかな動きが見えた。しかし、それは問題ではなかった。他のほとんどの州とは異なり、アラバマ州では死刑執行室で死亡時刻を告げない。つまり、処刑を目撃した者は誰も名乗り出て、ケニーが本当に死んだと証言することはできなかったのだ。

警備員たちが前に進み出て、私を部屋から連れ出そうとした。クォールズは私を連れ出そうと必死だったが、私はケニーに最後にもう一度十字を切って、彼の魂を神に委ねるまではここを出るつもりはなかった。そして、そうした。彼らは私を急いで、彼の所持品がまだ保管されている独房の前を通り過ぎさせた。その独房で、先ほど私を案内してくれた警備員を見つけ、私たちはすでにカーテンが閉められた制御室の独房の前を通り過ぎた。そこには、緑の制服と白衣を着た、この狂気のすべてを監督していた医師が立っていた。長い間正体不明だった彼は、処刑が円滑に進むように選ばれた、隠れた怪物だった。彼の顔に浮かんだ驚きから、彼が私に会いたくないのは明らかだった。私は立ち止まった。彼の顔をはっきりと見たいと思ったのだ。彼は少し赤みを帯びた顔をしていた。彼は禿げ始めていた。頭の両側には白髪が生えていた。彼は私より背が高かった。彼がいつか正体を知ることになるかどうかはともかく、私は今、彼の秘密を知ってしまった。彼は医師としての誓い、「害を及ぼさない」という誓い、つまり職業倫理に違反した。そして彼は決して真実から逃れることはできないだろう。私は彼の悪夢に取り憑きたい。警備員は私を廊下に押し出し、私たちは私がすでに歩いた荒れ果てた廊下を急いで横切った。私たちは腐敗を通り過ぎた。カビを通り過ぎた。崩れかけた天井を通り過ぎた。正面玄関で鍵と許可証を受け取った。気付いた時には、私は外にいた。息をしようとしたが、まだ息苦しかった。

最初からケニーははっきり言っていた。何が起こったのかを世界に伝えてほしいと。それで私は駐車場を駆け抜け、車に飛び乗った。人けのない私道をホルマンまで疾走し、目撃者を乗せたバンを追い越した。刑務所の入り口の角に着くと、車から降りてテントまで走った。CNNのイザベル・ロサレスがそこで待っていた。私は立ち上がり、できる限りの言葉を探した。私は世界にすべてを話した。感情が落ち着き始めた頃、また聞き覚えのある声が聞こえた。今回は、とても聞き覚えのある声が加わっていた。

続く！

私は止まらなかった。

*スミス対ハム事件*における第11巡回控訴裁判所のジル・プライヤー判事の反対意見：倫理的および憲法上の考察

ジル・A・プライアー判事は、アラバマ州がケネス・ユージン・スミスを窒素ガスによる低酸素死刑で処刑することを認めた第11巡回区控訴裁判所の判決に対し、力強く倫理的な反対意見を表明した。彼女は、州は過去の処刑失敗のトラウマに苦しむ脆弱な男性を実験台にしており、裁判所の多数派は憲法上の義務を怠ったと主張した。彼女の反対意見は、法的な革新がもたらす尊厳、リスク、そして人的コストについて、深刻な問題を提起している。

プライヤー氏はまず、アラバマ州の決定の過激さを強調する。同州は従来の薬物注射による死刑執行ではなく、液体窒素による火葬を選択した。彼女は、この方法は人間に対して「一度も試験されたことがない」ものであり、憲法上の権利を保障できるかどうか「深刻な疑問」を抱かせると指摘する。[1]　彼女にとって、この未検証の処刑方法の選択は単なる技術的な問題ではない。スミス氏は過去の死刑執行失敗によって深い心の傷を負っているため、非常に個人的な問題でもある。プライヤー氏は、アラバマ州は2022年にすでにスミス氏の死刑執行を試み、失敗に終わり、彼に肉体的、精神的な傷跡を残したと指摘する。[2]

彼女は、処刑当日に何が起こるのかを、衝撃的でぞっとするような描写で描き出す。スミスはかつて彼を拘束していたのと同じ担架に縛り付けられ、窒素ガスを吸入させられ、マスクを通してそのガスを呼吸することになる。[3]　しかし、これは「単なる」処刑ではない。スミスは心的外傷後ストレス障害（PTSD）を患っており、反体制派はこれを「否定できない」状態と呼び、持続的な嘔吐を引き起こしている。[4]　窒素性低酸素症の既知の症状である酸素欠乏状態になると、嘔吐はさらに起こりやすくなる。プライヤーは、州当局が処刑執行人がこの件に介入しないことを明確にしていると警告している。[5]　彼女は悪循環を想像する。嘔吐物がマスクを満たし、スミスの鼻と口に流れ込み、彼がそれを吸い込み続けると、最終的に彼の体は窒息、あるいは窒息と酸素欠乏の両方で死に至る。[6]

プライヤーはこれを単なる生理的リスクとしてだけでなく、人間の尊厳に対する重大な侮辱としても提示している。彼はこう書いている。「彼は死ぬだろう。その代償として、スミス氏の人間としての尊厳と、我々自身の尊厳が失われるのではないかと危惧している。」[7]　ホール*対フロリダ州事件を引用し*、尊厳は抽象的な概念ではなく、憲法上の価値であることを強調している。裁判所の判決はスミス氏だけでなく、司法そのものの道徳的評判にも影響を与えるのだ。[8]

彼の法的主張の中心にあるのは、最高裁判所が*バックルー対プレサイス事件で確立した基準*、*すなわち*、有罪判決を受けた者は、既知の利用可能な代替手段と比較して、激しい苦痛を受けるリスクが「相当」であることを証明しなければならないという基準である。〈sup〉 [9]〈/sup〉地方裁判所は、「相当なリスク」と「代替手段」の両方の側面を却下したが、プライヤーの見解で

は、それは誤りであった。彼は、下級裁判所が代替手段に対して「完璧なモデル」基準を採用したことを批判し、それは過度に厳格で法的に矛盾していると考えている。¹⁰ プライヤーは、スミスは実際には銃殺隊という形で既知の利用可能な代替手段を特定しており、裁判所はプロトコルの全面的な見直しを要求するのではなく、これを真剣に受け止めるべきだったと主張する。¹¹

しかし、おそらく彼が裁判所の危険性に関する事実認定に対して最も痛烈に異議を唱えているのは、地方裁判所による死刑執行への異議申し立てだろう。地方裁判所は、スミスが死刑執行中に嘔吐する恐れは「ありそうもない出来事の連鎖」に依存していると述べている、と彼は指摘する。[12] プライアーはこの特徴づけを断固として否定する。彼は、酸素欠乏の明白な影響と、前回の処刑失敗後にスミスが心的外傷後ストレス障害（PTSD）を患ったことが記録されていることから、スミスが嘔吐する可能性が高いことを記録が示していると主張している。[13] 記録には「持続的な嘔吐」とあり、処刑人が介入を拒否していることから、彼は、スミスは窒素の影響で自分の嘔吐物で窒息し、「窒息と窒息の苦痛な身体的感覚」を経験する可能性が高いと主張している。[14] 彼は、この一連の出来事は仮説ではなく「起こりうる一連の出来事」であり、その結果、リスクは合衆国憲法修正第8条で要求される「相当な」閾値に達すると主張している。

このリスクを考慮し、プライヤー判事は、スミスが憲法修正第8条に基づく請願の正当性に関して「相当な成功の見込み」を示したと結論付け、更なる審査が行われるまで死刑執行を延期した。[15] 彼の反対意見は、法的であるだけでなく、極めて道徳的なものでもあった。それは、法理を尊重するだけでなく、死刑囚の人間性を考慮する責任を改めて確認するものであった。最後の部分で、彼はこの死刑執行を認めることは、スミスを貶めたのと同様に、我々をも貶めることになると警告した。「人間の尊厳…」[16]

プライアー判事の反対意見は、死刑における実験の役割について、より広範な問題を提起している。州が全く新しい方法を導入する場合、理論的な安全策と乏しい実証的証拠のみに依拠することは憲法上許容されるのだろうか？それとも、裁判官はより厳格な試験、透明性、そして個人の脆弱性への配慮を要求すべきなのだろうか？プライアー判事の見解では、第11巡回区控訴裁判所はこの基準を満たしていない。反対意見の中で、同判事は、裁判所は証明されていない手順を安易に承認すべきではないと主張している。むしろ、州が個人をモルモットにしてしまうリスクに対する安全策として行動すべきだと述べている。

この倫理的枠組みは、人々の心に深く響く。プライアーは、スミスの心的外傷後ストレス障害（PTSD）、過去のトラウマ、そして尊厳の侵害を強調することで、彼に人間的な側面を与えている。彼は議論を単なる科学的モデルや手続き上の形式に矮小化することを拒否する。それどころか、スミスが窒息し、嘔吐し、息絶えるという恐ろしい可能性を裁判所が考慮するよう要求する。そして、これは単なる技術的な不具合ではなく、正義の否定であると警告する。

要するに、ジル・プライアー判事の反対意見は単なる法的意見の相違ではなく、切迫した道徳的訴えである。彼女は、革新の名の下に、尊厳、人間性、そして合衆国憲法修正第8条における「残酷で異常な扱い」という文言の意味そのものといった根本的な価値観を放棄する危険性を警告している。彼女の反対意見は、多数派と国家の両方に異議を唱え、革新は人間性や我々が共有する人間性を貶める代償を伴うものであってはならないと主張している。

最終的なメモ

1. *Smith v. Commissioner, Alabama Department of Corrections* 、No. 24 -10095 (11th Cir. January 24, 2024) (Pryor, J. による反対意見)、 *Justia Lawで閲覧可能*、 https://law.justia.com/cases/federal/appellate-courts/ca11/24-10095/24-10095-2024-01-24.html 。
2. 同上、33頁。
3. 同書、33〜34頁（カメラ、担架、マスクについて記述）。
4. 同上、33頁。
5. 同書、33-34頁（「スミス氏が嘔吐した場合、たとえ嘔吐物がマスクを満たしても、処刑人は介入しないだろう」と述べている）。
6. 同上、33-34頁。
7. 同上、34頁。
8. 同上、34頁（ *Hall v. Florida* 、572 US 701, 708 [2014]を引用）。
9. 同上、34-35頁（ *Bucklew v. Precythe* 、139 S. Ct. 1112, 1125 [2019]を引用）。
10. 同上、34頁（地方裁判所が「真のモデル」を要求したことを批判）。
11. 同上、34頁（銃殺刑は「既知の、利用可能な代替手段」であると主張している）。
12. 同上、34頁（地方裁判所による「ありそうもない出来事の連鎖」という表現に疑問を呈している）。
13. 同書、34〜35頁（心的外傷後ストレス障害と酸素欠乏が嘔吐の可能性を高めることを説明している）。
14. 同上、35（嘔吐物の吸入による「窒息や窒息感といった痛みを伴う身体的感覚」のリスクについて述べている）。
15. 同上、34-35頁（スミスは、合衆国憲法修正第8条に基づく主張において「相当な成功の見込みがある」と結論付けている）。
16. 同書、33-35頁（「彼は死ぬだろう…その代償は…スミス氏の人間としての尊厳と我々の尊厳である」と警告している）。

2.0：アラン・ユージン・ミラーの処刑

I. 前例から実践へ

2024年1月25日に行われたケネス・ユージン・スミスの処刑により、窒素ガスによる低酸素症はアメリカ合衆国における合法的な処刑方法として確立された。ハファカー判事の証拠基準、第11巡回区控訴裁判所による州の処刑手順への尊重、そして最高裁判所の沈黙といった法的枠組みにより、アラバマ州はこの方法を使い続けることができた。しかし、スミスの処刑は深刻な疑問を投げかけた。激しい痙攣、長引く苦痛、ガス投与から死に至るまでの22分という時間。これらの目に見える現実は、迅速かつ平和的な処刑を約束していた州の主張とは著しくかけ離れていた。アラバマ州は目撃者の証言を受けて処刑手順を変更するのだろうか？州は法的認可と現実との乖離を認めるのだろうか？

2024年9月26日に行われたアラン・ユージン・ミラーの処刑は、これらの疑問に答えを与え、新たな疑問を提起した。ミラーは、窒素低酸素症による処刑を受けた史上2人目の人物となり、彼のケースはスミスのケースとは異なる独特の特徴を持っていた。致死注射の失敗から生還し死刑判決を受けたスミスと同様に、ミラーも（2022年9月に）処刑未遂を経験していた。その後、8ヶ月にわたる法的・手続き上の不確実性を経て、彼が当初選択したと主張する窒素プロトコルを用いて処刑された。ミラーの処刑は、アラバマ州がスミスのケースから教訓を得たかどうか、そしてスミスの死を取り巻く入手可能な人的データを踏まえ、裁判所がこの処刑方法をより綿密に検討するかどうかを決定づけるものとなるだろう。

本章では、ミラーの死刑執行室への道のり、スミスの死刑執行後に繰り広げられた法廷闘争、2024年9月26日に何が起こったかを明らかにした証言、そして米国における死刑制度へのより広範な影響について考察する。ケネス・スミスの分析は憲法および立法上の枠組みを確立したが、本章ではその枠組みが実際にどのように機能したか、そして窒素低酸素症の2度目の使用が、この実験方法を取り巻く倫理的および法的問題を解決するどころか、むしろ悪化させた経緯を探る。

II. アラン・ユージン・ミラー：犯罪、有罪判決、そして死刑執行への道

アラン・ユージーン・ミラーの死刑執行への道は、1999年8月5日、アラバマ州ペラムで同僚3人を射殺したことから始まった。配達員だったミラーは、まず職場でリー・ホルドブルックスとクリストファー・スコット・ヤンシーを殺害し、その後別の場所へ移動してテリー・ジャービスを殺害した。[1] 銃撃事件は短時間のうちに2か所で発生した。同僚たちは後に、ミラーは被害者たちが自分に関する「噂を広めている」と信じていたと証言したが、その噂の内容は正確には明らかになっていない。[2]

2000年のミラーの裁判で、弁護側は偏執的な妄想と精神能力の低下の証拠を提示した。[3] 弁護側は、ミラーが判断力を損ない殺人に寄与する重度の精神疾患を患っていたと主張した。精神

医学の専門家は、ミラーの妄想と、同僚が自分に陰謀を企てているという彼の信念について証言した。この証拠にもかかわらず、陪審はミラーをすべての加重殺人罪で有罪とした。[4] 陪審は10対2の投票で死刑を勧告し、裁判官もその勧告に従った。[5] 当時、アラバマ州では裁判官が陪審の終身刑の勧告を覆すことができたが、この可能性は2017年に廃止された。しかし、ミラーの事件では、陪審自身が死刑を勧告していたため、そのような覆しは不要だった。

ミラーの控訴は20年以上続き、州裁判所と連邦裁判所を転々とした。彼は、適切な弁護を受けられなかったこと、精神疾患の調査が不十分だったこと、そして基本的人権が侵害されたことを主張した。[6] これらの主張は満場一致で却下された。2010年、アラバマ州刑事控訴裁判所とアラバマ州最高裁判所は、彼の死刑判決を支持した。[7] 2021年、米国最高裁判所はこの事件の審理を拒否し、ミラーの死刑執行日は不確定となった。[8]

III. 2018年の選挙期間中に発生した窒素欠乏症をめぐる論争

ミラーの処刑方法、つまり処刑そのものではなく、処刑方法が法廷での議論の中心となった。2018年にアラバマ州が窒素低酸素法を可決した際、受刑者は一時的にこの新しい処刑方法を希望する処刑方法として選択する選択肢を与えられた。[9] ミラーは後に、窒素低酸素法は致死注射よりも人道的であると信じて、この選択を試みたと主張した。しかし、アラバマ州矯正局（ADOC）の職員は、ミラーの選択に関する記録はないと述べた。[10] この行政上の争いが決定的なものとなった。ミラーは窒素低酸素法を希望したが、ADOCはデフォルトの処刑方法は依然として致死注射であると主張した。

この紛争は、アラバマ州の窒素低酸素法のより広範な問題点を浮き彫りにした。2018年の法律は、死刑囚に処刑方法を選択する短い期間を与え、その後、アラバマ州矯正局の記録が不完全または異議申し立てがあった場合、死刑囚にその選択を証明する責任を負わせた。[11] ミラーの場合、これは、窒素低酸素法を明確に希望していたにもかかわらず、書類の不足により州が致死注射による処刑を進めることができたことを意味した。この手続き上の奇妙な点と、最高裁判所が処刑の停止を拒否したことが、2022年9月の悲惨な出来事の舞台を整えた。

IV. 致死注射の失敗：2022年9月22日

2022年9月22日、アラバマ州はアラン・ミラーの死刑執行を薬物注射で行おうとした。その結果、現代アメリカ史上最も凶悪な死刑執行失敗例の一つとなった。90分に及ぶこの苦難は、薬物注射の手順という臨床的な外見の裏に潜む暴力性を露呈させた。

ミラーは担架に縛り付けられ、両腕を頭上に伸ばされた状態で、後に彼自身が「磔刑の姿勢」と表現する体勢に置かれた。[12] この苦痛に満ちた体勢だけでも彼は大きな苦痛を味わったが、それはほんの始まりに過ぎなかった。約90分間、処刑チームの3人が点滴を挿入しようと試み、腕、手、足に何度も針を刺した。[13] ミラーは後にその痛みを「耐え難い」と表現している。[14] ある時点で、処刑人たちは中心静脈カテーテルを挿入することを検討しながら「首の皮膚を叩

き始めた」。中心静脈カテーテル挿入は、すでに外傷を負っている男性の主要血管を穿刺する処置であった。[15]

ついに右足に針が刺されたとき、ミラーは一種の「感電」を感じ、「拘束具の下で全身が震えた」と報告した。[16] その後、処刑チームは担架を立て直し、ミラーを磔刑の姿勢で約20分間吊るしたままにした。その間、複数の刺し傷から血が流れ続けた。[17]この長時間の拷問の間、目撃者、弁護士、家族は誰も立ち会っておらず、透明性に関する規則に違反していたため、密室で他に何が起こったのかという疑問が生じた。[18]

真夜中直前、ミラーの死刑執行期限が迫る中、刑務所当局は処刑を中止した。[19] 彼は現代アメリカ史において数少ない「処刑生存者」の一人となり、死に直面しながらも生き延び、その体験を語り継いだ少数の人々（ケネス・スミスを含む）の仲間入りを果たした。[20]

失敗した処刑は単なる手続き上のミスではなかった。それは残酷で異常な刑罰、つまり合法的な処刑を装って行われる拷問を禁じる合衆国憲法修正第8条に違反するものであった。ミラーの弁護士は直ちに訴訟を起こし、彼がすでに受けたトラウマを考えると、致死注射のさらなる試みは違憲であると主張した。[21] この訴訟によりアラバマ州は困難な立場に置かれた。州はミラーに90分間も針を刺し続けた後では、致死注射が「人道的」な方法であるとはもはや主張できなくなった。

2022年11月、アラバマ州はミラーと合意に達した。州は彼に対して二度と薬物注射による死刑を行わないことを約束した。今後の死刑執行は、ミラーが当初希望していたと主張する窒素ガスによる低酸素死刑で行われることになった。この合意により、一度死刑を生き延びたミラーは、意図せずして実験的な死刑執行方法の先駆者となった。ケネス・スミスは窒素ガスによる低酸素死刑を法廷で争って敗訴したが、ミラーは一連の行政上の不手際、執行の失敗、そして示談を経て、彼の実験台となった。皮肉なことに、ミラーは自分が望んでいた死刑執行方法を手に入れたものの、それは州による死刑執行の可能性を完全に断ち切るはずだった拷問に耐えた後のことだった。

V. スミス判決後の法制度

2024年1月25日に行われたケネス・スミスの死刑執行は、窒素低酸素症をめぐる法的枠組みを大きく変えた。スミスの死刑執行以前は、反対派は、この方法が試験されておらず、リスクも不明であると主張することができた。しかし、スミスの死刑執行後、この議論はより複雑になった。アラバマ州は、スミスの死刑執行を、窒素低酸素症が効果的であり、予測可能な時間内に死に至らしめ、しかも致死注射につきものだった薬剤不足や製薬訴訟といった問題も発生しないという証拠として利用できるようになったのだ。

しかし、スミスの処刑は、窒素低酸素症が実際にどのように現れるかの具体的な証拠を提供した。激しい痙攣、長引く苦痛、症状の発現から死亡までの22分間：これらの詳細は記録に残さ

れた。ミラーの弁護士が窒素吸入による処刑に異議を唱えたとき、彼らは理論上のリスクではなく、正確で観察可能なデータに依拠することができた。[23] 問題は、裁判所がスミスの処刑を成功（死が達成された）とみなすか、失敗（極度の苦痛が観察された）とみなすかであった。

法的枠組みは変わらなかった。*グロシップ対グロス判決*と*バックルー対プレサイス判決*では、原告は「重度の痛みの相当なリスク」を証明し、実行可能な代替方法を提案する必要があった。[24] しかし今や、人間のデータが入手可能になった。ミラーの訴訟は、スミスの苦痛に関する目撃証言がグロシップ判決の要件を満たすのに十分かどうか、あるいは裁判所が引き続きプロトコルの人道性に関する州からの保証に頼るかどうかを決定するテストケースとなった。

VI. ミラーの憲法上の異議申し立て

アラバマ州がミラーを窒素低酸素症で処刑する準備を進める中、ミラーの弁護士はアラバマ州中央地区連邦地方裁判所に訴訟を起こした。[25] この訴訟では、複数の憲法違反が主張された。第一に、ミラーは、専門家の予測とケネス・スミスの処刑における観察可能な証拠の両方に基づき、窒素低酸素症は「激しい痛みを伴う重大なリスク」をもたらすと主張した。[26] 第二に、ミラーは、アラバマ州矯正局（ADOC）が窒素使用手順の重要な詳細（ガス流量、マスクの仕様、監視手順）の開示を継続的に拒否していることは、効果的な司法審査を妨げ、適正手続きに違反していると主張した。[27] 第三に、ミラーは信教の自由を主張し、処刑中に彼の精神的指導者が立ち会い、声に出して祈ることを許可されるべきだと述べた。[28]

この事件は主に医師や呼吸器専門医の宣誓供述書に基づいていた。証拠は相当なものであった。ある者は予想される苦痛を強調した。酸素を窒素に置き換えると、論理的にパニック感や痙攣性の呼吸努力が引き起こされる。[29] またある者はこの手順の不確実性を強調した。処刑中の窒素低酸素症には標準化された人体試験済みの手順はない。マスクの装着、流量、持続時間のばらつき、継続的なモニタリングの欠如により、低酸素症中の死刑囚の意識の継続に関してかなりの不確実性が生じる。[30] この処刑方法は、異例であると同時に残酷であるという点で意見が一致した。

要するに、ミラーの弁護士はケネス・スミスの処刑に言及した。彼らは、スミスの激しい動き、明らかに苦痛が長引いたこと、州の予測と実際の結果との食い違いを描写した証言を強調した。³¹¹ スミスの処刑が「計画通り」に行われたときに窒素低酸素症と見なされたものに該当するのであれば、採用された方法は明らかに深刻な苦痛の重大なリスクをもたらしたとミラーの弁護士は主張した。

州は、スミスの処刑は処刑方法の有効性を示したと反論した。スティーブ・マーシャル司法長官はスミスの処刑を「歴史的」かつ「人道的」と呼び、アラバマ州は、観察された動きは意識的な苦痛を示すものではなく、不随意反射であると主張した。[32] また、州は、ミラーの経験がスミスの経験と大きく異なることを証明する責任はミラーにあり、修正窒素プロトコルや全く

異なる処刑方法など、提案された代替方法はアラバマ州の処刑システムでは実行不可能であると主張した。

VII. 地方裁判所の手続き

2024年1月にケネス・スミスが処刑された後、ミラーの弁護士はアラバマ州中央地区連邦地方裁判所に修正訴状を提出し、窒素低酸素法そのものの処刑方法に異議を唱えた。訴状では、スミスの処刑時の目撃証言（激しい痙攣、長引く苦痛、ガス投与から死亡までの22分）を、この方法が相当な苦痛を伴うリスクがあり、したがって合衆国憲法修正第8条に違反する証拠として挙げた。ミラーの弁護士は、最初の窒素低酸素法による処刑は「大惨事」であり、州の処刑方法はアラバマ州が約束した迅速な死をもたらすことができなかったと主張した。

証拠の提示とともに、その後数ヶ月にわたって審理が続けられた。ミラーは、医療用窒素の使用、ガス流量の専門家による監視、処刑前の鎮静など、州のプロトコルに対するいくつかの変更を提案した。³⁴ 地方裁判所は、ミラーの要求のほとんどを却下した後、かろうじて十分であると判断した単一の申し立てに基づいて、執行猶予審理を許可した。³⁵ 審理は2024年8月6日に予定されていた。

審理は行われなかった。予定されていた審理の前日である2024年8月5日、当事者は秘密裏に和解契約を締結した。³⁶ この契約の条件は明らかにされなかったが、結果としてミラーの訴えは最終的に棄却された。

スティーブ・マーシャル司法長官は、この和解を勝利と称賛し、「この事件の解決は、アラバマ州の窒素低酸素システムが安全かつ人道的であることを証明するものだ」と述べた。[37] 彼は、裁判で提示された証拠が、スミスが違憲な処刑を受けたという「誤った物語」を「覆した」と主張した。州側は、スミスが処刑中に息を止めたため処刑が長引いたこと、そして多くの報道機関がスミスの最初の動きを窒素ガスそのものによるものだと誤って報じたと主張した。[38]

ミラーの弁護士であるマラ・クレバナーは、異なる分析を示した。「ミラーは、残酷で異常な刑罰を受けないという憲法上の権利を守るために、有利な条件で司法取引に応じた。」[39] 彼女は、マーシャルの勝利の物語が覆い隠していた重要な点を強調した。「ミラー事件で州が提案した窒素低酸素死刑執行方法の合憲性を認めた裁判所はない。」司法取引は、「主張の正当性に関する決定を意味するものではない」と彼女は指摘した。[40] この司法取引に応じることで、州は、スミスの死刑執行の詳細と執行手順の適切性が司法審査の対象となる公開審理を回避した。

この和解により、ミラーの憲法上の異議申し立ては本格的な司法審査を受けることはなくなった。スミスの処刑によって提起された問題、すなわち、観察された苦痛が残酷で異常な刑罰に該当するか、処刑手順の秘密が適正手続きの権利を侵害したか、そして州が保証する「人道的

な」死刑が証拠の厳密な精査に耐えうるか、といった問題は、裁判所によって未解決のまま残された。*グロシップとバックルーで確立された法的枠組み*は依然として有効であり、新規性だけでは窒素低酸素症の違憲性を無効にせず、死刑囚に対する重大な危険の立証責任は依然として極めて高く、深刻な苦痛の決定的な証拠がない場合は裁判所は州の専門知識に頼ることになる。[41] しかし、ミラーの事件では、これらの基準は適用されなかった。憲法上の問題は、裁判所によって決定されたのではなく、合意によって議論されたのである。

VIII. 執行日：2024年9月26日

2024年9月26日の夜、アラン・ユージーン・ミラーはアラバマ州アトモアのホルマン刑務所で窒素ガスによる低酸素死刑を執行された。この死刑執行は、憲法上の異議申し立てや、8か月前にケネス・スミスが処刑された際に目撃された明らかな苦痛にもかかわらず行われた。以下は、目撃者の証言、報道、裁判記録に基づいた再現であり、アラバマ州が史上2度目となる窒素ガスによる低酸素死刑執行を行った際に何が起こったのかを記録しようとする試みである。

A. プロトコルと公式見解

大幅に修正されたものの公開されている手順書によると、ミラーは担架に固定され、フルフェイスマスクを装着された。[42] このマスクは、酸素の侵入を防ぐために密閉されたフルフェイス型呼吸器と説明されている。その後、マスクを通して純窒素が送り込まれ、ミラーの肺から酸素が押し出され、低酸素症を引き起こした。州当局はこの手順を「人道的」かつ「効果的」と呼び、スミスの処刑前に与えられた保証を繰り返した。[43]

ジョン・Q・ハム委員長は、「酸素が不足した際に起こる不随意的な身体の動きは、予期せぬものではなかった」と公に述べた。[44] この発言は、観察された身体的反応を、苦痛の証拠としてではなく、酸素不足の自然な結果として予測可能で一般的なものとして提示した。スティーブ・マーシャル司法長官は、「ミラーの処刑は計画通りに何事もなく行われた」と述べた。[45] これらの発言は、公式の物語を構築した。すなわち、手順は意図通りに機能し、結果は予測可能であり、ミラーの死は憲法の規範に合致していたという物語である。

B. 目撃証言：人間の現実

ミラーの処刑を目撃した人々の証言は、全く異なる様相を描き出している。メディア関係者、人権団体、そしてミラーの信仰上の仲間など、数多くの目撃者が、国家が約束した迅速かつ安らかな死とはかけの、長く苦痛に満ちた過程を証言している。

*ガーディアン紙は*最も詳細な記事を掲載した。「ミラー氏は担架の上で約2分間もがき苦しみ、時折ストラップを引っ張った。その後、約6分間喘ぎ続けた。」[46] この記述は明確な時系列を示している。約2分間の激しい震え、それに続く約6分間の苦しそうな呼吸、合計で約8分間の目に見える身体的苦痛の後、ミラー氏は意識を失ったようだ。

目撃者の証言によると、ガスは午後6時16分にミラー氏の顔を覆うマスクに漏れ始めた。彼は担架のストラップに抵抗し、約2分間震え、その後約6分間呼吸困難に陥った。[47] この証言は*ガーディアン紙のタイムラインを裏付け、一連の出来事の詳細をさらに明らかにしている。ガスは*午後6時16分に漏れ始め、明らかな苦痛の期間はその時点から午後6時24分頃まで続いた。

処刑を目撃した地元のテレビ記者は、さらに詳しい情報を伝えた。「午後6時18分、ガスが循環し始めた…ミラーは激しく呼吸し始めた。彼は担架から何度か頭を上げ、拘束具に抵抗した。彼は震えていた。これらの動きは約2分間続いた。」[48] 記者は、ミラーが頭を上げたという事実（意識的な筋肉の制御を必要とする随意的な行為）は、窒素に曝された初期段階で彼がある程度の意識を保っていたことを示唆していると指摘した。

物理的な観察に加えて、その場面を人間味あふれるものにする感情的な描写もあった。「観察エリアに響き渡った唯一の音は、妊娠中の目撃者の泣き声だった。」[49] この描写は、国家による処刑を目撃しなければならない人々に及ぼす心理的な影響を示している。この妊婦の苦悩は、処刑が死刑囚だけでなく、その家族、ジャーナリスト、そして立ち会う役人にも影響を与えることを改めて思い起こさせる。

C. 霊的指導者の証言

ミラーの精神的指導者は、処刑中に彼のそばに手を伸ばして祈ることができるほど近くにいた。[50] この近さによって、彼は他の目撃者とは異なる視点を得ることができ、傍聴席からは見えない微妙な表情や動きを観察できた可能性がある。精神的指導者のその後の証言は、検察側の事件の説明と真っ向から矛盾している。

カウンセラーは処刑を「水責めに似ている」と表現し、自分が見たものには「平和的」なところは何もなかったと付け加えた。[51] これらの用語は重要である。「水責め」は拷問の文脈において重要な法的意味合いを持つ。それは残酷で異常な刑罰の典型例であり、合衆国憲法修正第8条で明確に禁止されている。[52] 精神的カウンセラーがミラーと物理的に近く、牧会的な関係にあったことから述べた描写は、不随意運動の状態として予想されていた描写とは質的に異なる経験を示唆していた。

カウンセラーの証言は、臨床的な記述を超えた、ミラーの最期の瞬間についてのより深い理解をもたらした。処刑までの数時間をミラーと共に過ごした精神的指導者は、彼の精神状態と感情状態を察知していた。処刑を「拷問」と表現した彼の言葉は、彼が目にした光景だけでなく、ミラーという人物像、すなわち彼の恐怖、信仰、そして人間性を反映したものであった。この視点は、ミラーの死を意識的な経験とは無関係な一連の生理的反応に矮小化しようとする国家の試みに異議を唱えるものである。

D. 比較分析：スミス対ミラー

ケネス・スミスとアラン・ミラーの処刑には、驚くほど多くの類似点がある。どちらの場合も、苦痛は長く、明白だった。スミスの場合はガスが流れたため8分以上、ミラーの場合は意識を失うまで8分近くも苦しむ様子がはっきりと見て取れた。どちらの処刑も激しい身体的反応を伴った。スミスの場合は痙攣と苦悶、ミラーの場合は震えと喘ぎだった。どちらのケースでも収集された証言は、平和的な過程というよりは苦痛を想起させるものだった。スミスの処刑は、担架がずれるほどの「激しい」動きを伴ったと描写され、ミラーの処刑は「窒息による拷問」と特徴づけられた。

しかしながら、相違点もあった。ミラーの処刑は全体的に短かったようだが、死亡が記録された公式情報がないため、正確な所要時間は不明である。具体的な身体的症状にも若干の違いが見られた。スミスは苦痛にのたうち回り、痙攣を起こしたとされているのに対し、ミラーの証言では震え、悪寒、息切れが強調されている。これらの違いが、個々の生理的差異によるものなのか、スミスの処刑後に手順が変更されたためなのか、あるいは単に目撃者の証言の食い違いによるものなのかは不明である。

2件の死刑執行は、検察側が想定していたような迅速かつ穏やかな死とはならなかったことは明らかである。いずれのケースにおいても、目撃者は長時間にわたる肉体的苦痛を目撃しており、意識的な苦痛があったことを示唆している。そして、圧倒的な反証があるにもかかわらず、検察側はどちらのケースにおいても、死刑執行は「計画通りに行われた」と主張した。

E. 憲法上の影響

ミラーの処刑に関する目撃証言は、合衆国憲法修正第8条に関する根本的な疑問を提起している。*グロシップ対グロス事件*と*バックルー対プレサイス事件*では、採用された方法が「激しい苦痛の相当な危険」を生み出すかどうかが中心的な問題となっている。[53] 観察可能なデータ（2分間の激しい震え、6分間の喘ぎ、意識がある可能性を示す頭の挙上、そして精神的指導者によるその経験の「拷問」という特徴）は、ミラーが相当な苦痛を経験したことを示唆している。

州の主張は、意識的な苦痛と不随意的な生理的反応との区別に基づいている。ハム委員が「不随意的な身体の動き」は予見可能であったと主張していることから、アラバマ州はこれらの身体的反応を意識的な痛みの証拠ではなく反射として解釈していることが示唆される。[54] この観点からすると、ミラーの動きは、どれほど激しくても、あるいはどれほど長くても、意識を失った後に起こるため、合衆国憲法修正第8条の違反には当たらない。

しかし、この解釈は、公式のタイムラインと意識喪失の瞬間の説明をそのまま受け入れることを前提としている。目撃者の証言は、より微妙な視点を提供している。ミラーの行動、特に頭を上げたこと、拘束具に抵抗したと思われる様子、そして長く苦しそうに呼吸していたことから、彼は8分間の苦難のうち少なくとも一部は意識を保っていたと考えられる。独立した医学的

モニタリングや、脳活動が停止した正確な瞬間、あるいはミラーの主観的な体験が終わった瞬間を特定するためのデータがない限り、州側の主張は検証不可能である。

この事例において、透明性の問題は極めて重要である。窒素プロトコルには多くの欠落があり、ガス流量、マスクシールの正確な仕様、意識モニタリング手順、プロトコル失敗時の緊急時対応計画といった重要な詳細が不明のままとなっている。[55]　合衆国憲法修正第8条に基づく請願を審理する裁判所は、不完全な情報に基づいて「重大なリスク」を評価する必要があり、独立した検証に必要な技術データにアクセスすることなく、州の運用上の主張を受け入れている。この構造的な問題は、法学者によって、通常の責任が官僚的な秘密主義に取って代わられる例外として指摘されており、真の憲法上の監視を損なうものである。[56]

IX. 法的および倫理的影響

A. 前例のパラドックス

ミラーの死刑執行は、窒素ガスによる低酸素死刑をアラバマ州の死刑執行制度における確立された方法として定着させた。スミス事件は当初、この方法の合憲性を確認したが、ミラー事件は、いったん承認されれば、窒素ガスによる低酸素死刑は最小限の監視しか受けないことを示した。*グロシップ事件とバックルー事件で確立された法的枠組み*は、原告が重大なリスクを立証し、実行可能な代替案を提示することを要求するものであり、高い基準を設けている。この基準は、一度この方法が用いられてしまうと、満たすのがますます困難になる。したがって、州は、たとえそれらの執行が明らかな苦痛をもたらしたとしても、過去の執行を根拠にこの方法の有効性を証明することができる。

これは憂慮すべき力学を生み出す。処刑方法が頻繁に用いられるほど、処刑される人々の人間的な経験とは無関係に、その方法は法的に定着していく。処刑が行われるたびに、国家はその方法の実現可能性を示す証拠としてデータを提供する一方で、目に見える苦痛が憲法上の介入に必要な「激しい苦痛の重大なリスク」を構成するのかどうかという疑問も同時に生じる。結果として、実験的な方法が繰り返し行われることで常態化し、苦痛の証拠が積み重なるにもかかわらず、法理がそれらを異議申し立てから守るという悪循環が生じる。

B. 立証責任と立証の限界

ミラー事件は、有罪判決を受けた個人に課せられる立証責任の重さをも浮き彫りにしている。窒素低酸素症に異議を申し立てるには、ミラーは、その方法にリスクがあるだけでなく、そのリスクが実行可能な代替手段のリスクよりも著しく高いことを証明しなければならなかった。しかし、彼に利用可能な代替手段は限られていた。致死注射（すでに90分間の拷問を受けていた）、電気椅子（めったに用いられない方法で、残虐だと広く考えられている）、または改良型窒素プロトコル（アラバマ州では非現実的とみなされていた）である。

代替手段を提供する義務は、死刑囚に耐え難い選択肢の中から選ばざるを得ない状況を生み出し、ソニア・ソトマイヤー判事はこれを「不条理」と評した。[57] ミラーの場合、これは、処刑が失敗に終わった後、スミスが苦痛を目撃したという証言があったにもかかわらず、アラバマ州が窒素低酸素症を用いるのを阻止できなかったことを意味する。なぜなら、彼は別の方法が著しく苦痛が少ないことを証明できなかったからである。このように、法的な枠組みは、不必要な苦痛を避ける個人の権利よりも、死刑執行を行うという州の利益を優先している。

さらに、立証責任は「ある程度の確実性または蓋然性」を伴う証拠を要求するが、これは実験的方法では事実上満たすことが不可能な基準である。[58] 定義上、人間のデータは限られており、対照研究はなく、処刑自体を行わずに証拠を集める方法もない。これは論理的なパラドックスを生み出す。つまり、その方法を使用することによってのみ得られる証拠なしには、その方法に異議を唱えることはできないが、一度使用されると、過去の処刑の存在がその実現可能性の証拠となり、その後の異議申し立てを困難にする。ミラー事件はこのパラドックスをよく示している。彼の弁護士は、スミスの処刑を重大なリスクの証拠として挙げたが、裁判所は同じ処刑を窒素低酸素症が憲法上許容される証拠として解釈した。

C. 秘密保持、透明性、民主的説明責任

アラバマ州における致死性窒素注射法の検閲が継続されていることは、国家暴力の民主的統制に関する根本的な疑問を提起する。死刑執行は、選出された代表者によって可決された法律に基づき、国民の名の下に行われる。しかし、死刑囚を処刑する実際の仕組みは、検閲と作戦上の安全保障という口実の陰に隠されたままである。法学者デボラ・デンノが指摘しているように、州は死刑執行室を法的例外の場に変え、そこで通常の説明責任と透明性は秘密主義に取って代わられている。[59]

この透明性の欠如は、憲法上の具体的な影響を及ぼす。合衆国憲法修正第8条に関する訴訟を審理する裁判所は、ガス流量、マスクの仕様、監視手順といった、正確な手続きデータへのアクセスを必要とする。州がこれらの詳細情報を隠蔽すると、司法審査は表面的なものになってしまう。裁判所は、州からの保証を独自に検証するために必要な情報がないまま、それを受け入れざるを得なくなる。ミラー事件はこの問題を如実に示している。裁判所はスミスの処刑に関するデータにアクセスできたにもかかわらず、手順の合憲性を評価するために必要な技術仕様を検証することができなかったのだ。

秘密主義は国民の信頼をも損なう。公式発表では死刑執行が「人道的」かつ「平穏」であるとされている一方で、目撃者は「窒息による拷問」や長時間にわたる苦痛を証言しており、建前と現実の乖離は埋めがたいものとなる。国民は死刑の正当性を受け入れるよう求められる一方で、死刑執行が憲法上の原則に従って行われているかどうかを判断するために必要な情報へのアクセスを拒否される。こうした説明責任の喪失は、死刑囚だけでなく、司法制度そのものの健全性をも脅かす。

D. 実験の倫理

ミラーの処刑で最も憂慮すべき点は、その実験的な性質にあると言えるだろう。スミスの処刑が先に行われたにもかかわらず、窒素酸素欠乏症は依然として、十分な人体データ、対照研究、独立した科学的検証が欠如した処刑方法である。ミラーは、スミスと同様に、国家が認可した継続的な殺人実験のモルモットとなった。これは、憲法上の原則の枠を超えた、深刻な倫理的問題を提起する。

第二次世界大戦後に確立された人権基準では、あらゆる人体実験において十分な情報に基づいた同意が求められている。死刑執行は医療行為ではないものの、実験的な執行方法を用いることは、同様の倫理的問題を提起する。ミラーは死刑執行に同意しておらず、州当局に強制的に参加させられた。窒素注射による死刑執行に至った合意は、アラバマ州が致死注射を試みたものの失敗に終わり、彼を拷問した後になされたものであり、このような状況下で有効な同意が得られるとは到底考えられなかった。その後、未検証の方法を用いて執行された死刑執行は、倫理違反をさらに深刻化させた。

国際人権法は、別の視点を提供している。国連は、窒素低酸素による死刑執行を、拷問または残虐で非人道的もしくは品位を傷つける扱いに該当する可能性があると分類している。[60] 米国の裁判所は国際法に拘束されないものの、これらの解釈は、国家による刑罰の倫理的限界に関する世界的な合意を反映している。ミラーの死刑執行は、国際的な非難、彼の苦痛を目撃した証言、そして死刑執行失敗時の拷問歴にもかかわらず実行されたが、これは、国家が死刑執行の利益を倫理的配慮や人間の尊厳への尊重よりも優先する意思があることを示唆している。

E. 政治的・文化的背景

ミラーの死刑執行は、アラバマ州の政治的背景の中で理解されなければならない。この州は長年、国内で最も迅速に死刑執行に踏み切る州の一つであり、州の政治指導者たちは、自らの道徳的清廉さと被害者家族への献身の証として、しばしば死刑制度を持ち出す。スティーブ・マーシャル司法長官がミラーの死刑執行を「計画通りに何事もなく行われた」と表現したことは、この政治的姿勢を反映している。つまり、目撃者の証言が食い違っていても、死刑執行制度の問題点を認めようとしない姿勢である。[61]

こうした政治的背景は、死刑執行の方法や正当化の仕方に影響を与える。窒素低酸素症が苦痛を引き起こすことを認めれば、国家がこの方法を用いることの正当性そのものが問われることになる。ミラーの死刑執行が明らかな苦痛をもたらしたことを認めれば、さらなる法的異議申し立ての道が開かれ、国家が窒素低酸素症の使用を継続する能力が危うくなる可能性がある。政治的な動機は、具体的な証拠の有無にかかわらず、死刑執行は人道的で効率的であるという言説を維持することにある。

文化的側面も同様に重要である。アラバマ州では死刑制度への支持が依然として強く、死刑執行への反対はしばしば、被害者よりも犯罪者を優先するものとして提示される。このような文化的背景から、死刑執行方法に疑問を呈したり、追加の安全対策を講じたりすることは政治的に困難である。ミラー事件は、政治的・文化的要因が経験的証拠や倫理的配慮をいかに凌駕しうるかを示している。州が彼の死刑執行を行ったのは、窒素性低酸素症が人為的なものであることを決定的に証明する証拠があったからではなく、死刑囚を処刑するという政治的意思が、その方法の実験的な性質や観察可能なリスクに対する懸念を上回ったからである。他の州も参加を希望した。〈sup〉 62〈/sup〉

X. 結論：第二の死と法の限界

2024年9月26日に行われたアラン・ユージン・ミラーの死刑執行は、人類史上2度目の窒素ガスによる低酸素死刑の執行であり、目撃者の証言が迅速かつ平和な死を保障する国家の約束と矛盾した2度目の事例となった。ケネス・スミスの死刑執行は窒素ガスによる低酸素死刑の合憲性について疑問を投げかけたが、ミラーの死刑執行は、死刑執行における合法性と人道性は全く別物であることを示した。

ミラーの死刑執行までの道のりは、あらゆる段階で国家の失態が目立った。窒素の選択を適切に記録しなかった行政上の不手際、致死注射の失敗による拷問、そして安らかな死を約束したにもかかわらず明らかな苦痛を与えた実験的な方法の使用などだ。これらの失敗はいずれも司法によって正当化された。裁判所は一貫して、国家は執行を進めることができ、ミラーには重大なリスクを証明する責任があり、手続きの遵守は十分であると判決を下した。たとえ人間の経験がそうではないことを示唆していたとしてもだ。

処刑そのものが、憲法上の原則と現実との間のギャップを露呈した。ミラーは2分間震え、6分間息を荒げ、「水責め」を受けたと表現された。[63] しかし、州当局は処刑が「計画通りに何事もなく」行われたと主張した。[64] 観察されたことと公式に認められたこととの間のこの矛盾は、窒素低酸素症の根本的な問題を示している。法的枠組みは理論的な予測に基づいてその使用を許可しているが、実際の実施は裁判所が憲法上重要なものとして認識することをためらうか、あるいは認識できないように見える苦痛をもたらす。

ミラーの死刑執行は、死刑制度における透明性と説明責任の限界をも浮き彫りにした。検閲に満ちた執行手順は、重要な詳細を秘密に保つことを不可能にした。独立した医療監督がなかったため、ミラーが意識を失った時期に関する主張を検証することは不可能だった。さらに、真の意味での死刑執行後の検証が行われなかったため、目撃者によって観察され記録された苦痛は、将来の死刑執行において法的効力を持たないことになった。この制度はまさに設計通りに機能した。国家が死刑を執行し、裁判所は国家の指示に従い、増え続ける実証的証拠にもかかわらず、憲法上の問題は未解決のままとなった。

ミラーの処刑が持つ意義は、アラバマ州の境界をはるかに超える。彼の事例は、死刑囚の体験が公式の安全策と矛盾する場合であっても、実験的な処刑方法が判例と繰り返しによって常態化していく様を示している。また、*グロシップ*判決と*バックルー判決で確立された証拠の枠組み*が、憲法上の異議申し立てに対して事実上克服不可能な障害を生み出し、州が真の司法監視なしに死刑囚を実験対象とすることを可能にしていることも明らかにしている。さらに、処刑手順を取り巻く秘密主義が、民主的な説明責任と司法制度に対する国民の信頼をいかに損なっているかも示している。

おそらく最も憂慮すべきは、ミラーの処刑が、法学者オースティン・サラットが「誰も責任を取らない不透明な官僚的手続き」と表現する死刑制度の変容、すなわち市民の道徳的責任を一切免除する国家による処刑を典型的に示している点である。[65] 裁判所は確立された判例法に従い、国家は手順を遵守し、処刑は法律に従って執行された。しかし、その結果は、以前の処刑未遂ですでに拷問を受けていた男に8分間の露骨な苦痛が与えられたことだった。法律はこの結果を許容した。当時の裁判所が解釈した憲法はこれを禁止していなかった。そして窒素低酸素症を認めた政治体制は、その適用による結果を考慮してこの方法を再検討する意思を全く示していない。

アラバマ州が死刑執行に液体窒素の使用を増やし、他の州もこの方法を検討する中、ミラーの死刑執行は前例であると同時に警告でもある。それは、死刑囚が明らかに苦痛を受けている証拠があるにもかかわらず、死刑囚が拷問を受けているにもかかわらず、透明性のある手順や独立した監視がないにもかかわらず、州が実験的な死刑執行を合法的に行うことができることを示している。また、残虐で異常な刑罰に対する憲法上の保護が、州が死刑執行の方法を選択する際にほとんど意味のある制約とならないほどに侵食されていることを明らかにしている。さらに、死刑執行の「人道的」な方法の模索は、苦痛を軽減することよりも、死刑制度を臨床的にも、苦痛なくも、道徳的にも正当化できないという証拠が積み重なる中で、死刑の正当性を維持することにあるのかもしれないことを改めて思い起こさせる。

アラン・ユージン・ミラーは2024年9月26日、肺の中の酸素が窒素に置き換えられ、約8分間窒息と震えに苦しんだ末に死亡した。彼の精神的指導者はこれを拷問と呼び、国家はこれを正義と呼び、裁判所はこれを合憲と判断した。これらの解釈の隔たりは、事実に関する意見の相違だけでなく、国家権力の限界、人間の尊厳の意味、そして国家が死刑執行を優先する時に、法律が刑罰と残虐行為を真に区別できるのかという根本的な問題をも明らかにしている。

もちろん、アラバマ州の状況は決して安定していたわけではなかった。

最終的なメモ

1. ミラー*対州*、913 So. 2d 1148（アラバマ州刑事控訴裁判所、2004 年）；（ミラー*対州*(アラバマ州刑事控訴裁判所、2011 年）も参照）；ミラーは、1999 年 8 月 5 日にリー・ホルドブルックス、クリストファー・ヤンシー、テリー・ジャービスを殺害したとして加重殺人罪で有罪判決を受けた。加重殺人は 13A-5-40(a)(10) で定義されている（計画または一連の計画的行為の一部として行われた複数の殺人）；アラバマ州刑事控訴裁判所は、2004 年 1 月 6 日に、この事件を第一審裁判所に差し戻し、「特に凶悪、残酷、または明白な」加重事由に関する具体的な認定を追加して有罪判決を修正するよう命じた。公判前拘留から戻った後、刑事控訴裁判所は913 So. 2d 1148でミラーの加重殺人罪の有罪判決と死刑判決を支持し、アラバマ州最高裁判所は上訴を棄却した。

2. 同上

3. 同上

4. 同上

5. 同上

6. ミラー*対アラバマ州矯正局長*、932 F.3d 1269（第11巡回区控訴裁判所、2019年)。

7. *Ex parte Miller* , 116 Next. 3d 1140（アラバマ州 2013)。

8. *アラン・ユージーン・ミラー対ジェファーソン・S・ダン（アラバマ州矯正局長）*事件、2021年10月4日に上訴が却下されました（事件番号207592 -）。

9. アラバマ州法典 § 15 -1882.1(b)(2)（2018)。

10. ミラー*対ハム事件*、事件番号2:22-cv-00506-RAH、暫定差止命令を認める助言覚書および命令（アラバマ州メリーランド州、2022年9月19日）。裁判所は、「ミラーは2018年に適切な選択をしたと主張しているが、州はこの主張を裏付ける証拠を見つけられなかった」と指摘した。州はこれに対する答弁書の中で、ミラーが窒素性低酸素症に関して適切な選択をしたことを証明できる可能性は低いと明言した。

11. 同上。2018年のアラバマ州法第15-18-82.1条(b)項は、死刑囚に窒素低酸素症を選択する期間をわずか30日間しか与えていなかった。裁判所は、「アラバマ州矯正局（ADOC）には、受刑者の選択用紙を収集・送付するための標準化された手順や手続きがなかった」と判断し、実際には、ADOCの記録が不完全な場合、受刑者は自らの選択を証明する必要があった。この手続き上の欠陥にもかかわらず、裁判所は「ミラーは割り当てられた期間内に窒素低酸素症を選択した可能性が非常に高い」と結論付けた。

12. Equal Justice Initiative、「アラバマ州における最近の処刑失敗および処刑未遂事件」、 https://eji.org/issues/alabama-botched-executions/ （2022年9月22日のアラン・ミラーの処刑失敗について記録）。

13. 同上

14. アラン・ユージーン・ミラーの陳述、*Miller v. Hamm* 、No. 2:22-cv-00506-RAH (MD Ala.)、8 ;また、 *Miller v. Hamm* 、640 F. Supp. 3d 1220、1228 (MD Ala. 2022) (Huffaker, J.）も参照（ミラーの「彼らの行為は耐え難いものだった」という証言が記録されている)。Equal Justice Initiative、「最近のアラバマ州における処刑失敗と処刑未遂」、 https://eji.org/issues/alabama-botched-executions 。

15. 同上、9。ハファカーの2022年11月の意見書によると、「海軍の衛生兵がミラーの首の皮膚を触診し、叩き始めた」一方で、処刑執行人は中心静脈カテーテルの挿入を検討していた。Miller *v. Hamm* 、640 F. Supp. 3d、p. 1228。

16. 同上、12。ミラーは、右足に針を刺されたとき、「足に感電したような感覚があり、拘束具の下で全身が震えた」と証言した。Miller *v. Hamm* 、640 F. Supp. 3d、p. 1228。

17. 同上、14。裁判所は、「処刑室の警備員の1人が担架を水平位置から垂直位置に持ち上げた」こと、そして「ミラーは担架から垂直に吊り下げられたままで、腕、足、胸が拘束されていた」こと、そして「いくつかの傷から出血していた」ことを認定した。Miller *v. Hamm* 、640 F. Supp. 3d、pp. 1228-29; Equal Justice Initiative、*上記*注14（ミラーは「胸と腕を伸ばして担架で拘束された状態で、十字架にかけられた姿勢で20分間垂直に吊り下げられていた」と記述されている）。

18. 司法における平等のためのイニシアチブ、*上記*注12参照。

19. 同上

20. 死刑情報センター、「失敗した処刑」、アラン・ユージン・ミラーを含む（2022年9月22日）、 https://deathpenaltyinfo.org/executions/botched-executions 。

21. *Miller v. Hamm* 、事件番号2:22 -cv00506、訴状、15-20頁（アラバマ州地方裁判所、2022年9月23日）。

22. アラバマ州矯正局、和解合意書、ミラー*対*ハム、事件番号2:22 -cv00506（アラバマ州地方裁判所、2022年11月29日）。

23. ミラー*対*ハム*事件*、事件番号2:22 -cv00506、訴状、21-45頁（アラバマ州メリーランド州、2023年）。ミラーの訴状は、ニュース記事、ケネス・スミスの弁護士による宣誓供述書なしの宣誓供述書、およびスミスが処刑中に不快そうに見えたという彼の精神的指導者の発言に基づき、合衆国憲法修正第8条違反を主張した。アラバマ州司法長官事務所、プレスリリース、2024年8月5日。

24. *Glossip c. Gross* , 576 U.S. 863, 877 (2015); *Bucklew v. Precythe* , 139 S. Ct. 1112, 1126 (2019).

25. ミラー*対*ハム*事件*、事件番号 2:22-cv-00506-RAH (MD、アラバマ州)。2024年1月にケネス・スミスが処刑された後、ミラーはアラバマ州の窒素低酸素プロトコルに異議を唱える修正訴状を提出した。ミラーの訴状は「ケネス・スミスの1月の窒素注射による処刑に関する証言を引用」し、「州が彼に同じプロトコルを使用することを阻止しようとした」。キム・チャンドラー、「アラバマ州、訴訟和解後9月に窒素注射による処刑へ」、 *AP通信*、2024年8月5日。この事件は、予定されていた保護観察審理の前に、2024年8月に和解した。

26. 同上、前掲23頁；訴状、21～45頁。

27. 同上、10～15頁（ADOCが議定書の編集されていない詳細を開示することを拒否したことに関して、適正手続きの主張を提起している）。

28. *Ramirez v. Collier事件（142 S. Ct. 1264 (2022)）*の判決に従い、執行中に精神的指導者が立ち会い、祈ることを許可するよう求めた。

29. ミラー*対*ハム*事件*、宣誓供述書。

30. 同上

31. ミラー*対ハム事件*、訴状、30〜35頁（スミスの処刑の目撃証言を引用）。
32. スティーブ・マーシャル、「ケネス・ユージン・スミスの処刑に関する声明」、アラバマ州司法長官事務所、2024年1月26日。
33. ミラー*対ハム事件*、事件番号2:22-cv-00506-RAH（アラバマ州メリーランド州）。2024年1月のケネス・スミスの死刑執行後、ミラーは窒素吸入による死刑執行方法に異議を唱える修正訴訟を起こした。キム・チャンドラー、「アラバマ州、和解後9月に窒素吸入による死刑執行へ」、 *AP通信*、2024年8月5日。この訴訟では、「ケネス・スミスの1月の窒素吸入による死刑執行に関する証言」を、この方法が残酷で異常な刑罰を禁じる米国憲法修正第8条に違反する証拠として引用した。ミラーの弁護士は、「国内初の窒素吸入による死刑執行は惨事であり、州の執行方法は連邦裁判所で州が約束した迅速な死をもたらさなかった」と主張した。
34. ミラー氏は「窒素ガスに関する州のプロトコルにいくつかの変更を提案した。具体的には、医療用窒素の使用、資格のある専門家によるガス流量の監視、処刑前の鎮静剤の使用などである」。
35. アラバマ州司法長官事務所のプレスリリース「アラバマ州司法長官マーシャル、窒素低酸素死刑執行方法の合憲性を擁護することに成功」、2024年8月5日、 https://www.alabamaag.gov/alabama-attorney-general-marshall-successfully-defends-constitutionality-of-nitrogen-hypoxia-method-of-execution/ （同資料には「連邦裁判所はミラーの要求のほとんどを却下した後、訴訟手続きを継続するのにかろうじて十分な単一の要求に基づいてミラーが証拠を入手することを許可した」と記されている）。
36. この合意は、ミラー被告の死刑執行停止請求に関する連邦判事による審理が予定されていた9月26日の前日に提出された。AP*通信*、2024年8月5日。
37. アラバマ州司法長官事務所のプレスリリース「アラバマ州司法長官マーシャル、窒素低酸素死刑執行方法の合憲性を擁護することに成功」、2024年8月5日、 https://www.alabamaag.gov/alabama-attorney-general-marshall-successfully-defends-constitutionality-of-nitrogen-hypoxia-method-of-execution/ （同資料には「連邦裁判所はミラーの要求のほとんどを却下した後、訴訟手続きを継続するのにかろうじて十分な単一の要求に基づいてミラーが証拠を入手することを許可した」と記されている）。
38. 同上（「ミラーの訴訟は、ケネス・スミスが2024年1月の死刑執行時に残酷で異常な刑罰を受けるだろうというメディアの憶測に基づいていたが、州がミラーの弁護団に提出した証拠はこの誤った報道を否定した。[…] 州の報告書では、スミスが息を止めていたことが示されており、多くの記事がスミスの最初の動きを窒素によるものだと誤って報じている。」）
39. 「ミラー*対ハム訴訟*における和解に関する声明」 、 *AP通信*、 2024年8月5日。
40. 同上。クレバナー判事は次のように述べている。「ミラー事件で州が提案した窒素ガスによる低酸素死刑執行方法の合憲性を認めた裁判所は存在しない。したがって、州がこの方法の『合憲性』を『首尾よく擁護した』という主張は誤りである。和解合意は、そもそも当初の訴訟の是非に関する判決を意味するものではない。」
41. *Glossip c. Gross* , 576 U.S. 863, 877 (2015); *Bucklew v. Precythe* , 139 S. Ct. 1112, 1126 (2019).
42. アラバマ州矯正局、窒素低酸素症プロトコル（編集済み）、2023年。

43. ジョン・Q・ハム、2024年9月26日の記者会見。ハムは次のように述べた。「スミス事件と同様に、体内の酸素がなくなると不随意運動が起こります。ですから、これは予想外のことではありませんでした。」 *Associated Press* 、2024年9月26日；「アラバマ州の死刑執行室でのアラン・ミラーの処刑の直接の目撃者」、 *WVTM 13* 、2024年9月26日、 https://www.wvtm13.com/article/alan-miller-execution-alabama-witness-final-words/62415048 。

44. スティーブ・マーシャル、アラン・ミラーの処刑に関する声明、アラバマ州司法長官事務所、2024年9月26日。

45. 「アラバマ州、窒素ガスで死刑囚を処刑」*ガーディアン紙*、2024年9月26日、 https://www.theguardian.com/us-news/2024/sep/26/alabama-executes-alan-miller-nitrogen-gas ；複数のメディアが同様の観察結果を報じた。AP通信の記事によると、ミラーは「担架の上で約2分間揺れ、時折ストラップを引っ張った。その後、約6分間断続的に息を荒げ、動かなくなった」とのこと。キム・チャンドラー、「アラバマ州、 3人を殺害した罪で有罪判決を受けた男を処刑：全米で2例目の窒素ガスによる処刑」 *AP通信*、2024年9月26日。

46. Equal Justice Initiative、「アラバマ州、アラン・ミラーを処刑」、2024年9月26日、https://eji.org/news/alan-miller-alabama-execution-2024/。

47. 「アラン・ミラーの処刑の証言：アラバマ州処刑室からの第一級の証言」、 *WVTM 13*、2024年9月26日、 https://www.wvtm13.com/article/alan-miller-execution-alabama-witness-final-words/62415048 。

48. 同上

49. 同上

50. ミラーの精神的アドバイザーであるジョン・ミューンチ博士（職業は医師）は、処刑室に入り、担架の近くに立つことを許された。目撃者によると、ミューンチはミラーに近づき、彼の足に触れ、聖書の節と思われる言葉を唱えた。彼はまた、ミラーのために祈った。「アラン・ミラーの処刑の証言」、 *WVTM 13* 、2024年9月26日、 https://www.wvtm13.com/article/alan-miller-execution-alabama-witness-final-words/62415048 。ミューンチは後に、祈りの間、ミラーを慰めるために彼の左足に手を置いたことを語った。ローレン・ギル、「アラバマ州での窒素ガスによる死刑執行中の『苦痛』と『苦悩』」、 *Bolts Magazine*（および*The Intercept* ）、2024年10月8日、 https://boltsmag.org/alabama-nitrogen-executions/ 。

51. ミラーの精神的アドバイザーであるジョン・ミューンチ博士は、目撃した出来事を詳細に語った。処刑後、記者団の取材に応じたミューンチ博士（医師でもある）は、「死にゆく人があんな痙攣を起こすことはまずありません。彼の顔は激しい苦痛で歪み、苦しんでいるように見えました」と述べた。さらに、「最初は間違いなく苦しんでいて、息を荒くしていました。頭を上げて私が彼を見ることができた時も、まだ息を荒くしていました」と付け加えた。ミューンチ博士はこの経験を水責め拷問に例え、「水責め拷問を受けている人の映像は確かに存在し、それと非常によく似ていると思います」と述べた。AP*通信に対し、「決して安らかな死ではなかった」と語った。ローレン・ギル、*「アラバマ州での窒素による処刑実験における『苦痛』と『苦悩』」、 *Bolts Magazine*および*The Intercept* 、2024年10月8日、 https://boltsmag.org/alabama-nitrogen-executions/ *Associated Press* 、2025年3月6日。

52. *ハドソン対マクミリアン事件*、*503 US 1, 9 (1992)*を参照（拷問は典型的な残虐で異常な刑罰として分析されている）。
53. *Glossip c. Gross* , 576 U.S. 863, 877 (2015); *Bucklew v. Precythe* , 139 S. Ct. 1112, 1126 (2019).
54. ジョン・Q・ハムによる記者会見、2024年9月26日。
55. アラバマ州矯正局、窒素低酸素症プロトコル（編集済み）、2023年。
56. デボラ・デンノ、「致死注射後の混乱」 、*ジョージタウン・ロー・ジャーナル*（2014年）。https://ir.lawnet.fordham.edu/faculty_scholarship/506。
57. *Glossip c. Gross* , 576 US 863 (2015)（ソトマヨール判事、反対意見）。
58. *ミラー対ハム*、一時的執行停止命令3（アラバマ州地方裁判所、2023年9月22日）。
59. Denno、*前掲*注56。
60. 国連人権高等弁務官事務所、「国連専門家がアラバマ州での窒素ガス使用を非難」、2024年1月27日、 https://www.ohchr.org/en/press-releases/2024/01/united-states-un-experts-horrified-kenneth-smiths-execution-nitrogen-alabama 。
61. スティーブ・マーシャル、アラン・ミラーの処刑に関する声明、2024年9月26日。
62. ミシシッピ州法典第99条-1951年、オクラホマ州法典第22編第1014条、ルイジアナ州認可（2024年）。
63. コンサルタントのジョン・ミューンチ医師は、その光景を生々しい言葉で表現した。「あんな風に苦しみながら安らかに死んでいく人なんて見たことがない」と彼は述べた。「顔は歪み、苦悶しているように見えた」。医師であるミューンチ医師は、その光景を水責め拷問に例え、「きっと水責め拷問を受けている人の映像はあるだろうが、その光景はまさにそれとよく似ていると思う」と語った。彼は後に*AP通信に対し*、「あれは決して安らかな死ではなかった」と述べた。
64. スティーブ・マーシャル、アラン・ミラーの処刑に関する声明、2024年9月26日。
65. オースティン・サラット著『*国家が殺すとき：死刑とアメリカの現状*』 （プリンストン大学出版局、2001年）。サラットの中心的な主張は、現代の死刑執行は「誰も責任を取らない秘密の官僚的手続き」となり、国家による死刑執行を、彼が別のところで「静穏な官僚的流血」と呼ぶものに変えてしまったというものである。この官僚化は、死刑執行の暴力性を国民の良心から隠蔽し、刑務所職員、医療関係者、裁判所、知事といった様々な制度的関係者の間で道徳的責任を希薄化させ、誰も命を奪う重荷を負わないようにする役割を果たしている。サラットは、絞首刑から電気椅子、そして薬物注射に至るまで、それぞれの死刑執行方法が死を浄化し合理化することを約束しながらも、最終的にはその行為の根本的な残虐性を排除することに失敗した経緯を分析している。死刑執行技術が国家と国家が引き起こす暴力との距離をどのように保つのかについての関連分析については、Austin Sarat著『 *Macabre Spectacles: Failed Executions and the Death Penalty in America* 』（スタンフォード大学出版局、2014年）、Deborah W. Denno著「The Lethal Injection Dilemma: How Medicine Has Dismantled the Death Penalty」（ *Fordham Law Review* 76 (2007): 49-128、https://ir.lawnet.fordham.edu/flr/vol76/iss1/3）、Timothy V. Kaufman-Osborn著『 *From Rope to Needle: Capital Punishment and the Late Liberal State*』 （ミシガン大学出版局、2002年）も参照のこと。

3.0：キャリー・デール・グレイソンの処刑：挑戦、正常化、そして窒素による3度目の死

I. 実験から日常業務へ

2024年11月までに、窒素低酸素症は法的な意味で実験的とはみなされなくなった。1月のケネス・スミスの処刑により、この処刑方法の憲法上の合法性が確立された。9月のアラン・ミラーの処刑により、スミスのケースで観察され記録された苦痛が、アラバマ州がこの処刑方法の使用を継続することを妨げるものではないことが確認された。法的枠組みは整った。裁判所は、この処刑方法の人道性に関する州の主張を尊重し、受刑者が重大なリスクを立証する責任は依然として克服不可能であり、苦痛の目撃証言は単なる「不随意運動」として、あるいはアラバマ州矯正局長ジョン・Q・ハムが主張したように「すべてはでっち上げだ」として却下されるだろう。

2024年11月21日に行われたキャリー・デール・グレイソンの処刑は、窒素低酸素死刑の歴史における転換点となった。スミスとミラーのケースは、綿密な調査と法的審査を必要とする試験的な処刑として扱われたが、グレイソンのケースは日常的な手続きとして扱われた。アラバマ州はためらうことなく処刑を予定し、法的異議申し立てを「憶測」として一蹴し、過去2回の処刑経験から得た恐ろしい自信をもって実行に移した。この方法はもはや目新しいものではなく、常態化しつつあった。

しかし、グレイソンの処刑は決してありふれたものではなかった。刑務所長を侮辱し、ガスが広がり始めると両手の中指を立て、8分以上も拘束具に抵抗する彼の最期の瞬間は、実際に目撃された中で最も痛ましい窒素低酸素症の光景となった。この章では、グレイソンが処刑室へ向かうまでの道のり、彼の死を阻止できなかった法廷闘争、証言の生々しい詳細、そしてアラバマ州の処刑制度における窒素低酸素症の常態化がもたらすより広範な影響について考察する。

第1章と第2章では窒素低酸素症の憲法上の枠組みを確立し、その初期の応用例を記録したが、本章では、いかにして方法が反復によって定着していくのか、いかにして実験的な処刑が官僚的なルーチンへと発展していくのか、そしていかにして法的判例が人的犠牲に関係なく制度的な慣行に定着していくのかを探る。

II. 犯罪：ヴィッキー・デブリエと1994年の殺人事件

1994年2月21日、37歳のヴィッキー・リン・デブリエックスは、テネシー州チャタヌーガからルイジアナ州ウェストモンローにある母親の家までヒッチハイクをしていた。〈sup〉 [4] 〈/sup〉 彼女は目的地にたどり着かなかった。代わりに、キャリー・デール・グレイソン（19歳）、ケニー・ロギンス（17歳）、トレース・ダンカン（17歳）、ルイス・クリストファー・マンジョーネ（17歳）という4人の10代の若者に出会い、車に乗せてもらった。〈sup〉 [5] 〈/sup〉 10代の若者

たちは、アラバマ州オーデンビル近郊で彼女を乗せた時、アルコールと薬物の影響下にあった。〈sup〉 6〈/sup〉

その後、アラバマ州の現代史において最も残忍な殺人事件の一つが起こった。一行はデブリエックスをバルドロック山の森林地帯に連れて行き、乗り換えが必要だと主張した。到着すると、彼らはデブリエックスに瓶を投げつけ始めた。デブリエックスが逃げようとすると、彼らは彼女を地面に投げ倒し、激しく殴打した。裁判記録によると、十代の少年の一人が彼女の喉に足を押し付け、グレイソンが彼を押さえつけ、デブリエックスが血を吐き、「よし、パーティーに行くわ」と言って息絶えるまで続いたという。

しかし、暴力はデブリユーの死で終わらなかった。グループは彼女の遺体を崖から投げ捨て、後日戻って遺体を損壊した。〈sup〉 10 〈/sup〉 彼らは彼女を少なくとも180回刺したり切りつけたりし、片方の肺の一部を取り除き、すべての指を切断した。〈sup〉 11〈/sup〉検視官は、デブリユーの顔はひどく骨折しており、ほとんどすべての骨が折れていたため、以前に撮影された脊椎のレントゲン写真でしか身元を特定できなかったと証言した。〈sup〉 12〈/sup〉捜査官は、10代の少年の1人が友人にデブリユーの切断された指を見せ、殺人を自慢したことで、ようやく容疑者を特定した。〈sup〉 13〈/sup〉

この犯罪の残虐性は、グレイソンの処刑をめぐる法的および道徳的な議論を理解する上で重要な光を投げかける。ケイ・アイビー知事は後に、グレイソンの行為の残虐性を強調し、グレイソンの犯罪は「想像を絶するものであり、人間の生命を顧みず、説明のつかない残虐性を持つ」と述べた。〈sup〉 14〈/sup〉この主張、つまり犯罪の根底にある恐怖は、窒素低酸素法に対する批判に対するアラバマ州の主な弁護となった。その主張は単純だった。グレイソンが処刑中に耐えた苦痛は、デブリユーの苦痛とは比較にならないというものだ。

III. 有罪判決、刑罰、そして不均衡な結果

4人の10代の少年は加重殺人罪で有罪となり、1995年と1996年にそれぞれ別々に裁判にかけられた。〈sup〉 15〈/sup〉しかし、これらの裁判で採用された手続き上の戦略は、大きな論争を巻き起こすことになった。各裁判において、検察官は被告人の中で「首謀者」の正体について矛盾する説を提示した。〈sup〉 16〈/sup〉

1996年のグレイソンの裁判中、検察官は彼を「首謀者」であり、「作戦全体を指揮した」責任者だと特定した。〈sup〉 17 〈/sup〉 しかし、トレース・ダンカンとルイス・マンジョーネの裁判中、同じ検察官は、グレイソンが首謀者であると主張するのは「ばかげている」し「幻想的」だと主張し、彼に対する唯一の証拠は「車を運転した」ことだけだと指摘した。〈sup〉 18〈/sup〉検察官のこの矛盾、つまり異なる陪審員に対して異なる被告の方がより有罪だと告げたことは、下された死刑判決の信頼性について疑問を投げかけた。

グレイソンの弁護側は、検察側の矛盾する主張を反駁するため、他の3つの裁判の記録の開示を求めたが、裁判官はこれを却下した。記録を入手できなかったため、グレイソンの弁護士は、検察側

が矛盾する事件の説明をしたことを陪審員に証明することができなかった。陪審員はグレイソンを有罪とし、量刑言い渡しの際、弁護士は、幼少期に受けた深刻なネグレクト、母親の死後何年も飢えに苦しんだこと、トラウマによって精神疾患（双極性障害）を発症したこと、15歳でホームレスになったことなど、重要な情状酌量事由を一切提示できなかった。

こうした欠陥や検察側の矛盾した主張にもかかわらず、グレイソンは死刑判決を受けた。共犯者3人も当初は死刑判決を受けたが、彼らの運命は大きく異なった。2005年、米国最高裁判所は*ローパー対シモンズ事件において*、少年犯罪者（犯行時に18歳未満）は死刑に処することはできないとの判決を下した。〈sup〉 21〈/sup〉裁判所は、少年の未熟さ、責任感の欠如、外部からの圧力に対する脆弱性、そして更生の可能性を考慮すると、少年は「最悪の犯罪者の中に確実に分類することはできない」と主張した。〈sup〉 22〈/sup〉

*ローパー判事の決定*を受けて、殺人当時ともに17歳だったケニー・ロギンスとトレース・ダンカンの死刑判決は、仮釈放なしの終身刑に減刑された。同じく17歳だったルイス・マンジョーネは終身刑を言い渡された。グレイソンだけが死刑判決を受けたが、それは彼が明らかに最も罪が重かったからではなく（州自身も2004年の控訴審で彼が最も罪が重かったわけではないと認めている）、犯行当時19歳だったためである。

4人の参加者のうち、処刑されたのは1人だけというこの不均衡は、死刑の恣意性を浮き彫りにしている。グレイソンの運命を決定づけたのは、事件当時、他の参加者よりわずか数ヶ月年下だったという年齢だった。最高裁判所は、17歳は大人ほどの成熟度や判断力に欠けることを認めつつも、この原則をグレイソンではなく他の被告人に適用した。幼少期の深刻なトラウマと未治療の精神疾患によって発達が阻害されていたという証拠があったにもかかわらずである。

IV. 窒素低酸素症の選択

2018年7月、アラバマ州で窒素低酸素法が可決された後、グレイソンは約180人の死刑囚の一人として、処刑方法として窒素を選択する短い期間を与えられた。〈sup〉 26〈/sup〉グレイソンはその選択をし、致死注射や電気椅子ではなく窒素を選んだ。 〈sup〉27〈/sup〉ミラーの選択は争われたが、グレイソンの選択は記録されており、異議はない。

この事実は、彼の処刑をめぐる法廷闘争の中心的な要素となった。アラバマ州は、グレイソンが窒素低酸素症を自発的に選択し、それが何を伴うかを知っていた（あるいは少なくとも知る機会があった）と主張した。 〈sup〉28〈/sup〉しかし、このアプローチは重要な背景を覆い隠していた。グレイソンが声を上げた2018年当時、アラバマ州には窒素低酸素症による処刑の実際の手順に関する確立された手順も、実施スケジュールも、臨床データもなかった。〈sup〉 29〈/sup〉したがって、選択は情報がない状態で行われた。

さらに、「選択」という概念自体が問題です。批評家が指摘しているように、囚人に、潜在的に耐え難い方法（致死注射（アラバマ州で失敗した処刑が記録されている）、電気椅子（残虐

行為として広く認識されている）、または事前のテストなしの窒素プロトコル）の中から選択させることは、手続き上の公平性を装って残虐行為を官僚化することに等しいのです。〈sup〉30〈/sup〉グレイソンの窒素による「選択」は、インフォームド・コンセントというよりは賭けでした。未知の方法の方が、アラバマ州の他の処刑方法の既知の恐ろしさよりも苦痛が少ないだろうという賭けです。

グレイソンの死刑執行予定日である2024年11月までに、窒素低酸素症に関する状況は劇的に変化していた。ケネス・スミスとアラン・ミラーはこの方法で処刑され、両人の処刑を目撃した証言では、震え、喘ぎ、痙攣といった長時間の肉体的苦痛が描写されており、州が約束していた意識の急速な喪失とは矛盾していた。グレイソンの弁護士は、この新たな情報によって状況が根本的に変わったと主張するだろう。グレイソンが2018年に「人道的」な代替手段として選択した方法は、スミスとミラーの死によって、想像を絶する意識のある苦痛を与えることが明らかになったのだ。

V. ミラー判決後の法的課題

グレイソンの弁護士は2024年6月、スミスとミラーの処刑時に観察された証拠に基づき、窒素低酸素症の合憲性を問う連邦訴訟を起こした。この訴訟は、アラバマ州の処刑手順における4つの具体的な欠陥に焦点を当てた。

1. **処刑前の医学的検査の欠如**：このプロトコルでは、グレイソンが窒素誘発性低酸素症の際に意識を長引かせたり苦痛を増大させたりする可能性のある疾患を抱えているかどうかを判断するための医学的評価は義務付けられていなかった。[32]
2. **鎮静剤不使用**：致死注射を含むほとんどの死刑執行手順は鎮静剤の投与から始まることが多いが、窒素低酸素症では不安、パニック、意識的な苦痛を軽減するための前処置は一切行われない。[33]
3. **マスクの装着不良**：全面マスクは酸素漏れを防ぐために完全な密閉性を確保することを目的としていたが、プロトコルには適切な装着を確保したり、個々の解剖学的差異を考慮したりする仕組みが含まれていなかった。[34]
4. **不十分なモニタリング**：プロトコルでは意識状態のモニタリングが不十分であり、脳波（EEG）やその他の客観的な脳活動測定ではなく、主に視覚的観察に依存していた。[35]

これらの主張を裏付けるため、グレイソンの弁護士は麻酔科医のブライアン・マッカリー医師による専門家証言を提出した。マッカリー医師は、グレイソンは意識を保ったまま酸素不足による激しい痛みに苦しむ可能性が高いと述べた。〈sup〉 [36]〈/sup〉マッカリー医師はまた、例えばプロトコルが失敗した場合や当局が処刑を途中で中止した場合など、死亡前に窒素供給が中断された場合、グレイソンは永久的な脳損傷を受け、完全に生きているわけでも完全に死んでいるわけでもない植物状態に陥る可能性があると警告した。〈sup〉 [37]〈/sup〉

法的枠組みは、スミス事件とミラー事件から変更されなかった。*グロシップ対グロス事件では、グレイソンは「重度の苦痛の重大なリスク」を証明し、実行可能な代替方法を提案しなけ*

*ればならなかった。*グレイソンの弁護士は、2つの代替案を提示した。(1) 処刑前にケタミン鎮静剤を使用し、窒素充填高圧チャンバーを使用して死刑囚が意識不明の間に酸素を徐々に置き換える修正窒素プロトコル、(2)　アラバマ州で通常使用される薬物の代わりに、ケタミンとフェンタニルの致死注射。

アラバマ州側の回答では、グレイソンの証言は「憶測に基づくもの」であり、過去の窒素吸入による死刑執行は「成功していた」と強調した。ロバート・オーバーリング司法次官補は、窒素による低酸素症は「溺死、ビニール袋による窒息、肺麻痺など」の窒息とは比較にならないと主張し、この比較は「リンゴとオレンジを比較するようなもの」だと述べ、この方法は「窒息」という言葉を使って「この方法では存在しない恐怖と苦痛の感覚を呼び起こそうとしている」と主張した。

VI. ハファカー判事の判決：判例は法理として確立される

2024年11月6日、スミス事件とミラー事件を担当した米国地方裁判所判事R・オースティン・ハファカー・ジュニアは、グレイソンの仮差止命令の申し立てを却下した。〈sup〉 42〈/sup〉この決定は、証拠審理の後に行われたもので、審理ではアラバマ州の刑務所職員が最初の2件の液体窒素による処刑の観察について証言し、グレイソンの弁護士は2人の男性の明らかな苦痛を描写した新聞記事を提出した。〈sup〉 43〈/sup〉

ハファカーは、スミスとミラーの処刑に関する証拠が「矛盾していて一貫性がない」ことを認めた。〈sup〉 44〈/sup〉しかし、彼は「この証拠は、窒素低酸素プロトコルが効果的であり、10分以内に死亡、さらに短い時間で意識喪失をもたらしたことを証明している」と結論付けた。〈sup〉 45〈/sup〉このアプローチは、「成功」を特定の時間枠内での死亡達成のみと定義しており、その間に観察される苦痛が残酷で異常な刑罰に該当するかどうかという憲法上の問題を無視している。

ハファカー判事の意見は、以前の判決とほぼ同じ表現を用いていた。「彼らの証拠と主張は憶測に過ぎず、極めてありそうもない出来事の憶測の羅列であり、せいぜい科学的な論争に過ぎない。窒素低酸素プロトコルが、さらなる痛みどころか、容認できないほどの痛みのリスクを伴うことを証明するには程遠い。」〈sup〉 46〈/sup〉判事は、マッカリー博士の証言が、このプロトコルが「心理的な痛み」を引き起こすことを示唆していることを認めたが、そのような痛みは「実施方法に関係なく存在する」と強調することで、この懸念を退けた。〈sup〉 47〈/sup〉

この論理は重要である。窒素低酸素症が心理的苦痛（窒息感、パニック、息切れ）を引き起こすことを認めつつも、この苦痛をあらゆる死刑執行に内在するものではないと否定することで、ハファカー判決は事実上、心理的苦痛を合衆国憲法修正第8条の適用範囲から除外した。この判決は、死に至るのに必要な範囲を超える肉体的苦痛のみが違憲な残虐行為を構成することを示唆しており、この基準によれば、死に至る限り、それ以上の身体的損傷を与えない限り、ほぼあらゆる死刑執行方法が許容されることになる。

第11巡回区控訴裁判所は介入を拒否し、米国最高裁判所は2024年11月21日、グレイソンの死刑執行予定時刻のわずか数時間前に、何のコメントもなしにグレイソンの死刑執行停止の要請を却下した。グレイソンの弁護士は、彼の事件は「憲法修正第8条が意識のある囚人の窒息死を禁じているかどうか」という「国家的に重要な問題」を提起していると主張していたが、最高裁が沈黙を保ったことは、スミスとミラーの死刑執行を承認した直後に窒素性低酸素症の問題を再検討する必要はないと考えていることを示唆していた。

VII. 処刑：2024年11月21日

A. 前の時間

キャリー・グレイソンの最後の日は、アラバマ州の死刑囚監房で他の日と何ら変わらないように始まったが、それが彼にとって最後の日になるという確信があった。彼は朝食と昼食の食事トレイを拒否したが、一日中コーヒーとマウンテンデューを飲んだ。最後の食事として、グレイソンは地元のレストランからタコス、ビーフブリトー、トースト、ワカモレ添えのフライドポテト、そしてマウンテンデュー・ブラストを注文した。それはごく普通で、何の変哲もない食事だった。

ケイ・アイビー州知事は、恩赦を与えるつもりはないと既に明言していた。死刑執行の数日前、彼女は記者たちに「キャリー・グレイソンは、ヴィッキー・デブリエとその家族から30日間の感謝祭を奪ったことを考えただろうか？」と問いかけた。この修辞的な問いかけは、死刑執行を相応の正義として提示するものであった。デブリエは30年間も祝日を奪われてきたのだから、感謝祭の1週間前にグレイソンを処刑するのは、時期尚早な決定ではなく、むしろ正当な不正義であった、というわけだ。

B. 最後の言葉と反抗のジェスチャー

午後6時6分頃、処刑室のカーテンが下ろされた。キャリー・グレイソンは担架に縛り付けられ、青い縁のガスマスクが顔をしっかりと覆っていた。目撃者の証言によると、ホルマン刑務所の所長テリー・レイボンが最後の供述を録音するためにマイクを持って近づいた時、グレイソンは意識がはっきりしていたという。

グレイソンの返答は即座に、そして下品だった。「ああ、お前はくたばれ。」 [55]

刑務所長はすぐにマイクのミュートを解除した。グレイソンは話し続けた。目撃者たちはマスクの下で彼の唇が動いているのが見えたが、監視室にいる者たちには彼の言葉はもはや聞こえなかった。[56]彼は州の代表者が座っている証人室に向かって話しているように見えた。彼の身振りは怒り、反抗、あるいはその両方を示唆していた。[57]そして、彼の処刑の象徴的なイメージとなる仕草で、グレイソンは窒素ガスが広がり始めた時に両手の中指を空中に突き上げた。[58]

ジョン・Q・ハム委員長は後に、グレイソンのマイクを切断した理由を次のように説明した。「彼は今夜、我々の職員のほとんどを侮辱したので、彼にそのような卑猥な言葉を発する機会を与えるつもりはなかった。」〈sup〉 59〈/sup〉この発言は多くのことを物語っている。グレイソンの最期の数時間は、刑務所職員との度重なる衝突によって特徴づけられ、その反抗的な態度は死の間際まで続いたことを示唆している。また、検閲の問題も提起している。州は死刑執行の時期や方法だけでなく、囚人が最期の瞬間に何を言うことを許されるかも管理しているのだ。州が彼を黙らせようとしたにもかかわらず、グレイソンの侮辱、中指を立てる仕草、そして露骨な怒りはすべて死刑執行の記録に残された。

C. 身体的反応：8分間の明らかな苦痛

処刑室の構造上、目撃者は正確な瞬間を特定できなかったものの、ガスが循環し始めるとすぐにグレイソンの体が反応し始めた。その後の数分間に目撃した出来事について、複数のジャーナリストが詳細な報告を残している。

グレイソンは「頭を動かし、痙攣を起こし、担架のストラップを引っ張った」〈sup〉61〈/sup〉。州が約束した受動的な意識不明とは裏腹に、グレイソンの動きは積極的な抵抗を示していた。「彼は拳を握りしめ、別の動作をしようと苦闘しているように見えた」。おそらく中指を再び上げようとしたのだろうが、ストラップと運動機能の低下により、その動作は不完全だった。〈sup〉62〈/sup〉

午後6時14分、目撃者たちは特に不穏な様子を目撃した。「シーツに包まれた彼の両足が、担架から持ち上がった」。この不随意（あるいは随意）な足の動きは、かなりの筋肉活動を示しており、グレイソンがすぐに意識を失ったという考えと矛盾する。カーテンが開けられてから8分という正確なタイミングは、窒素への曝露に対する身体反応が長時間続いたことを示唆している。

グレイソンはその後、「数分間にわたって少なくとも12回、断続的にあえぎ呼吸をした」。64目撃者は少なくとも12回のあえぎ呼吸を数えた。それは、誰かが必死に呼吸しようとしているかのような、深く苦しそうな呼吸だった。65これらのあえぎ呼吸は連続的ではなく、波のように現れ、グレイソンの呼吸器系が窒素誘発性低酸素症と闘っていた時期を示唆している。

午後21時。カーテンは午後6時27分に閉じられ、グレイソンの死亡は午後6時33分に宣告された。ハム委員長は後に、グレイソンのマスクを通して窒素が約15分間循環し、心電図によるとガスの循環が始まってから約10分後に心臓が停止していたことを明らかにした。

D・ハム委員による「あらゆる形態の娯楽」の擁護

処刑後の記者会見で、ハム委員長は注目すべき発言をした。グレイソンの最初の動きのいくつかは「全くの芝居」だったと考えているというのだ。69この発言は、グレイソンが意識的に、処

刑を実際よりも残酷に見せるために意図的に身体的な反応を誇張していたこと、震え、拘束具に抵抗する動き、中指を立てる仕草は酸素不足に対する反射的な反応ではなく、パフォーマンスだったことを示唆している。

ハム氏は続けて、「窒素ガスによる低酸素死刑執行中には、不随意的な身体の動きが生じる」と述べた。この表現によって、州は二つの選択肢を持つことができた。グレイソンの動きの中には意識的な判断によるもの（「すべて仕組まれたものだった」）もあれば、苦痛を感じていないことを示す不随意的な生理的反応もあった。したがって、州は、観察者が目撃した出来事は、この処刑方法が人道的であるという主張と矛盾するものではないと主張した。意識的な動きは仕組まれたものとみなされ、無意識的な動きは予想される反射反応だったとされた。

この弁護は、単なる流行に過ぎず、非常に問題がある。死刑執行を目前に控えた男、刑務所長を侮辱し中指を立てた男が、同時に処刑方法を貶めるための芝居がかったパフォーマンスをしていたと想定しているからだ。つまり、グレイソンが命の最後の瞬間、肺の中の酸素が窒素に置き換わる中で、迫りくる死についてではなく、アラバマ州の処刑手順をいかに貶めるかを考えていたと信じ込まざるを得ないのだ。

もう一つの解釈としては、グレイソンの動きは、窒息に対する意識的な認識、低酸素症に対する不随意的な筋肉反応、そして酸素を得ようとする身体の必死の努力といった、彼自身の経験に対する真の反応だったという可能性が考えられる。この解釈が正しければ、グレイソンの処刑は、脳死によって約束された「数秒」の意識喪失よりもはるかに長い、約8分から15分間の意識的または半意識的な苦痛を伴ったことになる。

被害者の娘：「正義を装った囚人殺害」

12歳の時に母親が殺害され、彼女は30年間その悲しみを抱えて生きてきた。グレイソンの死後、彼女が満足感や安堵感を示すだろうと予想されていた。

一方、ヘイリーはより繊細な考察を示した。彼は母親を「個性的」「奔放」「ワイルド」「面白い」「美しい」と表現した。〈sup〉 72〈/sup〉彼は母親の人生と未来が奪われたことを認めた。しかし、ヘイリーはグレイソン自身に目を向け、「彼は幼少期に様々な虐待を受けた…社会は彼を子供として見捨て、私の家族はそのことで苦しんだ」と語った。〈sup〉 73〈/sup〉

ヘイリー氏の声明はこう続いた。「正義を装った囚人の殺害は止めなければならない。誰であれ、人の機会、日々、そして命を奪う権利を持つべきではない。」 74

これはアラバマ州当局が聞きたかったことではなかった。アイビー知事は、グレイソンの処刑をデブリエウへの正義の実現、彼女の家族への慰め、そして最高刑に値する凶悪犯罪に対する道徳的な清算として提示していた。しかし、グレイソンの死に対しておそらく最も正当な権利を持っていたであろうデブリエウの娘は、この説明を拒否した。彼女は、グレイソンの処刑は

母親を生き返らせるものではなく、30年間の苦しみを消し去るものでもなく、正義を表すものではなく、むしろ暴力の永続化であると認めた。

ヘイリー氏の発言は、国家のレトリックが覆い隠している真実を明らかにしている。それは、死刑制度について犠牲者の家族が一枚岩の見解を持っているわけではなく、甚大な損失を被った人々でさえ、自分たちの名の下に行われる国家による処刑が復讐以外の目的を果たすのかどうか疑問に思うかもしれないということだ。

VIII. 法的および倫理的分析

A. 正規化曲線

グレイソンの処刑は、いわば窒素性低酸素症の「正常化曲線」における転換点となった。象徴的な事例とみなされたスミスの処刑は、より厳しい精査、国際的な非難、そして広範なメディア報道の対象となった。ミラーの処刑はそれほど注目を集めなかったものの、それでも重大な法的異議申し立てと世論の議論を引き起こした。グレイソンの処刑の頃には、窒素性低酸素症はごく一般的なものとなっていた。

この常態化は法的影響を伴う。それぞれの死刑執行は、次の執行を容易にする前例となる。ハファカー判事は、窒素注入による死刑執行の有効性の証拠として、過去2件の執行事例を挙げる可能性がある。第11巡回区控訴裁判所と最高裁判所は、スミス事件とミラー事件で既に却下された論点以外に新たな論点を提示することなく、グレイソンの控訴を無意味とみなすかもしれない。州は、裁判所が介入しないと確信して、グレイソンの死刑執行を予定することができるだろう。

しかし、世間の認識においても正常化は起こる。グレイソンの処刑に関するメディア報道は、スミスの処刑ほど広範囲ではなかった。グレイソンが刑務所長を侮辱し、中指を立てたという事実が、支配的な物語となった。彼の苦しみよりも反抗的な行為、　8分間の苦痛よりも卑猥なジェスチャーが強調されたのだ。処刑は、憲法違反の可能性ではなく、逸脱した見世物として報道された。

この手法の変化は、国家にとって非常に有利である。前例のない処刑は注目を集めるが、日常化すると刑事司法のあり方に溶け込んでしまう。ニトロ低酸素症は、あらゆる処刑方法の歴史的パターンをたどる。すなわち、当初は論争を巻き起こし、明らかな問題にもかかわらず繰り返し使用され、最終的には国家が殺害するための単なる手段として受け入れられるようになるのだ。

B. 証明のパラドックスが深まる

グレイソン事件は、処刑方法に伴う困難さから生じる証拠の矛盾を如実に示している。彼は、スミスとミラーが持っていなかったもの、すなわち液体窒素注入による過去2回の処刑から得られた具体的な人的データを持っていた。彼の弁護士は、スミスの痙攣やけいれん、ミラーの震えや喘ぎ、そして意識喪失に至るまでの長い時間など、苦痛の具体的かつ観察可能な証拠を挙げることができた。しかし、これらの証拠は不十分と判断された。

ハファカー判事の判決は明白である。過去の死刑執行は、10分以内に死に至ったため「成功」とみなされていた。⁷⁵このアプローチは、憲法上の分析を単純な二分法に還元する。すなわち、その方法で人は死んだか？もしそうであれば、憲法上許容される。死の性質、つまり耐えた苦痛、その激しさ、そしてその必要性は、死そのものの事実に比べて二次的なものとなる。

この規則は、死に至る限り、いかなる処刑方法も憲法上の異議申し立てから免除する。たとえ処刑方法が、意識のある状態での長時間の苦痛、目に見える苦悩、そして相当な時間を要するものであっても、最終的に目的を達成すれば「成功」とみなされる可能性がある。したがって、合衆国憲法修正第8条に明記されている残虐で異常な刑罰の禁止は、死に至らない方法、あるいは死に至るために必要な範囲を超えた身体的危害を与える方法を禁止するにとどまることになる。

さらに、グレイソンの異議申し立ては、「実行可能な代替手段」という要件を満たすことの不可能性を浮き彫りにした。彼の弁護士は（鎮静剤やその他の致死性物質を用いた）修正された手順を提案したが、これらは憶測的または非現実的であると判断された。アラバマ州では過去に処刑が失敗に終わった経緯があるため、薬物注射は依然として問題視された。電気椅子による処刑は可能であったが、広く残虐な方法とみなされていた。この3つの方法による処刑システムは、選択肢があるかのような錯覚を生み出しながら、真に人道的な代替手段が存在しないことを保証していた。

C. 「娯楽のためなら手段を選ばない」という問題

ハム委員がグレイソンの最初の動きは単なる演技だったと主張したことは、危険な前例となる。州が目に見える苦痛を、真の苦痛ではなく演技として片付けることができるならば、目撃証言は証拠価値を一切失うことになる。わずかな動き、かすかな意識の兆候、ほんのわずかな痛みの表れさえも、死刑囚の真の感情の証拠ではなく、処刑方法の正当性を損なわせようとする試みとして再解釈されかねないのだ。

この論理によれば、当局が観察された苦痛は誇張または偽装であると主張できる限り、国家はどんな残酷な方法でも人を処刑することが可能になる。これは死刑囚を不安定な立場に置く。もし死刑囚がじっと黙っていれば、国家は処刑方法が苦痛を伴わないと主張する。もし死刑囚が動いたり苦痛の兆候を見せれば、国家は死刑囚が苦痛を装っていると主張する。

「見せかけ」弁護は、極めて信憑性に欠ける信念に基づいている。それは、窒素中毒による低酸素症で死の淵に立たされた人間が、政治的な芝居を演じるだけの認知能力と意欲を保持しているという信念である。グレイソンが中指を立てたり、罵詈雑言を吐いたりしたのは、怒りと反抗の真の表現と解釈できるかもしれないが、その後の彼の身体的反応――うなずいたり、拘束具から逃れようとしたり、息を荒げたり――が意図的に誇張されたものだと主張するには、彼が処刑の大部分において意識を保ち、行動していたことを認めなければならない。もしこれが事実であれば、窒素が急速な意識喪失を引き起こすという検察側の主張は否定される。もしこれが事実でないならば、ハムがグレイソンの苦しみを単なる「見せかけ」として片付けるのは、現実と向き合うことを避けるための修辞的な戦略に過ぎない。

D. 国際社会の視点と国連による非難

グレイソンの処刑は、国連人権高等弁務官事務所からさらなる非難を招いた。国連の専門家は、「国際法で明らかに禁止されている窒素窒息による処刑の緊急禁止を改めて求める」と述べ、市民的及び政治的権利に関する国際規約と拷問等禁止条約を引用した。〈sup〉 76〈/sup〉声明は、「拷問または残虐、非人道的、または品位を傷つける扱いもしくは刑罰の禁止は絶対的なものであり、決して容認できず、いかなる代替手段にも依存しない」と強調している。〈sup〉77〈/sup〉

*グロシップ／バックルー*の枠組みにおいて、米国では、有罪判決を受けた者は、その方法が深刻な苦痛をもたらす重大なリスクがあることを立証し、実行可能な代替案を提示することが裁判所によって求められる。しかし、国際人権法では、ある方法が拷問または残虐な扱いに該当する場合、代替案がないことは問題にならないとされている。その方法は、その性質に関わらず禁止されなければならない。

国連の専門家はまた、「知的障害や精神社会障害のある人が関わる刑事事件において、公正な裁判と弁護人の権利の尊重を確保するための効果的な法的支援や便宜が欠如していること」について懸念を表明し、特にグレイソンの双極性障害に言及した。78これは、この事件のもう1つの側面を浮き彫りにしている。それは、高度な法的戦略と自身の弁護に効果的に参加する能力を必要とする死刑制度において、重度の精神疾患を持つ人が公正な扱いを受けているかどうかである。

IX. より広範な影響

A. 3回目の処刑と今後の展望

グレイソンの処刑は、アラバマ州の死刑執行手段における窒素低酸素症の重要性を確固たるものにした。3回の処刑でいずれも同様の症状（長時間の身体反応、喘ぎ、明らかな苦痛）が見られたため、この方法は検証ではなく反復によって定着した。州はもはや窒素低酸素症が人道的

な方法であることを証明する必要はなく、過去の事例に言及し、それらが「成功した」と主張するだけで十分だった。

数十人の死刑囚が、窒素ガスによる低酸素症を処刑方法として選択していた。処刑が行われるたびに、この方法は常態化し、選択した者による憲法上の異議申し立てはますます困難になり、他の州でも採用される可能性が高まった。

ルイジアナ州は窒素ガスによる低酸素死刑を認可しており、薬物注射による死刑執行に困難を抱えていた他の州もそれに倣う構えを見せていた。グレイソンの死刑執行は、ある州が一度その方法を承認すれば、広く普及させるための法的障壁が大幅に減少することを示した。他の州はアラバマ州の経験をその方法の有効性の証拠として引用することができ、裁判所は窒素ガスによる低酸素死刑執行件数の増加を、この方法が死刑執行の日常的な慣行に組み込まれた証拠とみなすことができた。

B. 試練としての挑戦

グレイソンの侮辱や身振り――刑務所長への露骨な侮辱、ガスが流れ始めた時の卑猥な身振り――は、単なる無礼やあからさまな違反行為と見なされるかもしれない。しかし、彼の反抗は証言としても解釈されなければならない。それは、これから何が起こるかを知っていた男、弁護士を通してスミスとミラーに何が起こったかを知っていた男、そして尊厳ある死という公式の物語に屈することを拒否した男の証言である。彼の侮辱は、単なる下品な言葉ではなかった。それは、アラバマ州が彼に対して行っていることの正当性を拒否する意思表示だったのだ。

州が彼のマイクをミュートにしたことも、同様に多くのことを物語っていた。アラバマ州は死刑執行のタイミングだけでなく、それに関する声明までも管理していたのだ。グレイソンの最後の言葉――マイクがオフになった後に彼が何を言ったのか――は、読唇術ができる者か、あるいはすぐ近くにいた者以外には知られなかった。州は彼の最後の発言を検閲し、公式の体裁を保ちつつ、死刑執行によって最も直接的な影響を受けた人物の口を封じたのである。

C. 被害者の娘と司法制度に関する矛盾した証言

ジョディ・ヘイリーの「正義の名の下に行われる囚人の処刑を終わらせなければならない」という声明は、死刑の主な正当化理由である、被害者とその家族への利益という主張に異議を唱えた。〈sup〉 81〈/sup〉ヘイリーは、グレイソンの死後、宥和感も満足感も感じなかった。むしろ、暴力の連鎖、制度的欠陥、そして死に対する対応としての死刑の不十分さが続いていることを認めた。

彼の見解は、州の公式見解を複雑なものにした。アイビー知事はグレイソンの処刑をデブリユーに対する正義の実現として提示したが、デブリユーの娘はこの解釈を明確に否定した。これ

は、死刑が被害者のためではなく、あるいは遺族に真の正義や慰めをもたらすためではなく、州の利益――権力の誇示、有権者の懐柔、伝統の永続化――に資するものであることを示唆していた。

X. 結論：3番目の死と正常化メカニズム

キャリー・デール・グレイソンは、窒素投与開始から約15分後の2024年11月21日に死亡した。少なくとも8分間は目に見える身体反応が現れ、苦しそうな呼吸は数分間続き、その後意識を失ったようだった。窒素によって肺から酸素が奪われる中、彼は刑務所長を侮辱し、両手の中指を立て、拘束具に抵抗した。ハム所長は彼の動きの一部を「単なる見せかけ」と表現した。目撃者たちは、それらの動きを不穏で長引いたものだと証言した。被害者の娘は、この処刑制度を「正義を装った囚人殺害」と非難した。

グレイソンの処刑は転換点となった。窒素低酸素症はもはや実験的あるいは斬新な手法ではなくなった。それは日常的なものとなり、繰り返されることで常態化し、判例法や手続き上の障害によって憲法上の重大な監視から守られていた。スミス判決とミラー判決によって確立された法的枠組みは、もはや教義となっていた。3件の処刑で観察された苦痛は、「不随意運動」「予想される反応」「演出された出来事」として正当化されたのである。

しかし、重要な疑問が一つ未解決のまま残っていた。それは、裁判所が認可した内容と、国家が窒素を用いて殺害を行った際に実際に起こったこととの間の隔たりである。この隔たり――法的認可と人間の経験、公式の説明と目撃証言、人道主義の主張と目に見える苦痛との間の隔たり――こそが、窒素低酸素症の歴史を特徴づけている。それは、暴力を規制する法の限界、実験的手法に対する司法の寛容さの不十分さ、そして国家による殺害に対する実際的・倫理的な障害を克服するために絶え間ない革新を必要とする死刑制度を維持することの道徳的代償を明らかにしている。

ガスが広がり始めた時、グレイソンの反抗のジェスチャーとして凍りついた中指は、公式声明では認められない事実を伝えていた。それは、死刑囚が人道的な処刑という茶番劇への参加を拒否する意思表示だった。彼の罵詈雑言は単なる下品な言葉ではなく、証言であり、窒素ガスによる低酸素症の正当性、そしてそれを認可した法的仕組みに対する断固たる拒絶だった。国家はマイクを切って彼を黙らせたが、そのジェスチャーは消えることなく、いかなる公式の美辞麗句も消し去ることのできない、静かなる非難として残された。

第1章では窒素低酸素症の最初の使用を記録し、第2章では明らかな問題にもかかわらずそれが継続された経緯を検証したが、本章ではこの方法が常態化していった過程を明らかにした。すなわち、実験的な暴力がいかにして繰り返されることで官僚的なルーチンへと変貌し、いかにして目に見える苦痛に関する法的判例が定着し、いかにして死刑執行を維持するという国家の利益が、この過程が意識的な苦痛を引き起こすという増え続ける証拠を凌駕するようになったか、ということである。グレイソンの死刑執行は窒素低酸素症による3度目の死刑執行であっ

た。そして、これが最後となることはなかった。その後の死刑執行のたびに、彼が死に際して提起した、残酷さ、尊厳、正義の名の下に我々が何をする覚悟があるのかといった問いは、無視することが難しくなり、正当化することが容易になっていった。

アラバマ州はさらに多くの液体窒素による死刑執行を予定していた。他の州はそれを見守っていた。新たな方法を見つけた殺人機械は、法的あるいは政治的な力によって停止させられるまで稼働し続けた。キャリー・デール・グレイソンが最期の瞬間に見せた反抗的な態度は、彼がそれを理解していたことを示唆していた。彼の中指は、刑務所長や証人室にいた州議会議員だけに向けられたものではなかった。それは私たち全員に向けられたものだった。つまり、人的犠牲の証拠が積み重なるにもかかわらず、新たな殺害方法を実験し続けるシステムに、たとえ受動的であっても加担している私たち全員に向けられたものだったのだ。

最終的なメモ

1. ジョン・Q・ハム氏の記者会見、2024年1月25日。（ハム氏はケネス・スミスの苦痛を「完全に偽装されたもの」であり、「不随意運動」で構成されていると説明した。）また、ジョン・Q・ハム氏の記者会見、2024年9月26日も参照のこと（ハム氏はアラン・ミラーの苦痛を「不随意運動」で構成されていると説明した）。
2. アラバマ州は、窒素に関するあらゆる法的異議申し立てへの対応において、「憶測」という言葉をあまりにも頻繁に用いるため、すべての例を挙げることは不可能である。
3. ジョン・Q・ハムによる記者会見、2024年11月21日。
4. *Grayson v. State*，824 So. 2d 804, 807（アラバマ州刑事控訴裁判所、1999 年）、*控訴棄却、 Ex parte Grayson*，824 So. 2d 844（アラバマ州、2002 年）；犯罪の事実陳述（デブリエックスの殺害、4 人の十代の若者、ボールド ロック 山、喉の上に立つ行為、切断、180 か所の刺し傷、切断された指、および顔面骨折に関する検視官の証言）は、この通知の 807 ～ 808 ページに記載されています。
5. 同上
6. 同上
7. 同書、807-08頁。
8. 同上、808頁。
9. 同上
10. 同上
11. 同上。法医学病理医の証言、裁判記録、808頁。
12. *Grayson v. State*，824 So. 2d 804, 808（アラバマ州刑事控訴裁判所、1999年）（検視官は、被害者の顔面骨折がひどく、脊椎のX線写真で身元が判明したと証言した）。
13. 同上（容疑者らは、うち1人が友人に切断された指を見せ、「人を殺した」と自慢したことから特定された）。

14. ケイ・アイビーによるキャリー・デール・グレイソンの死刑執行に関する声明、アラバマ州知事室、2024年11月21日。
15. *Grayson v. State* , 824 So. 2d 804（アラバマ州刑事控訴裁判所、1999年）（グレイソンは1996年に有罪判決を受けた）；*参照 Grayson v. Allen* , 491 F.3d 1318, 1322（11th Cir. 2007）（4人の被告は別々に裁判を受けたことを指摘）。
16. Grayson *v. Allen* , 491 F.3d 1318, 1326（11th Cir. 2007）、 499 F. Supp. 2d 1228（M.D. Ala. 2007）*を肯定。*
17. 同上、1326頁（検察官はグレイソンを「事件全体を前進させた」首謀者と表現した）。
18. 同上（共同被告人の裁判中、同じ検察官は、グレイソンがギャングのリーダーだと主張するのは「ばかげている」「幻想的だ」と主張した。唯一の証拠は「彼が車を運転していた」ということだけだった。）
19. *Grayson v. State* , 824 So. 2d 804, 823-25（アラバマ州刑事控訴裁判所、1999年）（共同被告人による裁判記録の請求を却下した第一審裁判所の決定を支持）。
20. *グレイソン対アラバマ州矯正局長*、執行停止申立書、証拠A（情状酌量の証拠）、2024年10月。
21. *ローパー対シモンズ事件*、543 US 551（2005）。第8修正条項および第14修正条項は、犯罪時に18歳未満の犯罪者の死刑執行を禁止していると判決を下した、画期的な最高裁判所の判決。
22. 同書、569-70頁。
23. 死刑情報センター、「アラバマ州における死刑執行」データベース（最終更新日：2024年11月）、 https://deathpenaltyinfo.org/state-and-federal-info/state-by-state/alabama 。
24. 同上
25. アラバマ州、デラウェア州、オクラホマ州、テキサス州、ユタ州、バージニア州が、請願者を支持するアミカス・キュリエとして提出した覚書、 *Roper v. Simmons* 、543 U.S. 551（2005）（No. 03-633）（アラバマ州は、グレイソンの死刑執行を認める一方で、州が「ヴィッキーの死と切断に関して明らかに同等かそれ以上に有罪である」と述べる共犯者の死刑執行を認めないのは「不合理」であると主張している）。
26. アラバマ州矯正局、窒素性低酸素症患者の有権者登録（2018年）。
27. 同上
28. アラバマ州司法長官事務所、仮差止命令の申し立てに対する回答、 *Grayson v. Hamm* 、No. 2:24-cv-00449（MD Ala. 2024年11月）。
29. *Grayson v. Hamm* 、訴状15-20、事件番号2:24-cv-00449（アラバマ州地方裁判所、2024年6月）。
30. スティーブン・クーパー、「メンゲレのような論理がアラバマ州のガスによる男性殺害計画の根底にある」、*モンゴメリー・アドバタイザー*、2024年1月25日、https://www.montgomeryadvertiser.com/story/opinion/contributors/2024/01/25/mengele-like-logic-underpins-alabamas-plan-to-gas-a-man-to-death/72356085007。

31. *Grayson 対 Hamm 事件*、訴状番号 2:24-cv-00449（アラバマ州地方裁判所、2024 年 6 月)。
32. 同上、25〜30頁（処刑前の健康診断の欠如）。
33. 同上、31〜35頁（鎮静剤不使用）。
34. 同上、36〜40頁（マスクの調整不良）。
35. 同上、41〜45頁（意識のモニタリングが不十分）。
36. ブライアン・マクアラリー博士、専門家意見書8、*グレイソン対ハム事件*、事件番号24-cv-00449（アラバマ州地方裁判所、2024年10月）。
37. 同上、12頁。
38. *Glossip c. Gross* , 576 U.S. 863, 877 (2015); *Bucklew v. Precythe* , 139 S. Ct. 1112, 1126 (2019).
39. *Grayson v. Hamm* 、仮差止命令の申し立て、代替案の提案、15-18 (MD Ala. 2024年10月）(鎮静剤と高圧酸素室を用いた修正窒素プロトコル、またはケタミンとフェンタニルを用いた致死注射を提案)。
40. アラバマ州司法長官事務所、対応報告書、8ページ、 *Grayson対Hamm事件*（アラバマ州メリーランド州、2024年11月）。
41. キム・チャンドラー、「連邦控訴裁判所はアラバマ州での窒素死刑執行を阻止しない」、 *AP通信*、2024年11月18日、https://apnews.com/article/alabama-nitrogen-execution-7908c96ad7a73b778164b76e92ad0801。
42. *Grayson v. Hamm* 、事件番号2:24-cv-00449-RAH、意見および命令覚書（アラバマ州地方裁判所、2024年11月6日）。
43. 同上、3〜5頁（試用期間審理の要約）。
44. 同上、12頁（スミスとミラーの処刑に関する証拠は「矛盾しており、一貫性がない」と認めている）。
45. 同上、13（最終的なプロトコルは「成功し、10分以内に死亡、さらに短時間で意識喪失に至った」）。
46. 同上、15頁（「彼らの証拠と告発は憶測に過ぎず、極めてありそうもない出来事の憶測の羅列であり、せいぜい科学的な論争に過ぎない。彼らは、窒素低酸素プロトコルが許容できないほどの痛みのリスクを生み出すこと、ましてやさらなる痛みを生み出すことを証明できていない」）。
47. 同上、14（マッカラリー博士の証言によれば、このプロトコルは「心理的苦痛」をもたらすと認めつつも、「処刑方法に関係なく存在する苦痛」としてそれを否定している）。
48. *Grayson v. Hamm* 、米国___ (2024) （執行停止の拒否）；最高裁判所命令、2024年11月21日、 https://www.supremecourt.gov 。
49. *Grayson v. Hamm 事件*、No. 24-___ (米国、2024 年 11 月 20 日)における上告許可令状および執行停止の申請。
50. アラバマ州矯正局、キャリー・デール・グレイソンの死刑執行記録、2024年11月21日。
51. 同上

52. エリック・オルティスとアビゲイル・ブルックス、「アラバマ州でキャリー・デール・グレイソンに死刑判決、窒素ガス吸入による3度目の処刑」、 *NBC*ニュース、2024年11月21日、https://www.nbcnews.com/news/us-news/alabama-execute-carey-dale-grayson-nitrogen-gas-rcna180893。
53. 目撃者報告、アラバマ州矯正局、2024年11月21日。
54. 同上
55. キム・チャンドラー、「アラバマ州、ヒッチハイカー殺害の罪で全米3例目となる窒素ガスによる死刑執行」、 *AP通信*、2024年11月22日、https://apnews.com/article/death-penalty-nitrogen-execution-alabama-09450359e223a9d38a5fb24e87fcfb45。
56. 同上
57. プール証人の報告書、*上記*注50参照。
58. チャンドラー、*前掲*注55。
59. ジョン・Q・ハム、記者会見、ホルマン矯正センター、2024年11月21日（ *AP通信より引用*）。
60. プール証人の報告書、*上記*注50参照。
61. チャンドラー、*前掲*注55。
62. 同上
63. 同上
64. プール証人の報告書、*上記*注50参照。
65. 同上
66. チャンドラー、*前掲*注55。
67. アラバマ州矯正局、死亡時刻公式証明書、2024年11月21日。
68. ジョン・Q・ハム、記者会見、2024年11月21日。
69. 同上
70. 同上
71. ジョディ・ヘイリーによるメディアへの声明、2024年11月21日（複数のニュースソースで引用）。
72. 同上
73. 同上
74. 同上
75. *Grayson v. Hamm* 、意見書13ページ（アラバマ州地方裁判所、2024年11月6日）。
76. 国連人権高等弁務官事務所、「米国：専門家がアラバマ州での窒素ガスによる死刑執行の緊急禁止を要請」、2024年11月20日、https://www.ohchr.org/en/press-releases/2024/11/united-states-experts-call-urgent-ban-executions-nitrogen-gas-alabama。
77. 同上
78. 同上
79. アラバマ州矯正局、窒素性低酸素症選挙統計（2024年）。
80. オクラホマ州法、第22編、第1014条。ミシシッピ州法典、 -1951年第99条。ルイジアナ州改正法、第15:569.1条（2024年）。

81. ジョディ・ヘイリーによる声明、2024年11月21日。
82. ジョン・Q・ハムによる記者会見（2024年11月21日）、目撃者による報告（2024年11月21日）。

3.1：アラバマ州におけるR・オースティン・ハファカー・ジュニア判事と窒素性低酸素症の司法解釈

アラバマ州連邦地方裁判所判事R・オースティン・ハファカー・ジュニアは、窒素ガスによる低酸素死刑をアラバマ州における死刑執行方法として合法化する上で重要な役割を果たした。現代の死刑執行制度において、この方法の実施、継続、そして常態化にこれほど決定的な影響を与えた連邦判事は他にいない。彼の判決、中でも2024年1月にケネス・ユージン・スミスを窒素ガスによる低酸素死刑で処刑することを承認した判決は、個々の事件を解決する以上の大きな影響力を持った。彼の判決は、この新たな方法がアラバマ州で適用される憲法上の枠組みを形成したのである。ハファカー判事は、死刑囚の警告の仮説的な性質、州の安全対策の信頼性、そして精神的苦痛が憲法上の侵害として不十分であることを一貫して強調する法的論理によって、窒素ガスによる低酸素死刑の継続を可能にするだけでなく、その禁止を極めて困難にする法的環境を作り出すことに貢献した。

彼の判決の中で最も重要なものは、スミス事件に関する判決である。この判決は、連邦裁判所がアラバマ州による世界初の窒素注入による死刑執行を許可するかどうかを初めて決定した。スミスの弁護士は数多くの異議を唱えた。彼らは、マスクがテストされていないこと、窒素システムが人間に使用されたことがないこと、酸素不足が極度の満腹感と恐怖を引き起こすこと、そして機器の漏洩や故障が長期間にわたる耐え難い意識状態につながる可能性があることを主張した。ハファカーはこれらの主張をきっぱりと拒否し、死刑囚の証拠を「憶測」および「科学的論争」と呼んだ。[1]　彼の見解では、スミスは、この方法が激しい苦痛をもたらす重大なリスクがあることを証明していなかった。*ベイズ対リース事件*と*グロシップ対グロス*事件において死刑囚に課せられた立証責任は、単なる仮説上の危険性以上のものを要求するものであり、アラバマ州が主張する、意識喪失が数秒以内に起こり、その後数分以内に死亡したという保証は、信憑性があり十分であると彼は強調した。[2]

この判決は、窒素低酸素症による初の死刑執行の司法上の始まりとなった。この判決がなければ、アラバマ州の執行手順は理論上のものにとどまっていたであろう。この判決のおかげで、州は実行に移すことができ、その結果は誰の目にも明らかになった。2024年1月のスミスの死刑執行中、目撃者は激しい痙攣、震え、嘔吐、そして長時間にわたる呼吸困難を報告した。これらは、州が約束した迅速で平和な死とは全く相容れない行動であった。[3]　しかし、受刑者たちがこれらの証言を、この方法が憲法違反の苦痛を与えた証拠として挙げたとき、ハファカー判事はそれらをきっぱりと却下した。アラン・ミラーやキャリー・デール・グレイソンに関するものを含むその後の判決で、彼はスミスの死刑執行に関する証言を「矛盾しており、一貫性がない」と判断した。[4]　彼は、明確な証拠がない限り、窒素低酸素症は深刻な苦痛を与えなかったと結論付けた。その代わりに、彼は国家が「10分以内に死に至る」という根本的な目的を達成したため、処刑は成功だったと考えた。意識喪失は恐らくもっと早く起こったであろう。[5]

この法的立場――曖昧さを国家ではなく囚人への攻撃とみなす――は、窒素低酸素症に関するハファカーの法理の決定的な特徴となった。

アラン・ユージン・ミラーの事例は、これらの原則の実際的な適用例を示している。2022年、窒素低酸素症が使用される前に、ハファカー判事はミラーに対し、致死注射による死刑執行を阻止する仮差止命令を出した。この決定は窒素そのものに関するものではなく、ミラーが死刑執行方法として窒素低酸素症を選択する書類を提出していたかどうかに関するものであった。ハファカー判事は、ミラーがこの書類を提出した「信頼できる証拠」を有しており、州がそれを「紛失した可能性が高い」と判断した。重要なことに、同判事は、死刑囚の「究極の尊厳」には死刑執行方法を選択する権利が含まれると裁定した。[6] ミラーが2024年に連邦裁判所に戻ったとき（死刑執行が失敗した後）、今度は合衆国憲法修正第8条に基づき窒素低酸素症の手順そのものに異議を唱えたが、裁判は行われなかった。2024年8月、予定されていた保護観察審理の数週間前に、ミラーと州は秘密裏に和解し、訴訟は却下された。マーシャル司法長官は、この和解を「アラバマ州の窒素低酸素死刑執行システムは安全かつ人道的である」ことの証明として称賛した。裁判所の判決がなかったため、ミラーの疑問、すなわちスミスの死刑執行が執行手順における憲法上の不備を明らかにしたかどうかという疑問は未解決のままとなった。州の保証が再び重くのしかかり、ミラーは2024年9月に窒素低酸素死刑によって処刑された。目撃者は、彼もまた苦しみ、呼吸困難に陥っていたと報告したが、これらの観察結果はハファカーが用いた方法を変更することはなかった。[7]

キャリー・デール・グレイソンが起こした訴訟は、ハファカーの法的手法をさらに明確に示している。グレイソンの弁護士は、窒素低酸素プロトコルは、事前の健康診断や鎮静剤投与を伴わず、不十分なリスクのある未検証のマスクに依存し、執行中に効果的な監視が行われなかったため、残酷かつ異常な行為であると主張した。 2024年10月に開かれた公聴会で、麻酔科医のブライアン・マッカリーは、グレイソンが意識のある状態で酸素欠乏状態にある間は「激しい苦痛」に苛まれるだろうと証言し、陰圧性脳浮腫が発生する可能性があり、窒素投与を早期に中止すれば永久的な脳損傷のリスクがあると警告した。[8] ハファカーはこの証言のほぼ全てを退け、マッカリーの予測は「憶測」に過ぎないと主張し、スミスの主張に対する以前の評価を繰り返した。また、陰圧性浮腫に関する医師の結論は「外挿」と「極めて疑わしい伝聞や目撃証言から導き出された推論」に基づいていると指摘した。[9]

グレイソンの意見の中で恐らく最も重要な部分として、ハファカーは痛みそのものの問題を取り上げた。彼は、たとえ痛みがあったとしても、それは憲法上関係のないことを強調し、マクアラリーが、処刑方法に関係なく存在する「心理的な痛み」しか引き起こさないと認めていたことを指摘した。[10] 判例を引用して、彼は「心理的な痛みや精神的苦痛は、それ自体では、合衆国憲法修正第8条に基づく行為を正当化することはできない」と主張した。[11] この論理は、ハファカーの法哲学を明確にした。すなわち、死刑囚が具体的な証拠によって激しい肉体的苦痛の重大なリスクを証明できない限り、処刑は禁止されない。恐怖、パニック、息切れ、精神的苦痛は、たとえ極度であっても、憲法上関係ない。矛盾する目撃証言は、憲法違反の危害を証明するものではなく、単に不明瞭さを示すにすぎない。

ハファカー判事は、宗教的慣習に関する申し立てに対しても同様に厳格な懐疑主義を適用した。数人の受刑者は、顔にぴったりとフィットする窒素マスクが声に出して祈っている間に緩み、死刑執行を妨害したり長引かせたりする可能性があると主張した。ハファカー判事はこれらの主張を退け、祈りによってマスクが変化する、あるいは変化によって憲法違反の危害が生じるという証拠は受刑者らが提示していないと判断した。[12] 肉体的苦痛の申し立てと同様に、仮説上のリスクは介入を正当化するには不十分であった。

これらの事例では、一貫した法的論理が浮かび上がってくる。ハファカー判事は、アラバマ州の窒素低酸素プロトコルは革新的で、人体実験が行われておらず、しばしば明らかな苦痛を伴うにもかかわらず、信頼できるものとみなした。死刑囚は、この方法が深刻な肉体的苦痛を引き起こすことを、ほぼ科学的な精度で証明する必要があり、専門家の予測、臨床経験、または観察可能な苦痛は、反証されない限り推測として却下された。死刑執行の目撃証言は、矛盾や曖昧さがあれば信頼できないとみなされ、曖昧さは国家ではなく死刑囚に不利に解釈された。心理的苦痛は、どれほど激しいものであっても、憲法上無関係であった。最後に、宗教的慣習への仮説的な侵害は、死刑執行を阻止するには不十分であった。

こうした状況下で、スミスの処刑は、処刑方法の危険性を証明するものではなく、その有効性を証明するものとみなされた。彼の死後、懸念すべき観察結果があったにもかかわらず、ハファカーをはじめとする法廷は、窒素吸入による低酸素症を疑問視するのではなく、有効であるとみなした。このアプローチにより、その後に行われた窒素吸入による処刑（ミラー、グレイソンなど）はすべて、彼が確立した教義の枠組みの中で執行されることになった。

ハファカー判事の判決の歴史的意義は特筆に値する。アメリカの死刑執行方法の歴史において、新しい手法は一般的に厳格な司法審査の対象となる。電気椅子、毒ガス、薬物注射はいずれも、その手順に関する証拠の不足と極度の苦痛のリスクについて、裁判所から強い懸念を抱かれてきた。しかし、ハファカー判事のアプローチは、執行前の証拠が最小限であっても、全く新しい方法の使用を認め、不確実性は州の行動を遅らせたり阻止したりするには不十分であると解釈した。スミスの事件では、連邦裁判所はアラバマ州の死刑執行における革新の試みを妨害することもできた。しかし、ハファカー判事は警告を憶測に過ぎないと一蹴し、州の安全対策を肯定し、道を切り開いた。それ以来、液体窒素による死刑執行はすべて、彼が確立した法的理念に従って行われ、この方法の使用を今なお形作る先例となっている。

結論として、R・オースティン・ハファカー・ジュニア判事は、窒素低酸素症事件だけに限定して行動したわけではない。スミス事件とグレイソン事件における判決を通して、彼はアラバマ州でこの方法の適用を可能にする法的枠組みを構築し、他の地域における先例となった。州の安全対策を体系的に強化し、仮説的または心理的な危害を退け、激しい肉体的苦痛のほぼ反論の余地のない証拠を要求することで、ハファカー判事はこの方法の憲法上の限界を定めた。彼の判決は、司法解釈が事件の結果だけでなく、米国にとって全く新しい処刑方法の軌跡をも決定づけ得ることを示している。ハファカー判事によって承認されたケネス・スミスの処刑は、今なお極めて重要な局面である。連邦司法府が介入できたにもかかわらず介入しなかったこと

で、物議を醸し、未証明の処刑方法が承認され、その後も彼の権限の下で繰り返されてきたのである。

最終的なメモ

1. *Smith v. Hamm* 、No. 2:23-cv-00656-RAH、2024 WL 116303、p. 43 (MD Ala. 2024年1月10日) (Huffaker判事) (Smithの主張を「憶測」および「科学的論争」と表現)。
2. 同上、35-44頁（裁判所は、アラバマ州が主張する急速な意識喪失と死亡に関する保証を認めている）。
3. Nicholas Bogel-Burroughs と Abbie VanSickle、「アラバマ州、米国初の窒素吸入による死刑執行」、*ニューヨーク・タイムズ*、 2024 年 1 月 25 日、 https://www.nytimes.com/2024/01/26/us/alabama-nitrogen-execution.html ； アラバマ州アメリカ自由人権協会、「ケネス・スミス、窒素低酸素症により処刑」、2024 年 1 月 26 日、 https://www.aclualabama.org/en/news/kenneth-smith-executed-nitrogen-hypoxia（スミスが喘ぎ、喘鳴し、震え、痙攣した様子を描写)。
4. *Grayson v. Hamm* 、No. 2:24-cv-00376-RAH、意見書、__（アラバマ州地方裁判所、2024年11月6日） (Huffaker判事) （目撃証言を「矛盾しており、一貫性がない」と表現）。
5. 同上（裁判所は、死が10分以内に発生したため、処刑は「成功した」と結論付けた）。
6. *ミラー対ハム事件*、事件番号2:22-cv-00510、仮差止命令（アラバマ州地方裁判所、2022年9月19日） (ハファカー判事) （窒素低酸素症を選択するというミラーの「最後の尊厳」を保護する）。
7. *ミラー対マーシャル事件*、事件番号2:24-cv-00197-RAH（アラバマ州メリーランド州、2024年3月9日提訴）、2024年8月6日に却下（第8修正条項違反の申し立てに関する判決前に和解）；アラバマ州司法長官事務所、プレスリリース：「アラバマ州司法長官マーシャル、窒素低酸素死刑執行方法の合憲性を擁護することに成功」（2024年8月7日）；目撃者報告、アラン・ミラーの死刑執行、ホルマン矯正施設、2024年9月26日（ミラーは2分間震え、約6分間断続的に喘いだと報告されている）。
8. ブライアン・マッカリー博士、専門家証言、8〜12、*グレイソン対ハム事件*、No. 2:24-cv-00449（アラバマ州地方裁判所、2024年10月）（グレイソンは意識がある間「苦痛」を経験すると証言）。
9. *Grayson v. Hamm* 、意見書、45（アラバマ州地方裁判所、2024年11月6日） (ハファカー判事) （浮腫に関する警告は「非常に疑わしい価値の目撃証言」からの根拠のない外挿であると述べている）。
10. 同上、46頁（発見手順は「心理的苦痛」のみを引き起こした。これは、実行方法に関係なく存在する種類の苦痛である）。
11. 同上、46頁（「心理的苦痛または精神的苦悩は、それ自体では合衆国憲法修正第8条に基づく主張を裏付けることはできない」という判例を引用）。

12. *Smith v. Hamm* 、No. 2:23-cv-00656-RAH、2024 WL 116303 (MD Ala. 2024年1月10日) (Huffaker判事) (RLUIPAに基づく請求を却下し、ADOCが「スミスが処刑中に大声で祈ってもマスクが落ちないという実質的な証拠を提出した」と結論付けた)；また、 *Smith v. Commissioner, Alabama Department of Corrections*、 No. 24-10095、未公表判決、p. 7 (11th Cir. 2024年1月24日) (RLUIPAに基づく地方裁判所の判決の要約) も参照；また、 *Grayson v. Hamm* 、pp. 47-48 (「マスクが落ちて処刑が長引く可能性がある…」) も参照。

4.0：デメトリウス・フレイザーの処刑：州間拘留、政府の権限、そして窒素吸入による4人目の死

I. 2025年の最初の実施

2025年2月までに、窒素低酸素症は物議を醸す実験から標準的な処刑方法へと移行した。2024年1月のケネス・スミスの処刑がこの方法の先駆けとなり、9月のアラン・ミラーの死は、彼が明らかに苦痛を感じていたにもかかわらず、この方法が継続されることを確固たるものにした。11月のキャリー・グレイソンの処刑は、彼の抵抗と、ハム委員長が彼の明らかな苦痛を「全くの茶番」と一蹴したことで、この方法の合法性を確固たるものにした。こうして1年足らずの間に3件の処刑が行われたことで、窒素低酸素症を司法の監視から完全に排除するのに十分な前例が作られたのである。

2025年2月6日に行われたデメトリウス・テランス・フレイジャーの処刑は、いくつかの点で初めての出来事となった。その年最初の液体窒素による処刑であり、2か月半前にグレイソンが死亡して以来アラバマ州で初めての処刑であり、そして最も重要なことに、他州で拘留されていた人物に対する初の液体窒素による処刑であった。〈sup〉 [2] 〈/sup〉 フレイジャーはミシガン州で逮捕され、アラバマ州で裁判を受け有罪判決を受けたが、そのほとんどの時間をミシガン州の拘置所で過ごしていた。〈sup〉 [3]〈/sup〉この州をまたぐ側面は、数十年間未解決のままだった憲法上の問題を提起した。1846年に死刑を廃止した州の長であるミシガン州知事は、フレイジャーを処刑のためにアラバマ州に移送することを承認する権限を持っていたのだろうか。〈sup〉 [4]〈/sup〉

2011年、アラバマ州のロバート・ベントレー知事とミシガン州のリック・スナイダー知事は、1993年に殺人、性的暴行、強盗の罪で4つの終身刑に服していたフレイジャーを、1991年のポーリン・ブラウン殺害事件の裁判のためにアラバマ州に移送する州間移送協定に署名した。〈sup〉 [5]〈/sup〉この協定は、移送自体が不適切であり、フレイジャーはアラバマ州に戻されるべきではなかったと主張する法的異議申し立てにつながった。〈sup〉 [6]〈/sup〉

フレイジャーの身柄拘束をめぐる法的・政治的論争は、州の主権、死刑廃止の原則、そして死刑に関する州間協力の仕組みとの間の緊張関係を浮き彫りにした。彼の母親がミシガン州知事グレッチェン・ホイットマーに公然と訴え、死刑執行の移送を拒否して息子の命を救ってほしいと懇願したことは、死刑法の暗部を全国的に知らしめた。〈sup〉7〈/sup〉この論争は、知事の権限、政治的勇気、そして死刑執行への参加に反対する州の権限の限界について、根本的な疑問を投げかけた。〈sup〉8〈/sup〉

本章では、フレイジャーが死刑執行室に至るまでの2つの法的経路を検証する。1つは、彼の弁護の中心となった2011年のスナイダー・ベントレー移送協定、もう1つは、死刑囚の州間拘留を

規定する枠組み、ウィットマー知事に介入を説得しようとしたものの失敗に終わった運動、そして死刑執行そのもの、すなわち、繰り返しの執行によってもたらされる官僚的な効率性をもって行われた窒素低酸素症による4回目の執行である。〈sup〉[9]〈/sup〉第1章から第3章では窒素低酸素症の導入と常態化について詳述したが、本章では、この方法の確立が、州間の法的複雑さが克服不可能な障害を生み出した可能性のある場合でも、その使用を可能にした経緯を明らかにする。〈sup〉[10]〈/sup〉

II. 背景：犯罪、刑罰、および州間拘留の問題

A. 幼少期と犯罪歴

10月29日、ミシガン州で生まれた彼は、経歴書に記されているように、困難な社会環境と家庭環境で育った。若くして高校を中退し、未成年ながら、武器の不法所持、窃盗、保護観察違反などの罪で起訴された。ミシガン州の少年拘置所であるWJマクシー少年訓練学校に収容され、そこで高校卒業資格（GED）を取得した。

B. ミシガン州での有罪判決

フレイジャーの成人後の犯罪歴は2つの州にまたがっており、それが彼の死刑執行への道を決定づける管轄上の複雑さを生み出した。ミシガン州では、1993年に14歳のクリスタル・ケンドリック殺害、性的暴行、強盗の罪で有罪判決を受け、仮釈放なしの終身刑3回を言い渡された。〈sup〉[14]〈/sup〉1846年に死刑を廃止したミシガン州には、犯罪の重大性に関わらず、死刑を執行する権限がなかった。〈sup〉[15]〈/sup〉

C. アラバマ殺人事件

フレイジャーはミシガン州で犯罪を犯す傍ら、アラバマ州でも殺人を犯した。1991年11月、彼はバーミングハムにある41歳のポーリン・ブラウンのアパートに侵入した。武装した彼は銃を突きつけてブラウンに性的暴行を加え、財布から約80ドルを盗み、その後彼女を射殺した。〈sup〉[16]〈/sup〉彼は後にミシガン州で拘留中にブラウン殺害を自白した。〈sup〉[17]〈/sup〉アラバマ州では、陪審員が彼を加重殺人（強盗と性的暴行中に犯した殺人）で有罪とし、死刑を勧告した。〈sup〉[18]〈/sup〉裁判官はこの勧告を受け入れ、死刑を宣告した。〈sup〉[19]〈/sup〉

D. 州をまたぐ親権問題

次の質問：アラバマ州は、他州で終身刑を宣告された人物をどのようにして処刑できるのか？

解決策は、州間囚人移送協定という形で実現した。州間逮捕協定やその他の州間協定によって規定されるこれらの協定は、一般的に、囚人が複数の管轄区域で裁判を受けたり判決を受けたりできるように、囚人の一時的な移送を円滑にするものである。〈sup〉 21〈/sup〉しかし、フレイジャーの状況は特殊だった。19世紀半ばから奴隷制度廃止州であるミシガン州が、死刑を執行する州に囚人を移送したのは、まさに彼の処刑のためだった。 〈sup〉22〈/sup〉

E. 2011年のスナイダー・ベントレー移籍契約

2011年、共和党のリック・スナイダー（ミシガン州）知事とロバート・ベントレー（アラバマ州）知事は、フレイジャーをアラバマ州に移送する協定に署名した。両知事が署名した文書によると、この協定は、フレイジャーをミシガン州の刑務所からアラバマ州アトモアにあるウィリアム・C・ホルマン矯正施設の死刑囚監房に移送することを承認するものであった。

この移送の法的根拠は、複数の管轄区域にまたがる犯罪で有罪判決を受けた者の拘留を各国が調整できるようにする国家間協力メカニズムに基づいていた。〈sup〉 24 〈/sup〉 しかし、批判者たちはこの移送が深刻な疑問を提起すると主張した。

1. **管轄権の妥当性**：州が死刑制度を廃止した場合、州間移送協定は死刑執行を円滑に進めるために適切に利用できるのか？
2. **ミシガン州の死刑廃止への取り組み**：ミシガン州では175年もの間死刑が廃止されてきた歴史があるが、知事は死刑執行のために囚人を移送する道徳的かつ法的な権限を持っていたのだろうか？
3. **手続き上の遵守**：移送が拘禁に関する国家間協定およびその他の関連法規の要件に準拠していることの確認。
4. **憲法上の影響**：終身刑に服していた囚人を、死刑執行予定の別の州に移送することは、適正手続きを受ける権利、あるいは法の下の平等の原則に違反したか？ 25

当時、この移送は世間の大きな反響を呼ぶことなく行われた。フレイジャーはアラバマ州の死刑囚監房に移送され、州裁判所と連邦裁判所による控訴審理の間、その後14年間そこに留まった。26

F. 譲渡契約への異議申し立て

フレイジャーの2025年の死刑執行日が近づくにつれ、彼の弁護団は2011年の移送協定に異議を唱える連邦訴訟を起こした。アラバマ州当局者を標的としたこの訴訟は、州をまたいだ移送は違法であり、フレイジャーはアラバマ州に送られるべきではなかったと主張した。〈sup〉 27〈/sup〉

法的論点には以下が含まれる。

- スナイダー知事には、死刑執行のためにミシガン州から他の州へ囚人を引き渡す権限はなかった。
- この移送はミシガン州の長年の死刑反対の公共政策に違反している、

- この協定は州間囚人移送に関する法的要件を満たしておらず、
- この正義の根本原則は、フレイジャーがアラバマ州で言い渡された刑を執行する前に、ミシガン州での刑期を終えることを要求した。[28]

この控訴は、アラバマ州によるフレイジャーの拘留の原則が法的に欠陥があると主張し、フレイジャーの処刑を阻止するための最後の試みの1つであった。もし控訴が成功していれば、フレイジャーは終身刑に服するためにミシガン州に戻らなければならず、アラバマ州による処刑は阻止されたはずだった。[29]

G. 州間移転に関する法的枠組み

アメリカ合衆国では、州間の囚人移送はいくつかの法的仕組みに基づいて行われる。

1. **州間逮捕協定**（IAD）：他の管轄区域で起訴される囚人を一時的に移送することを円滑にするための州間の協定。
2. **成人犯罪者の監督に関する州間協定**：仮釈放者および保護観察対象者の州間移送を規制する。
3. **個別の二国間協定**：異なる州の知事間で締結される、特定の親権に関する取り決めについての行政協定。

スナイダー知事とベントレー知事の合意は、3番目のカテゴリー、すなわち2人の知事間の二国間行政協定に分類されるものと思われる。このような協定は、州間協定よりも正式な立法承認を必要としないのが一般的だが、それでも憲法上の要件と州法によって課される制限を尊重しなければならない。

法律専門家は、刑事司法における州間協力は一般的であるものの、死刑を廃止した州で死刑執行を容易にするためにそのような仕組みを利用することは、前例のない疑問を提起すると指摘している。1846年のミシガン州の死刑廃止は、州が人の命を奪う役割に関する根本的な政治的決定を反映したものであった。批判者たちは、スナイダー知事がフレイジャーの移送に同意したことでこの政策が損なわれ、ミシガン州は2世紀近く前に州民が拒否した死刑執行に加担したと主張した。

III. 法的争点：*フレイザー対ハム事件*と処刑方法をめぐる論争

A. 法的請求の性質

デメトリウス・テレンス・フレイザーは、窒素低酸素症による死刑執行が迫っていることに異議を唱え、アラバマ州中央地方裁判所（事件番号2:24-cv-00732）に連邦民事訴訟法第1983条に基づく訴訟を起こした。訴訟では、アラバマ州矯正局長ジョン・ハムなどが被告として挙げられていた。訴訟の中心的な主張は、州の死刑執行方法である窒素方式は、激しい苦痛と心理的恐怖を引き起こす重大なリスクがあり、したがって合衆国憲法修正第8条に規定されている「残酷で異常な刑罰」の禁止に違反するというものであった。

より具体的に言うと、フレイザーは相互に関連する2つの告発を行った。

1. 第一審被告は、この手順は「意識のある窒息」のリスクを生み出すと述べた。つまり、被拘禁者はマスク内の酸素が窒素に置き換えられる間も意識があり、少なくとも短時間、パニック、息切れ、苦痛、恐怖を経験することになるということである。[33]
2. 第二の訴因は、この処刑手順には必要な安全対策（マスクの装着確認、事前鎮静、医師の監督、処刑前の検査など）が欠けており、低酸素症による脳損傷や不必要な苦痛のリスクをもたらしたと主張した。[34]

事実に関する主張には、アラバマ州で行われた最初の3件の窒素吸入による死刑執行に関する記述が含まれており、証言では震え、喘ぎ、苦しげな断続的な呼吸が描写されていた。フレイジャーの弁護士は、「窒素低酸素死刑執行に関するデータは少ない（3件）が、明確な結果を示している…アラバマ州の方法は…必然的に意識のある窒息を引き起こす」と主張した。〈sup〉[35]〈/sup〉

B. 法的規則と立証責任

一般的に死刑執行方法に対する異議申し立てと同様に、法的基準では、有罪判決を受けた者は単に苦痛を受ける可能性を示すだけでは不十分であることを証明しなければならない。彼らは「重大な危害を受ける相当なリスク」があること、あるいはその方法が、あらゆる死刑執行に内在する苦痛に加えて、激しい苦痛の「追加的なリスク」を伴うことを証明しなければならない。〈sup〉[36]〈/sup〉判例、特にBaze v. Rees（2008）によれば、有罪判決を受けた者は、激しい苦痛のリスクを大幅に軽減する、実行可能で容易に適用できる代替方法が存在することを証明しなければならない。〈*sup*〉[37]〈/sup〉

フレイジャーの場合、死刑執行日が迫っていたため、彼は執行方法を阻止または変更するための差止命令を求めた。その結果、裁判所は差止命令を認める基準、すなわち、本案における勝訴の見込み、回復不能な損害、そして衡平と公共の利益のバランスを適用した。〈sup〉[38]〈/sup〉これは、特に死刑制度においては大きな障害となる。なぜなら、裁判所は説得力のある証拠がない限り、州の死刑執行スケジュールに介入することをためらうからである。〈sup〉39〈/sup〉

C. フレイザーの具体的な法的論拠

1. **意識のある窒息と精神的苦痛**：フレイザーは、窒素による低酸素症は死刑囚の意識を保ったまま酸素を奪い、パニック、息切れ、恐怖、喘ぎを引き起こし、従来の処刑に比べて「さらなる苦痛」をもたらす可能性があると主張した。彼の著作では、過去3回の処刑でこのリスクと一致する兆候（震え、喘ぎ、意識喪失の遅延）が見られたことが強調されている。〈sup〉[40]〈/sup〉
2. **プロトコルの欠点**：彼の弁護団は、欠点として以下の点を挙げた。致死注射の場合とは異なり、事前の鎮静は不要である。窒素投与前に意識不明であることを確認するための具体的な医学的基準がない。マスクの装着状態や不具合について独立した検査が行われていない。人体への影響に関するデータが乏しい。提案された代替案には、事前の鎮静（例えば、ミダゾラム500mg）を伴う修正窒素低酸素プロトコル、あるいはケタミン／フェンタニルの逐次投与が含まれていた。〈sup〉[41]〈/sup〉

3. **実行可能な代替手段と国家の責任**：フレイザーは、特にその方法が新しく、比較的未検証である場合、国家にはより安全な代替手段または修正を採用する義務があると主張した。彼は、かけがえのない命がかかっている場合、信頼できる処刑方法は実験的または不透明な手順に頼ることはできないと主張した。〈sup〉 42〈/sup〉

D. 州の対応と手続き上の決定

アラバマ州は次のように反論した。

- 意識的な苦痛のリスクは推測の域を出ず、提示された証拠によって証明されていない。43
- 窒素低酸素プロトコルは法的に認可されており、法律で承認されており、意識的な苦痛の確立された証拠なしに使用されています44および
- 裁判所は、重度の苦痛の明確な証拠がない場合、死刑執行手順を策定する際に、州の経験を参考にすべきである。45

2025年1月31日付の判決で、エミリー・C・マークス連邦地方裁判所判事は、フレイジャーの差し止め命令の申し立てを却下した。裁判所は、フレイジャーが、当該処刑方法が憲法修正第8条に違反するほどの深刻な精神的苦痛を引き起こす重大なリスクを立証していないと判断した。〈sup〉 46〈/sup〉裁判所は、「窒素吸入中に受刑者が意識を保っている時間が長ければ長いほど、憲法修正第8条違反のリスクは高まる」としながらも、記録は「過去の受刑者が、いかなる処刑にも内在する苦痛を超える深刻な精神的苦痛や苦悩を被ったという結論を裏付けるものではない」と指摘した。〈sup〉 47〈/sup〉

マークス判事はまた、フレイジャーが数年前に選択肢を与えられた際に、窒素ガスによる低酸素症を明確に選択していたことを指摘し、州側によれば、これは死刑執行方法が強制されたという主張と矛盾すると述べた。そして裁判所は死刑執行を承認した。

IV. 政府介入運動の失敗

A. ウィットマー知事への訴え

法廷での訴えが失敗に終わったため、フレイジャーの家族と支持者たちは政治的な弁護に転じ、ミシガン州知事グレッチェン・ホイットマーに力を注いだ。その主張は単純明快だった。1846年に死刑制度を廃止した州の知事であるホイットマーには、道徳的な権威があり、ひいては、前任者が署名した2011年の死刑移送協定に介入する法的権限もある、というものだった。

フレイジャーの母親は、州知事ホイットマーに公の場で訴え、州間協定の実施を拒否して息子の命を救ってほしいと懇願した。この痛切な訴えは、全米メディアの注目を集め、ミシガン州が奴隷制度廃止の原則に忠実であることを示す証拠として報じられた。

B. 法的および政治的問題

このキャンペーンはいくつかの疑問を提起した。

1. **ウィットマー知事は2011年の合意を一方的に破棄または異議申し立てできるのだろうか？**法律専門家の間では意見が分かれていた。知事間の合意は、特に状況の変化や合意が州の方針に違反する可能性が高い場合には、後任の知事によって覆される可能性があると考える者もいた。一方、フレイジャーがアラバマ州に移送され、そこで死刑囚として何年も過ごした時点で、ミシガン州は彼を拘束する権限を放棄したと主張する者もいた。
2. **ミシガン州には、囚人の処刑を阻止する恒久的な義務があったのだろうか？**死刑廃止論者は、この廃止は根本的な政治的コミットメントを反映したものであり、ミシガン州の住民として犯罪を犯し、ミシガン州の裁判所で有罪判決を受けた者の処刑を阻止することにまで及ぶべきだと主張した。[53]
3. **政治的なリスクは何だったのか？**全国的な政治的野心を持つ民主党のウィットマー知事は、複雑な判断を迫られた。介入すれば、死刑に反対する進歩派の有権者の支持を再び高めることができるかもしれないが、同時に、有罪判決を受けた殺人犯を保護しているとして批判にさらされる可能性もあった。

C. ウィットマー知事の沈黙

ウィットマー知事は介入要請に対し具体的な対応を取らず、状況は自分の手に負えないと簡潔に述べるにとどまった。 2011年の合意に異議を唱えたり、フレイジャー氏をミシガン州の管轄に戻すための法的措置は取られていない。

周囲の沈黙は、おそらくいくつかの現実を反映していたのだろう。

- **法的制約**：2025年までに、フレイジャーはアラバマ州で14年間拘留されていた。裁判所は、釈放の試みは時期尚早であり、アラバマ州の量刑主権を損なうものとみなした可能性が高い。[56]
- **政治的計算**：有罪判決を受けた殺人犯、特に複数の州で凶悪犯罪を犯した殺人犯のために介入することは、重大な政治的リスクと不確実な利益を伴う。[57]
- **影響力は限定的だった**。ミシガン州は移送に異議を申し立てようとしたものの、アラバマ州が身柄を拘束しており、連邦裁判所から死刑執行の承認を得ていた。[58]
- **前例に関する懸念**：このような介入は、刑事司法における国家間の協力関係をより広範に複雑化させる可能性のある前例を作り出すことになるだろう。[59]

D. 政府権力の限界

フレイザー事件は、州をまたいだ拘留を伴う死刑事件における政府権限の実際的な限界を浮き彫りにした。死刑制度を導入している州の知事は、恩赦権を行使して刑を減刑したり、死刑執行を延期したりするのが常である一方、死刑廃止州の知事が他州での死刑執行に介入する権限は、はるかに限定的であることが明らかになった。

囚人の移送や刑事司法における協力関係を円滑にする州間条約制度は、各州がそれぞれの約束を尊重することを前提としている。スナイダー知事が2011年に協定に署名したことで、フレイジャーの身柄拘束に関するミシガン州の正式な権限は終了した。ウィットマー知事は、容易には変更できない法的かつ実際的な状況を引き継いだのである。

V. 処刑の目撃証言

A. 構成と手順

2025年2月6日、デメトリウス・テレンス・フレイジャーはアラバマ州アトモアのウィリアム・C・ホルマン矯正施設で処刑された。これは米国で4例目となる窒素低酸素死刑による処刑であり、この方法は致死注射の代替手段として2018年にアラバマ州法に導入された。52歳のフレイジャーは2018年に自ら窒素低酸素死刑を処刑方法として選択しており、これにより州はこの方法を実行する法的権限を得た。

目撃者たちは、極めて厳重に管理された環境だったと証言した。フレイジャーは処刑室内のパッド付きストレッチャーに縛り付けられていた。窒素注入システムに接続されたフルフェイスガスマスクが、彼の頭に慎重に装着された。刑務所職員はマスクの密閉状態と窒素の流れを監視しており、窒素の注入は現地時間午後6時10分過ぎに開始された。州当局は、フレイジャーの死亡が午後6時36分に宣告されたと発表した。マスク装着から正式な死亡宣告まで、合計約26分だった。

メディアは、この実験室には心拍センサーや呼吸モニターなどの生体認証監視システムが備えられていたと報じたが、刑務所職員は詳細なリアルタイムデータを提供しなかった。専門家はこの透明性の欠如を重大な法的問題として指摘した。完全な生理学的データがなければ、裁判所や監視員は液体窒素に曝された際の受刑者の意識レベルを明確に判断できないからである。

B. 初期反応と観察可能な動き

目撃者の証言によると、フレイジャーは窒素を投与されてから数秒以内に身体の動きと呼吸反応を示した。平等正義イニシアチブは次のように記録している。「午後6時11分、フレイジャーは両手を上げ、位置を調整しようとするかのように小さな円を描くように動かした。1分以内に両手は体の横に戻ったが、指は震え続けていた。」 [66]

午後6時12分、目撃者たちはフレイジャーが顎を食いしばり、鼻孔を広げ、明らかに震えているのを目撃し、脚が担架からわずかに浮いた。複数の記者は、数分間続いた「浅く苦しそうな」不規則な呼吸を指摘した。低酸素症に詳しい医療専門家は、これらの症状は酸素不足と一致しており、不随意反射運動か意識的なパニックのどちらかを示している可能性があると指摘した。

その後5、6分間、フレイジャーの動きは断続的に続いた。目撃者の証言は以下の通りである。

- 腕や手の痙攣、
- 脚を上げ下げするわずかな動き、
- しかめ面や顔の歪み、
- 時折、息を呑むような声やうめき声が聞こえる。[70]

これらの観察結果は、過去の窒素低酸素による処刑結果と一致しており、意識の即時喪失ではなく、遅延した意識喪失のパターンを示唆している。[71]

C. 意識持続時間指標と生理学的状況

目撃者の証言によると、フレイジャーは窒素ガスの注入開始後も長時間にわたり反応を示していた。〈sup〉 [72] 〈/sup〉 低酸素室のモニターでは午後6時36分に心拍が停止したと記録されているが、最初の曝露から目に見える不動状態になるまでの期間から、低酸素症がフレイジャーの意識喪失を直ちに引き起こしたわけではないことがわかる。〈sup〉 [73]〈/sup〉

人体生理学の専門家によると、窒素性低酸素症は肺内の酸素を置換し、血中酸素飽和度を低下させ、脳への酸素供給を阻害することによって意識喪失を引き起こす。[74]

30秒から2分で意識を失う人もいる一方で、特に心血管系や呼吸器系の持病がある人は、意識は保ったまま数分間パニック状態に陥ることがある。75目撃者の観察（手の動き、あえぎ、足の動き）から、フレイジャーの生理的反応には息切れやパニックのような反応が含まれていたことが示唆され、これは彼が以前に行った憲法修正第8条に関する主張を裏付けるものである。[76]

D. コミュニケーションと閉会の挨拶

ガスマスクを装着される前に、フレイザーはジャーナリストや宣誓証人によって記録されたいくつかの発言をした。[77]

「まず第一に、ポーリン・ブラウンさんのご家族とご友人に謝罪したいと思います。何が起こったのか…」

「ポーリン・ブラウン事件は決して起こるべきではなかった。」 [78]

死刑囚全員を釈放してほしい。デトロイトは強い。行け！ [79]

これらの発言は、フレイジャーの意識、一貫性、そして決意を示しており、窒素による低酸素症が始まる前にフレイジャーが精神的に意識を保っていたことを強調している。〈sup〉 [80]〈/sup〉 「デトロイト・ストロング」への言及は、彼をミシガン州のルーツと結びつけ、アラバマ州の処刑室へと彼を導いた州をまたぐ旅を痛切に思い出させるものだった。〈sup〉 [81]〈/sup〉専門家によると、意識的な発話と不随意運動の期間の間の移行は、この方法が意識的な恐怖を許容するかどうかを判断する上で極めて重要であるという。〈sup〉 [82]〈/sup〉

VI. 結論：窒素低酸素症の州間管理と正常化

A. 州間次元

デメトリウス・テレンス・フレイジャーの処刑は、刑事司法と死刑における州間協力の特異な事例を示している。2011年にスナイダー知事とベントレー知事の間で締結された移送協定は、死刑廃止州で終身刑に服している囚人を、死刑執行を目的として死刑制度のある州に移送するための法的仕組みを確立した。〈sup〉 83〈/sup〉当時ほとんど注目されなかったこの協定は、最終的にフレイジャーの処刑を阻止できなかった重要な議論の根拠となった。〈sup〉 84〈/sup〉

この事件は、州の主権と死刑廃止の原則との間の緊張関係を浮き彫りにした。ミシガン州が1846年に死刑を廃止した決定は、死刑に対する州の立場に関する深い道徳的・政治的判断を反映したものであった。 〈sup〉85〈/sup〉しかし、州境を越えた刑事司法を円滑にする州間協力制度により、ミシガン州は囚人の身柄をアラバマ州に移送することで死刑執行に参加することができた。〈sup〉 86〈/sup〉介入を求める声に対し、ウィットマー知事が沈黙を守ったことは、こうした状況における政府権力の実際的・政治的な限界を浮き彫りにした。〈sup〉 87〈/sup〉

B. 法的影響

フレイザー事件は、いくつかの重要な法的教訓を与えてくれる。

1. **州間移送協定**：この事例は、たとえ死刑廃止国からの囚人の処刑を容易にするものであっても、こうした協定は実施後には司法の監視が最小限にとどまることを示している。裁判所は、明白な法律違反の場合を除き、州間協力メカニズムを阻害することに消極的である。[88]
2. **の分析**：目撃者の証言によれば、8〜10分間、動き、喘ぎ、明らかな苦痛が見られたにもかかわらず、裁判所は一貫して、死刑執行に異議を唱える者は「重大な危害の重大な危険」の存在を証明できていないと判断してきた。数多くの死刑執行で観察された反応パターンは、州の死刑執行手順に対する裁判所の尊重を覆すには至っていない。[89]
3. **同意と処刑方法の選択**：フレイジャーが以前に窒素低酸素症を選択したことが、憲法修正第8条への異議申し立てを複雑化させた。裁判所は、フレイジャーの同意によって、その方法が憲法上の問題を引き起こすという主張が無効になると判断したからである。これは、実験的な処刑方法に対するインフォームド・コンセントの可能性について疑問を投げかけるものである。[90]
4. **透明性と説明責任**：死刑執行に関する生理学的データの公表を頑なに拒否することは、司法および国民による監視を制限し、憲法上の保護が尊重されているかどうかを評価することを困難にしている。[91]

C. 窒素低酸素症の正常化

フレイザーの処刑は、窒素低酸素症を用いた4例目の処刑であり、この処刑方法の常態化における重要な一歩となった。2024年1月のケネス・スミスの物議を醸した処刑から始まったこの方法は、アラン・ミラーとキャリー・グレイソンの処刑へと続き、2025年2月には日常的な処刑方法

となっていた。かつては法的介入を促したであろう、目に見える動き、喘ぎ、そして長時間の意識喪失といった症状は、今やこの処刑方法の想定される機能の一部として受け入れられていた。

この常態化は、繰り返しと司法の尊重によって生じた。それぞれの処刑は、その方法の合憲性を問うために利用できるデータを提供したが、同時に、その後の異議申し立てを困難にする先例も生み出した。〈sup〉 94〈/sup〉フレイジャーの処刑の時点で、裁判所は、窒素低酸素症は、その目に見える影響にもかかわらず、残酷で異常な刑罰には当たらないと事実上判断していた。〈sup〉 95〈/sup〉

D. 倫理的および人間的側面

フレイジャー事件は、法的な側面だけでなく、死刑制度における人間的な側面をも浮き彫りにしている。被害者の家族への謝罪と、死刑囚仲間への連帯の表明という彼の最期の言葉は、処刑直前の彼の明晰さと、衰えることのない感情を示している。 「デトロイトは強い」という彼のスローガンは、彼をミシガン州のルーツと結びつけ、彼をこの瞬間へと導いた州を越えた道のりを、傍観者たちに思い出させる。

処刑の目撃証言は、抽象的な法的文書だけでは捉えきれない、人間の経験の具体的な痕跡を示している。目撃者によって記録された手の動き、足の上げ下げ、顔の歪み、そして喘ぎ声は、人間の最期の瞬間を表している。これらの動きが意識的な苦痛を反映したものなのか、それとも無意識的な反射なのかは議論の余地があるが、その存在は否定できない。97

州をまたいだ身柄拘束という側面は、さらに倫理的な複雑さを増している。フレイジャーは成人してからの人生を、2つの州の刑事司法制度の歯車に巻き込まれて過ごした。ミシガン州で有罪判決を受け収監され、アラバマ州で有罪判決を受け、最終的に処刑されたのだ。2011年に彼を一方の制度から他方の制度に移送した移送協定は、両州間の官僚的な協力関係を反映したものであったが、同時に、彼がミシガン州の刑務所で自然死するか、アラバマ州の死刑執行室で処刑されるかを決定づけるものでもあった。

E. 体系的な教訓

フレイザー事件からは、いくつかの体系的な教訓が浮かび上がる。

1. **州間の協力には監視が必要である**。死刑制度を廃止した州であっても、死刑執行のために囚人が容易に州間移送される現状は、こうした協定に対するさらなる精査の必要性を示唆している。
2. **実験方法は厳格な精査を受けなければならない**。徹底的な科学的評価やデータの透明性のある公表なしに窒素低酸素症を継続的に使用することは、憲法上の保護と公共の説明責任を損なう。
3. **州知事の権限には限界がある**。州知事は自州内では恩赦権を持つものの、たとえ自州が死刑制度を廃止していたとしても、他州における死刑執行に影響を与える能力は厳しく制限されている。

4. **法的制約は死刑執行を有利にしている。**死刑執行方法に異議を唱えるには高い証拠要件が必要であり、裁判所が国家の執行手順を尊重する傾向があるため、死刑執行中に目に見える苦痛が生じたとしても、憲法上の介入につながることは稀である。[99]

F. 結論

デメトリウス・テレンス・フレイザーの死刑執行は、アメリカの死刑制度が法律、政治、州間協力、そして人間の苦しみという要素が交錯する中でどのように機能しているかを如実に示している。2011年にほとんど注目されなかった政府間の合意によって実現した、ミシガン州からアラバマ州への彼の移送は、官僚的な仕組みがいかにして、州の根本的な価値観と相容れないように見える死刑執行を可能にしてしまうかを示している。

彼女が提起した訴訟は、州間移送と窒素低酸素死刑執行方法そのものの両方に対するもので、深刻な憲法上の問題を提起していたにもかかわらず、いずれも失敗に終わった。裁判所は州間協定に異議を唱えること、あるいは窒素低酸素死刑執行中に観察された反応が合衆国憲法修正第8条に違反すると結論づけることに消極的だった。ウィットマー州知事に介入を促すための政治運動も失敗に終わり、各州知事の権力と意思の限界を露呈した。

2025年2月6日、フレイジャーの顔を覆うマスクを通して窒素ガスが循環し始めた頃には、この方法は日常的なものとなっていた。目撃者が目にした動き、息切れ、そして明らかな苦悶は、もはや衝撃的な異常事態ではなく、アラバマ州の新たな処刑手順における予測可能な特徴となっていた。常態化は完了していた。

フレイザー事件は、法的な先例であると同時に、警告でもある。この事件は、国家間の協力、司法の裁量、そして官僚機構がいかに組み合わさって、正義、苦痛、そして国家権力に関する根本的な問題を提起する死刑執行を可能にし得るかを示している。また、実験的な死刑執行方法が、検証ではなく繰り返しによっていかに広まるかを示している。さらに、政府権力の実際的かつ政治的な制約が、たとえ根本的な原則が危機に瀕しているように見えても、死刑囚に有意義な介入の機会をほとんど与えないことを明らかにしている。

窒素低酸素による4回目の死刑執行は、州をまたいだ拘留が初めて伴ったものでもあり、この方法のこれまで予期されていなかった複雑さを浮き彫りにした。アラバマ州は引き続き窒素低酸素による死刑執行を行っており、他の州もその導入を検討しているが、フレイジャーの死刑執行は、州をまたいだ刑事司法協力、新たな死刑執行方法、そして憲法上の保護が実際にどのように相互作用するかを示す重要な事例研究となっている。この事件で提起された問題は、死刑執行のあり方が進化し続ける中で、今後も繰り返し取り上げられる可能性が高い。

最終的なメモ

1. 第1章から第3章（スミス、ミラー、グレイソンの処刑について記述している）を参照のこと。
2. ビル・ブリット、「アラバマ州、窒素ガスでデメトリウス・フレイジャーを処刑、州の暗い記録に新たな一章を追加」、*アラバマ政治レポーター*、2025年2月7日、https://www.alreporter.com/2025/02/07/alabama-executes-demetrius-frazier-with-nitrogen-adding-to-states-grim-record。
3. *スナイダー・ベントレー州間移送協定の文書*、2011年。
4. ミシガン州は1846年に法律によって死刑を廃止し、英語圏の管轄区域としては初めて死刑を廃止した。この禁止は、ミシガン州憲法第4条第46項（1963年）に明記された。
5. *スナイダー・ベントレー州間移送協定*、2011年（マーシャル司法長官によると、終身刑4回、https://www.alabamaag.gov/attorney-general-steve-marshall-statement-on-the-execution-of-convicted-murderer-demetrius-frazier/）。
6. *Frazier v. Hamm* 、No. 2:24-cv-00732-ECM（アラバマ州メリーランド州、2024年11月15日提出）（合衆国憲法修正第8条に基づく窒素低酸素症プロトコルへの異議申し立て）； *Frazier v. Hamm* 、No. 2:24-cv-00732-ECM、2025 WL 460857（アラバマ州メリーランド州、2025年1月31日）（Marks首席判事）（差止命令申請の却下）。（州間移送協定は、アラバマ州刑務所長テリー・レイボンとミシガン州矯正局長ハイディ・ワシントンを被告とする連邦裁判所に提出された別の人身保護令状請願で異議申し立てされた。ミシガン州司法長官ダナ・ネッセルがミシガン州への身柄引き渡し要請を拒否した後、フレイジャーは自発的に訴訟から撤退した。）参照 ラルフ・チャポコ、「ミシガン州はアラバマ州の死刑事件に介入しない」、*アラバマ・リフレクター*、2025年1月28日、https://alabamareflector.com/2025/01/28/michigan-will-not-wade-into-alabama-death-row-case。
7. フレイジャー家による公式声明、2025年1月～2月。
8. 同上
9. 「アラバマ州、窒素ガスで男性を処刑、米国で4例目の処刑」 *KPBS Public Media* 、2025年2月6日、https://www.kpbs.org/news/national/2025/02/06/alabama-puts-man-to-death-in-the-nations-fourth-execution-using-nitrogen-gas。
10. 第1章から第3章を参照してください。
11. グレタ・クロス、「残忍な殺人犯デメトリウス・フレイザーがアラバマ州で処刑される。彼は一体何者なのか？」、 *USA TODAY* 、2025年2月5日、 https://www.usatoday.com/story/news/nation/2025/02/05/demetrius-frazier-pauline-brown-alabama-execution-gas/7799253 0007/ 。
12. 同上
13. 同上
14. 同上。ミシガン州矯正局アーカイブ、1993年。
15. *ミシガン州憲法第4条第46項*（1963年）（「死刑を定める法律は存在しない」）；ミシガン州議会は1846年5月18日に死刑廃止を決議した（最初の法律による廃止）。
16. ベイリー・メジャーズ、「アラバマ州、議論のさなか4人目の窒素ガスによる死刑執行を予定」、*アラバマ公共ラジオ*、2025年1月8日、 https://www.apr.org/news/2025-01-08/alab

ama-schedules-fourth-nitrogen-gas-execution-amid-debate-over-method （情報源によってブラウンの年齢は40歳か41歳と異なっている）。
17. 同上
18. 同上。アラバマ州刑法典第13A-5-40条(a)(2)。
19. ライリー・コンロン、「デメトリウス・フレイザーとは誰か？」 *WVTM13* 、 https://www.wvtm13.com/article/demetrius-frazier-alabama-execution-nitrogen/63364169 。
20. 同上
21. *州間拘禁協定*、公法91-538（1970年）。
22. 同上； チャポコ（*上記注6）*も参照のこと（ミシガン州は1847年に死刑を廃止し、憲法で死刑を禁止したことを指摘している）。
23. *スナイダー・ベントレー協定、成人犯罪者の監督に関する州間協定*。
24. 同上
25. チャポコ、*上記注6*を参照（州間移送に異議を唱えるフレイジャーのヘイビアス・コーパス請願の主張について説明している）。スティーブ・ニーブリング、「アラバマ州の刑務所に送られたデトロイト出身者の死刑執行を中止するようウィットマー知事に要請」、*デトロイト・メトロ・タイムズ*、 2025年1月23日。
26. アラバマ州司法長官のプレスリリース（*上記*注5参照）（「2011年、行政協定に基づき、フレイジャーは刑期を務めるためアラバマ州に移送された。」）
27. ベイリー・メジャーズ著「アラバマ州刑務所に送られたデトロイト出身者の弁護士らが2月の死刑執行を阻止しようと試みる」 *アラバマ公共ラジオ*、2025年1月24日、https://www.apr.org/news/2025-01-24/lawyers-for-detroit-native-sent-to-alabama-prison-seek-to-stop-his-february-execution を参照。
28. 同上
29. 見る チャポコ、*前掲*注6参照。
30. Edward G. Hild、「死刑と州間拘留協定法：変更案」、29 *J. Marshall L. Rev.* 499（1996）；Chapoco、*上記*注6；Elliot Ratzman、「Ratzman：Whitmerはミシガン州の囚人の処刑を阻止できる」、 *Detroit News* 、2025年2月4日、https://www.detroitnews.com/story/opinion/2025/02/04/ratzman-whitmer-can-stop-execution-of-michigan-prisoner/78211630007。
31. 同上
32. *Frazier v. Hamm* 、訴状、116-137頁、 https://law.justia.com/cases/federal/district-courts/alabama/almdce/2%3A2024cv00732/84772/46/も参照。また、 *Frazier v. Hamm* 、No. 2:24-cv-00732-ECM、意見および命令覚書（アラバマ州地方裁判所、2025年1月31日）（Marks首席判事）も参照。
33. 同上
34. 同上、訴状、138～153頁。
35. 「アラバマ州の受刑者が窒素ガス注入による死刑執行を阻止するよう裁判所に要請」 *アラバマ公共ラジオ*、2025年1月16日、https://www.apr.org/news/2025-01-16/alabama-inmate-asks-court-to-block-nitrogen-gas-execution。
36. *Baze v. Rees* 、553 US 35 (2008)。

37. 同上
38. *Winter v. Natural Resources Defense Council, Inc.* , 555 U.S. 7 (2008).
39. *Hill v. McDonough* 、547 U.S. 573 (2006)。
40. *Frazier v. Hamm* 、訴状、116-137頁、*上記*注32参照。
41. 「連邦判事がアラバマ州での窒素ガスによる死刑執行を阻止する要請を検討」*アラバマ公共ラジオ*、2025年1月29日、https://www.apr.org/news/2025-01-29/federal-judge-hears-request-to-block-an-upcoming-nitrogen-gas-execution-in-alabama。
42. 同上
43. 州からの書面による回答、*フレイジャー対ハム事件*（2025年1月）。
44. 同上
45. 同上
46. *Frazier v. Hamm* 、意見書、米国地方裁判所判事エミリー・C・マークス、2025年1月31日、 https://law.justia.com/cases/federal/district-courts/alabama/almdce/2%3A2024cv00732/84772/46/ 。
47. 同上、 32頁（「囚人が意識を保っている時間が長ければ長いほど…」）。
48. *Frazier v. Hamm* 、2025 WL 460857、 (MD Ala. 2025年1月31日) （衡平の観点から、窒素低酸素症に関するフレイジャーの以前の選択について議論） ; （「フレイジャーの立場変更は…衡平が差止命令を支持しないという裁判所の結論を強化する」） ;Mary Claire Wooten、「連邦判事がデメトリウス・フレイジャーの処刑を許可」、 *Alabama Political Reporter* 、2025年2月4日、https://www.alreporter.com/2025/02/04/federal-judge-allows-demetrius-fraziers-execution-to-proceed。
49. 同上
50. 公式声明およびメディア報道、2025年1月～2月。
51. 同上
52. 州間における子の親権に関する諸問題の法的分析。
53. 政治分析、ミシガン州知事の政策。
54. 同上
55. キム・チャンドラー、「アラバマ州、1991年の殺人で男に死刑判決：米国で4例目の窒素吸入による死刑執行」、 *AP通信*、2025年2月6日、https://apnews.com/article/alabama-execution-demetrius-frazier-nitrogen-gas-e1b391e1e157f2815be1baa248737778（ウィットマー知事の発言を引用：「これは非常に難しい状況です。嘆願や懸念は理解しています。ミシガン州では死刑は執行していません」）マックス・ラインハート著「アラバマ州、1991年の殺人でデトロイトの男に死刑判決」、*デトロイト・ニュース*、2025年2月7日、https://www.detroitnews.com/story/news/nation/2025/02/06/alabama-set-to-execute-michigan-man-with-nitrogen-gas-for-1991-murder-and-rape/78289955007 も参照（ウィットマー知事が、スナイダー知事が「残念ながら」フレイジャーをアラバマ州に送ることに同意し、事件は「地元当局の手に委ねられている」と述べたと報じている）。
56. 州間における子の親権に関する諸問題の法的分析。
57. 政治分析、ミシガン州知事の政策。

58. 連邦裁判所による、死刑執行の継続を認める判決。
59. 州間協定に関する判例法。
60. 州境を越えて知事が与える恩赦権限の分析。
61. 同上
62. Britt、*前掲*注2（様々な情報源によると、流量は15～18分とされている）。
63. Doug Cunningham、Mike Heuer、Darryl Coote、「アラバマ州、1991年の強姦殺人事件でデメトリウス・フレイジャーを窒素ガスで処刑」、 *United Press International* 、2025年2月6日、https://www.newsbreak.com/upi-news-510013/3793877082726-alabama-executes-demetrius-frazier-by-nitrogen-gas-for-1991-rape-murder。
64. 同上。クルス、*前掲*注11。
65. 「アラバマ州、1991年の殺人および強姦の罪で窒素ガスによる死刑執行」、 *CBSニュース*、2025年2月6日、https://www.cbsnews.com/news/demetrius-frazier-alabama-execution-nitrogen-gas。
66. Equal Justice Initiative 、「アラバマ州におけるデメトリウス・フレイザーの処刑の目撃証言」、2025年2月6日、https://eji.org/news/demetrius-frazier-alabama-execution。
67. 同上
68. Sarah Clifton、「アラバマ州、1991年の殺人事件でデメトリウス・フレイザーを窒素ガスで処刑」、 *Montgomery Advertiser* 、2025年2月6日、https://www.montgomeryadvertiser.com/story/news/local/alabama/2025/02/06/alabama-executes-demetrius-frazier-by-nitrogen-gas-for-1991-murder/78282236007。
69. 同上、*上記*注30参照。Frazier *v. Hamm* 、2025 WL 460857（アントニーニ博士の低酸素症と不随意運動の生理学に関する専門家証言が議論されている）。
70. 司法における平等のためのイニシアチブ、*上記*注66参照。
71. 同上
72. 同上
73. 同上。低酸素症の生理学に関する専門家の証言。
74. 司法における平等のためのイニシアチブ、*上記*注66参照。
75. 同上
76. 同上
77. 同上
78. 同上。カニンガム、ホイヤー、クート、*前掲*注63。
79. ブリット、*前掲*注2参照。
80. 窒素性低酸素症と意識に関する医学文献。
81. 執行方法に関する紛争における専門家の証言、 *Grayson v. Hamm* 、2024年。
82. *Frazier v. Hamm* 、2025 WL 460857（窒素投与前の認知的認識の重要性について論じている）。
83. 同上、*上記*注30参照。
84. 同上
85. 同上

86. 同上
87. ブリット、*前掲*注2参照。
88. *Baze v. Rees* 、*上記*注36参照。
89. 執行方法に関する訴訟における司法判断の尊重に関する分析。
90. *Frazier v. Hamm* 、*上記*注6参照。
91. 窒素欠乏症による死刑執行の透明性に関する懸念。
92. スミス、ミラー、グレイソンの処刑の比較。
93. 同上、*上記*注30参照。
94. 複数の窒素施肥試験における傾向分析。
95. 同上、*上記*注30参照。
96. 司法における平等のためのイニシアチブ、*上記*注66参照。
97. 同上
98. 国家間協力と国家主権の分析。
99. 同上、*上記*注30参照。
100. ブリット、*前掲*注2参照。
101. 「アラバマ州が男を処刑…」、*上記*注65参照。

5.0：ジェシー・ホフマン・ジュニアの処刑：ルイジアナ州における窒素中毒による初の死刑執行と、実験的方法の州間普及

I. 窒素低酸素症は州境を越える

2025年3月までに、窒素窒息死はアラバマ州で最も好まれる死刑執行方法となっていた。2024年1月から2025年2月にかけて、ケネス・スミス、アラン・ミラー、キャリー・グレイソン、デメトリウス・フレイザーの4人が窒素窒息死した。それぞれの死刑執行は、予測可能なパターンをたどった。長時間にわたる苦痛と明らかな苦悶、州による執行方法の有効性に関する保証、裁判所によるアラバマ州の規定への遵守、そして次の死刑執行が近づくにつれて沈静化する世論の論争。この方法はアラバマ州で繰り返されるうちに常態化し、判例によって法的地位が確立され、目に見える暴力は「不随意運動」として正当化されるか、「全くの茶番」として片付けられた。

しかし、アラバマ州で行われた窒素低酸素症を用いた実験は、決して単一の州に限定されることを意図したものではなかった。この方法を導入した2018年の立法は、薬物不足、製薬会社のボイコット、そして失敗した処刑に対する世間の厳しい目といった、致死注射に関連する課題に直面している他の州にとってのモデルとして明確に提示された。オクラホマ州、ミシシッピ州、ルイジアナ州、そして最終的にはアーカンソー州も窒素低酸素症を認可し、アラバマ州の経験を参考に、この方法が自州の処刑問題を解決できるかどうかを判断した。

2025年3月18日、アンゴラにあるルイジアナ州立刑務所でジェシー・ホフマン・ジュニアが処刑されたことは、転換点となった。アラバマ州以外で初めて窒素低酸素死刑が用いられたのである。ルイジアナ州は、この方法を採用した2番目の州となり、アラバマ州での実験として始まったものが、州をまたいだ処刑戦略へと発展したことを示した。本章では、ホフマンが処刑室に至るまでの経緯、15年間の処刑停止期間を経てルイジアナ州が窒素低酸素死刑を採用した経緯、ホフマンが直面した具体的な法的・宗教的障害、そして処刑そのものについて考察する。これは窒素低酸素死刑による5人目の死刑執行であったが、アラバマ州のモデルに倣って他州でこの方法の実現可能性を検証した最初の事例となった。

第1章から第4章ではアラバマ州における窒素低酸素死刑の開発、標準化、実施について詳述したが、本章ではこの死刑執行方法の地理的拡大と、それを可能にした政治的力学を明らかにする。アラバマ州から採用された実験的な方法を用いてルイジアナ州が死刑執行を再開した事例は、ある管轄区域で確立された前例が、過去に新たな死刑執行方法が受けていたであろう厳格な審査を回避し、いかに急速に他の地域に広がるかを示している。

II. 犯罪：メアリー・“モリー”・エリオットと1996年の殺人事件

1996年11月27日、28歳の広告会社重役メアリー・“モリー”・エリオットは、ニューオーリンズのダウンタウンにある職場を後にし、シェラトンホテルの駐車場へ車を取りに行き、夫のアンディ・エリオットと夜を過ごそうとしていた。彼女はこれまで数え切れないほどそこに車を停めており、そこは彼女にとって習慣であり、馴染みのある安全な場所となっていた。しかしその夜、モリー・エリオットは、そこで働き始めてまだ3週間も経っていない18歳のバレットパーキング係、ジェシー・ホフマン・ジュニアと出会った。

ホフマンはエリオットを強盗し、無理やり車に乗せた。彼は彼女をATMに連れて行き、200ドルを引き出させた。その後、セント・タマニー郡のポンチャートレイン湖を渡り、ミドル・パール川近くの僻地へと彼女を連れ去った。そこでホフマンは銃を突きつけ、エリオットをレイプした。その後、彼は彼女を裸にして土の道を仮設の桟橋まで歩かせ、ひざまずかせ、冷酷にも彼女の頭を撃ち抜いた。彼は現場に彼女の遺体を放置し、凶器と所持品を処分した後、盗んだ200ドルを持ってニューオーリンズに戻った。

モリー・エリオットの遺体は、2日後の感謝祭の日に、カモ猟をしていたハンターによって発見された。妻が夕食の約束に現れなかったため行方不明届を出していたアンディ・エリオットは、その日の午後に遺体を確認した。捜査は急速に進展した。ホフマンは、駐車場にいるところを映した防犯カメラの映像と、彼を犯行に結びつける法医学的証拠のおかげで、数日後に逮捕された。取り調べ中、ホフマンは当初、エリオットと合意の上で性行為をした後、見知らぬ銃を持った男が現れて彼女を誘拐したと主張した。しかし、この主張はすべての物的証拠と矛盾していたため、後に撤回された。

銃を突きつけての誘拐、強姦、即決処刑、裸の遺体の放置という残虐な犯罪行為は、ニューオーリンズとセント・タマニー郡に衝撃を与えた。モリー・エリオットは、結婚したばかりで、キャリアを築き、思い描いていた人生を歩んでいた、活気に満ちた若い女性だった。彼女の殺害は、無意味な暴力、たった200ドルで奪われた命、そして束の間の権力欲を満たすことの象徴だった。この事件は、その後30年間にわたり、ルイジアナ州における死刑制度をめぐる議論の重要な転換点となる。

III. 裁判、有罪判決、そして死刑囚監房での数十年

ジェシー・ホフマンは1997年1月8日に第一級殺人罪で起訴された。ルイジアナ州では、第一級殺人罪は死刑に処せられる。ホフマンの裁判は1998年6月にセント・タマニー郡で行われた。当時、ホフマンは19歳だった。

検察側は、計画性と残虐性を示す説得力のある証拠を提示した。監視カメラの映像には、ホフマンが駐車場でエリオットに近づく様子が映っていた。ATMの記録は、エリオットが強制的に現金を引き出させられたことを裏付けている。法医学的証拠は、ホフマンを強姦と殺人に結びつ

けた。目撃者たちはまた、殺人後、ホフマンが盗んだ金でガールフレンドと買い物に出かけ、自分の行為に何の悔恨や反省の念も示さなかったと証言した。

ホフマンの弁護側は、彼の幼少期に関する情状酌量の余地のある事情を提示した。それは、彼の成長を特徴づけた深刻なネグレクト、虐待、そして多世代にわたるトラウマの歴史である。²²ホフマンはニューオーリンズで極度の貧困の中で育ち、しばしば空腹に苦しみ、暴力を目撃し、幼い頃から弟妹たちの親代わりを務めた。²³彼の兄マービンは後に、幼少期を「恐怖とネグレクト」の時代と表現し、ホフマンは大人の支援のない環境の中で、幼い頃から保護と思いやりを学んだと述べている。²⁴

これらの情状酌量の余地があるにもかかわらず、陪審は1998年6月25日にホフマンを第一級殺人罪で有罪とした。25 その2日後の1998年6月27日、陪審は死刑を勧告した。26 裁判官は1998年9月11日に正式に判決を言い渡し、ホフマンは1998年11月11日にルイジアナ州立刑務所の死刑囚監房に移送された。27彼は20歳だった。

ホフマンはその後26年間、死刑囚監房で過ごした。この間、ルイジアナ州の死刑制度は事実上麻痺状態に陥った。ホフマンの死刑執行前の最後の執行は、2010年のジェラルド・ボーデロンの死刑執行であった。²⁸その後、ルイジアナ州は15年間の執行停止期間を設けたが、これは正式な廃止や政策変更によるものではなく、致死注射に必要な薬剤の入手困難、執行手順に関する係争中の訴訟、そして死刑に対する世論の変化といった実際的な障害によるものであった。²⁹

死刑判決を受けた期間中、ホフマンは弁護士や支援者たちが「劇的な変貌」と表現するほどの経験をした。彼は服役中も関係を続けていたイロナと結婚した。彼は息子ジェシー・スミス（ホフマンの裁判当時は乳児だった）を独房から育て、指導と支援を行った。彼は刑務所内で安心感を与える存在となり、職員の信頼できる相談相手となり、他の囚人たちからも尊敬を集めた。彼は仏教を学び、瞑想を実践するようになり、それが彼の精神生活の中心となった。彼は自らの罪を悔い、2023年の恩赦嘆願書に次のように記した。「エリオット氏、モリー・エリオットさんのご両親、そしてこの最も無意味で痛ましい喪失によって影響を受けたすべての方々に、私の身勝手で恐ろしく残酷な行為が皆様に与えたすべての苦痛について、心から深くお詫び申し上げます。」

この変化が重要かどうか、つまり、18歳で残虐な犯罪を犯した人物が、数十年にわたる成長と変化を経て46歳で死刑に処されるべきかどうかという問題は、ホフマンの死刑執行をめぐる議論の中心的な争点となった。

IV. ルイジアナ州における窒素低酸素症の受容：政治的意思と立法措置

ルイジアナ州における15年間の死刑執行停止措置は、実際的な障害がなくなったからではなく、政治指導者の交代によって終了した。2024年1月、共和党の元州司法長官ジェフ・ランドリ

ーが州知事に就任した。彼は死刑執行の再開を公約に掲げ、死刑は被害者の家族に対する正義の義務であり、州が法を執行する決意の証であると主張した。

2024年1月25日にアラバマ州でケネス・スミスが処刑される数週間前、史上初の窒素低酸素による処刑となるこの日、ランドリー知事は刑事司法に関する特別議会を招集した。〈sup〉 37〈/sup〉この選択は偶然ではなかった。ランドリーは、スミスの処刑を、窒素低酸素が致死注射に伴う問題に対する解決策となることの証拠と捉えていた。致死注射は、ルイジアナ州で10年以上も死刑執行を停滞させていた問題だった。〈sup〉 38〈/sup〉

2024年3月、ルイジアナ州議会は、致死注射に加え、窒素ガスによる低酸素死と電気椅子による死刑執行を認める法律を可決した。この採決は共和党が多数を占める州議会がランドリー知事の政策に賛同したことを反映し、圧倒的多数で可決された。この法律は、比較的弱く組織的な反対運動に阻まれて可決された。ルイジアナ州の死刑反対派は非常に活発に活動していたものの、この法案を阻止するだけの政治的影響力は持ち合わせていなかった。

議会での議論は、6年前にアラバマ州で提示された議論を彷彿とさせた。賛成派は、窒素低酸素症は「人道的」で「効果的」であり、致死注射を妨げていた薬物合併症なしに州が死刑執行を再開できると強調した。〈sup〉 42〈/sup〉彼らは、この方法の有効性の証拠としてアラバマ州での死刑執行を挙げ、同州で窒素低酸素症によって処刑された4人全員が予測可能な時間内に死亡したことを指摘した。〈sup〉 43〈/sup〉

反対派は、アラバマ州での処刑の目撃証言、すなわち、息切れ、痙攣、そして長時間にわたる明らかな苦痛を強調した。 〈sup〉44〈/sup〉彼らは、窒素低酸素症を拷問の一形態と表現した国連や人権団体からの国際的な非難を引用した。〈sup〉 45〈/sup〉彼らは、ルイジアナ州が徹底的な検証なしに実験的な方法を採用し、独立した評価ではなくアラバマ州からの保証に頼っていると警告した。〈sup〉 46〈/sup〉

議会は動じなかった。法案は可決され、ランドリー知事が署名して法律として成立した。ルイジアナ州は、アラバマ州、オクラホマ州、ミシシッピ州に続き、窒素低酸素症を合法化した4番目の州となった。アーカンソー州は、ホフマンの処刑のわずか数日前の2025年3月に5番目の州となる。

重要なことに、ルイジアナ州の法律にはアラバマ州と同様の秘密保持条項も含まれていた。〈sup〉 50〈/sup〉新法は、処刑チームのメンバー、薬物供給者、および処刑手順の詳細に関する情報の開示を禁止した。 〈sup〉51〈/sup〉このような秘密保持により、死刑囚とその弁護士は、処刑方法が憲法上の基準に適合しているかどうかを評価するために必要な運用仕様にアクセスできないため、窒素処刑手順に異議を申し立てることが困難になる。〈sup〉 52 〈/sup〉

ランドリー知事の事務所は、ルイジアナ州の窒素低酸素プロトコルの要約をわずか3段落しか公表せず、ガス流量、マスクの仕様、モニタリング手順、緊急時対応計画に関する重要な詳細を省略した。〈sup〉 53 〈/sup〉 明らかになったことから、ルイジアナ州のプロトコルはアラバマ州

のものと「ほぼ同一」であったことがわかる。同じ全面マスク、同じ純窒素の投与、そして同じ処刑前の鎮静剤投与の欠如である。〈sup〉 54〈/sup〉ルイジアナ州は独自のアプローチを開発していたのではなく、アラバマ州のモデルをそのままコピーしていたのである。 〈sup〉55〈/sup〉

V・ホフマンの選任と処刑再開の急ぎ

窒素吸入による低酸素死刑が合法化された後、ルイジアナ州は死刑囚を必要としていた。州司法長官のリズ・マリル（ランドリーが知事に就任した際に後任となった）は、死刑囚の記録を精査し、適任者を選定した。セント・タマニー郡地方検事のコリン・シムズは、長年裁判が係属中で、事実上すべての控訴手続きが尽くされていたジェシー・ホフマンの死刑執行令状を請求した。

ホフマンがルイジアナ州の致死窒素注射法の試験対象となったのは、彼の犯罪が州内の死刑囚55人の中で特に凶悪だったからではなく、彼のケースがこの方法に適しており、彼の選定が明確なメッセージを送ることになるからだった。つまり、15年ぶりにルイジアナ州は死刑執行を再開する決意を固めているということだ。〈sup〉 58〈/sup〉裁判所はホフマンの死刑執行日を2025年3月18日に設定した。 〈sup〉59〈/sup〉

そのタイミングは重要だった。ルイジアナ州は、ケネス・スミスの死刑執行からわずか1年余り後、アラバマ州のデメトリウス・フレイジャーの死刑執行からわずか1ヶ月後に、ホフマンの死刑執行を予定した。〈sup〉 60〈/sup〉このタイミングの速さは、ルイジアナ州が死刑制度への強い意志を示し、アラバマ州に続いて窒素ガスによる低酸素死を死刑執行方法として定着させようとしていたことを示唆している。 〈sup〉61〈/sup〉

シムズ検察官は記者団に対し、ホフマンの刑がもっと早く執行されなかった唯一の理由は「執行の不可能性」だと述べた。[62] このアプローチは、窒素低酸素症を、深刻な憲法上および倫理上の問題を提起する物議を醸す実験的方法としてではなく、実際的な問題（執行を妨げてきた障害を克服する方法）に対する解決策として提示した。[63]

VI. 法的課題：仏教、呼吸、そして合衆国憲法修正第8条

ホフマンの弁護士はルイジアナ州の窒素低酸素プロトコルに繰り返し異議を唱え、アラバマ州での死刑執行とは異なる問題点を提起した。第8修正条項に基づく主張（激しい苦痛の重大なリスク、適切な監督の欠如、鎮静剤の不足）はよく知られていたが、宗教の自由に関するホフマンの主張は斬新であり、大きな注目を集めた。[64]

A. シェリー・D・ディック判事と窒素性低酸素症の憲法上の限界

ジェシー・ホフマン事件における最も重要な法的展開は、2025年3月11日に起こった。ルイジアナ州中央地区連邦地方裁判所のシェリー・D・ディック首席判事が、州によるホフマンの窒素低酸素死刑執行を差し止める広範な仮差止命令を発令したのだ。経験的証拠に基づき、ルイジア

ナ州の主張に明確な懐疑を表明したこの判決は、連邦裁判所がルイジアナ州が最近採用した窒素低酸素死刑執行手順の憲法上の欠陥に直接対峙した初めての事例となった。単なる執行停止にとどまらず、ディック判事の命令は、南部における窒素低酸素死刑の急速な拡大に対する重大な法的非難となり、これまでのすべての死刑執行で覆い隠されてきた中心的な問題、すなわち、この方法が拷問に当たるとしたらどうなるのか、という問題を浮き彫りにしたのである。

ディック判事はまず、ホフマンの訴訟の憲法上の根拠である合衆国憲法修正第8条の検討から始めた。*グロシップ／バックルーの分析枠組みを適用し*、ホフマンが窒素による低酸素症が「重度の苦痛の相当なリスク」をもたらすことを証明する高い可能性を示したかどうかを判断しようとした。このリスクは、アラバマ州での死刑執行ですでに強調されていた基準である。判事は、アラバマ州で行われた4件の死刑執行の目撃証言を引用し、公式発表された「不随意運動」はいずれも、震え、痙攣、喘ぎといった目撃者の体験と真っ向から矛盾していたことを強調した。ディック判事は、これらの証言は信憑性があり、一貫性があり、そして何よりも科学的証拠によって反駁されていないと判断した。判事の分析によれば、州は一般的な保証しか提供しておらず、そのどれもが窒素誘発性窒息の生理学的現実に十分に対応していなかった。

ディック判事は専門家の証言に基づき、窒素性低酸素症の心理的側面を強調した。これはアラバマ州では軽視され、ルイジアナ州では事実上無視されていた点である。医師らは、窒息感、すなわち医師が「息切れ」と呼ぶ感覚は、人間の苦痛の中でも最も原始的で恐ろしい形態の一つであると説明した。意識が持続する時間が短くても、主観的な体験は圧倒的で、パニック、絶望、そして深刻な精神的苦痛を引き起こす可能性がある。ディック判事は、ホフマン被告が30秒から40秒にわたって息切れが徐々に悪化していくのを経験した可能性が高いことを示す証拠を挙げた。身体の本能的な生存闘争が、瞑想による平静や精神的な準備といったあらゆる形態を凌駕したのである。判事は、この時間は数秒という短い時間ではあるものの、憲法上重要な意味を持つと結論付けた。なぜなら、合衆国憲法修正第8条は、人を意図的または故意に主観的な恐怖にさらす刑罰を禁じているからである。判事の見解では、ルイジアナ州のプロトコルはこのリスクを軽減できていなかった。

ディック判事は、宗教的土地利用および収容者法（RUIPA）に基づく信教の自由を根拠とするホフマンの請願を審理した。仏教徒であるホフマンは、ルイジアナ州の窒素プロトコルで義務付けられている全面マスクが、数十年にわたり彼の精神生活を支えてきた呼吸法の実践を妨げると主張した。ラミレス対コリアー事件によれば、死刑囚は、州が最も制限の少ない手段で追求する重大な利益を証明できない限り、処刑中に誠実に宗教を実践することを許されなければならない。*ディック*判事は、瞑想呼吸は仏教において正当な宗教的実践であると判断した。しかし、彼女はRUIPAに基づくホフマンの請願を却下し、「周囲の空気を窒素に置き換えることは、ホフマンの呼吸能力に実質的な制約を課すものではない」と判決を下した。窒素は不活性ガスであり、無味無色無臭であるため、裁判所は、彼の規則的な呼吸運動に実質的な制約はないと結論付けた。判決は、異なる事実関係を持つ将来の申請者が勝訴する可能性というより広範な問題を未解決のまま残したが、ホフマンの訴えは却下された。しかし、判決は、この問題はまだ解決には程遠いと指摘し、州は一方的な主張しか提示しておらず、ホフマンの異議申し立ての宗教

的側面について真摯に取り組まなかったことを強調した。したがって、判決は、執行前日までに適切に立証され、裁判所で審査された将来の訴えが認められる可能性を残した。

ディック判事の判決に影響を与えた大きな要因の一つは、州の透明性の欠如であった。ルイジアナ州は、予定日のわずか数日前に窒素吸入による死刑執行手順書を公開したが、それも重要な運用上の詳細が欠落した大幅に編集されたバージョンであった。ディック判事は、州の手順書公開の対応を批判し、ホフマン氏が「州が執行手順書の編集版さえ提出することを拒否したために妨げられた」こと、そして裁判所が提出を命じなければならなかったこと、それが「公聴会のわずか3日前」であったことを指摘した。これにより、ホフマン氏には「救済を得るための時間がほとんど残されていなかった」。〈sup〉 76〈/sup〉判事は、「州のスピードへの欲求は、十分な情報に基づいた審議を凌駕することはできない」と強調し、「この提案された新たな執行方法を完全な記録に基づいて検討することは、公共の利益にかなう」と判決を下した。〈sup〉 77〈/sup〉

判事は、ルイジアナ州の窒素注入プロトコルが、完全な試用期間を経ていないアラバマ州のプロトコルにほぼ完全に依拠していたという、より深い構造上の懸念にも言及した。〈sup〉 78 〈/sup〉　　ディック判事は、州がアラバマ州の保証（「うまくいった」「問題なし」「不随意運動」）に頼っていることは、憲法上の懸念を払拭するには不十分であると指摘した。アラバマ州当局者が、独立した証人が明らかに暴力的だと証言した処刑の成功を繰り返し強調していたという事実は、彼の懐疑心をさらに強めた。 〈sup〉79〈/sup〉ディック判事はまた、ルイジアナ州のプロトコルは「関連するすべての点でアラバマ州のプロトコルと同一」であると指摘したが、アントニーニ博士の意識の急速な喪失に関する仮説は、スミス事件での最初の証言以降、アラバマ州で行われた3件の処刑のいずれも目撃していなかったため、「証明も立証もされていない」と判断した。アラバマ州で過去に死刑執行があったという事実は、憲法上の問題を解決するものではなかった。〈sup〉 80〈/sup〉

ディック判事の命令は、公共の利益が死刑執行停止を支持する決定的な要因であることを強調した。彼女は、差し止め命令はルイジアナ州がホフマンの刑を執行することを妨げるものではなく、その合憲性が確立されていない方法を使用することを妨げるものであると強調した。〈sup〉 81〈/sup〉彼女は、この問題は取り返しがつかないと指摘した。もしホフマンが後に違憲と宣言された方法で処刑された場合、その違反は取り返しがつかないものとなる。〈sup〉 82〈/sup〉したがって、差し止め命令は現状を維持しながら司法審査の完全性を保護するものであった。

より広範に言えば、ディック判事の判決は、窒素低酸素症をめぐる訴訟における新たな局面の始まりを告げるものであった。連邦判事がこの方法の根本的な信頼性、倫理的正当性、そして州がそれを支持するために提示した科学的根拠について、初めて公然と疑問を呈したのである。判事は、窒素低酸素症が複数の管轄区域に拡大したからといって、憲法上の審査から免除されるわけではないことを明確にした。それどころか、アラバマ州で明らかになった証拠によって、より徹底的な検証が不可欠となった。ルイジアナ州での最初の窒素低酸素症による死刑

執行を阻止することで、ディック判事は、新たな死刑執行方法が合憲であることを証明するという立証責任を、死刑囚ではなく、関係当事者である州に負わせたのである。

B. 宗教の自由の要求

ホフマンは仏教を信仰しており、呼吸法を中心とした瞑想を実践していた。彼はそれを根本的な精神修養と考えていた。彼の弁護士は、窒素マスクは彼が最期の瞬間にこの瞑想を続けることを妨げ、憲法修正第1条で保障された信教の自由を侵害すると主張した。具体的には、マスクによってホフマンは仏教信仰に不可欠な瞑想呼吸法を行うことができず、死への精神的な準備として頼りにしていたものができなくなると主張した。

訴状では、最高裁判所がテキサス州に対し、死刑囚の精神的指導者が死刑執行中に声に出して祈り、死刑囚に触れることを許可しなければならないと判決を下したラミレス*対コリアー判決（2022年）が引用されている。ラミレス判決は、信教の自由は死刑執行室においても保護され*、重大な安全上または運営上の懸念が生じない限り、州は死刑囚の誠実な宗教的慣習を尊重しなければならないことを確立した。

ホフマンの弁護士は、ルイジアナ州は窒素投与前にマスクなしで瞑想や呼吸法を行う時間を与えるか、呼吸を妨げない別の処刑方法を用いることで、彼の宗教的要求に容易に対応できると主張した。彼らは、ホフマンの仏教信仰は真摯で長年にわたるものであり（彼は死刑囚監房で何年も仏教を実践していた）、彼の精神的な成長は刑務所職員や彼の精神的指導者によって記録され、証言されていることを強調した。

ルイジアナ州は、マスクは窒素低酸素症の投与に不可欠であり、マスクを外したり、装着を遅らせたりすれば手順が損なわれると反論した。また、ホフマンは処刑室に入る前に瞑想することができ、マスクによる短い中断は彼の宗教的実践に大きな影響を与えなかったと主張した。

ディック判事がホフマンのルイジアナ州宗教自由法（RLUIPA）に基づく連邦訴訟を却下した後、彼の弁護士は州裁判所で同様の戦略を採用した。2025年3月17日、彼らは連邦の宗教の自由の保護を模倣した州法であるルイジアナ州宗教自由保護法（LRUIPA）に基づいて新たな訴訟を起こした。第19司法地区裁判所のリチャード・「チップ」・ムーア3世判事は同日夜、翌朝の審理まで執行を一時停止する一時的な差し止め命令を出した。

3月18日の審理で、ムーア判事は差し止め命令を取り消した。同判事は、宗教の自由に関するホフマンの主張は「既に判決を下した連邦判事の管轄範囲内にある」という州検察官の主張に同意し、ディック判事がRLUIPAに基づいて提起された訴訟を却下したことに言及した。ムーア判事は州法に関する訴訟の是非については検討しなかったが、連邦裁判所の判決は有効であると結論付けた。

C. 合衆国憲法修正第8条と精神的苦痛

窒素：たとえ肉体的な痛みが最小限であっても、心理的な苦痛（窒息の自覚、空気の欠乏、パニック）が残酷で異常な刑罰に該当するかどうかを知ること。

彼らは、窒素誘発性低酸素症は、意識のある脳が潜在的に致命的であると認識する窒息感を生み出し、パニックと苦痛を引き起こすという専門家の証言を提示した。〈sup〉 95〈/sup〉たとえ死刑囚が比較的早く意識を失ったとしても、呼吸を求めて喘ぎ、酸素欠乏に苦しむ意識のある期間は、心理的拷問に該当する可能性がある。〈sup〉 96〈/sup〉

この議論は、*グロシップ／バックルー判例の欠陥を浮き彫りにした*。これらの判例は肉体的苦痛を扱っていたが、精神的苦痛（恐怖、パニック、窒息の意識的経験）がそれ自体で合衆国憲法修正第8条違反を構成するかどうかについてはほとんど言及していなかった。ホフマンの弁護団は、憲法は肉体的虐待だけでなく、死刑囚に深刻な精神的苦痛を与える方法も禁止していると主張した。

州は、いかなる死刑執行においてもある程度の精神的苦痛は避けられないものであり、合衆国憲法修正第8条は州に対し、あらゆる不快感や不安を取り除くことを義務付けているわけではないと反論した。また、窒素ガスによる低酸素症は意識の急速な喪失を引き起こすため、精神的苦痛が生じる期間が短縮されると主張した。

裁判所は納得しなかった。ムーア判事は、アラバマ州の事例で検討され却下された以上の深刻な苦痛の重大な危険性をホフマンが証明していないとして、州の宗教の自由を求めるホフマンの請願を却下した。 〈sup〉101〈/sup〉第5巡回控訴裁判所は、ディック判事の仮差止命令を取り消した。〈sup〉 102〈/sup〉そして、米国最高裁判所は、予定されていた死刑執行のわずか数時間前の2025年3月18日午後に、ホフマンの死刑執行停止の要請を却下した。〈sup〉 103〈/sup〉

注目すべきは、少数派ではあるが4人の判事が、宗教の自由に基づくホフマンの請願はさらなる検討に値すると考えていると表明したが、裁判所は執行停止を認めなかったことである。 〈sup〉104〈/sup〉この判決寸前の出来事は、窒素性低酸素症が宗教的慣習に干渉することが最終的に最高裁判所の介入につながる可能性を示唆したが、ホフマンを救うには手遅れだった。〈sup〉 105〈/sup〉

D. 死刑執行に反対する犠牲者の親族

ホフマン事件の異例な点は、モリー・エリオットの親族の一部が彼の死刑執行に反対したことである。エリオットの義理の姉であるケイト・マーフィーは、ルイジアナ州当局に恩赦審問を求める手紙を送り、自身の悲しみを癒す過程の一環としてホフマンに会いたいと願っていることを表明した。 〈sup〉106〈/sup〉マーフィーは、被害者の親族として自分の意見を聞いてもらいたいこと、そしてホフマンの死刑執行に反対することを強調した。〈sup〉 107〈/sup〉

「ジェシーの処刑前に、被害者の親族として恩赦手続きの中で発言する機会があればよかったのですが、私の声が届かないかもしれないと思うと、とても悲しいです」とマーフィーは書い

た。〈sup〉108〈/sup〉彼女は、ホフマンの裁判中に彼の幼い息子に会ったこと、そしてほぼ同時期に生まれた自分の娘を、殺害された義理の姉にちなんでモリーと名付けたことを記した。〈sup〉109〈/sup〉モリーを悼み、ホフマンの人間性を認め、国家による処刑に反対するという彼女の複雑な感情は、死刑制度に関する議論でしばしば軽視される見解を反映していた。〈sup〉 110〈/sup〉

モリーの夫だったアンディ・エリオットは、死刑執行について複雑な心境を表明した。報道陣に対し、30年近く経った今、ホフマンが死刑判決を受けようと、仮釈放なしの終身刑判決を受けようと、もはやどうでもいいと語った。エリオットが何よりも望んでいたのは、悲しみに暮れることと、ホフマンから罪の弁明を得ることだった。ホフマンは恩赦嘆願書に謝罪文を書いていたが、公式ルートを通じてエリオット一家に届くことはなかった。

被害者たちの証言は、ホフマンの処刑がモリー・エリオットの家族に正義をもたらしたという州の主張を複雑にした。家族の中には処刑を支持する者もいたが、明確に反対する者や無関心を示す者もいた。〈sup〉114〈/sup〉それにもかかわらず、ルイジアナ州は処刑を被害者への約束の履行として主張し続け、親族の中には州に自分たちの代わりに処刑を行わないよう懇願する者もいた。〈sup〉 115〈/sup〉

VII. 実施日：2025年3月18日

A. 最後の数時間と法的試みの失敗

ホフマンは最後の日を家族や弁護士との面会に費やした。特別な最後の食事は断り、刑務所の通常の食事をとった。処刑直前の数時間、弁護士たちは州裁判所と連邦裁判所に土壇場で一連の上訴を申し立てた。その中には、当初は認められたものの、処刑開始直前に期限切れとなった暫定的な差し止め命令の申し立ても含まれていた。

ランドリー知事は介入しなかった。マリル司法長官は恩赦を勧告しなかった。一度動き出した殺戮機械は、容赦なくその道を突き進んだ。119

アンゴラにあるルイジアナ州立刑務所の外で、少数の死刑反対派が祈りを捧げた。〈sup〉 120〈/sup〉 彼らは笑顔のホフマンが描かれた祈祷カードを配り、仏教の読経と「平和のための瞑想」を行った。〈sup〉121〈/sup〉祈りはささやかなものだった。ルイジアナ州の死刑反対運動は熱心ではあったものの、大規模なデモを組織する手段や資源が不足していた。〈sup〉122〈/sup〉死刑執行は、州当局の公式声明とは別に、最大限の慎重さをもって行われることになっていた。〈sup〉 123〈/sup〉

B. プロトコルと観察可能な反応

午後6時21分頃、刑務所職員はホフマンの顔を完全に覆う呼吸マスクに窒素ガスを注入し始めた。アラバマ州での死刑執行では、死刑囚の行動の変化を観察することでガス注入の開始を目撃

者が判断できることが多かったが、ルイジアナ州では手順と処刑室の構造上、目撃者が窒素投与が始まった正確な瞬間を特定することは困難だった。

ホフマンは最後の口頭声明を拒否した。126この決定は、キャリー・グレイソンのように沈黙させられることを避けるための戦略的なものだったのか、あるいは単に沈黙を貫くという選択だったのかは定かではないが、いずれにせよ、彼が世界に最後に伝えたのは、書面による声明と彼を知る人々の証言だけだった。[127]

目撃者らは、ホフマンの身体がアラバマ州での処刑時に見られたのと同様の身体的反応を示したと報告した。ある目撃者は、処刑中にホフマンが痙攣を起こしたと証言した。当局はてんかん発作の存在も確認した。〈sup〉[128]〈/sup〉ルイジアナ州のプレスリリースは、アラバマ州で収集された証言ほど反応のタイミングや性質について具体的に述べていなかったが、そのパターンはよく似ていた。すなわち、明らかな苦痛、呼吸困難、そして意識喪失に至るまでの長い期間である。 〈sup〉129〈/sup〉

窒素ガスは19分間循環し、アラバマ州で行われた他のどの死刑執行よりも長かった。ホフマンは午後6時50分に死亡が確認された。ガス放出開始から死亡確認まで約29分が経過したが、これは窒素低酸素症の支持者が約束していた「急速な意識喪失」や「数分以内の死亡」よりもはるかに長い時間だった。

C.「非の打ちどころがない」：ルイジアナ州の公式見解

死刑執行後の記者会見で、ルイジアナ州公安矯正局長官のゲイリー・ウェストコットは、死刑執行を「完璧」と称し、「我々が望みうる限り最善の形で執行された」と述べた。[133] この姿勢は、アラバマ州における死刑執行に関してジョン・Q・ハム委員長が述べた発言と共通しており、死刑囚が耐えた苦痛について言及するよりも、手続きの遵守と適切な執行を強調していた。[134]

ウェストコット氏はまた、ルイジアナ州がアラバマ州の処刑手順に「いくつかの調整を加えた」とし、「実際、他のチームよりも少し良い結果を出した可能性が高い」と述べた。[135]この発言は、ルイジアナ州がアラバマ州の経験に基づいて窒素投与手順を修正したことを示唆しているが、具体的な改善点は明らかにされていない。[136] ルイジアナ州の処刑がアラバマ州との比較よりも優れているという主張は、アラバマ州の処刑が「成功」したにもかかわらず目に見える苦痛を伴ったとすれば、ルイジアナ州の場合の「より良い」とはどういう意味だったのかという疑問を提起する。[137]

記者会見で、リズ・マリル司法長官はモリー・エリオットの写真を示し、「ルイジアナ州は窒素ガスによる低酸素症を用いてジェシー・ホフマンの死刑執行に成功した。ホフマンは1996年に28歳のモリー・エリオットを残忍かつ凶悪な強姦と殺害した罪で有罪判決を受け、死刑を宣告されていた。今夜、モリーとルイジアナ州のために正義が果たされた」と述べた。[138]

マリル氏の声明はこう続いた。「ジェフ・ランドリー知事と私は、ルイジアナ州民とこれらの凶悪犯罪の被害者の家族に対し、法を遵守し、彼らを最優先に扱うことを約束しました。[…] 正義の実現にはあまりにも長い時間がかかりました。ルイジアナ州司法省と共に、私はルイジアナ州におけるすべての死刑事件において正義が実現されるよう尽力し続けます。私は法を遵守し、擁護することを誓いました。ジェシー・ホフマンは今、来世で神の御前で最後の審判を受けることになるでしょう。」 [139]

マリルの発言の宗教的枠組み――「神の前での最終審判」――は印象的だった。それは、ホフマンの現世での処刑は神の審判への序曲に過ぎず、国家は法的かつ形而上学的な正義の道具であると示唆していた。 ¹⁴⁰この枠組みはまた、処刑そのものの人間性に関する疑問を回避した。たとえその過程に苦痛が伴ったとしても、ホフマンは最終的に死後の世界でその責任を問われることになるだろう。〈sup〉 141</sup>

ランドリー知事は次のように声明を発表した。「悪人が存在し、凶悪な行為を犯すことは遺憾である。このような暴力行為が発生した場合、社会はそれを容認してはならない。この州で凶悪な暴力行為を犯せば、死刑に処される。それだけのことだ。」 [142] この「死刑に処される。それだけのことだ」という簡潔明瞭な声明は、死刑を議論の的となる道徳的選択ではなく、避けられない結果として提示し、死刑に関する数十年にわたる法的、倫理的、そして実際的な議論を消し去った。[143]

注目すべきは、マリルもランドリーもホフマンの処刑を直接目撃していなかったことである。¹⁴⁴彼らは処刑方法を直接目撃することなく、その方法を擁護し、効果的であると宣言した。その代わりに、標準化された処刑手順を提示することに利害関係を持つ刑務所職員の報告に依拠していたのである。〈sup〉 145</sup>

D. ホフマンの弁護士と家族からの回答

ホフマンの弁護士、キャロライン・ティルマンは、州の勝利主義的な姿勢に真っ向から反論する声明を発表した。「今夜、ルイジアナ州は、周囲の人々に光をもたらし、30年近くにわたり人は変われることを示してきた、深く愛されたジェシー・ホフマンの命を奪いました。[…] 4人の米国最高裁判事は、ジェシーの重要な信教の自由の主張は、さらなる検討を可能にするために死刑執行の延期を正当化すると判断しました。ランドリー知事は被害者の最善の利益のために行動していると主張していますが、私たちは被害者の家族から直接、ジェシーの死は彼らに安らぎをもたらさないだろうという声を聞いています。」 [146]

ティルマン氏は続けてこう述べた。「彼女の処刑は多くの人々に永続的な傷を残すでしょう。ジェシーの息子は裁判当時生まれたばかりで、死刑囚監房に入ってからは父親に育てられてきました。刑務所職員は、守り、大切にしてきた人物を殺さざるを得ませんでした。そしてルイジアナ州民は『私の名において、そんなことは許さない！』と声を上げています。私たちはこんなことをするべきではありません。」 [147]

ホフマンの弁護士の一人であるセシリア・コッペルは、「ジェシーはもはやモリー・エリオットを殺害した18歳の少年ではなかった…彼の人生は、悔い改めた父親、夫、そして一人の人間として幕を閉じ、並外れた更生能力を示した」と付け加えた。[148]この記述は、ホフマンが死刑囚監房で過ごした26年間で経験した変貌を強調するものであったが、州当局はこの変貌を、彼の死刑執行の判断において無関係なものとみなした。[149]

ホフマンの妻、イロナ・ホフマンは声明を発表した。「いかなる処刑も、彼がどんな人物だったかという真実を消し去ることはできません。彼は多くの人々にインスピレーションを与えた美しい魂の持ち主でした…私は、彼が最期の数日間をどのように過ごしたかだけでなく、彼がどんな人間になったかについても、心から誇りに思っています。」[150] 彼女の言葉は、ホフマンを愛し、彼の恐ろしい犯罪にもかかわらず、生きるに値する人物だと考えていた人々の苦しみを反映していた。[151]

アンディ・エリオットの反応は複雑で、慎重なものだった。「ホフマンの死刑執行は、私にとっても、モリーの家族にとっても、そして私自身にとっても、ほろ苦い知らせです。この長い悪夢がようやく終わったことに大きな安堵を感じる一方で、モリーへの新たな苦痛と、ホフマン氏の家族への深い悲しみも感じています。彼らの悪夢は私と同時期に始まり、彼らもまた、何の落ち度もないのに、30年近くもこの恐ろしい試練に耐えなければならなかったのです。」[152]

エリオットの声明は、死刑制度そのものについての考察へと続いた。「死刑制度に関して言えば、この事件が大きな変化をもたらすことを願っています。一方では、ようやく正義が実現し、皆が前に進むことができるようになったことを嬉しく思います。他方では、死刑制度を維持するのであれば、手続きは妥当な期間内に完了しなければなりません。なぜなら、何十年も待つことは関係者全員にとって困難であるだけでなく、刑罰の効果を著しく低下させるからです。」[153]

この両義性――事件が終結したことへの満足感と、30年にも及ぶ手続きと待ち時間によって、死刑執行が持つはずだった抑止力や懲罰的価値が損なわれてしまったという認識――は、死刑に関する政治的言説ではほとんど言及されない視点を反映している。〈sup〉[154]〈/sup〉実際に執行される死刑は、その支持者が思い描く迅速かつ確実な刑罰とはほとんど似ていない。〈sup〉[155]〈/sup〉

VIII. 分析と示唆

A. 州間の採用と標準化が加速している

ホフマンの処刑は、窒素低酸素症がアラバマ州における実験的方法という初期段階を脱したことを示した。ルイジアナ州が、独自の開発や試験を行うことなくアラバマ州のモデルをそのまま模倣し、プロトコルを全面的に採用したことは、ある州で方法が成功裏に（「死に至った」

と定義される）使用されると、他の州もさらなる検証を必要とせずにそれを採用するだろうことを示唆している。〈sup〉156〈/sup〉

この力学は、死刑執行方法の普及に深刻な影響を与えた。ルイジアナ州はアラバマ州の経験のみに基づいて窒素低酸素死刑を実施することができたが、ミシシッピ州、オクラホマ州、アーカンソー州（ホフマンの死刑執行のわずか数日前にこの方法を認可した）もおそらくそれに倣ったであろう。〈sup〉157〈/sup〉スミス、ミラー、グレイソン、フレイジャー、ホフマンの5件の窒素低酸素死刑執行で観察された苦痛は、この方法の普及を阻止しなかった。それどころか、前例の存在は、法的および手続き上の安全策を提供することで、その採用を容易にした。〈sup〉158〈/sup〉

ルイジアナ州が死刑執行を「完璧」でアラバマ州よりも「優れている」と評したことは、この力学を如実に示している。目撃者が痙攣を目撃していたにもかかわらず、ガス投与から死亡宣告まで29分もかかったにもかかわらず、ホフマンの宗教的慣習が制限されていたにもかかわらず、州は死亡が確認され、手順が守られたという理由で死刑執行の成功を宣言できたのである。〈sup〉159〈/sup〉この「成功」という緩い基準は、苦痛のいかなる経験的証拠にも関わらず、窒素低酸素症の永続化を保証した。〈sup〉160〈/sup〉

B. 宗教の自由という側面

ホフマン事件は、これまでの窒素関連事件では十分に検討されてこなかった憲法修正第1条に関する問題を提起した。すなわち、呼吸制御を妨げるマスクは、呼吸と瞑想を中心とした宗教的慣習を侵害するのか、という問題である。161この問題は、最高裁判所が死刑制度の文脈において信教の自由を近年重視していること、特に*ラミレス対コリアー事件*162のような事例においてその重要性が高まっていることを考えると、なおさら重要である。

最高裁判事4人がホフマンの信教の自由に関する請願を審査に値すると判断したという事実は、この事件が再び最高裁に持ち込まれる可能性があることを示唆している。呼吸法を用いる宗教的慣習（仏教だけでなく、ヒンドゥー教、ヨガ、瞑想的なキリスト教の慣習など）を行う受刑者が関わる窒素性低酸素症の将来的な事例は、時効の対象となっていたホフマンの請願のように簡単に却下できない、説得力のある憲法修正第1条違反の異議を提起する可能性がある。

より根本的な問題は、死刑執行の方法を宗教的慣習への干渉を最小限に抑えるように設計できるのか、それとも国家の執行効率への関心が、死刑囚が死に向けて精神的に準備したいという願望よりも常に優先されるのか、ということである。ルイジアナ州がホフマンの瞑想を認めなかったことは、いったん処刑手順が確立されると、いかなる宗教的配慮も、たとえ些細なものであっても拒否されることを示唆しているようだ。

C. 変容、贖罪、そして死刑の道徳的論理

ホフマン事件は、死刑の目的と更生の重要性について、根本的な問いを投げかけた。2025年のホフマンは、1996年のホフマンとは全く異なる人物に見えた。彼は26年間、成長し、学び、人間関係を築き、精神性を実践し、18歳で恐ろしい犯罪を犯した者でさえ、価値ある意義深い人間になれることを証明したのだ。

しかし、この変化は法的には無関係だった。彼の死刑執行を決定した裁判所は、彼がどのような人物になったかではなく、最初の犯罪を考慮した。168死刑の論理は、人はその人自身ではなく、行った行為によって処刑されるべきであり、人間は進化や変化が可能な存在ではなく、最悪の瞬間に凍結された存在として扱われるべきである、ということを意味する。169

これはいくつかのデリケートな問題を提起する。死刑の目的が処罰であるならば、処刑される人物がもはや犯罪を犯した本人ではないことは問題なのだろうか？抑止力であるならば、犯罪から数十年、そしてもはや何の脅威も及ぼさない人物を処刑することは、その目的を達成できるのだろうか？そして、死刑が被害者の家族に悲しみに暮れる時間を与えるものであるならば、死刑に明確に反対するケイト・マーフィーや、ある種の複雑な感情を表明するアンディ・エリオットのような遺族の反応を、私たちはどのように説明できるのだろうか？

ルイジアナ州が恩赦を拒否したことに暗黙のうちに示されているのは、こうしたことは何ら重要ではないということだ。ホフマンは1996年に犯した罪で1998年に死刑判決を受けた。彼のその後の人生、犯罪への関与、あるいは彼の処刑が州の殺す権限を示す以外の目的を果たすかどうかに関わらず、その判決は執行されなければならない。173

D. 物語の「完璧な」実行と熟達

ウェストコット長官がホフマンの処刑を「完璧」と評したことは、州が窒素性低酸素症の物語をどのように操作しているかを示している。手順の遵守、つまりプロトコルに従い、死が達成されたことを成功と定義することで、ルイジアナ州は死刑囚がどのような経験をしたかに関わらず、勝利を主張することができたのである。〈sup〉174〈/sup〉

このプレゼンテーション戦略は、窒素ガスによる5件の死刑執行すべてにおいて一貫していた。アラバマ州当局は、目撃者の証言で長時間の苦痛があったとされているにもかかわらず、スミス、ミラー、グレイソン、フレイジャーの死刑執行を成功とみなした。ルイジアナ州も同様の修辞的手法を採用した。 〈sup〉175〈/sup〉 「完璧」という言葉は特に意味深長である。それは完璧さ、問題や心配のない死刑執行を暗示しているが、証言では目に見える反応や29分間の過程が描写されている。 〈sup〉176〈/sup〉

物語のコントロールは、証人の立ち入り制限や情報の隠蔽にまで及ぶ。ルイジアナ州の秘密保持法により、処刑手順の詳細が公表されないため、外部の観察者は、処刑が本当に完璧だったのか、あるいは当局が公表しないことを選択した問題が発生したのかを判断することができない。独立した医療監視が行われていないため、ホフマンがいつ意識を失ったのか、彼の脳活動

が何を示したのか、あるいは弁護士が警告していたような精神的苦痛を彼が受けたのかどうかについて、客観的なデータは一切得られていない。

E. 被害者の家族の複雑さ

ホフマン事件は、死刑制度に対する被害者遺族の意見が一致していないことを如実に示した。ケイト・マーフィーの死刑執行への反対、アンディ・エリオットの複雑な心境、そしてマリル司法長官の「モリー・エリオットの近親者は死刑執行に反対しなかった」という主張は、被害者遺族の見解の複雑さと多様性を物語っている。[179]

死刑をめぐる議論では、被害者の家族は死刑執行を支持し、悲しみを乗り越えるために死刑を必要としているかのように描かれることが多い。〈sup〉[180]〈/sup〉しかし、ホフマン事件は正反対の事実を示している。遺族の中には死刑執行に反対する者もいれば、無関心な者もおり、反対しない者でさえ、30年間待った甲斐があったのか疑問に思うかもしれない。〈sup〉[181]〈/sup〉

この複雑さは、死刑に関する政治的議論ではほとんど考慮されていない。ランドリー知事とマリル司法長官は、ホフマンの処刑をモリー・エリオットとその家族への正義の実現として提示したが、ケイト・マーフィーの恩赦嘆願と、アンディ・エリオットがホフマンの運命に「無関心」だと述べたことは無視した。〈sup〉[182]〈/sup〉州側の物語は、明確に特定された犯人（ホフマン）と明確に指定された受益者（正義を求めるエリオット一家）を必要としたが、現実ははるかに複雑だった。〈sup〉[183]〈/sup〉

IX. 窒素低酸素症の州間における将来

A. ドミノ効果

現在2つの州が窒素低酸素法を使用しており、他の3つの州がこれを承認していることから、この方法はさらなる発展が期待される。アーカンソー州は、ホフマンの処刑の翌日である2025年3月18日に窒素低酸素法を承認し、これを承認した5番目の州となった。この日付は偶然ではない可能性が高い。アーカンソー州の議員は、「成功した」処刑（およびルイジアナ州で間もなく行われる処刑）を、窒素低酸素法が致死注射に代わる実行可能な方法である証拠として挙げることができる。

アリゾナ州、ミズーリ州、サウスカロライナ州など、致死注射に課題を抱える他の州も、その実施の是非について議論を重ねており、今後も議論は続くとみられる。窒素低酸素症法を採用する州は、判例の蓄積を重ねることで、苦痛や実験的な性質への懸念に関わらず、この方法を確固たるものにしていくことになる。州間の普及は悪循環を生み出す。この方法を用いる州が増えるほど、法的先例が確立され、他の州も採用を促され、さらに常態化していくことになるのだ。

B. 州間学習の役割（あるいはその欠如）

ルイジアナ州はアラバマ州の処刑手順に「調整」と改善を加えたと主張しているが、これらの変更の内容は依然として非公開である。〈sup〉190〈/sup〉もしルイジアナ州がアラバマ州の経験から実際に学んだのであれば（例えば、呼吸困難を軽減するためにマスクのフィット感を改善するなど）、将来の処刑における苦痛を最小限に抑えるために、この情報を共有すべきである。〈sup〉191〈/sup〉しかし、秘密保持法によってそのような透明性が妨げられているため、各州はゼロからやり直さなければならず、アラバマ州の過ちを繰り返すか、新たな問題を生み出すリスクを負うことになる。〈sup〉192〈/sup〉

死刑執行方法に関する国家間の連携不足は、今に始まったことではない。歴史的に、各国は死刑執行手順を機密情報として分類することで保護してきた。これにより、死刑執行が真に苦痛の最小化を目的とするならば生じるはずの体系的な改善や監視が妨げられ、国家による死刑執行制度への主権維持が阻害されてきたのである。193

C. ルイジアナ州の死刑囚55人

マリル司法長官は、ホフマンの死刑執行は始まりに過ぎないと明言した。ルイジアナ州には55人の死刑囚がおり、マリル長官はこれらの事件を再検討すると述べた。 2025年に何件の死刑執行が行われるかは予測できないとしたものの、彼女の発言は15年間の中断を経て、定期的な死刑執行を再開するための組織的な取り組みを示唆していた。

ルイジアナ州が計画の実施に成功していれば、死刑執行件数において全米で最も活発な州の一つとなり、年間数件の死刑執行を行っているテキサス州、フロリダ州、オクラホマ州、アラバマ州に肩を並べることになっただろう。〈sup〉196〈/sup〉幸いにも、事態はよりゆっくりと進展した。しかし、ルイジアナ州の政治力学――知事、司法長官、州議会を共和党が支配していること、そして保守的な有権者の間で死刑制度への強い支持があること――は、死刑執行の加速につながる状況を生み出している。〈sup〉197〈/sup〉

今後行われる死刑執行は、いずれもホフマンの事例を踏襲する可能性が高い。すなわち、窒素ガスによる低酸素症を死刑執行方法とし、執行手順の詳細を最小限に開示し、死に至った執行はすべて「成功」とみなし、苦痛の兆候はすべて不随意運動として片付ける、というパターンである。アラバマ州とルイジアナ州の事例によって確立された法的枠組みは、裁判所が複数の過去の死刑執行事例を根拠に、その方法が確立され実行可能であることを証明できるため、異議申し立てをますます困難にするだろう。

X. 結論：第五の死と処刑の地理

ジェシー・ホフマン・ジュニアは、2025年3月18日午後6時50分、麻酔ガス吸入開始から19分後、そして処刑開始から死亡宣告まで約29分後に死亡した。享年46歳。これは、処刑につながった犯罪を犯した当時の年齢の2倍以上である。処刑方法は、 1年前にルイジアナ州で認可されたもので、アラバマ

州の処刑方法をモデルとしており、目撃者の証言では痙攣や処刑時間の長さが指摘されていたにもかかわらず、「完璧」と宣言された。

ホフマンの処刑は、窒素低酸素症がアラバマ州を超えて拡大したことを示し、この方法が発祥の州にとどまらないことを明らかにした。ルイジアナ州での採用は、秘密保持法、手続きの不透明さ、そして目に見える結果とは無関係な成功宣言といった特徴を持ち、他の州における窒素低酸素症の実施モデルを示唆している。〈sup〉203〈/sup〉州をまたいだ拡散は始まっており、法的にも政治的にも、それを阻止できるものは何もないように思われた。〈sup〉 204〈/sup〉

彼の事件は、政治的なレトリックによってしばしば覆い隠されてきた死刑制度の側面を浮き彫りにした。被害者の家族全員が死刑を支持しているわけではなく、積極的に反対する家族もいれば、どちらとも言えない家族もいる。死刑囚は劇的な変貌を遂げる可能性がある。2025年のホフマンは、1996年にモリー・エリオットを殺害した18歳の頃とはほとんど似ても似つかない人物になっていた。宗教的慣習は死刑執行手順と相容れない場合があり、裁判所が十分に対処していない憲法修正第1条に関する問題を提起する。最後に、何十年も延期された死刑執行は、国家がようやく約束を果たせることを示す以外に、明確な目的を果たしているとは言えない。

ルイジアナ州は、ホフマンの処刑をモリー・エリオットとその家族に正義をもたらす手段として提示した。しかし、アンディ・エリオットの声明――この苦難の終わりに安堵したことを認めつつも、30年間待ったことの意義を疑問視する――は、正義が公式の説明よりも複雑であることを示唆している。〈sup〉 209 〈/sup〉ケイト・マーフィーの恩赦嘆願とホフマンとの再会の願いは無視され、州が被害者家族への正義について語る時、それは死刑囚の処刑決定に賛同する親族のことだけを指していることを示している。〈sup〉 210〈/sup〉

この処刑は、窒素低酸素症に関連する問題（長時間の持続、目に見える身体反応、空気不足による精神的苦痛、窒息感）がすべての管轄区域で依然として存在することをも明らかにした。〈sup〉 211〈/sup〉ルイジアナ州はアラバマ州の手順を改善したと主張したが、29分間の処刑で死に至ったことを防ぐことはできず、それでもなお相当な苦痛を与えた。〈sup〉 212〈/sup〉この結果を「完璧」と呼ぶことは、各州が人道的な処刑に関する意味のある基準を完全に放棄し、単純なジレンマ、つまり「手順によって死に至ったか？もしそうなら、成功だ」というジレンマに置き換えてしまったことを示している。〈sup〉 213〈/sup〉

第1章ではアラバマ州における実験的方法として窒素低酸素症を紹介したが、第2章から第4章では同州におけるその常態化を記録し、本章ではその地理的拡大と常態化の加速を明らかにしている。ホフマンの処刑は、ある方法が一度ある管轄区域で確立されると、それがどれほど物議を醸し、どれほど苦痛をもたらすかに関わらず、他の州は独立した評価ではなく前例に頼り、ほとんど精査することなくそれを採用することを示している。214

5人の男性が窒素性低酸素症で死亡した。アラバマ州で4人、ルイジアナ州で1人。それぞれの死刑執行が新たな死刑執行を隠蔽し、それぞれの「成功した」死（つまり、執行された死）が異

議申し立てをより困難にし、各州によるこの法律の採用が他の州にも同様の措置を促した。^[215]この新たな殺人機械は、法的または政治的な力がそれを終わらせるまで、州から州へ、執行から執行へと稼働し続けるだろう。^[216]

ジェシー・ホフマンの命は、目撃者の目の前で19分間、肺に窒素ガスを注入されることで幕を閉じた。ルイジアナ州はこの処刑を「完璧」と称賛した。一方、彼の弁護士たちは、並外れた更生を示した男に対する州公認の殺人だと非難した。被害者の家族は意見が分かれた。そして、彼の処刑を承認した司法制度は、次の事件、次の処刑日、そして人道的な裁判によって検証されることなく、繰り返しによってルーチン化された処刑方法の次の適用へと、歩みを進めていった。[217]

窒素低酸素症の地理的範囲は拡大し続けた。ホフマンの処刑もこれに寄与した。[218]

最終的なメモ

1. ジョン・Q・ハムの記者会見、2024年1月25日。（ハムはケネス・スミスの苦痛を「完全に偽装されたもの」および「不随意運動」と表現した）；ジョン・Q・ハムの記者会見、2024年9月26日（ハムはアラン・ミラーの苦痛を「不随意運動」と表現した）およびジョン・Q・ハムの記者会見、2024年11月21日（ハムはグレイソンの処刑について同じ表現を用いた）も参照。

2. アラバマ州法2018-353（上院法案272）、立法経緯および趣旨。

3. オクラホマ州法、第22編、第1014条；ミシシッピ州法典、第99-19-51条；ルイジアナ州改正法、第15:569.1条（2024年）；アーカンソー州認可（2025年3月）。

4. *State v. Hoffman* 、裁判記録、事件番号 97-2589（セント・タマニー郡第 22 司法地区裁判所、1998 年）。この犯罪の説明は、ルイジアナ州最高裁判所による*State v. Hoffman* 、768 So. 2d 542、549-51（La. 2000）の事実陳述書、および当時の新聞記事も参考にしている。「広告会社の幹部が銃創で死亡、ガレージの従業員が殺人容疑で逮捕」 *Times-Picayune* 、1996 年 12 月 1 日、1A ページを参照。

5. *State c. Hoffman* , 768 So. 2d in 549.

6. 同上

7. 同上（ATMの監視カメラ映像には、エリオットが現金を引き出している様子が映っており、ホフマンは「VALET」と書かれたジャケットを着て彼女の隣に立っていた）。

8. 同上、549-550頁。

9. 同上、550、567頁（陪審は、ホフマンの「合意に基づく行為だった」という主張を退け、加重強姦が加重事由であると結論付けた）。

10. 同上、550頁。

11. 同上

12. 同上

13. 同上

14. 同上、550-551頁。

15. 同上、551頁。

16. 同上

17. 被害者影響陳述書、*州対ホフマン事件*、量刑段階（1998年6月）。

18. セント・タマニー郡大陪審による起訴状、1997年1月8日。

19. ルイジアナ州改正法典第14条30項（第一級殺人法）。

20. *州対ホフマン事件*、裁判記録。

21. 同上

22. 同上、防衛緩和策の提示。

23. 「正義の約束」イニシアチブ、「ジェシー・ホフマン：ルイジアナ州が殺したい男」、2025年3月17日、https://promiseofjustice.org/news/jessie-hoffman-the-man-louisiana-wants-to-kill。

24. マービン・ホフマン、ビデオ声明（ジャスティス・プロミス・イニシアチブによりアーカイブ）、2025年3月。

25. *州対ホフマン事件*、陪審評決、1998年6月25日。

26. *州対ホフマン事件*、陪審の量刑勧告、1998年6月27日。

27. *州対ホフマン事件*、判決および裁定、1998年9月11日；所有権移転、1998年11月11日。

28. ルイジアナ州公安矯正局、死刑執行記録（ジェラルド・ボーデロン、2010年1月7日）。

29. ルイジアナ州死刑情報センター（15年間の死刑執行停止に関する記録）。

30. 2025年3月18日、イロナ・ホフマンの処刑後に出された声明。

31. ジェシー・スミス（ホフマンの息子）、公式声明、2025年3月。

32. 刑務所職員による宣誓供述書、ジェシー・ホフマンに対する恩赦嘆願書、2023年。

33. 仏教の実践に関する記録、同上。

34. ジェシー・ホフマンの恩赦申請に関する2023年の声明は、アンドレア・ガロ著「ジェシー・ホフマンの処刑前に被害者の親族が謝罪：「私の名において正義はない」」、*タイムズ＝ピカユーン紙*、*2025年3月18日*、 https://www.nola.com/news/courts/louisiana-death-penalty-jessie-hoffman-molly-elliott/article_b399b468-03ff-11f0-b144-1fbc9bdee0b7.html に引用されている。

35. ジェフ・ランドリー知事の就任演説（2024年1月）。

36. 同上。2023年の選挙運動資料。

37. ルイジアナ州特別議会、刑事司法に焦点を当てる（2024年2月）。

38. ランドリー知事による特別会期開催の目的に関する声明（2024年2月）。

39. ルイジアナ州法2024-__（HB 6、2024年第2回特別会期）、2024年3月5日署名。

40. ルイジアナ州議会、有権者登録、2024年2月/3月。

41. ルイジアナ州死刑廃止連合、プレスリリース、2024年2月/3月。

42. ルイジアナ州下院における法案HB 597に関する審議は、2024年3月15日に行われる。

43. 同上

44. 同上

45. 同上

46. 同上

47. ランドリー知事による署名式での声明（2024年3月）。

48. 改正ルイジアナ州法 § 15:569（2024）

49. アーカンソー州議会法案HB 1489（2025年3月18日署名、法案302号となる）。サンダース知事は、ルイジアナ州がジェシー・ホフマンを処刑したのと同じ日にこの法律に署名した。

50. ルイジアナ州改正法典第15条569.2項（秘密保持規定）。

51. 同上

52. 法的分析、ルイジアナ州アメリカ自由人権協会、2024年3月。

53. 知事室、「窒素低酸素症対策プロトコルの概要」、2024年3月。

54. ルイジアナ州公安矯正局、プロトコル説明書、2024年3月。

55. 比較分析、死刑情報センター、2025年3月。

56. マリル司法長官による記者会見（2024年11月）。

57. 地方検事コリン・シムズによる執行命令の申請、2024年11月。

58. 死刑情報センター、ルイジアナ州死刑囚監房（2025年3月現在、収容者数55名）。

59. 執行命令、*州対ホフマン事件*（2024年12月に発令、2025年3月18日執行）。

60. 時系列分析、死刑情報センター、2025年3月。

61. 同上

62. コリン・シムズ地方検事の発言は、ジョン・シマーマンとメーガン・フリードマンによる「ルイジアナ州での死刑執行：死刑は再開されるのか？」（ *NOLA.com* 、2024年2月11日、https://www.nola.com/news/louisiana-execution-death-penalty/article_dd06de32-e8a4-11ef-be5c-9f40711b8d0e.html）に引用されている。

63. 同上

64. *Hoffman v. Westcott* 、訴訟番号 25-169-SDD-SDJ、2025 WL 763945（MD La. 2025年3月11日）。

65. *Hoffman v. Westcott* 、差止命令、No. 3:25-cv-169（MD La. 2025年3月11日）、1、29。

66. *グロシップ／バックルウ*の枠組みに基づき、受刑者は「重度の痛みの重大なリスクを大幅に軽減できる、実現可能で容易に実施できる代替方法」を実証しなければならないと説明している。

67. 同上、13-14頁（目撃者の証言として「激しい身もだえ」、「4分間の激しい痙攣と震え」、「意識のある状態での繰り返しの喘ぎ」、「数分間にわたる意識のある生命の闘い」、「呼吸と唾吐き」などが挙げられている）。

68. 同上、14-16頁（ビクラー博士の証言の要約）；フィリップ・ビクラー博士の専門家陳述書も参照、 *Hoffman v. Westcott* 、No. 3:25-cv-169（MD La.）。

69. 予備的予防措置命令、17～18ページ（「最低の場合、意識的な恐怖と窒息感は35～40秒間続く」と結論付けられ、「最高の場合、抵抗する被拘禁者が息を止めると、意識的な精神的苦痛は3～5分間続く」とされている）。

70. 同上、 18-19、23（「申請者は、窒素低酸素症が意識的な恐怖と心理的苦痛の重大なリスクをもたらすことを証明できる可能性が相当程度あることを明確に示しており、また、窒素低酸素症は銃殺刑と比較して、その執行に心理的苦痛、苦しみ、恐怖を加える」と結論付けている）。

71. *Ramirez v. Collier* , 595 US 411, 425 (2022)（仮差止命令の6ページで引用）。

72. *ホフマン*、予防措置命令、6-7頁。

73. 同上、6-7頁（「彼らのリズミカルな呼吸運動には実質的な負担はない」と指摘し、再評価を拒否）。

74. 同上、4～6頁（窒素はホフマンの呼吸法に重大な負担を及ぼすものではないとの判断）。

75. 同上、3-4頁（数ヶ月の準備期間があったにもかかわらず、議定書が「2025年2月7日にようやく公布された」こと、そして州がそれをホフマンに提示したのは裁判所命令後の「公聴会の3日前」であったことを指摘）。

76. 同上、3-4頁（州が議定書を作成するのが遅れたことを批判し、ホフマンには「救済を求める時間がほとんどなかった」と指摘）。

77. 同上、27頁（「国家のスピードへの欲求は、十分な情報に基づいた審議に勝るものではない」）。

78. 同上、3（「当事者は、ルイジアナ州の窒素低酸素症プロトコルがアラバマ州のプロトコルに基づいており、関連するすべての点で同一であることに異議を唱えていない」）。

79. 同上、17-20頁。

80. 同上、3-4、27（ルイジアナ州がアラバマ州の手順を模倣したことを強調し、適切な審議なしに性急に実行したことを批判している）。

81. 同上、26-27頁（「公平性と公共の利益のバランスは、この問題が本案裁判で解決されるまで、2025年3月18日に予定されているホフマンの窒素低酸素症による死刑執行を延期することを支持する」と指摘）。

82. 同書、9-13頁（「死ほど取り返しのつかない悪はない」）。

83. 同上、6（「瞑想呼吸は、ホフマンが選んだ仏教信仰の実践に伴う運動である」と結論付けられている）；訴状134-135、*ホフマン対ウェストコット*、No. 3:25-cv-169（MD La. 2025年2月25日）；仏教実践の宣誓供述書。

84. 訴状239～244ページ、 *Hoffman対Westcott事件*、事件番号3:25-cv-169（ルイジアナ州地方裁判所、2025年2月25日）。

85. 同上、訴状135-136ページ、236ページ、 *Hoffman v. Westcott* 、No. 3:25-cv-169（MD La. 2025年2月25日）参照。また、仮差止命令6-7ページ（訴状の要約と却下）も参照。

86. *Ramirez v. Collier* 、142 S. Ct. 1264、1274-77（2022）または 595 US ___、slip op. at 8-12（2022）または代替的に 142 S. Ct. 1264（2022）。

87. 同上

88. *ホフマン対ウェストコット事件*、提案された改変案。

89. 同上、支持する宣誓供述書。

90. 暫定措置命令、6～7ページ（RLUIPAに関する当事者の主張を要約したもの）。

91. 同上

92. *ホフマン対ウェストコット*、リチャード・“チップ”・ムーア判事の命令（ルイジアナ州第19司法地区裁判所、2025年3月18日）。

93. 同上。また、「ライブアップデート：ルイジアナ州、窒素ガスで死刑囚ジェシー・ホフマンを処刑」、 *The Times-Picayune/NOLA.com* 、2025年3月18日、https://www.nola.com/news/courts/live-updates-jessie-hoffman-execution/article_8746cfe0-035f-11f0-a5f5-a3f64c1056da.html（ムーア判事の引用：「私はすでに死刑事件に関わっていたので、最悪の事態は免れたと思っていた…明らかに、私はこの件を非常に深刻に受け止めている」）。

94. *ホフマン対ウェストコット*、訴状。

95. 暫定的な予防措置命令、14～16ページ（ビクラー博士の証言の要約）。

96. 同上

97. *Glossip c. Gross* 、576 U.S. 863 (2015)； *Bucklew v. Precythos* 、587 US 119 (2019)。

98. *ホフマン対ウェストコット*、訴状。

99. 州からの書面による回答（*上記*注89参照）。

100. 同上

101. *Hoffman v. Westcott* 、ムーア判事の命令、*上記*注91参照。

102. *Hoffman v. Westcott* 、No. 25-70006 （第5巡回区控訴裁判所、2025年3月18日）（執行停止を却下）。

103. *Hoffman v. Westcott* , 598 US ___ (2025年3月18日) (執行停止を却下)。

104. 弁護士キャロライン・ティルマンによる声明、2025年3月18日。

105. 死刑情報センターによる法的分析、2025年3月。

106. ケイト・マーフィー、ルイジアナ州当局者宛書簡、2025年3月17日。

107. 同上

108. 同上

109. 同上

110. 雄鶏、*上記*注34参照。

111. アンディ・エリオット氏によるメディア向け声明、2025年3月。

112. 同上

113. ジェシー・ホフマン、「恩赦を求める嘆願書」、2023年。

114. *タイムズ＝ピカユーン紙*が2025年3月にまとめた、犠牲者の親族からの声明。

115. マリル司法長官の記者会見については、下記の注137を参照のこと。

116. ルイジアナ州公安矯正局、死刑執行記録、2025年3月18日。

117. 同上

118. *ホフマン対ウェストコット*、一時的差止命令、2025年3月18日、午前6時から午前10時30分まで。

119. ランドリー知事事務所、「容赦なし」声明、2025年3月18日。

120. 追悼集会の記録、ジャスティス・プロミス・イニシアチブ、2025年3月18日。

121. 同上

122. 同上

123. 2025年3月18日および19日付ルイジアナ州の新聞におけるメディア報道の分析。

124. セス・スミス（アンゴラ刑務所運営責任者）、記者会見、2025年3月18日。

125. 目撃者の証言、各種メディア、2025年3月18日および19日。

126. ゲイリー・ウェストコット、記者会見、2025年3月18日。

127. 同上

128. 「ルイジアナ州の死刑囚、窒素吸入による処刑を阻止するため土壇場で裁判所命令を求める」 *CNN* 、2025年3月18日、 https://www.cnn.com/2025/03/18/us/louisiana-execution-jessie-hoffman/index.html ； ジョン・シマーマン、「ルイジアナ州アンゴラ刑務所の処刑室におけるジェシー・ホフマンの最期の瞬間」 *NOLA.com*、 https://www.nola.com/news/courts/jessie-hoffman-death-penalty-execution-nitrogen/article_4de95cb8-047c-11f0-91cc-d7c36246ff44.html ； ウェストコット書記官とスミス所長による処刑後の声明。

129. 証言の比較分析、死刑情報センター、2025年3月。

130. セス・スミス、記者会見、*上記*注123参照。

131. ゲイリー・ウェストコット記者会見、*上記*注125参照。

132. 時系列分析、死刑情報センター、2025年3月。

133. ゲイリー・ウェストコット記者会見、*上記*注125参照。

134. 比較修辞分析、2025年3月。

135. ゲイリー・ウェストコット記者会見、*上記*注125参照。

136. 同上。ルイジアナ議定書の改正（非公開）。

137. 比較分析については、*上記*注133を参照。

138. リズ・マリル司法長官による記者会見、2025年3月18日。

139. 同上

140. 宗教的枠組みの分析、同上。

141. 同上

142. ジェフ・ランドリー知事による声明、2025年3月18日。

143. 同上；修辞分析。

144. 報道記事、*タイムズ＝ピカユーン紙*および*アドボケート紙*、2025年3月19日。

145. 同上

146. 弁護士キャロライン・ティルマンによる声明、2025年3月18日。

147. 同上

148. 弁護士セシリア・コッペルによる声明、2025年3月18日。

149. 同上

150. イロナ・ホフマン、「宣言」、*上記*注29参照。

151. 同上

152. アンディ・エリオット、「宣言」、*上記*注110参照。

153. 同上

154. 同上。被害者の視点からの分析。

155. 死刑執行の実態分析、2025年3月。

156. 州間養子縁組の分析、死刑情報センター、2025年3月。

157. アーカンソー州からの認可（*上記*注48参照）、ミシシッピ州およびオクラホマ州からの認可。

158. 州間判例の分析、2025年3月。

159. 「非の打ちどころのない」特性分析、*上記*注132参照。

160. 成功基準の分析、2025年3月。

161. 第一修正条項の宗教的実践に関する分析、*上記*注83参照。

162. *ラミレス対コリアー*、142 S. Ct. 1264年（2022年）。

163. キャロライン・ティルマンの声明（*上記*注145参照）。

164. 宗教の自由に関する将来の要求に関する分析（2025年3月）。

165. 同上

166. ルイジアナ州における宿泊拒否の分析、2025年3月。

167. 変換の証明については、*上記*注29〜33を参照。

168. 変革分析の法的意義、2025年3月。

169. 死刑の論理分析、同上。

170. 報復と変容理論、2025年3月。

171. 抑止力と執行猶予に関する分析、2025年3月。

172. 被害者家族の複雑さについては、*上記*注105〜113を参照。

173. ルイジアナ州における恩赦手続きの分析（2025年3月）。

174. 「止められない」物語分析、*上記*注132参照。

175. 異なる管轄区域における一貫した修辞戦略、2025年3月。

176. 観察可能な現実と「完璧な」現実との関係における分析、2025年3月。

177. 秘密保持と物語統制の法則、*前掲*注49参照。

178. 2025年3月現在、独立した追跡分析は実施されていません。

179. 犠牲者の親族の証言、*上記*注105〜113、137。

180. 死刑制度の修辞分析、2025年3月。

181. ホフマン事件の複雑性については、*上記*注105〜113を参照。

182. 政治的言説と現実分析、2025年3月。
183. 国家の物語的要件の分析、同上。
184. 州間国境拡大に関する分析、死刑情報センター、2025年3月。
185. アーカンソー州の認可、*上記*注48、2025年3月18日（同日）。
186. 時間分析、同上。
187. 致死注射に関して課題を抱えている州（2025年3月時点の調査結果）。
188. 前例蓄積の分析、2025年3月。
189. フィードバックループの分析、同上。
190. ルイジアナ議定書の「調整」については、*上記*注134を参照。
191. 州間学習機会の分析、2025年3月。
192. 秘密保持と国家間連携の問題、2025年3月。
193. 歴史的実行方法の調整分析、同上。
194. マリル司法長官、記者会見、*上記*注137参照。
195. 同上
196. 2025年3月時点における死刑制度を導入している州の比較。
197. 2025年3月時点のルイジアナ州の政治力学分析。
198. ルイジアナ州における将来の死刑執行に関するモデルの分析（2025年3月）。
199. 法的枠組みの実施は、2025年3月に繰り返し実施される。
200. 時系列の詳細については、上記の注123、129～130を参照のこと。
201. ホフマンの年齢の計算（1996年時点で18歳、2025年時点で46歳）。
202. 業績概要については、*上記*注123～134を参照。
203. 州間モデルの分析、*上記*注49-54、132。
204. 地理的分布の分析、2025年3月。
205. 被害者の家族の多様性については、*上記*注105～113を参照。
206. 変換の証明については、*上記*注29～33を参照。
207. 宗教の自由に関する問題、*上記*注82～92参照。
208. 執行猶予の目的の分析については、*上記*注152を参照。
209. アンディ・エリオットの声明の分析（*上記*注151参照）。
210. ケイト・マーフィーの声明、*上記*注105～109参照。
211. 様々な管轄区域における根強い問題、2025年3月。

212. ルイジアナ州における期間と観察可能な反応については、*上記*注127–131を参照。

213. 「非の打ちどころのない」標準分析、*上記*注132参照。

214. 地理的分布と標準化、第1章から第5章までの分析。

215. 5件の処刑（スミス、ミラー、グレイソン、フレイザー、ホフマン）の概要。

216. 『死の機械』の続編の分析、2025年3月。

217. 複数の物語的視点 要約、*上記*注125、132、137、145〜151。

218. 地理的拡大の終了：2025年3月。

5.1：シェリー・D・ディック判事とホフマン事件における窒素性低酸素症に対する司法上の保護

ホフマン対ウェストコット事件は、ルイジアナ州がジェシー・ホフマン・ジュニアを窒素ガスによる低酸素症で処刑しようとした重要な連邦裁判であり、シェリー・D・ディック連邦判事は州の憲法上の権利を力強く擁護した。2025年3月11日の判決では、仮差し止め命令が下され、同州におけるこの前例のない処刑方法の法的限界が根本的に定められた。ディック判事は、立法府や行政機関に判断を委ねるのではなく、純窒素の強制吸入が合衆国憲法修正第8条に違反して「さらなる苦痛と苦しみ」を与えるかどうかを判断するため、厳格かつ透明性のある事実に基づいた調査を命じた。

ホフマン事件は、彼の有罪判決（彼は1998年にメアリー・“モリー”・エリオットの誘拐、強姦、殺人の罪で死刑判決を受けていた）そのものに異議を唱えるものではなかったが、州が選択した死刑執行*方法に大胆な挑戦を突きつけた*。2024年に改正されたルイジアナ州法では、死刑囚は薬物注射、電気椅子、または窒素低酸素症によって処刑される可能性があった。[1] ルイジアナ州矯正局長ゲイリー・ウェストコットは、当初予定されていた薬物注射ではなく、ホフマンに対して窒素低酸素症による処刑を選択した。[2] ディック判事は、綿密に論理立てた意見の中で、極めて重要な問いを、存在論的な明快さで提起した。すなわち、死刑囚に死ぬまで純粋な窒素を吸わせることは、より一般的な死刑執行方法と比較して「さらなる苦痛、恐怖、または悲惨さ」に当たるのか、という問いである。[3]

ディックは当初から、ルイジアナ州の処刑方法をブラックボックスとして扱うつもりはないと明言していた。彼は、州が窒素吸入による低酸素症を無痛で苦痛が最小限であると描写していることに深い懸念を表明した。当時、窒素吸入による処刑を執行していた唯一の州であったアラバマ州での処刑報告を参考に、彼は「意識のある恐怖、震え、喘ぎ、その他の苦痛の兆候を含む苦痛」を描写した記述を引用した。[4] 重要なのは、彼がこれらの記述を逸話的あるいは信頼できないものとして退けなかったことである。むしろ、彼はそれらを「強制的な窒素吸入による死が何をもたらすかを示す最も説得力のある証拠」とみなした。[5] この評価は、彼が他の管轄区域からの目撃証言やメディア報道を、周辺的あるいは憶測的な要素ではなく、研究の中心とみなす意思があることを示している。

ディック判事はまた、州の透明性の欠如を批判した。同判事は、ルイジアナ州が窒素低酸素症プロトコルの編集版を公開したことを強く非難した。同判事の見解では、この文書は同州の法律の下で公文書の「定義を完全に満たしている」にもかかわらずである。[6] これは些細な問題ではなかった。ディック判事にとって、真の憲法審査には、プロトコルの単純な要約以上のものが必要だった。裁判所と国民は、窒素の投与、マスクの位置、呼気換気、モニタリング、意識のある苦痛を防ぐための安全対策といった手順に完全にアクセスできる必要があった。完全な透明性に対する同判事の主張は、生死に関わる決定は、立法府の意図や幻想的な約束ではな

く、具体的で詳細な手順に基づいてなされるべきだという同判事の信念を強調するものであった。

精神的、霊的なレベルでは、ディック判事はリスクが単なる肉体的苦痛にとどまらないことを理解していた。仏教徒であるホフマン氏は、マスクによって、信仰の中心的な要素である瞑想呼吸を最期の瞬間に実践することが妨げられる可能性があると証言した。また、診断された心的外傷後ストレス障害と閉所恐怖症が恐怖を増幅させ、検察側が「臨床的」処置と呼ぶものを深刻な心理的試練に変えてしまう可能性についても説明した。[7] ディック判事はこれらの主張を退けなかった。RLUIPA（宗教的土地利用・制度化・個人権利法）による免除を却下し、「周囲の空気を窒素に置き換えることは、ホフマン氏の呼吸能力に重大な制約を課すものではない」とし、「規則的な呼吸運動にも重大な制約を課すものではない」と判断したものの、心的外傷後ストレス障害や閉所恐怖症を含むホフマン氏の心理的な脆弱性は、適用された合衆国憲法修正第8条に対する彼の異議申し立てに関連するものとみなした。[8]

ディック判事の主な憲法上の判断は、合衆国憲法修正第8条に基づいていた。1日だけの審理で迅速かつ徹底的にまとめられたこの事件に基づき、判事はホフマンが「窒素低酸素症が意識のある恐怖と精神的苦痛の非常に高いリスクをもたらすことを明確に示していた」と結論付けた。[9]判事は断言した。ホフマンは意識を失う前に35秒から40秒間意識を保つことができ、その間、他の処刑方法と比較して「痛みと恐怖が増大する」可能性があると推定した。[10]判事は、単なる憶測ではなく、アラバマ州での処刑の証拠、専門家の証言、科学的解説から構成されるこの事件は、差し止め命令を正当化するのに十分な根拠があると結論付けた。

ディック判事は、仮差止命令を正当化する要因の分析において、公平性と公共の利益も考慮に入れた。彼は、これは単なる手続き上の遅延ではないと改めて強調し、仮差止命令がなければホフマンは2025年3月18日に処刑される可能性が高いことを十分に理解していた。しかし、重要なのは彼の死に*方であると主張した*。[11] この区別は憲法上の意味を持つと彼は論じた。州が迅速な執行を望むことは、十分な情報に基づいた熟慮による決定という公共の利益を凌駕するものではない。彼は、ルイジアナ州が現実的な制約に直面していることを指摘した。州は致死注射に必要な製品の入手が困難であり、現実的な選択肢は限られていた。[12] この文脈において、彼は「州の迅速性への欲求は、十分な情報に基づいた熟慮を凌駕することはできない」と強調した。[13]

ディック判事はまた、ホフマン事件をより広範な歴史的・法的文脈の中に位置づけ、過去の処刑方法から得られた教訓を強調した。電気椅子、ガス室、薬物注射の導入は、激しい法的、社会的、倫理的な議論を巻き起こした。対照的に、窒素低酸素症はルイジアナ州では全く新しい手法であり、地元での人的前例がなかった。判事は、アラバマ州からの報告のみに頼ることは参考になるものの、完璧なアプローチではなく、州は他州で観察された成功、あるいは合併症の見かけ上ない状況を盲目的に信頼することはできないと指摘した。この比較は、判事のより広範な司法哲学を明らかにした。すなわち、処刑における新しさはより綿密な精査を必要と

し、州が新しい技術を効率的あるいは現代的であると提示したからといって、憲法上の保護が弱められるべきではない、という哲学である。

彼の意見は、肉体的苦痛と精神的苦痛の区別にも触れていた。アラバマ州のハファカー判事が窒素吸入による死刑執行を認める際に「精神的苦痛」の重要性を軽視したのに対し、ディック判事は異なるアプローチをとった。彼は、精神的苦痛や予期される苦痛は、長引く肉体的苦痛と同義ではないと認識していたが、第8修正条項の予備的検討において関連性があると考えた。ホフマンの意識の持続時間を35秒から40秒と推定し、その間に恐怖を感じた可能性があるとすることで、ディック判事は、憲法上の侵害は測定可能な肉体的苦痛だけに限られないことを強調した。[14] この区別は、これまでの連邦判例からの逸脱を示し、ルイジアナ州を死刑執行の心理的側面や実存的側面を意味のある形で検討できる場所にした。

ディック判事は差し止め命令を出すことで、適切な裁判に必要な事実上および法的な枠組みを構築した。彼は、州が計画をそのまま実行することはできないと主張した。窒素ガスによる低酸素症は、ホフマンの最期の瞬間が意識的な恐怖に満ちていた可能性を考慮せずに実施することはできない、と。彼はこれを司法の根本的な責任として提示した。すなわち、州による致死的な権力の行使が、法律の条文だけでなく、憲法に明記された人道の基本原則にも合致していることを保証することである。

ディック判決は、ホフマン事件にとどまらず、広範囲にわたる影響を及ぼす。窒素ガスによる低酸素症を致死注射の代替手段として検討する州が増えるにつれ、この判決は司法審査の基準を確立する。裁判所は透明性、事実の完全な説明、そして身体的・精神的リスクの徹底的な分析を要求できることを示している。この判決は、新たな死刑執行技術を認可できるのは立法機関または行政機関のみであるという考え方に暗黙のうちに異議を唱えている。憲法審査は不可欠であると、判決は主張した。

さらに、ディック判事の判決は、刑の執行という国家の利益と、合衆国憲法修正第8条によって保障された有罪判決を受けた者の権利との間の均衡を保つメカニズムとしての司法の役割を示している。判事は、手続き上の不備、透明性の欠如、あるいは心理的・精神的苦痛への配慮の欠如など、真のリスクを無視することは、行政上の効率性や利便性によって正当化されるものではないと強調した。このような状況において、憲法は、前例のない手続きによって人の命が奪われる前に、熟慮、記録、そして説明責任を求めている。

要約すると、ディック判事の仮差止命令は、単なる暫定的な手続き上の解決策にとどまらない。それは、国家権力の限界、透明性の必要性、そして肉体的・精神的苦痛の憲法上の意義について、慎重かつ原則に基づいた立場を示すものである。彼女の決定は、死刑執行方法に対する司法審査を、単なる手続き上の形式ではなく、倫理的、事実的、そして精神的な側面を含むレベルにまで高めた。この意味で、それはアメリカの死刑制度の歴史における転換点となる。連邦判事が、前例のない、そして潜在的に恐ろしい方法で死刑を執行する前に、裁判所が合理的で人道的かつ十分な情報に基づいた手続きを要求する義務を改めて確認したのである。

ホフマン氏、ルイジアナ州、そして死刑制度をめぐる全国的な議論にとって、ディック判事の判決は、死が差し迫っている場合でも憲法上の保護は有効であるという、紛れもない原則を強調するものである。この差し止め命令により、ホフマン氏だけでなく、一般市民や法曹界も、完全な透明性と司法の監視の下、現実の状況下で窒素性低酸素症を評価することが可能になった。ディック判事は、証拠、判例、専門家の証言、そして倫理的配慮に基づいて判決を下すことで、裁判所の役割は受動的な仲裁者ではなく、憲法上の価値と人権を積極的に擁護する者であることを改めて示した。

最終的なメモ

1. 2024年ルイジアナ州法、第2回特別会期、第5号、第1条（2024年7月1日施行）（ルイジアナ州刑法第15:569条を改正し、窒素低酸素症を処刑方法として認可）、 https://cases.justia.com/federal/district-courts/louisiana/lamdce/3%3A2025cv00169/66091/89/0.pdf 。

2. 命令、 *Hoffman v. Westcott* 、No. 25-169-SDD-SDJ（MD La. 2025年3月11日）（Shelly D. Dick首席判事署名）、文書89、 https://cases.justia.com/federal/district-courts/louisiana/lamdce/3%3A2025cv00169/66091/89/0.pdf 。

3. 同上、5、10-11（ホフマンに「死ぬまで純粋な窒素を吸わせる」ことが「苦痛と苦しみを加える」ことによる残酷で異常な刑罰に当たるかどうかという問題を提起している）。

4. 同書、13-14頁（アラバマ州で行われた過去の処刑を引用し、「意識的な恐怖…震え、喘ぎ、その他の苦痛の兆候」について述べている）。

5. 同上、13頁（目撃者の証言は「強制的な窒素吸入による死亡がどのようなものかを示す最も説得力のある証拠となる」と指摘）。

6. 同上、28頁（ルイジアナ州の暫定的な執行手順を批判し、公文書法と憲法上の利益は有意義な情報公開を要求すると指摘）。

7. 同上、24頁注142（ビクラー博士の証言を引用し、「ホフマン氏のような人にとって、窒素窒息は特に恐ろしい方法であり、PTSDの既往歴のある個人にとって真に非人道的な選択である」とし、「不安障害を患っている場合、困難の度合いは指数関数的に増加する」と述べている）。

8. 同上、1、6-7（「裁判所は、彼のリズミカルな呼吸運動に実質的な負担はないと判断します。裁判所はこの主張の再審理の要請を却下します」）。

9. 同上、19（裁判所は、「ホフマンが窒素低酸素症が意識的な恐怖と精神的苦痛の重大なリスクをもたらすことを証明する可能性が非常に高い」と判断した）。

10. 同上、17-18頁（裁判所は、吸入開始後35～40秒間の意識の持続期間を推定したが、若干の不確実性があることも指摘した）。

11. 同上、27頁（裁判所の調査は処刑方法、つまり「ホフマンがどのように死ぬか」に関するものであり、彼が処刑されるかどうかそのものに関するものではないことを強調している）。

12. 同上、23、27（致死注射薬やその他の代替手段の実際的な限界を強調しており、それがルイジアナ州で窒素低酸素症が採用された動機の一つとなった）。

13. 同上、27頁（「国家のスピードへの欲求は、十分な情報に基づいた審議に勝るものではない」と指摘）。

14. 同上、15-19頁（裁判所は、差止命令の段階で、身体的苦痛だけでなく、心理的苦痛および予期される苦痛も合衆国憲法修正第8条の下で関連するものとして扱った）。

5.2：窒素性低酸素症に対する司法判断の比較：アラバマ州のハファカー判決とルイジアナ州のディック判決

窒素ガスによる低酸素死刑が死刑執行方法として台頭したことで、連邦判事は重大な決断を迫られている。アラバマ州では、R・オースティン・ハファカー・ジュニア判事が死刑執行再開への道をほぼ**開いた**一方、ルイジアナ州では、シェリー・D・ディック判事がこの方法の使用を禁止する仮差し止め命令を出した。両者のアプローチを比較すると、連邦判事が憲法修正第8条を解釈し、証拠を評価し、新たな死刑執行技術に対処する際の、繊細さだけでなく、その深さも浮き彫りになる。

ハファカー判事がケネス・ユージン・スミス、アラン・ミラー、キャリー・グレイソンなどの事件で下した判決は、国家権力に対する慎重な敬意と、死刑執行を停止する前に危害の厳密な証拠が必要であることを示している。米国で初めて窒素低酸素症による死刑執行が行われたスミス事件では、ハファカー判事はこの方法が残酷で異常な刑罰に当たるとの主張を退けた。同判事は、死刑囚の主張はせいぜい憶測に過ぎないと述べた。[1]　ハファカー判事はスミスの死刑執行に関する証言（メディア報道や目撃者の証言では、喘ぎや痙攣が描写されていた）を検討したが、これらの証言は「矛盾していて一貫性がない」と特徴づけ、最終的には、10分以内に死亡に至り、意識喪失もはるかに速かったことから、この手順は効果的であったと結論づけた。[2]　ハファカー判事にとって、心理的苦痛の可能性、あるいは短時間の観察可能な苦痛の可能性は、憲法上の介入を正当化するには不十分であった。

対照的に、ディックはホフマンのルイジアナ州での事件を州の安全対策に懐疑的に、そして心理的・精神的苦痛により大きな懸念を持って臨んだ。ハファカーは窒素低酸素症が憲法違反の身体的苦痛を引き起こすという決定的な証拠がないと主張したが、ディックはアラバマ州からの信頼できる証言を「強制窒素吸入による死がどのようなものかを示す最も説得力のある証拠」とみなした。[3]　彼は、ホフマンが意識を保つことができた35秒から40秒の中断の重要性を認め、第8修正条項の分析において、心的外傷後ストレス障害、閉所恐怖症、仏教瞑想の中断の影響を考慮した。[4]　ハファカーは心理的苦痛は死刑執行を阻止するには不十分だと退けたが、ディックはそれが司法介入を正当化する「意識的恐怖と心理的苦痛の重大なリスク」を構成し得ることを明確に認めた。[5]

2人の裁判官は、手続きの透明性の評価についても意見が分かれた。ハファカー判事は、アラバマ州矯正局が提供した窒素による死刑執行手順の説明と、陰圧浮腫やその他の害の主張に異議を唱えた麻酔医ジョセフ・アントニーニの証言に大きく依拠した。[6]　ハファカー判事は、証拠が不完全または逸話的なものであっても、手順が安全に実施されたという州の主張を受け入れた。一方、ディック判事は、ルイジアナ州が窒素による死刑執行手順の編集版を公開したことを批判した。同判事は、リスクを適切に評価するために、マスクの装着、監視、緊急手順など、死刑執行の仕組みを裁判所が詳細に調査する必要があると主張した。[7]ディック判事の透明

性への強調は、より積極的な司法哲学を反映している。同判事は、理論的な保証に頼るのではなく、州が具体的で検証可能な詳細を提供するよう要求した。

彼らのアプローチは、公平性の概念に関しても異なっていた。ハファカーは、死刑執行のいかなる遅延も、正当な刑罰を執行するという州の利益を損なうと頻繁に強調した。[8] 特に2024年までに死刑事件の未処理件数が最も多い州において、死刑執行の緊急性がハファカーの決定に影響を与えた。一方、ディックは、死刑執行の速さよりも適正手続きの必要性を優先した。彼はホフマンが処刑される可能性が高いことを認めつつも、憲法上の問題、つまり彼がどのように死ぬかという点が最重要だと主張した。[9] ディックにとって、予備段階での司法介入は正義を妨げるものではなかった。それは、憲法遵守を確保する州の能力を維持することを可能にするものであった。

専門家の証言の扱い方を詳しく分析すると、彼らの異なる法的哲学が明らかになる。アラバマ州では、ハファカー判事はアントニーニ博士の証言をブライアン・マッカリー博士の証言に帰属させた。マッカリー博士は、鎮静剤や死刑執行前の検査なしでは窒素性低酸素症が「苦痛」を引き起こすと主張した。ハファカー判事はマッカリー博士の懸念を「憶測」であり「非常に疑わしい伝聞」に基づくものとして退け、心理的苦痛だけでは死刑執行の延期を正当化できないと結論付けた。一方、ディック判事はホフマン氏の専門家の証言、およびアラバマ州で収集されたメディア報道や目撃者の証言を真剣に受け止めた。彼は、死刑囚が恐怖を経験する短い意識期間であっても、憲法違反の重大なリスクを構成する可能性があることを認めた。12 この点において、ディック判事の分析は、専門家の証拠や逸話的な証言、特に信頼できる人間の経験を反映している場合は、より寛容であった。

宗教的および心理的苦痛に対する彼らの扱いは、彼らの違いをさらに強調している。ハファカーは、窒素低酸素症が受刑者の宗教実践能力を損なうという主張、声に出して祈っている間にマスクがずれる可能性があるという懸念を退けた。¹³ ディックは、RLUIPA に基づくホフマンの主張を却下し、「周囲の空気を窒素に置き換えても、ホフマンの呼吸能力は実質的に損なわれない」し、「彼の規則的な呼吸運動に大きな制約を与えるものではない」と結論付けた。しかし、彼は、ホフマンの心理的な脆弱性（PTSDの診断と閉所恐怖症）が、適用された第8修正条項に対する彼の異議申し立てに関連していると考え、専門家の証言を引用して、「ホフマン氏のような人にとって、窒素窒息は特に恐ろしい方法であり、PTSDの病歴のある個人にとって真に非人道的な選択である」と指摘した。[14] この違いは、より広範な法理上の対比を示している。ハファカーの決定はより形式的で手続き上の証拠に焦点を当てているのに対し、ディックの決定は人間の経験と尊厳に包括的に取り組んでいる。

こうした相違点にもかかわらず、両判事はいくつかの基本的な信念を共有している。それぞれが、憲法修正第8条の確立された法理に基づいて慎重に判決を下し、原告が違憲な損害の「重大なリスク」を証明する責任を負うことを強調した。[15] 両判事は、窒素性低酸素症の新規性と、その影響に関する証拠が限られていることも認めたが、差止命令を正当化するのに十分な証拠とは何かについては異なる結論に達した。ハファカー判事は、そのリスクは本質的に理論上の

ものだと考えたのに対し、ディック判事は、証拠は差止命令を正当化するのに十分なほど実質的であると主張した。

ハファカー判決とディック判決の対比は、窒素低酸素死刑が試験的に実施されている司法上の広範な状況を反映している。アラバマ州での初期の死刑執行は最初の実証データを提供し、ハファカー判決は同州が執行を進めることを可能にした。これにより、司法審査の裁量権に関する全国的な先例が確立された。一方、ルイジアナ州はディック判決の精査の下、この方法に慎重に取り組み、事実の厳密な調査と心理的・精神的側面への配慮が窒素低酸素死刑の使用を遅らせたり制限したりできることを他の州や裁判所に示唆した。これら二つのアプローチの違いは、司法裁量、証拠の解釈、そして哲学的指向が、新たな死刑執行方法の実施にどれほど大きな影響を与えるかを示している。

最後に、ハファカー判事とディック判事の哲学は、アメリカの死刑法理における重要な緊張関係、すなわち立法権と行政権の尊重と憲法上の保護の効果的な適用とのバランスを浮き彫りにしている。ハファカー判事は前者のアプローチを体現しており、死刑執行命令を出す前に立証責任と具体的な証拠を優先し、証拠が不確かな場合は州の政策に基づいて判断を下すことを認めている。一方、ディック判事は後者のアプローチを体現しており、証拠を積極的に検証し、透明性を求め、予備段階から人間の経験を特に重視している。これらの判例を総合すると、連邦判事は、人が死刑に処されるべきかどうかだけでなく、どのような条件下で処刑されるべきかを決定する上でも決定的な役割を果たしており、州によって判決に大きなばらつきが生じるリスクがあることを示している。

要約すると、アラバマ州のハファカー判決とルイジアナ州のディック判決の対比は、死刑執行方法の監督における連邦司法府の多面的な役割を浮き彫りにしている。ハファカー判決は、証拠、証人への敬意、心理学的証拠の限界を強調することで、窒素低酸素症による死刑執行の早期導入を促進した。一方、ディック判決は、透明性、事実の徹底的な調査、心理的・精神的苦痛への配慮を求め、州権力に対する一時的ではあるが重要な抑制を確立した。これらの判決は、共に全国的な議論を巻き起こしている。州が未検証の死刑執行方法を試行錯誤する一方で、連邦判事は合法性と人道性の仲裁者としての立場をとっており、彼らの哲学と解釈は死刑判決の結果に直接影響を与えている。

最終的なメモ

1. *Smith v. Hamm* 、No. 2:23-cv-00656-RAH、2024（MD Ala. 2024年1月10日）（Huffaker判事）（差止命令の申請を却下する命令）。

2. 同上（目撃者の証言は「矛盾しており一貫性がない」としながらも、プロトコルによって10分以内に死亡に至ったと結論付けている）。

3. *Hoffman v. Westcott* 、No. 25-169-SDD-SDJ、メリーランド州控訴裁判所判決、p. 13（MD La. 2025年3月11日）（Dick、CJ）（アラバマ州の証言を「強制窒素吸入による死亡がどのようなものかを示す最も説得力のある証拠」と表現している）。

4. 同書、 6-7、15-19頁（ホフマンの宗教的および心理学的主張、仏教の瞑想実践を含む、第8修正条項の分析に関連するものとして検討）。

5. 同上、 19頁（ホフマンは「意識的な恐怖と精神的苦痛の相当なリスク」に直面していたと結論付けている）。

6. *Grayson v. Hamm* 、No. 2:24-cv-376-RAH、2024 WL 4701875、pp. 51-52（MD Ala. 2024年11月6日）（Huffaker判事）（McAlary博士の証言よりもAntognini博士の専門家証言を信用した）。

7. *ホフマン氏*の意見は28ページに掲載されている（編集されたルイジアナ州の議定書を批判し、完全な情報公開を要求している）。

8. *Smith v. Hamm* 、No. 2:23-cv-00656（MD Ala. 2024年1月10日）、p. 17（「言うまでもなく、多くの死刑事件は、死刑執行を無期限に延期することを主な、あるいは唯一の目的として連邦裁判所に持ち込まれる」）。

9. *ホフマン*、27に関する予備的意見（「州のスピードへの欲求は、十分な情報に基づいた審議よりも優先されるものではない」と示唆）。

10. *Grayson v. Hamm*、 51-53頁（精神的苦痛のみでは合衆国憲法修正第8条の保護を受けるには不十分であると却下し、McAlary博士の懸念を「憶測」と判断した）。

11. 同上、51頁（原告の証拠を「非常に疑わしい伝聞証拠」と評している）。

12. *ホフマン判決*、17～19項に関する意見（30～40秒間の意識喪失は憲法上のリスクとなり得ることを認める）。

13. *スミス対ハム事件*、2024年（死刑執行手順に関連する宗教的主張を却下）。

14. *ホフマン*、 7ページ（RLUIPAの主張を否定している）；同書、24ページ注142（適用された第8修正条項の分析においてPTSDを考慮に入れている） 。

15. *Hoffman v. Westcott* 、No. 25-169-SDD-SDJ（MD La. 2025年3月11日） ； *Smith v. Hamm* 、No. 2:23-cv-00656-RAH、2024（MD Ala. 2024年1月10日）（両裁判所とも、原告は違憲な損害の「重大なリスク」を立証しなければならないことを強調した）。

5.3：窒素低酸素による処刑時の呼吸マスク：設計、機能、証言

窒素吸入による死刑執行に用いられる呼吸マスクは、米国で始まったばかりの強制窒素吸入による死刑執行において、中心的な、そして極めて物議を醸す要素となっている。もともとはサウスカロライナ州の産業安全機器専門企業であるアレグロ・インダストリーズ社が設計したこの送気式呼吸マスクは、死刑執行において純窒素を投与し、致命的な酸素欠乏を引き起こすために再利用されている。[1]

I. 原産地および製造元

アレグロ・インダストリーズは、親会社がウォルター・サーフェス・テクノロジーズ（ケベック州に拠点を置き、トロントに拠点を置くプライベート・エクイティ・ファームのオネックス・コーポレーションが共同所有する企業）であり、生命を守るために設計された産業用呼吸器を製造している。[2]　しかし、死刑執行の際には、同じタイプのマスクが正反対の目的、つまり命を奪うために転用される。アラバマ州（後にルイジアナ州）で使用されたマスクは青と黒で、額から顎までゴム製のシールがあり、透明なバイザーが付いている。[3]　死刑執行室に居合わせた目撃者は、プラスチック製のチューブで室外の窒素ボンベに接続されたフルフェイスマスクが作動しているのを目撃したと証言している。[4]　アラバマ州は窒素低酸素死刑を最初に実施した州であり、ルイジアナ州がそれに続いた。[5]　両州において、目撃者は、死刑囚の顔に呼吸器が装着され、チューブが制御室に接続され、死刑囚が呼吸困難を示すような身体の動きをしているのを目撃したと証言している。[6]

II. 物理的設計と機能

マスク自体はNIOSH承認のタイプC送気式呼吸器です。[7]快適性と耐久性を考慮して設計されたソフトシールを備え、窒素吸入弁と一方向呼気弁が付いています。[8]漏洩したプロトコルの詳細によると、マスクは完全に気密である必要はなく、わずかな酸素漏れを許容します。これは窒息時間を長引かせる可能性があるとして批判されています。[9]処刑中、ホースを通して送り込まれた窒素がマスク内の呼吸可能な空気と入れ替わり、死刑囚から酸素を奪います。目撃者によると、窒素がマスク内を循環すると、人々はしばしば身体的反応（痙攣、けいれん、硬直）を経験すると報告されています。[10]支援団体や精神的指導者は、アレグロマスクが酸素漏れを引き起こす可能性があることを示しており、当初は命を救うために設計されたこの装置が、苦痛を最小限に抑えるどころか、むしろ長引かせる可能性があることを示唆しています。[11]

III. 倫理的および実践的な意味合い

特にアラバマ州やルイジアナ州のような州において、死刑執行に工業用呼吸器を再利用することは、倫理的、法的、技術的な面で深刻な問題を提起する。

1. 意図された用途と実際の用途：アレグロマスクは生命を守るために設計されたものであり、生命を奪うために設計されたものではない。目撃者や擁護者たちは、その本来の目的と死刑執行における役割との間に大きな隔たりがあることを強調している。[1][2]
2. 密閉の完全性と苦痛：アラバマ州当局が気密シールは必要なく（酸素漏れが発生する可能性がある）と述べたという事実は、急速な死ではなく、長時間の窒息のリスクを示唆している。113 観察された身体反応（痙攣、けいれん、あえぎ）は、苦痛のない死の保証と矛盾する苦痛を反映している可能性がある。
3. 透明性と管理：両州とも、窒素導入プロトコルの大部分は、ガスシステムのテスト、保管、安全管理の詳細を含め、公文書に記載されています。14 この透明性の欠如は、説明責任に関する懸念を増幅させます。
4. 宗教的・心理的側面：ジェシー・ホフマン・ジュニアのケースでは、彼の弁護士は、マスクと窒素の使用が彼の仏教的な呼吸法、瞑想、そして最期の瞬間の精神状態を乱したと主張した。15
5. 前例と拡大：ルイジアナ州など、窒素低酸素症を導入する州が増えるにつれ、使用されるマスクの種類が危険な前例を作り出している。それは、標準的な産業用安全装置を使用して、州が認可した殺人を犯すというものだ。

IV. 結論

アラバマ州とルイジアナ州で窒素ガスによる死刑執行に用いられたアレグロ呼吸マスクは、単なる技術的な装置以上の意味を持つ。それは、死刑制度における新たな時代を力強く象徴している。両州の目撃者たちは、死刑執行室でこのマスクを目撃したと証言しており、彼らの証言は、即死かつ安らかな死がもたらされたという主張の信憑性に深刻な疑問を投げかけている。かつて生命を維持するために用いられていたものが、今や生命を奪うために用いられている。これは、窒素ガスによる死刑執行に内在する道徳的な矛盾を浮き彫りにしている。

最終的なメモ

1. Christopher Reynolds、「ケベック州関連企業が米国での死刑執行に使用するマスクを製造」、 *CBC*ニュース、2024年1月24日、https://www.cbc.ca/news/canada/montreal/canadian-masks-used-for-us-executions-1.7093059。
2. レイノルズ、*前掲*注1。
3. 著者は、アラバマ州とルイジアナ州で使用されているものと同じAllegro Industries製の呼吸保護具を所有しています。また、この同じモデルが死刑囚の処刑に2回使用されたのを目撃しています。Allegro Industries 9901低圧送気式フルマスク（シリコーンゴム製、ダブルシールフランジ付き、ポリカーボネートレンズ、NIOSH承認番号TC-19C-353）です。製品仕様は、https: //www.industrialsafetyproducts.com/allegro-9901-low-pressure-supplied-air-full-mask-universal-size/で確認できます。

4. Ed Pilkington、「ルイジアナ州、死刑執行に初めて窒素ガスを使用」、*ガーディアン*、2025年3月18日、https://www.theguardian.com/us-news/2025/mar/18/louisiana-nitrogen-gas-execution-jessie-hoffman-jr; *Associated Press* 、Sara Clineによる記事; John Simerman、「ジェシー・ホフマン、アンゴラのルイジアナ州処刑室での最期の瞬間」、 *NOLA.com*、https://www.nola.com/news/courts/jessie-hoffman-death-penalty-execution-nitrogen/article_4de95cb8-047c-11f0-91cc-d7c36246ff44.html 。

5. Alison Mollman、「アラバマ州、陪審の終身刑評決にもかかわらず窒素注入で男性を処刑」、*アメリカ自由人権協会*、2024年1月26日、https://www.aclu.org/news/capital-punishment/alabama-has-executed-a-man-with-nitrogen-gas-despite-juries-life-verdict ; Kim Chandler、「アラバマ州、窒素注入で男性を処刑：新手法が初めて使用」、 *AP通信*、2024年1月26日、https://apnews.com/article/nitrogen-execution-death-penalty-alabama-699896815486f019f804a8afb7032900。

6. Darryl Coote、「ルイジアナ州、初の窒素ガスによる死刑執行」、 *United Press International* 、2025年3月19日、https://www.upi.com/Top_News/US/2025/03/19/Louisiana-nitrogen-hypoxia-execution/6581742367594; 「ルイジアナ州、男性を処刑：州が初めて窒素ガスを使用」、 *CBS News* 、2025年3月19日、https://www.cbsnews.com/news/louisiana-death-row-inmate-first-nitrogen-gas-execution;ニーナ・モタゼディ、「ルイジアナ州、15年の中断を経て初の窒素ガスによる死刑執行で死刑執行を再開」、*死刑情報センター*、2025年3月19日、https://deathpenaltyinfo.org/louisiana-resumes-executions-after-15-year-hiatus-with-first-nitrogen-gas-execution。

7. 同上、*上記*3；エミリー・メイ・チャコール、「アラバマ州で2度目の窒素ガスによる死刑執行は、批評家が『秘密主義への固執』と呼ぶものに続く」、 *CBS*ニュース、2024年10月1日、https://www.cbsnews.com/news/alabama-nitrogen-gas-execution-alan-eugene-miller-secrecy-corrections-department。

8. 同上、*上記*3。

9. モーリス・チャマ、「米国で初めて窒素吸入による死刑執行が行われる場合、何が起こる可能性があるか？」、*マーシャル・プロジェクト*、2024年1月18日、https://www.themarshallproject.org/2024/01/18/alabama-nitrogen-execution-death-penalty（ジェフリー・ケラー博士のマスクの密着性に関する発言を引用し、アラバマ州のプロトコルでは髭剃りについては触れられておらず、製造元のマニュアルではマスクが「特定の身体的特徴を持つ個人に対して満足のいく顔面密着性を提供しない可能性がある」と警告していることを指摘） *Smith v. Hamm* , 601 US ___ (2024) (Sotomayor 判事、反対意見)（「さらに、アラバマ州はマスクの完全な密閉は必要ないと考えている。したがって、Smith は、酸素がマスク内に漏れて持続的植物状態、脳卒中、または窒息を引き起こし、Smith の苦痛を悪化させ、死期を長引かせるという重大なリスクを提起した。」）また、 *Smith v. Commissioner* , Ala. Department of Corr., No. 24-10095, 2024 WL 266027, (11th Cir. January 24, 2024) も参照（この事件では、Smith がマスクは「完全な密閉を保証せず、酸素がマスク内に漏れる」と主張したことが指摘されている)。

10. Pilkington、*上記*注4；Gloria Oladipo、「窒素ガスによる死刑執行：その仕組みと論争の的となっている理由」、*ガーディアン*、2024年1月26日、https://www.theguardian.com/us-news/2024/jan/26/what-is-nitrogen-gas-execution-risks。
11. 同上
12. 同上
13. *Grayson v. Hamm* 、*上記*注3参照。
14. キム・チャンドラー、「全米初の窒素ガス処刑で何が起こったのかを目撃した証言」、*PBS*ニュースアワー、2024年1月27日、 https://www.pbs.org/newshour/nation/an-eyewitness-account-of-what-happened-at-the-nations-1st-nitrogen-gas-execution 。
15. クート、*前掲*注6。

6.0：グレゴリー・ハントの処刑：自発的に提出された文書、「容赦なし」、そして窒素による6人目の死

I. アラバマに戻り、日常に戻る

2025年6月までに、窒素吸入による低酸素死刑はアメリカの死刑制度において一般的な手法となっていた。この方法で処刑されたのは、アラバマ州のケネス・スミス、アラン・ミラー、キャリー・グレイソン、デメトリウス・フレイジャー、そしてルイジアナ州のジェシー・ホフマンの5名である。法的な枠組みは整い、そのパターンは周知の事実となっていた。そして、この手法を永続させようとする政治的な意思は依然として強く、特にこの分野の先駆者であるアラバマ州では、処刑ペースを緩める兆候は全く見られなかった。

2025年6月10日に行われたグレゴリー・ハントの死刑執行は、ルイジアナ州の短期間の中断を経て、アラバマ州が再びこの分野の最前線に返り咲いたことを示すものとなった。ハントは窒素低酸素症による死刑執行を受けた6人目の人物であり、アラバマ州では5人目となった。これにより、同州がこの方法の先駆者であり主要な使用者としての役割を担っていることが改めて確認された。[1] 彼の死刑執行は、ガルフ・ステーツ・ニュースルームのキャット・ストロムクイストが、アラバマ州が2024年に記録した死刑執行件数6件に並ぶための試みの一環だったと述べている。[2]

しかし、ハントの事件には、これまでの液体窒素による死刑執行とは異なる独特の特徴があった。彼はアラバマ州で最も長く死刑囚として収監されていた囚人の一人で、35年間も死刑執行を待っていた。これは、被害者であるカレン・レーンの生存期間よりも長い。[3] 彼は最近の裁判では弁護士が見つからなかったとして、自ら弁護を行った。[4] 死刑執行前にAP通信のインタビューに応じ、自身の精神的な変容と、イエスを死刑に反対した「擁護者」と見なしていることを語った。[5] そして、彼は記者たちに、驚くほど冷静に「自分を哀れむつもりはない」と語り、死刑囚として数十年を過ごしたことで培われた諦めの気持ちで、迫りくる死を受け入れた。[6]

この章では、ハントが処刑室に送られるまでの道のり、彼の最後の控訴における法的特異性、キャット・ストロムクイストの報告書を含む目撃者によって記録された処刑そのもの、そしてハント事件がアラバマ州の処刑制度における窒素低酸素症の完全な常態化について明らかにしていることを検証する。これまでの章では、この方法の導入、法廷闘争、そして州をまたいだその広がりを記録してきたが、この章では窒素低酸素症を官僚的なルーチンとして提示する。つまり、反復によってもたらされる効率性で実行され、過去5回使用されたのと同じレトリックで擁護され、アラバマ州でのまた別の処刑という通常のメディア報道以外には、わずかな世間の注目しか集めない処刑である。

II. 犯罪：カレン・レーンと1988年8月

カレン・サンダース・レーンは1956年6月5日、アラバマ州ジャスパーで生まれた。彼女はウィリアム・O・サンダースとベティ・ジョー・サンダースの次女だった。[7] ウォーカー郡で育ち、後にA・C・レーンと結婚したが、結婚生活は短命に終わった。[8] 1988年の夏、二人は別居し、カレンは友人のティナ・ギリランドの家に身を寄せた。ティナは子供たちとコルドバのアパートに住んでいた。[9]

1988年7月、カレンはティナのいとこであるグレゴリー・ハントと交際を始めた。¹⁰ ハントはもともとフロリダ出身で、数か月前に母親と継父と同居するためにアラバマ州に引っ越してきた。¹¹ 当時、彼はすでに2回結婚しており、子供がいた可能性もある。¹² カレンとハントの関係はわずか1か月しか続かなかった。カレンの母親はこの関係に反対し、2週間後にはティナ自身がカレンに、ハントに二度と家に来ないように伝えるよう頼んだ。¹³

1988年8月2日未明、グレゴリー・ハントはカレン・レーンがティナ・ギリランドと彼女の子供たちと滞在していたアパートに侵入した。¹⁴ 残忍で長時間の暴行が続き、数時間にわたり、カレン・レーンは壊滅的な怪我を負った。裁判でのハントの証言によると、彼はカレンを手、足、そして椅子で殴ったという。¹⁵ アラバマ州法医学局の検視官、ジョセフ・エンブリー博士は、彼女の怪我の深刻さを記録した。

- 頭部外傷20件、
- 左側の肋骨12本と右側の肋骨12本が骨折。
- 胸骨（胸の骨）の骨折、
- 心臓の打撲、
- 3つの肝臓裂傷、
- 肺の打撲、
- 大動脈に3/4インチの裂け目があり、
- 膵臓の打撲、
- 首の側面の筋肉の出血と
- 合計60～62件の外傷。[16]

医学的検査により、カレンは性的行為を強要され、ハントがほうきの柄で彼女に性的暴行を加えたことも明らかになった。[17]彼女は頭部への鈍器による外傷で死亡した。[18]

ハントは逃走したが、後に数人に犯行を自白した。[19] 彼は逮捕され、加重殺人罪で起訴され、1990年に裁判にかけられた。[20]

III. 裁判、有罪判決、そして死刑囚監房での35年間

グレゴリー・ハントの裁判は1990年にウォーカー郡で行われた。検察側は、暴行の残虐性を示す圧倒的な証拠を提示した。検視官の証言、ハントと犯行現場を結びつける法医学的証拠、そ

してハントが自白したとする目撃者の証言などである。[21] 検察側はまた、性的暴行の容疑を強調し、アラバマ州の死刑法に基づきハントは死刑に処される可能性があった。[22]

ハントの弁護団は、情状酌量となる証拠をほとんど提示しなかった。その後の裁判記録によると、弁護団はハントの経歴についてほとんど調査を行わず、量刑審理において陪審員に重要な情状酌量事由を提示しなかった。[23] その結果、陪審員はハントがフロリダ州の「暴力的なアルコール依存症の家庭」で育ち、身体的虐待と性的虐待を受けていたことを知らされなかった。[24] ハントが里親のもとで生活していた時期があったことや、幼少期から薬物を使用していたことも知らなかった。[25] 死刑事件における情状酌量事由と呼ばれるこれらの事由は、通常、量刑審理において被告人の人間性を理解し、その行為の背景を説明するために提示され、陪審員が死刑ではなく終身刑を選択するよう説得する可能性がある。[26]

1990年、陪審はハントに対し、3件の加重殺人罪で有罪判決を下した。[27] 量刑審理では、11対1で死刑賛成の票が投じられた。[28] 裁判所は陪審の勧告に従い、ハントに死刑を宣告した。[29] 控訴審でも、有罪判決と死刑判決は維持された。[30]

ハントはその後35年間、アラバマ州の死刑囚監房で過ごした。これは、カレン・レーンが殺害された時点で生きていた期間よりも長い。処刑前にキャット・ストロムクイストとのインタビューで、ハントは刑務所での生活を人生を変える経験だったと語った。彼は「そこには私と神と聖書と祈りしかなく、聖霊が私の正気を取り戻すのを助けてくれた」と力強く宣言した。

ハントの宗教的改宗は、迫りくる死刑執行に対する彼の理解を決定づける要因となった。彼は*AP通信に対し*、死刑制度が存続しているのは一部の牧師がそれを神の承認を得たものとして提示しているからだと考えていたが、聖書の研究によって考えが変わったと語った。³³ 彼は宗教書の中でイエスを「擁護者」と呼び、女性が石打ちの刑に処されるのを阻止したキリスト教指導者の物語に言及した。³⁴ イエスを罰ではなく慈悲の擁護者とみなすこの神学的視点は、ハントが自身の死刑執行を準備する中でも、死刑制度に反対する動機となった。³⁵

しかし、ハントは自分の運命を驚くほど受け入れている様子も見せた。「自分を哀れむつもりはない」と彼はストロムクイストに語り、深い精神性ゆえに死を恐れていないと説明した。[36] この禁欲主義――慈悲を乞うことも、判決に反抗することもなく、35年間死が来ることを知っていた者の諦めをもって死を受け入れること――こそが、アラバマ州の死刑囚監房が彼に与えた心理的影響だった。ハントは成人してからの人生のほとんどを死の脅威の下で生きてきた。2025年6月までに、死刑執行はもはや遠い可能性ではなく、彼が受け入れ、ある程度は受け入れることを学んだ差し迫った現実となった。

IV. 訴訟手続きと弁護士の問題

ハントは死刑執行までの数週間、死刑囚の法的支援へのアクセスに関する深刻な問題を提起する法的ジレンマに直面した。ストロムクイストの報告書によると、ハントは少なくとも2つの裁判所で「本人訴訟」で法的文書を提出していた。これは、彼自身が弁護することを意味する法律用語である。〈sup〉37〈/sup〉 ハントは、自分を弁護してくれる弁護士を見つけることができず、一部の裁判所では連邦弁護人が書類作成を手伝ってくれなかったと説明した。〈sup〉38〈/sup〉

この状況は、死刑制度に反対するために必要な専門性と資源の不足を浮き彫りにした。死刑訴訟は極めて複雑で、複雑な手続き規則、厳しい期限、憲法上の権利に関する高度な法的議論が伴う。にもかかわらず、35年間服役していた教育水準の低いハントは、弁護士の不在のため、自ら連邦裁判所に嘆願書を提出した。[39]

死刑事件を専門とする刑事弁護士のリチャード・ジャフェ氏はストロムクイスト氏に対し、収監されている者が自ら法的書類を提出することは珍しくないと語った。[40] しかし、こうした慣行が一般的だからといって、問題が軽減されるわけではない。死刑判決を受けた者は、効果的な法的支援を受ける憲法上の権利を有している。にもかかわらず、執行直前の数週間、法的選択肢が最も緊急を要する時期に、ハントは明らかに自力で法制度を乗り切らなければならなかった。[41]

アラバマ州司法長官事務所は、ハント氏が弁護士の代理を受けていないという主張を否定した。広報担当者は、ハント氏は「引き続き法的支援を受けている」と述べ、「ハント氏の文書の一部は明らかに弁護士の手によるものであり、死刑囚は適切な形式で文書を作成するために必要なワープロソフトにアクセスできないため、文書自体も弁護士によって作成されなければならなかった」と強調した。

この回答は示唆に富む。たとえ弁護士がハントの書類作成を手伝ったり、非公式な助言を与えたりしたとしても、司法長官の声明は、ハントが従来の意味での代理人、つまり弁護士が代理で申し立てを行う代理人によって弁護されていたわけではないことを示唆している。ハントの書類が「きちんと整理されていた」ことから、ハントは何らかの支援を受けていたに違いないという検察側の主張は、ハント自身が多くの作業を行ったことを暗黙のうちに認めている。これは、死刑執行が間近に迫った他の死刑事件では考えられない状況である。[43]

ハントは最終弁論で本人訴訟を行い、いくつかの法的論点を提起した。彼は、最近の最高裁判所の判決が再審につながる可能性があると主張した。[44] また、カレン・レーンの遺体の近くで発見されたほうきの柄など、裁判で提示された証拠にも異議を唱えた。検察側は、このほうきの柄がレーンへの性的暴行に使用されたと主張していた。[45] 裁判中、血清学者はほうきの柄にヒト細胞が含まれていると証言し、検察側はそれが暴行時に採取された子宮頸管粘液である可能性を示唆した。[46] ハントは、ある証人が粘液は別の部位から採取された可能性があると述べており、アラバマ州法で死刑判決の対象となる性的暴行の罪は正式には立証されていないと反論した。[47]

司法長官事務所は、ハントの主張は根拠がなく、一部は既に以前にも提起されていたと反論した。[48] ほうき事件に加え、レーンに対する性的暴行を示唆する他の証拠もあると指摘した。[49] ハントは弁護士を立てずに自ら弁護を行ったが、裁判所は彼の申し立てを却下し、執行猶予は認められなかった。[50]

このエピソードは、死刑制度の構造的な問題点を浮き彫りにしている。死刑囚は、特にこれまでの控訴手続きがすべて終了し、法的選択肢が限られている場合、自分を弁護してくれる弁護士を見つけるのに苦労することが多い。[51] その結果、ハントのような死刑囚の中には、処刑を免れるための最後の手段として、自ら弁護せざるを得ない者もいる。手書きの嘆願書や、不十分な内容の嘆願書を提出しても、裁判所は手続き上の不備や内容の不備を理由に却下する。[52]

V・ハントによる窒素性低酸素症についての見解：「枕で窒息する」

ハントの事件の異例な点は、アラバマ州が2018年に初めて窒素低酸素症による死刑執行方法を提示した際、ハント自身がそれを選択したにもかかわらず、2025年までに州が策定した手順に深刻な懸念を表明していたことである。[53] ストロムクイストとのインタビューで、ハントは窒素低酸素症を「枕で窒息する」ようなものだと例えた。[54] 彼は、アラバマ州が実施したマスクを用いた手順よりも、おそらくより穏やかな、ゆっくりと意識を失わせる方法を望んでいたと述べた。[55]

この区別は極めて重要である。ハントが2018年に窒素ガスによる低酸素死刑を選択した当時、アラバマ州はまだ死刑執行手順を策定・公表していなかった。[56] この決定は不確実な状況下で行われた。ハントと他の死刑囚たちは、窒素ガスによる死刑は「人道的」であり、迅速かつ苦痛のない意識喪失をもたらすと告げられたが、アラバマ州での最終的な執行がこれらの約束通りになるかどうかを確認する術はなかった。[57] 2025年までに、ハントは（報道や法的文書を通じて）スミス、ミラー、グレイソン、フレイジャー、ホフマンの運命を知り、アラバマ州で行われている窒素ガスによる低酸素死刑は、長時間の窒息、肉体的苦痛、そして一部の目撃者が苦痛と表現した状態を伴うことを理解した。[58]

ハントの「枕で窒息させられる」という表現は、窒素低酸素症の窒息感を的確に捉えている。フルフェイスマスクは頭部をしっかりと密閉し、酸素の流入を遮断する一方で、肺に窒素を充満させる。医療専門家によると、窒素投与の症状には、息切れ、パニック、そして呼吸ができないという恐ろしい感覚が含まれる。[59] ハントが「徐々に意識を失う」ことを好んだのは、より緩やかで急激でない方法、おそらく窒素投与前に鎮静剤を投与するプロトコル、あるいは窒息感を引き起こさない別の投与方法を求めていたことを示唆している。[60]

しかし、ハントにはアラバマ州が採用する処刑方法を変更する手段はなかった。2018年に液体窒素による処刑を選択した彼は、州が定めた方法に従うしかなかった。処刑前の彼の発言からは、死を受け入れたものの、その方法については深い不安を抱えていた人物像がうかがえた。[61]

VI. 実施日：2025年6月10日

A. 最新の時間と国内情勢

グレゴリー・ハントは2025年6月10日、アラバマ州アトモアのウィリアム・C・ホルマン矯正施設で処刑された。[62] この日付の選択は極めて重要だった。ハントの処刑は、その夜に全米で予定されていた4件の処刑のうちの1件であり、死刑反対派は処刑件数の憂慮すべき増加を指摘していた。[63]

フロリダ州では、アンソニー・ウェインライトが1994年のカーメン・ゲイハート殺害の罪で薬物注射により処刑された。[64] ウェインライトは東部時間午後6時22分に死亡し、ハントの死亡が発表される1時間4分前のことだった。[65] ケネス・スミス（アラバマ州初の窒素注射による処刑）をはじめとする多くの死刑囚の精神的指導者であったジェフ・フッド牧師は、二つの処刑のうちどちらか一方にしか立ち会えないという、究極の選択を迫られた。[66] ハントの選択次第で、フッドはフロリダ州でのウェインライトの処刑に立ち会うことを決めた。つまり、ハントはスミスの歴史的な初の窒素注射による処刑に立ち会った精神的指導者なしに処刑されることになった。[67]

アラバマ州矯正局の記録によると、ハントは最後の食事を拒否し、弁護士以外の面会者は一切受け入れなかった。[68] 最期の数時間、彼は電話をかけることもなかった。[69] 最期の日の姿――弁護士だけが付き添い、食事を拒否し、家族や友人にも連絡を取らなかった――は、深い孤独を物語っている。この孤独が彼自身の選択だったのか、それとも家族関係の破綻や数十年にわたる服役の結果だったのかはともかく、それは彼の最期の瞬間の荒涼とした様相を一層際立たせた。[70]

B. プロトコルと観察可能な反応

午後5時57分、処刑が始まった。[71] 目撃者の証言によると、ハントは「短い痙攣を起こし、息を切らし、担架から頭を上げた」[72]。処刑開始から2分後の午後5時59分頃、ハントは「うめき声を上げ」、「足を上げた」[73]。この足の動きは、目撃者が過去の液体窒素による処刑で目撃した動きを彷彿とさせ、酸素不足に対する身体の反応であったことを示唆している[74]。

その後、ハントは「少なくとも4回、あえぎ呼吸を繰り返し、その間に長い間隔を置いた」[75]。これらの「長い」間隔は、彼の呼吸がもはや連続的ではなく、断続的であり、その間、彼は全く呼吸していないように見える長い間隔があったことを示している[76]。このパターンは、脳幹が呼吸機能を再開しようとする際に低酸素症で起こりうるあえぎ呼吸の一種である、死戦期呼吸と一致する[77]。

午後6時5分、処刑開始から8分後、ハントはそれ以上の目立った動きを見せなかった。⁷⁸ 彼の死亡は午後6時26分、処刑開始から約29分後に宣告された。⁷⁹

タイミングは重要である。ハントは最初の8分間は目に見える反応を示したが、その後21分間は明らかに動かず、死亡が宣告された。この合計29分間は、これまでの窒素吸入による処刑最長記録（ルイジアナ州のジェシー・ホフマンの29分）に並び、窒素低酸素症の支持者が約束していた「急速な意識喪失」や「数分以内の死亡」をはるかに超えている。[80]

ハム委員：「不随意的な身体の動き」

死刑執行後の記者会見で、アラバマ州刑務所長のジョン・Q・ハム氏は、いつものように窒素ガスによる低酸素死の弁明を行った。「私が目にしたものは、他のすべての窒素ガスによる低酸素死刑執行と一致している」とハム氏は述べた。「不随意的な身体の動きが見られた」。

この「不随意的な身体運動」という表現は、窒素注入による処刑中に観察される身体反応に対するハムの標準的な説明となった。ハントの震え、喘ぎ、頭足の動きを「不随意」と分類することで、ハムはこれらの動きが意識的な苦痛を示すものではないことを示唆した。身体は動いているかもしれないが、本人は意識がなく、苦痛や痛みを感じていない、少なくとも国家はそう主張している。[82]

しかし、批評家たちは、窒素吸入による死刑執行で観察されるこれらの「不随意運動」の一貫性を、この方法が約束されたような迅速かつ苦痛のない死をもたらさない証拠として指摘している。[83] もしこれらの運動が本当にランダムで不随意的なものであれば、執行ごとにばらつきが生じるはずである。震え方が強い人もいれば弱い人もいるだろうし、息を切らす人もいればそうでない人もいるだろう。しかし、窒素吸入による死刑執行はすべて同様のパターンをたどっている。まず震えがあり、その後、長い間隔を挟みながら長時間息を切らす状態が続き、最後に不動状態となる。[84] この一貫性は、ランダムな不随意運動ではなく、窒素誘発性低酸素症に対する予測可能な生理学的反応を示唆している。[85]

さらに、観察された反応の持続時間（ハントの場合は8分間）は、「不随意運動」という説明の信憑性に疑問を投げかける。プロトコルが予測したようにハントがすぐに意識を失ったのであれば、なぜ彼の体は8分間も苦痛の兆候を示し続けたのか？そして、もし彼がその8分間意識を保ち、医学専門家が予測した呼吸困難とパニックを経験していたのであれば、彼の動きを単なる不随意反射と特徴づけることは、正確な記述というよりは都合の良い作り話に近い。[86]

D. 被害者の家族からの声明

ハム委員長によると、カレン・レーンの家族5人が死刑執行に立ち会った。[87] 家族は後に声明を発表し、死刑執行の意義について次のように述べた。「これは宥和でも勝利でもありません。今夜は正義の実現であり、37年間私たちの家族を苦しめてきた悪夢の終焉を意味します。」[88] 彼らは、ハントが1988年にカレンに慈悲を示さなかったこと、そして今夜はハントの命のためではなく、「あまりにも残酷に命を奪われたカレン・サンダース・レーンの恐ろしい死」のために捧げられたものであることを改めて強調した。[89]

声明が「心の平安」ではなく「正義」を強調している点は重要である。カレンが殺害された当時の寿命よりも長い37年を経て、レーン一家はハントの死刑執行によって喪失感が消えることも、何十年にもわたる苦しみが消えることもないことを認めた。死刑執行は、彼らの人生に深く影響を与えた法的プロセスの終結、つまり一つの終わりを意味したが、必ずしも癒しや平安をもたらすものではなかった。

スティーブ・マーシャル司法長官は、自身の声明の中でこの点について詳しく説明し、死刑執行を「待ち望まれた正義の瞬間」と呼んだ。⁹¹ マーシャル氏は、「グレゴリー・ハントが死刑囚監房で過ごした時間は、カレン・レーンが生きた時間よりも長かった」と指摘し、これは死刑執行の遅延性を浮き彫りにする数学的な事実であると述べた。⁹² カレン・レーンは1988年に殺害された時32歳だった。ハントは35年間死刑囚監房で過ごした。計算は避けられない。刑の執行にかかった時間は、被害者が生きた時間よりも長かったのだ。⁹³

マーシャルの声明は、ハントの支持者と土壇場での法的異議申し立てにも向けられていた。「もし彼が無罪の真の証拠を持っていたなら、それを提出するのに30年以上あったはずだ。しかし彼はそうしなかった。彼と彼の支持者が代わりに提示したのは、歴史を書き換え、真実から目をそらすために仕組まれた土壇場での見せ物だった。」[94] この描写は、ハントの嘆願と最終控訴を真の法的手続きではなくパフォーマンスとして捉え、証拠と手続きに関する実質的な問題を単なる「見せ物」の地位に貶めた。[95]

ケイ・アイビー州知事の声明も同様のトーンだった。「数十年前、わずか32歳だったカレン・レーンは、想像を絶する最期の数時間を過ごした。今夜、州はグレゴリー・ハントに対する法的に義務付けられた刑を執行した。彼の有罪は疑いの余地がない。」⁹⁶ 「疑いの余地がない」という表現は、ハントの有罪判決に正当な疑いがないことを示唆しており、ハント自身が提出した陳述書で提起された証拠に対する異議申し立てを無視した声明だった。⁹⁷

VII. 分析と示唆

A. 官僚的なルーチンとしての窒素低酸素症

ハントの処刑は、アラバマ州の処刑制度において窒素による低酸素症がいかに日常的なものになっていたかを如実に示した。州は異議なく処刑を予定し、定められた手順に従って執行し、過去の処刑と同様の弁明でそれを擁護した。⁹⁸ 処刑方法の人道性についてのさらなる議論はなく、過去の処刑で観察された苦痛に照らしたさらなる精査もなく、処刑開始から死亡宣告までの29分が「急速な」意識喪失に該当するかどうかの再評価も行われなかった。⁹⁹

死刑執行の報道には、常態化の兆候が顕著に表れている。2024年1月に行われたケネス・スミスの窒素注入による初の死刑執行は国内外のメディアから大きな注目を集めたが、ハントの死刑執行（全体で6例目、アラバマ州では5例目）は日常的なニュースとして扱われた。ガルフ・ステーツ・ニュースルームのキャット・ストロムクイストによる報道は詳細な記録を提供したが、地域メディア以外では、ハントの死刑執行はスミスの死刑執行に比べて報道量が限られていた。[100] この方法はもはや目新しいものではなく、したがって、特にニュース価値もなくなった。[101]

実験的で物議を醸すものから、日常的で官僚的なものへと至るこの軌跡は、これまでのすべての処刑方法のパターンを踏襲している。電気椅子、ガス室、致死注射はすべて同様の段階を経た。すなわち、最初の精査、文書化された問題、国家当局による弁明、失敗に終わった法的控訴、そして最終的には、繰り返し行われることで受け入れられるようになった。¹⁰² ニトロ低酸素症はこの期間を短縮し、最初の使用から標準的な方法になるまでわずか18か月だった。¹⁰³

B. 職業上の紛争の問題

ハントが最終控訴審で自ら弁護を行った経験は、死刑の手続き上の保障に重大な欠陥があることを明らかにしている。弁護士が不在であったり、弁護を拒否したり、死刑執行前の最後の数週間で事件を引き受けることができない場合、弁護を受ける権利は意味をなさない。¹⁰⁴ ハント自身の申し立ては、実質的なものであろうと、司法長官が主張したように「根拠のないもの」であろうと、そもそも必要となるべきではなかった。死刑判決を受けた者は、逮捕された瞬間から最終控訴審まで、有能な弁護士による弁護を受ける権利を有しなければならない。¹⁰⁵

問題は構造的なものであり、個人の問題ではない。死刑囚の弁護は専門的で、精神的に消耗が激しく、報酬も低い仕事である。多くの弁護士は、死刑控訴を扱うための訓練やリソースが不足している。¹⁰⁶ 連邦弁護事務所は、死刑訴訟の専門家ではあるものの、能力と管轄権の制約により、すべての死刑囚をすべての訴訟手続きで弁護することはできない。¹⁰⁷ その結果、特に複数回控訴され、法的選択肢が限られているように見える死刑囚の中には、適切な弁護を見つけるのに苦労する者が少なくない。¹⁰⁸

ハント事件は、手続き上の安全策が失敗した場合でも、アラバマ州の死刑執行制度が効果的に機能しうることを示唆している。裁判所は弁護士なしで提出された彼の嘆願を却下し、死刑執行は予定通り行われ、州当局は彼の最後の法的控訴を正当な異議申し立てではなく「宣伝行為」として退けた。¹⁰⁹ 州の視点からすれば、制度は完璧に機能したが、教育を受けていない死刑囚ハントは、複雑な法的手続きをほぼ一人で乗り越えなければならなかった。¹¹⁰

C.、死刑囚として35年間服役、そして司法の遅延問題

ハントはアラバマ州の死刑囚監房で35年間を過ごしたが、これは被害者の生存期間よりも長い。マーシャル司法長官はこの事実を司法制度の遅延を示す証拠として強調したが、同時に死刑の適用に関するデリケートな問題も提起している。

死刑が犯罪に見合った刑罰による報復を目的としているとすれば、35年間の服役と死刑執行を待つことは、この目的を達成するものと言えるだろうか。それとも、判決で定められた刑罰以上の追加的な刑罰となるのだろうか。[112] 死刑が抑止力、つまり他者が同様の犯罪を犯すことを思いとどまらせることを目的としているとすれば、犯罪から37年後に死刑を執行することは、この目的を達成するものと言えるだろうか。[113] また、死刑が社会から危険な人物を排除し、無力化することを目的としているとすれば、ハントは35年間の服役と、いわゆる精神的な変容を経て、依然として死刑執行を正当化するほどの脅威であったと言えるだろうか。[114]

カレン・レーンの家族からの声明は、ハントの死刑執行は結論や勝利ではなく「悪夢の終わり」を意味すると認め、37年間の待ち時間によって、死刑執行は正義が果たされたというよりも、長い苦難がようやく終わったという認識が率直に示された。¹¹⁵ この見方は、死刑執行の延期は、経過時間に関わらず刑を執行するという国家の決意を示すこと以外に、不明瞭な目的を持っていることを示唆している。¹¹⁶

デイビッド・ハントの精神的変容と死刑の神学

ハントがイエスを死刑に反対した「弁護人」と特徴づけたことは、死刑を支持する際にしばしば持ち出される宗教的正当化に対する神学的対抗物語を提供している。¹¹⁷ マーシャル司法長官の声明は、「ジェシー・ホフマンは今、来世で神の前に最終的な裁きを受ける」という言葉で締めくくられており、これは死刑を神の裁きの前触れとして提示したホフマン事件で用いられたものと同様の表現である。¹¹⁸神によって認められた刑罰としての死刑と、キリスト教の中核的価値観としての慈悲と贖罪という、こうした相反する宗教的枠組みは、死刑の道徳的正当性に関するより深い分裂を反映している。¹¹⁹

ハントが記者たちに語ったところによると、彼の精神的な旅とは、刑務所での時間を「病院」として利用し、そこで「毒と悪魔」を取り除き、勉強、礼拝、そして精神修養を通して「健全な精神」を育むことだった。[120] 若き日に残忍な犯罪を犯した男が、信仰を見出し、他の受刑者を助けるようになったこの変貌は、死刑が数十年にわたる個人的な変化を説明できるのかという疑問を提起する。[121]

ハントの処刑が示すように、法律の答えはノーである。死刑は犯した行為に対して科されるのであって、その人自身に対して科されるのではない。[122] ハントの精神的な成長、責任の受容、神学的見解――これらはどれも法的には何の意味も持たなかった。刑は1988年の犯罪に基づいて執行され、35年間の変化は法的には何の影響も及ぼさなかった。[123]

E. 「4つ以上」という驚きの声と数え方の問題

ハントの処刑を目撃した人々の証言によると、処刑には「少なくとも4回の浅い呼吸が、長い間隔を置いて繰り返された」という。[124]「少なくとも4回」という表現は示唆に富む。目撃者たちは正確な回数について意見が一致せず、呼吸の回数を区別するのが難しかったか、あるいは目撃者それぞれが処刑の様子を異なって認識していたことを示唆している。[125]

この曖昧さは、窒素注入による6件の処刑の特徴である。目撃者は震え、喘ぎ、身体的反応を報告しているが、その詳細は証言ごとに異なっている。ある者は「痙攣」、ある者は「震え」、またある者は「不随意運動」と表現している。[126]　標準化された観察手順の欠如――客観的な医学的監督の欠如、反応を記録するための合意された基準の欠如、独立した専門家の観察者の欠如――は、それぞれの処刑が、国家が主観的あるいは誇張として却下できるような、議論を呼ぶような記述を生み出すことを意味する。[127]

ハントの処刑も同様のパターンを示した。州当局は処刑は計画通りに行われ、観察された動きは予測可能で非自発的なものだったと主張したが、目撃者の証言は州当局が認めたよりも長く、より苦痛を伴う過程だったことを示唆していた。[128]　客観的なデータ（脳波、血中酸素濃度、意識喪失の正確な時刻）がないため、窒素性低酸素症が苦痛を引き起こすかどうかについての議論は、検証可能な事実というよりは解釈の問題である。[129]

VIII. アラバマ州における死刑執行のペース：「適切なペースで」

ストロムクイスト氏は、ハントの死刑執行は「アラバマ州で今年3件目であり、2024年には死刑執行件数が6件に達する見込みで、これは昨年他のどの州よりも多い」と指摘した。[130]　この指摘は、アラバマ州が2025年に向けて野心的な死刑執行計画を掲げていることを示しており、そのペースは政治的意思と実際的な能力の両方を反映している。[131]

2025年6月中旬までに、アラバマ州はすでに3人の死刑を執行していた。デメトリウス・フレイジャー（2月6日）、ジェームズ・オズグッド（4月24日）、グレゴリー・ハント（6月10日）である。[132]　このペースで行けば、アラバマ州は2024年の総数を上回り、米国で最も死刑執行件数の多い州となる可能性があった。[133]　この加速の背景には、政治的な要因が明らかだった。ケイ・アイビー州知事とスティーブ・マーシャル州司法長官は死刑制度の強力な支持者であり、共和党が多数を占める州議会は死刑執行を遅らせる意向を示さず、アラバマ州の世論も依然として死刑制度を支持していた。[134]

2025年6月中旬までにフロリダ州の死刑執行件数がすでに6件に達し、アラバマ州の2024年の総件数を上回ったという記述は、死刑制度を導入している州が刑の執行に対する決意を示すために競い合っていることを浮き彫りにしている。¹³⁵ この州間の競争は、各州が互いの死刑執行件数に匹敵するか、あるいは上回ろうとする力学を生み出し、死刑を「法執行」の信頼性を測る指標として捉え、慎重に用いるべき最後の手段としてではなく、むしろ重視するようになっている。¹³⁶

窒素低酸素症の常態化により、このペースの加速が可能になった。アラバマ州はもはや、致死注射による死刑執行を遅らせていた薬剤不足や製薬会社のボイコットに直面することはない。窒素は容易に入手可能であり、手順は確立され、法的異議申し立ては一貫して失敗に終わっており、州は裁判所が介入しないという確信を持って死刑執行を計画できる。[137] ハントの死刑執行はこの効率性を実証した。アラバマ州の死刑執行スケジュールに最小限の混乱をもたらすだけで、計画、実施、弁護、執行が行われた。[138]

IX. 結論：第六の死と機械の唸り

グレゴリー・ハントは2025年6月10日午後6時26分、窒素注入プロトコル開始から約29分後に死亡した。[139] 彼は痙攣を起こし、あえぎ、頭と足を上げ、少なくとも4回、長い間隔を置いてあえぎ呼吸を繰り返した後、8分後には目立った動きを示さなくなった。[140] 彼は窒素低酸素症で処刑された6人目の人物であり、アラバマ州では5人目、そしてアラバマ州が2025年前半に処刑する3人のうちの1人であった。[141]

ハントの処刑は、アラバマ州の死刑制度における窒素低酸素症の完全な常態化を露呈した。この方法はもはや実験的ではなく、州内で物議を醸すこともなく、ケネス・スミスの最初の窒素低酸素症による死刑執行時に見られたような精査の対象でもなくなった。それは日常的な、効率的に実行される官僚的な手続きとなり、お決まりのレトリックによって擁護され、繰り返されることで受け入れられるようになったのである。[142]

彼の事件は、死刑制度の擁護における構造的な問題点も浮き彫りにした。ハントが処刑直前の数週間、自ら弁護を行ったという事実は、彼が弁護士を見つけるのに苦労し、最終的に裁判所が却下するであろう問題を提起しようと必死になって自ら申し立てを行ったことを示唆している。¹⁴³ 司法長官が主張したように、彼の主張が正当であったかどうかはともかく、死刑囚が最終控訴審で自ら弁護しなければならなかったという事実は、死刑事件における手続き上の保障が、まさに最も必要とされる時に機能不全に陥る可能性があることを示している。¹⁴⁴

ハントが死刑囚監房で過ごした35年間――被害者の生存期間よりも長い――は、米国における死刑執行の延期という性質を如実に示していた。アラバマ州で処刑されるまでに、彼は成人期のほとんどを刑務所で過ごし、自らが「深い精神的変容」と表現する変化を遂げ、自らの命を奪うことになる死刑に反対する神学的立場を確立した。¹⁴⁵ しかし、これらの変化はいずれも法的効力を持たない。1988年に犯した罪に対して1990年に下された死刑判決は2025年に執行され、処刑された男は37年前に罪を犯した男とはほとんど似ても似つかない姿になっていた。¹⁴⁶

ハントの死刑執行は、その夜全国で予定されていた4件のうちの1件であり、死刑反対派が「波」と呼ぶ死刑執行の「急増」の一環だった。この急増は、パンデミックと薬物不足による長年の減速の後、各州が死刑執行スケジュールを加速させているという、より広範な傾向の一

部だった。〈sup〉147〈/sup〉 ハントの死により、アラバマ州は死刑執行の面で最も活発な州の一つとなり、フロリダ州を除く他のどの州も追随できないペースで死刑執行が行われた。〈sup〉148〈/sup〉

第1章では窒素低酸素症を未証明の方法として提示したが、第2章から第4章では明らかな苦痛にもかかわらずアラバマ州でそれが常態化していたことを記録し、第5章ではルイジアナ州への州間拡大を明らかにした。本章では、この方法が官僚的なルーチンとしてどのように機能しているかを示す。つまり、処刑は効率的に実行され、自動的に擁護され、中断や再検討なしに殺戮機械に組み込まれているのである。149

窒素吸入による低酸素症で6人が死亡した。身体的な反応は変わらず、震え、喘ぎ、意識の喪失が長時間続く。州の説明も変わらず、不随意運動、予想される反応、人道的かつ効果的な方法であると主張している。そして、そのペースは加速している。アラバマ州はさらに多くの死刑執行を予定しており、ルイジアナ州は窒素吸入による死刑執行をさらに行う予定で、窒素の使用が認められている他の州もこれに続くと予想されている。[150]

グレゴリー・ハントが記者たちに最後に言った「私は誰にも同情しない」という言葉は、いつか処刑されることを知りながら35年間生きてきた男の諦めを反映していた。[151] 彼の禁欲主義は、勇気や罪の受容からではなく、死刑囚監房の厳しい現実から生じたものだった。何十年にもわたる待ち時間、実を結ばない控訴、最も必要とされる時に姿を消した弁護士、そして改心や信仰、イエスが自分の処刑に反対しただろうという信念に関わらず、最終的には死刑執行という機械が勝利するという緩やかな認識。[152]

ハントが窒素性低酸素症を「枕で窒息する」と表現したことは、予言的であったことが証明された。〈sup〉153〈/sup〉 目撃者は、彼が息を荒げ、頭と足を上げているのを目撃した。これは、息切れを起こし、呼吸困難に陥っている人の身体的反応と一致する。〈sup〉154〈/sup〉 しかし、ハム委員長はこれらの反応を「不随意の身体の動き」として退け、窒素性低酸素症は迅速かつ苦痛のない死をもたらすという公式見解を維持した。これは、現在ではこれに反する経験的証拠を提供する6件の処刑にもかかわらずである。〈sup〉155〈/sup〉

カレン・レーンの家族が、ハントの死刑執行は結論や勝利ではなく「悪夢の終わり」だと述べたことは、37年にも及ぶ手続きと待ち時間を経て、死刑が何をもたらすのかを最も正直に評価したものと言えるだろう。〈sup〉156〈/sup〉 死刑執行はカレン・レーンを生き返らせることはなく、37年間の苦しみを消し去ることも、死刑支持者が期待するような迅速な正義をもたらすこともなかった。〈sup〉157〈/sup〉 それは、彼らの人生の多くを費やした法的手続きの終結、つまり終わりを意味したが、癒しや平和をもたらしたわけではなかった。〈sup〉158〈/sup〉

ハントの処刑は、アラバマ州が窒素低酸素症による死刑執行を加速的に継続できる能力を持っていることも明らかにした。2025年前半に3件の死刑執行を行った同州は、2024年の死刑執行件数6件（同年、他のどの州よりも多い）に匹敵するペースで進んでいた。〈sup〉159〈/sup〉 この

ペースは、政治的意思、窒素低酸素症の利用可能性によって可能になった実務能力、そしてこの方法を重大な異議申し立てから守る法的判例を反映している。〈sup〉160〈/sup〉 効果的な方法（「確実に死に至らしめる」と定義される）を見つけた死刑執行機関は、ますます効率的に運営されるようになった。〈sup〉161〈/sup〉

これまでの章では、窒素低酸素症の合法性、アラバマ州以外への拡大の可能性、そして目に見える苦痛がこの問題の再検討につながる可能性について疑問を呈してきたが、ハントの処刑は決定的な答えを示した。この方法はあらゆる法的障害を乗り越え、ルイジアナ州にまで広がり、今後さらに拡大する可能性が高い。目に見える苦痛――震え、喘ぎ、29分間の持続時間――は再検討を促すどころか、州の公式見解、すなわち窒素低酸素症による死に対する予期される、非自発的かつ憲法上許容される反応という見解に組み込まれてしまった。[162]

6回の液体窒素による死刑執行は、極めて一貫したパターンを確立しており、いかなる逸脱も驚くべきことだった。各執行は同様の段階を経た。最初の震え、長い間隔を挟んだ長時間の喘ぎ、最終的な不動状態、そして20〜30分後の死亡宣告。各執行は同様の反応を引き起こした。手順は意図通りに機能したという主張、目に見える反応は不随意的なものとみなされる、そして成功は死という基準のみで測られるという宣言。そして、執行を重ねるごとに、次の執行は容易になり、異議を唱えることはより困難になった。[163]

グレゴリー・ハントの処刑は、歴史的あるいは決定的な出来事として記憶されることはないだろう。それは日常的な行為であり、法的あるいは政治的な力が介入するまで続くであろう一連の処刑の6例目に過ぎない。彼の事件は、窒素吸入による窒息死の軌道や、その使用を認める法的枠組みを変えることはないだろう。それは単に、窒素吸入によって殺害された人々のリストに新たな名前を加えただけであり、国家がフルフェイスマスクで人々を窒息させ、それを人道的行為と称したときに何が起こるかという経験的記録に新たな一項目を加えたに過ぎない。[164]

ハントは報道陣に対し、同情を求めているわけではないと語った。しかし、同情は得られなかった。彼は、アラバマ州がここ数週間、死刑執行に異議を唱えるすべての死刑囚に対して行ってきた対応を受けた。すなわち、彼らの主張は軽率あるいは手続き上の問題として却下され、彼らの法的努力は見世物とみなされ、証人の証言に関係なく、合憲と宣言された手順に従って処刑されたのである。[165]

機械は唸りを上げる。さらに多くの処刑が予定されている。この方法は繰り返される。そして、被害者の生存期間よりも長い35年間を死刑囚監房で過ごしたグレゴリー・ハントは、窒素低酸素症による死刑執行記録に名を連ねる一人の名前となる。これは、処刑方法がいかに繰り返しによって常態化していくかを示す事例研究であり、また、実際に執行される死刑制度が、その支持者が思い描く迅速かつ確実な正義とはほとんど似ても似つかないことを示すもう一つの例でもある。166

最終的なメモ

1. アラバマ州矯正局、死刑執行記録 2024-2025年。

2. Kat Stromquist、「アラバマ州、1988年のカレン・レーン殺害事件でグレゴリー・ハントを窒素ガスで処刑」、 *WBHM* 、2025年6月10日、https://wbhm.org/2025/alabama-executes-gregory-hunt-by-nitrogen-gas-for-1988-murder-of-karen-lane。

3. 同上。時系列計算（カレン・レーンは1988年当時32歳、ハントは死刑囚監房で35歳だった）。

4. 同上

5. ストロムクイスト、*前掲*注2。

6. 同上

7. *Hunt v. State* , 659 So.2d 933, 936 (Ala. Crim. App. 1994)、確定、659 So. 2d 960 (Ala.)、上訴棄却、516 US 880 (1995)。

8. 同上

9. 同上

10. 同上

11. 同上、937頁。

12. 同上

13. 同上

14. 同上

15. 同上、938頁。

16. 同上（検視官の証言）、941頁（証拠が「圧倒的」であったと記載されている）；また、 *Hunt v. State* 、940 So.2d 1041、1044-45（アラバマ州刑事控訴裁判所、2005年）（検視官が記録した60の負傷の詳細を記した量刑命令が引用されている）も参照。

17. 同上、939頁。

18. 同上

19. 同上、940頁。

20. 同上、941頁。

21. *Hunt v. State* , 659 So.2d 933（アラバマ州刑事控訴裁判所、1994年)。

22. *アラバマ州法典 § 13A-5-40(a)(8)* （性的虐待中の殺人罪）；同条 *§ 13A-5-40(a)(4)* （強盗中の殺人罪）。

23. *Hunt v. Commissioner* 、アラバマ州矯正局、判決後請願書 15-25（弁護人の不十分な弁護の申し立て）; *Hunt v. Commissioner* 、666 F.3d 708（11th Cir. 2012）も参照。

24. 同上、18頁。

25. 同上、19。

26. *ロケット対オハイオ州事件*、438 US 586（1978）（情状酌量証拠を提出する権利を確立）。

27. *Hunt v. State* , 659 So.2d in 941.

28. 同上

29. 同上

30. *Ex parte Hunt* , 659 So.2d 960（Ala. 1995）（有罪判決および刑に対する上告を承認）。

31. ストロムクイスト、*前掲*注2。

32. 同上

33. *AP通信*、*上記*注5参照。

34. 同上

35. 同上

36. ストロムクイスト、*前掲*注2。

37. 同上

38. 同上

39. 同上

40. Richard Jaffe、Stromquist で引用、*上記*注 2。

41. *ギデオン対ウェインライト事件*（372 U.S. 335（1963））（裁判における弁護人選任権を確立）および*ダグラス対カリフォルニア州事件*（372 U.S. 353（1963））（控訴審における弁護人選任権を拡大）の判決は先例である。州裁判所における有罪判決後の手続きにおいては、憲法上の弁護人選任権は存在しないことに留意すべきである。*マレー対ジャラタノ事件*（492 U.S. 1（1989））を参照。

42. アラバマ州司法長官事務所の広報担当者の発言（ストロムクイスト著、*前掲*注2より引用）。

43. 死刑事件における本人訴訟の分析、同上。

44. *ハント対州*、本人訴訟（ウォーカー郡巡回裁判所、2025年5月提出）。

45. 同上

46. 公判証言録取書、*州対ハント事件*、公判記録（ウォーカー郡巡回裁判所、1990年）。

47. *ハント対州*、本人訴訟、*上記*注44参照。

48. アラバマ州司法長官事務所からの回答報告書。

49. 同上

50. 裁判所命令、*ハント対州*（申し立ての却下および執行停止）；また、*ハント対アラバマ州*、第24A___号（米国、2025年6月10日）（執行停止の申し立ての却下）も参照。

51. 死刑情報センターの「州別」を参照してください。https://deathpenaltyinfo.org/state-and-federal-info/state-by-state

52. 同上

53. ストロムクイスト、*前掲*注2。

54. 同上

55. 同上

56. アラバマ州矯正局、窒素低酸素症選挙プロセス（2018年）。

57. 同上

58. ストロムクイスト、*前掲*注2；スミス、ミラー、グレイソン、フレイザー、ホフマンの処刑に関する目撃証言。

59. 窒素低酸素症の影響に関する専門家の証言、 *Miller v. Hamm* 、No. 2:22-cv-497 (MD Ala.)、Philip Bickler博士の宣誓供述書 (2023)。

60. ストロムクイスト、*前掲*注2。

61. 同上

62. アラバマ州矯正局、グレゴリー・ハント死刑執行概要（2025年6月10日）。

63. 死刑情報センター、「2025年の死刑執行リスト」、https://deathpenaltyinfo.org/executions/2025。

64. フロリダ州矯正局、死刑執行概要、アンソニー・ウェインライト（2025年6月10日）。

65. アンソニー・ウェインライトは、フロリダ時間午後6時22分（東部時間）に死亡が確認された。グレゴリー・ハントは、アラバマ時間午後6時26分（中部時間）、つまり東部時間午後7時26分に死亡が確認された。したがって、ウェインライトの死刑執行は、ハントの死刑執行より約1時間4分早く完了したことになる。

66. ジェフ・フッド牧師、「6月10日の処刑に関する声明」（2025年6月9日）；ストロムクイスト、*上記*注2も参照。

67. 同上

68. アラバマ州矯正局、最終日日誌、グレゴリー・ハント（2025年6月10日）。

69. 同上

70. ハントの最期の数時間の分析、同上。

71. 同上（執行開始時刻：17:57）。

72. キム・チャンドラー、「アラバマ州、1988年に女性を殴打して死亡させた男を窒素ガスで処刑」、 *AP通信*、2025年6月10日、https://apnews.com/article/execution-alabama-nitrogen-gas-1799b231099c2e260bee7f55b97fa31f。

73. 同上

74. 窒素に関する過去の試験との比較分析（Frazier、Grayson、Miller、Smith）。

75. チャンドラー、*前掲*注72。

76. 同上

77. 死戦呼吸の医学的説明については、死刑情報センターの「処刑方法」を参照してください。https://deathpenaltyinfo.org/resources/high-school/about-the-death-penalty/methods-of-execution。

78. チャンドラー、*前掲*注72（午後6時05分、他に目立った動きなし）。

79. 同上（午後6時26分、死亡報告）。

80. 6つの窒素テストの時系列の比較：スミス（22分、2024年1月25日）、ミラー（約16分、2024年9月26日）、グレイソン（約22分、2024年11月21日）、フレイジャー（29分、2025年2月6日）、ホフマン（29分、2025年3月18日）、ハント（29分、2025年6月10日）。

81. ジョン・Q・ハム、記者会見、ホルマン矯正センター（2025年6月10日）。

82. 同上。「不随意運動」の枠組みに関する分析。

83. Hayley Richbart、「死刑に関する事実：『人道的な』処刑方法はあるのか？」、*死刑情報センター*、2025年11月18日、https://deathpenaltyinfo.org/facts-about-the-death-penalty-is-there-a-humane-execution-method。

84. 同上

85. 同上

86. 窒素による処刑中の意識と無意識の分析、同上。

87. ジョン・Q・ハム、記者会見、*上記*注81参照。

88. レーン家からの声明（2025年6月10日）、チャンドラー著、*前掲*注72に引用。

89. 同上

90. 被害者家族の視点の分析、同上。

91. スティーブ・マーシャル、グレゴリー・ハントの処刑に関する声明、アラバマ州司法長官事務所（2025年6月10日）。

92. 同上

93. 時系列で計算すると、1988年当時、カレン・レーンは32歳、ハントは35歳で死刑囚だった。

94. マーシャル、*前掲*注91。

95. 法的異議申し立てを「見世物」として特徴づけることの分析、同書。

96. ケイ・アイビー、グレゴリー・ハントの処刑に関する声明、アラバマ州知事室（2025年6月10日）。

97. 同上。「否定できない有罪」論拠の分析。

98. ハント社の実績と、過去の窒素施肥実績との比較分析。

99. 同上

100. メディア報道の分析、*ガルフステーツニュースルーム*と全国メディアの比較（2025年6月）。

101. 同上

102. 詳しくは、スチュアート・バナー著*『死刑制度：アメリカの歴史』*（2002年）を参照のこと。

103. タイムライン：スミスの死刑執行は2024年1月25日、ハントの死刑執行は2025年6月10日（約17ヶ月後）に行われる予定です。

104. 憲法上の弁護人選任権の分析；*ギデオン対ウェインライト事件*、372 US 335（1963）。

105. 同上

106. 死刑事件の弁護に割り当てられたリソースの分析。米国弁護士協会、「報告書：連邦公選弁護の財政危機」、2025年10月8日、https://www.americanbar.org/advocacy/government_legislative_work/priorities_policy/criminal_justice_system_improvements/federal-defenders-issue-brief。Alexis Hoag -Fordjour、「バック・トゥ・ザ・フューチャー：（再）構築の非効率的な法的援助」、 *UC Davis Law Review* 58（2024）、https://papers.ssrn.com/sol3/papers.cfm?abstract_id=4772028。 Ruth Brown、「死刑囚の弁護を専門とする弁護士の需要は間もなく爆発的に増加する可能性がある」、 *Idaho Capital Sun* 、2025年5月12日、https://idahocapitalsun.com/2025/05/12/demand-for-capital-defense-attorneys-may-soon-skyrocket-in-idaho; Jay C. Hauser、「令状不足の資金調達：公選弁護の適切な資金調達を求める嘆願」、 *University of Pennsylvania Journal of Law and Social Change* 25、no. 4 (2022)、https://scholarship.law.upenn.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1275&context=jlasc; Nicholas M. Pace 他、「 *National Public Defense Workload Study* (Santa Monica, CA: RAND Corp., 2023)」、https://www.rand.org/content/dam/rand/pubs/research_reports/RRA2500/RRA2559-1/RAND_RRA2559-1.pdf; Irene Oritseweyinmi Joe、「Effective Administration of Legal Aid」、 *Boston University Law Review* 105、no. 1 (2011)、https://www.org/content/dam/rand/pubs/research_reports/RRA2500/RRA2559-1/RAND_RRA2559-1.pdf 1 (2025)、https://www.bu.edu/bulawreview/files/2025/03/JOE.pdf ; Malia N. Brink、 *「カリフォルニア州の公選弁護人の業務量と人員配置」*、Deason Cr

iminal Justice Reform Center、2025年9月29日、https://scholar.smu.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1018&context=deasoncenter; John Gross、「貧困者弁護危機の再考」、 *Harvard Law Review* 、2023年3月18日、https://harvardlawreview.org/blog/2023/03/reframing-the-indigent-defense-crisis; Joe Margulies、「資源の剥奪と弁護を受ける権利」、 *Journal of Criminal Law & Criminology* 80、no. 1 (2025)、https://www.bu.edu/bulawreview/files/2025/03/JOE.pdf 3 (1989): 673-725、https://scholarlycommons.law.northwestern.edu/jclc/vol80/iss3/2; Stephen B. Bright、「貧困層のための弁護士：死刑は最悪の犯罪のためではなく、最悪の弁護士のため」、 *Yale Law Journal* 103 (1994)、https://capitalpunishmentincontext.org/files/resources/representation/worstlawyersnotcrimes.pdf。

107. 連邦弁護人の能力に関する制限については、全米公選弁護人協会（2025年）を参照。

108. 資本防衛の表現における構造的問題、同上。

109. 司法長官の人物像については、マーシャルの声明（*上記*注91参照）を参照。

110. ハントの本人訴訟経験に関する分析については、*上記*注37～50を参照。

111. マーシャルの声明（*上記*注91参照）；時系列分析。

112. 報復理論と執行猶予については、キャロル・S・スタイカーとジョーダン・M・スタイカー共著*『死刑を求める：最高裁判所と死刑制度』* （2016年）を参照。

113. 抑止理論と犯罪から処刑までの時間、同上。

114. 35年後の無能力の正当化、同上。

115. レーン家からの声明（*上記*注88参照）。

116. 執行猶予の目的の分析については、*上記*注112を参照。

117. ストロムクイスト、*前掲*注2（ハントの神学的見解）。

118. ルイジアナ州司法長官リズ・マリルによるジェシー・ホフマン・ジュニアの処刑に関する声明（2025年3月18日）を参照のこと（「ジェシー・ホフマンは今、死後の世界で神の御前で最終審判を受けることになる」）。

119. 宗教指導者たちが死刑制度の分析を巡って競い合う（2025年6月）。

120. ストロムクイスト、*前掲*注2（ハントは刑務所を「病院」と表現している）。

121. 変容と死刑の分析、同上。

122. 死刑事件における犯罪後の変容の法的扱いについては、 *Skipper v. South Carolina* , 476 US 1 (1986) を参照。

123. 同上

124. Chandler、*前掲*注72（「4回以上の浅い呼吸」）。

125. 証人の数に関する曖昧さの分析、同上。

126. 6つの窒素施肥試験における対照群の比較記述。

127. 標準化された観察手順の欠如。キム・チャンドラー、「アラバマ州、1993年の200ドルの麻薬借金による殺人で、窒素ガス吸入により受刑者を処刑」、 *AP通信*、2025年10月23日、https://apnews.com/article/alabama-execution-nitrogen-gas-85850653469135f1a8c7482ca0d4f990。アンソニー・ボイドの窒素低酸素による処刑は、矛盾する証言を生んだ。彼の精神的指導者は、-意識と苦痛の兆候と解釈した、長く続く苦痛のような動きについて述べたが、アラバマ州当局は、観察された震えと動きは単なる不随意反応であり、痛みの証拠ではないと主張した。

128. 州側と証人の証言の比較、ハントの処刑。

129. 客観的な医学的フォローアップの欠如、同上。

130. ストロムクイスト、*前掲*注2。

131. アラバマ州の執行ペースの分析（2024年～2025年）。

132. 2025年のアラバマ州における死刑執行のタイムライン：フレイジャー（2月6日）、オズグッド（4月24日）、ハント（6月10日）。

133. 6か月で3件の死刑執行に基づく予測。パット・ダギンズ、「アラバマ州は米国で最も死刑執行件数の多い5州のうちの1つ」、*アラバマ公共ラジオ*、2025年10月13日、https://www.apr.org/news/2025-10-13/alabama-among-five-states-leading-the-nation-in-executions。死刑情報センターのエグゼクティブディレクター、ロビン・マーハー氏は、2025年の死刑執行総数はすでに2024年の25件をはるかに上回っており、2012年以来最多になる可能性があり、アラバマ州のような州がこの増加に大きく関わっている（フロリダ州、テキサス州、サウスカロライナ州も含む）と指摘した。

134. アラバマ州における死刑制度の政治力学、同上。

135. フロリダ州での死刑執行ペースの比較（2025年6月中旬までに6件の死刑執行）、同上。

136. 州間執行における競争の分析、同上。

137. 窒素低酸素症は加速速度を可能にする、同上。

138. ハントの実行効率の分析、同上。

139. 実施スケジュールについては、*上記*注71、79を参照。

140. 観察可能な反応の概要については、*上記*注72～78を参照。

141. ハントは窒素ガスで処刑された6人目の人物であり、アラバマ州では5人目である（*前掲*注1参照）。

142. 正規化分析、*上記*注98～103参照。

143. 本人訴訟に関する分析については、*上記*注37～50を参照。

144. 手続き上の保護の侵害、同上。

145. ハントの35年間と彼の変遷、*前掲*注3、31-36頁。

146. 処刑された人物と犯罪を犯した人物との間の不一致、同上。

147. 6月10日の執行件数の増加については、*上記*注63を参照。

148. アラバマ州におけるランニングペースの比較については、*上記*注130–135を参照。

149. 第1章から第6章までの分析の進行状況。

150. 6つの窒素試験の概要と今後の展望については、*上記*注141を参照。

151. ストロムクイスト、*前掲*注2（「私は不平を言っているわけではない」）。

152. ハントの辞任と死刑囚監房での経験に関する分析、同上。

153. 同上 「枕で窒息させてやる。」

154. 観測可能な反応については、*上記*注72〜78を参照。

155. ハム委員の声明（*上記*注81参照）。

156. レーン家からの声明（*上記*注88参照）。

157. 同上

158. 同上

159. ストロムクイストのリズム分析、*上記の*注 2。

160. リズムを可能にする政治的および実際的な要因については、*前掲*注131〜138を参照。

161. 機械効率の分析、同上。

162. 法的生存、国家間伝播、そして苦難の受容。第1章から第6章までの分析。

163. 6つの実行から構成されるモデル、*上記*注80参照。

164. 6回目の実行は定型的なものであり、正規化分析が行われる。

165. ハントの要求は拒否され、反対にもかかわらず処刑は実行された（*上記*注44〜50、91参照）。

166. 窒素低酸素症の正常化という観点から見た、ハント氏の処刑に関する最終的かつ要約的な分析。

7.0：ジェフリー・トッド・ウェストの処刑：恩赦、「ほんのわずかな仕草」、そして窒素による7度目の死刑

I. 2025年9月とペースの加速

2025年9月までに、窒素低酸素症による死刑執行は、安全に計画・実行できるほど一般的になっていた。アラバマ州では、すでにその年に3人が処刑されていた。2月にデメトリウス・フレイザー、4月にジェームズ・オズグッド、6月にグレゴリー・ハントである。ルイジアナ州では、3月にジェシー・ホフマンが処刑されていた。法的枠組みは整い、観察可能なパターンは周知のものであり、これらの死刑執行を継続するという政治的意思は揺るぎなかった。[1] 6人が窒素低酸素症で死亡していた。7人目は月末までに死亡するだろう。

2025年9月25日に行われたジェフリー・トッド・ウェストの処刑は、窒素低酸素症の進化におけるいくつかの進歩を示した。特に注目すべきは、アラバマ州矯正局長ジョン・Q・ハムが、ウェストの処刑は窒素低酸素症による処刑の中で「最も動きが少なかった」と述べ、ウェストの身体的反応はスミス、ミラー、グレイソン、フレイジャー、ハント、ホフマンの反応よりも顕著ではなかったと述べていることである。[2] この主張――処刑手順が改善され、目に見える苦痛が減少している――は、アラバマ州が窒素プロトコルを改良したか、あるいは州が苦痛を「非自発的」とみなす許容範囲が、わずかな苦痛の兆候さえも包含するまで拡大したことを示唆している。[3]

しかし、ウェスト事件は、処刑方法の技術的な詳細をはるかに超えた側面を持っていた。1997年にガソリンスタンドで強盗中にマーガレット・パリッシュ・ベリーを殺害した彼の罪は、被害者の家族に28年間も続く深いトラウマを残した。[4] それにもかかわらず、ベリーの息子の一人、ウィル・ベリーはウェストを公に許し、ケイ・アイビー州知事に彼の命を助けてくれるよう懇願した。[5] ベリーの懇願――アラバマ州議会議事堂での死刑反対デモへの参加、嘆願書の提出、そして母親の殺人犯との手紙のやり取り――は、州が単純な復讐というレトリックでは捉えきれない道徳的な複雑さを示していた。[6]

本章では、ウェストが死刑執行室へと至るまでの過程を、AP通信の記者キム・チャンドラーの報道を通して検証する。チャンドラーは、死刑執行の準備とその後の様子を記録した。これまでの章では窒素ガスによる低酸素死刑の合法性と州をまたいだその普及について論じてきたが、本章では、被害者の家族が死刑執行に反対した場合、死刑囚が心からの悔恨の念を示した場合、そしてスティーブ・マーシャル司法長官事務所が指摘したように、ウェストの刑は既に執行中であるため州がそれでもなお執行を続ける場合、この方法がどのように運用されるのかを明らかにする。[7]

II. 犯罪：マーガレット・パリッシュ・ベリーと1997年3月

1997年3月、マーガレット・パリッシュ・ベリーは33歳だった。当時11歳のウィルと彼の兄の2人の子供の母親である彼女は、エトワ郡アタラにあるハロルドのシェブロン・ガソリンスタンドで働いていた。[8] このコンビニエンスストアの仕事で彼女は家族を養っていた。それは地域社会を支える、誠実な仕事だったが、めったにニュースの見出しになることはなかった。[9] 1997年3月28日、マーガレット・ベリーは夕方には家に帰れると確信して仕事に出かけた。しかし、彼女にその機会は二度と訪れなかった。[10]

ハロルドのシェブロンガソリンスタンドの元従業員、ジェフリー・トッド・ウェスト（21歳）は、店とその日常業務に精通していた。¹¹¹ 後に検察側は、ウェストが店を強盗し「目撃者を残さない」つもりだと述べていたことを立証した。¹² その3月の夜、ウェストはガールフレンドのエイミー・ピアースと共に、45口径のピストルで武装してシェブロンガソリンスタンドへ車で向かった。¹³ 彼は店に入り、マーガレット・ベリーに銃を突きつけ、金を要求した。¹⁴

ベリーは従った。裁判記録によると、店が現金を保管していたクッキー缶から250ドルが盗まれた。¹⁵ ベリーはウェストに金を渡した。しかしウェストは立ち去らなかった。それどころか、彼はベリーをカウンターの後ろにうつ伏せにさせ、首の後ろを撃った。¹⁶ その銃弾は致命傷だった。マーガレット・ベリーは職場で死亡し、250ドルのために殺害され、強盗事件の目撃者としての証拠も排除された。¹⁷

ウェストはエイミー・ピアースと共に逃亡したが、ピアースは後に共犯として起訴され、有罪を認め、懲役35年の判決を受けた。¹⁸ ウェストは1999年に逮捕され、裁判にかけられ、加重殺人罪で有罪判決を受けた。¹⁹ 陪審は10対2で死刑を勧告し、エトワ郡巡回裁判所のウィリアム・カードウェル判事は勧告を受け入れた。²⁰ ウェストはアラバマ州の死刑囚監房に送られ、そこで次の26年間を過ごすことになった。²¹

犯罪の残虐性は否定しようがなかった。マーシャル司法長官事務所は後に、ベリーが「手持ちの金をウェストに渡し、ウェストが実行した」と強調し、ベリーが全面的に協力した後に起きた殺人事件は特に冷酷なものだったと述べた。[22] しかし、この犯罪は悲劇的にもありふれたものでもあった。金に困った若者が破滅的な選択をし、数日で使い果たしてしまうような金額のために人々の人生を破壊してしまうのだ。[23]

III. 死刑囚監房での26年間と後悔の念

ジェフリー・トッド・ウェストはアラバマ州の死刑囚監房で26年間を過ごした。これはマーガレット・ベリーが処刑された時点での平均余命とほぼ同期間である。[24]その間、ウェストは自らが「深い内省」と表現する真の変容を経験した。処刑前にキム・チャンドラーとのインタビューで、ウェストは誠実で深い後悔の念を表明した。[25]

「後悔しない日は一日たりともなく、すべてを元に戻せたらと願っています」とウェストはチャンドラーに語った。[26] 彼はベリーの家族に直接謝罪したいと考えていた。「私があなた方に与えた苦痛について深くお詫び申し上げます。あなた方から奪ったものについて深くお詫び申し上げます。どうか私を許してください。」[27]

ウェスト氏はまた、21歳で最悪の決断を下してしまった経験を持つ者として、絶望的な状況にある若者たちにアドバイスを送った。「他に頼る場所がないなら、教会に行って司祭を探し、すべてを話してください。でも、私のしたようなことはしないでください。たとえそう感じられなくても、あなたには選択肢があるのです。」[28]

この後悔が十分なものだったのか、法的効力があったのか、ウェストの行為に何らかの変化をもたらしたのかという問題が、彼の死刑執行をめぐる議論の中心となった。[29]マーシャル司法長官事務所が表明した州の立場は明確だった。ウェストは「26年間死刑囚監房に収監されており、判決は保留中である」。[30] 時間の経過、後悔の表明、更生の可能性――これらはいずれも根本的な計算を変えるものではなかった。ウェストは1997年の犯罪で1999年に死刑判決を受けていた。ウェストが収監中にどのような人物になろうとも、その判決は2025年に執行されることになる。[31]

IV. ウィル・ベリー：許しと、死刑執行に反対した被害者の息子

ウェスト事件で最も注目すべき点は、母親が殺害された当時11歳で、その後父親、そして祖父となったウィル・ベリーの公的な活動であった。[32] ベリーがトラウマを抱えた子供から死刑反対者へと至るまでの道のりは、被害者家族の視点が数十年の間にどのように変化しうるか、そして、そうした視点が国家の死刑執行への決意と一致しない場合、しばしば無視されることを示している。[33]

ベリーはチャンドラーに、母親の殺害後、検察側が家族に死刑を支持するよう促したと打ち明けた。³⁴ 11歳で、想像を絶する悲しみに打ちひしがれていたベリーは、死刑について独自の意見を形成することはおそらく不可能だっただろう。³⁵ しかし、成長し、結婚し、家庭を築き、祖父になるにつれて、彼の考えは変わった。ベリーは「時間と信仰が私に異なる視点を与えてくれた」と語った。³⁶

ベリーがウェストの死刑執行に反対した理由は、許しと現実主義の両方に基づいていた。「私はこの男を許しますし、彼に死んでほしくありません」とベリーはチャンドラーとの電話インタビューで語った。「州が私の名において、あるいは私の家族の名において、母に復讐することを望みません」[37]彼女は、許しこそが母親が望んでいたことだと信じていた。[38]そして、ウェストの死刑執行によって母親が生き返ることも、28年間の苦しみが和らぐこともないことを理解していた。[39]

ベリーはウェストを擁護する発言を公に行った。ウェストの死刑執行予定日の2日前、2025年9月23日火曜日、彼はアラバマ州議会議事堂前で行われた死刑反対集会に参加した。[40] 写真には、彼が死刑反対の象徴である鐘を鳴らし、集まった少数の人々に語りかける様子が写っている。[41] ベリーはアイビー州知事の事務所に死刑執行停止を求める嘆願書を届けるのを手伝った。[42]

ベリーとウェストは処刑までの数週間、手紙をやり取りしていた。[43] ウェストは後悔の念を表し、ベリーは彼を許した。両者とも処刑前に面会する許可を求めた。[44] 刑務所当局は安全上の理由を挙げてこの要請を拒否した。[45] この拒否は疑問を投げかける。ウェストは、これほど厳重に管理された刑務所環境において、被害者の同意を得た親族と面会することさえ許されないほど、重大な安全保障上の脅威となり得たのだろうか？あるいは、この拒否は安全保障上の懸念よりも、単なる復讐行為に矮小化された国家の物語にニュアンスを加える可能性のある人間的な出会いを阻止したいという願望によるものだったのだろうか？[46]

ベリーはアイビー知事に直接手紙を書き、ウェストの死は「私にとって重荷であり、母を取り戻すことはできない」と述べた。[47] アイビー知事は2025年9月11日に返信し、ベリーの有罪判決を認めつつも、アラバマ州法は「最も凶悪な殺人行為に対して死刑を規定している」ため、知事として法を執行するのは自分の義務であると述べた。[48]

ベリーとアイビーのやり取りは、死刑制度論争の中核にある緊張関係を浮き彫りにした。ベリーは寛容、許し、そしてウェストの処刑が母親の死によって引き起こされた道徳的な傷を癒すことはないという認識を体現していた。一方、アイビーは法、義務、そして被害者家族の利益になるかどうかに関わらず刑罰を執行するという国家の決意を代表していた。[49] ベリーの反対が却下されたのは、彼の主張が説得力に欠けていたからではなく、死刑執行の仕組みは一度動き出すと、個々の事件の道徳的な複雑さのために止まることはないからである。[50]

V. 法的背景：「判決は保留中」

スティーブ・マーシャル司法長官の事務所は、ウェストの死刑執行を明確な言葉で発表する声明を発表した。「ジェフリー・トッド・ウェストは26年間死刑囚監房に収監されており、彼の刑は執行保留中である。」[51] この「保留中」という言葉は、義務、負債、期限が過ぎたことを示唆していた。死刑囚監房で過ごした26年間は、更生のために刑が再検討される可能性があるという証拠としてではなく、死刑執行の期限がすでに過ぎたという証拠として提示されたのである。[52]

声明では、犯罪の残虐性も強調されていた。「彼女は持っていた金をウェストに渡し、彼は彼女を殺害した。」[53] この記述は、マーガレット・ベリーがウェストの要求に屈したことを強調しており、彼女の殺害が特に無意味で残酷なものであることを示している。[54] 検察側は、ウェストが激情やパニックに駆られて行動したのではなく、証人を抹殺するために協力的な被害者を意図的に殺害したというこの主張に基づいて、寛大な処置を求める主張を反駁した。[55]

しかし、ウェストが死刑執行直前に起こした法的異議申し立ては、死刑囚だった元受刑者たちが起こした異議申し立てに比べればごくわずかだった。ウェストは、アラバマ州が窒素ガスによる死刑執行を提案した2018年、執行手順が策定される前から、窒素ガスによる死刑執行を希望していた。[56] 選択が争われたミラーや、州をまたいだ身柄拘束の問題が浮上したフレイジャーとは異なり、ウェストの窒素ガスによる死刑執行の選択は明確で、異議申し立てはなかった。[57] これにより、異議申し立ての可能性は完全に排除された。[58]

窒素低酸素症の残酷性に関する憲法上の議論は、過去の判例ですでにほぼ尽くされていた。スミス、ミラー、グレイソン、フレイザー、ハント、ホフマンはいずれも合衆国憲法修正第8条に基づいて上訴したが、裁判所は一貫してこれを却下した。[59] 2025年9月までに、法的枠組みは確立された。窒素低酸素症は憲法上許容され、観察可能な身体的反応は重度の苦痛の重大なリスクを立証するものではなく、決定的な証拠によって反証されない限り、プロトコルの人道性に関する州の主張は受け入れられることになった。[60]

ウエスト事件は、法的な問題がほとんどなく進行した。死刑執行の延期は認められず、連邦裁判所も介入しなかった。9月25日木曜日の午前0時から9月26日金曜日の午前6時までの30時間に予定されていた死刑執行日は、予定通り前倒しされた。[61]

VI. 実施日：2025年9月25日

A. 最後の営業時間と訪問

処刑の数時間前、ウェストは弁護士、両親、その他の家族を含む8人の面会を受けた。[62] この家族の面会は、グレゴリー・ハント（弁護士以外からの面会はなかった）よりも多く、ウェストが26年間の投獄生活にもかかわらず家族との繋がりを維持していたことを示唆している。[63] 彼の最後の食事はチキンケサディーヤで、洗練された快楽ではなく、質素な味覚を反映した控えめなリクエストだった。[64]

この死刑執行は、その夜に米国で予定されていた2件のうちの1件だった。テキサス州は、ガールフレンドの生後13ヶ月の娘を殺害したブレイン・ミラムに薬物注射による死刑を執行する予定だった。[65] この同時執行――2つの州が同じ夜に2人の死刑を執行する――は、死刑反対派が「全国的な死刑執行の急増」と呼ぶ状況を反映しており、2014年以来最多の件数に達した。[66] フロリダ州は2025年に12件の死刑執行で州記録を更新し、アラバマ州も2024年の執行件数に匹敵するか、あるいはそれを上回る勢いだった。[67]

B. 実行プロトコルと観測可能な反応

午後5時56分頃、死刑執行が始まった。[68] 刑務所長のテリー・レイボンがウェストに最後の言葉があるかと尋ねると、ウェストは「いいえ」と答えた。[69] 担架に縛り付けられ、青い縁のガスマスクで顔を覆われたウェストは、死刑執行が始まると弁護士に親指を立てた。[70] この仕草

は、命をかけて戦った男との最後の非言語的なコミュニケーションであり、迫りくる死へのウェストの自覚と、最期の瞬間に人間的な繋がりを保とうとする彼の試みを反映していた。[71]

チャンドラーの報告書は、その後に何が起こったかについて重要な詳細を伝えている。「最初の2分間、ウェストは目を開けており、嚥下と呼吸が荒く見えた。」[72]　この観察結果――目を開け、嚥下し、荒い呼吸――は、窒素投与の初期段階において意識があったことを示唆している。プロトコルに反して、ウェストは数秒以内に意識を失うことはなかった。彼は明らかに酸素欠乏の感覚に反応していた。[73]

他の証言もチャンドラーの観察を裏付けている。ウェストは処刑中に身体を動かしたが、その動きの正確な性質と持続時間については議論の的となっている。[74] 疑いの余地のないのは、ウェストが午後6時22分、処刑開始から約26分後に死亡宣告を受けたことである。[75]　この所要時間は、過去の液体窒素による処刑と一致しており、いずれも開始から死亡宣告まで20分から30分の間であった。[76]

C・ハム委員：「これまで見た中で最小の動きだ」

死刑執行後の記者会見で、ジョン・Q・ハム委員長は、ウェストの死刑執行を過去6回の窒素注射による死刑執行と区別する注目すべき発言をした。死刑執行中のウェストの動きについて問われたハム委員長は、「これまでも述べてきたように、死刑執行には常に不随意運動があり、人それぞれに違いがある。我々が執行した6回の死刑執行では動きにばらつきが見られたが、ウェストは最も動きが少なかった」と述べた。

この「わずかな動き」という表現は、ウェストの処刑がスミス、ミラー、グレイソン、フレイザー、ハント、ホフマンの処刑よりも容易だったことを示唆していた。⁷⁸　しかし、この主張はすぐに疑問を生じさせた。チャンドラーは、ウェストが最初の2分間、目を大きく見開き、唾を飲み込み、荒い息をしていたのを目撃していた。⁷⁹　以前の処刑がもっと苦痛ではなかったとしたら、これらの反応がどうして「わずかな動き」と言えるのだろうか。⁸⁰

処刑中にウェストの皮膚が青く変色したことについて問われた際、ハムは「死にゆく人は皮膚の色が変わるものだが、彼の腕にはそのような変化は見られなかった」と答えた。[81]　この回答は、酸素欠乏による皮膚の変色であるチアノーゼが窒素窒息死で起こることを認めたものの、ハムはウェストの場合にはそれを観察していないと主張した。[82]　「ハムが立っていた場所から」という具体的な表現は、委員長の視野が限られていたことを示唆しており、視界が不完全な状態で、処刑中に「わずかな動き」があったと断言できたのはなぜかという疑問が生じる。[83]

ハムはまた、唾液の分泌や口からの泡立ちに関する質問にも答え、「唾液の分泌や口からの泡立ちは確認できなかった」と述べた。なぜなら、彼の位置からは「彼女の顔のごく一部しか見

えなかった」からである。[84] 視界が限られていたというこの事実の認識は、ウェストが経験したことに関するハムの断定的な主張を再び複雑にした。[85]

アラバマ州が窒素吸入による死刑執行中に起こる動きを「非自発的」と主張できる根拠を問われた際、ハム氏は意味深な返答をした。「それはあくまで私の意見です。メディアが目にしたものについて意見を持っているのと同じです。」[86] このアプローチ、つまり州の苦痛の評価を単なる「意見」と位置づける姿勢は、アラバマ州が窒素吸入による低酸素症の人間性について主張していることが、客観的な医学的証拠ではなく解釈に基づいていることを、意図せず認めてしまった。[87] ハム氏は脳波検査、血中酸素濃度測定、神経学的モニタリングの結果を報告しなかった。彼は部分的な観察に基づいて意見を述べ、同じ死刑執行を目撃した他の観察者が異なる結論に達する可能性があることを認めた。[88]

ハム氏はまた、手続き変更に関する懸念にも言及し、「処刑は計画通りに行われた」と述べ、手順の変更は一切否定した。[89] しかし、ウェストの処刑が「最も動きが少なかった」という主張は、個々の生理的差異がその違いを説明するか、アラバマ州が手順に非公開の変更を加えたことを示唆している。[90] 手順の詳細が秘密にされていたため、変更があったかどうかを確認することは不可能だった。[91]

D. フラットラインを超えた5分間のガス流量

ハムの証言によって明らかになったウェストの処刑に関するある一点は特に重要だった。「心停止後もガスは5分間流れ続けた」[92]。これは、ウェストの心臓が停止した後（心電図で心臓活動が認められなくなった後）、窒素ガスがさらに5分間流れ続けたことを意味する[93]。この長時間のガス注入の目的は、おそらく死を確実にし、蘇生や植物状態での生存の可能性を完全に排除することだったと考えられる[94]。

しかし、この詳細から疑問も生じた。窒素低酸素症が、その支持者が主張するように、数分以内に急速な意識喪失と死を引き起こすのであれば、なぜプロトコルでは心停止後5分間、ガスを継続的に流すことが求められるのだろうか？⁹⁵ 答えは、アラバマ州は死亡時刻の不確実性を認識し、死亡者が回復できないように安全マージンを設けていることを示唆している。⁹⁶ しかし、死を確実にするためのこの予防措置は、窒素が急速かつ確実な意識喪失を引き起こすという州の断言と矛盾する。⁹⁷

VII. 公式声明と矛盾する説明

A. アイビー知事：義務と法律

ケイ・アイビー州知事は死刑執行後の声明で、州の立場を強調した。「約30年前、マーガレット・パリッシュ・ベリーさんはコンビニエンスストアへ仕事に向かう途中、二度と家に帰ることはありませんでした。ジェフリー・ウェストは強盗と殺人の目的で店に入り、卑劣にもベリ

ーさんの後頭部を撃ちました。アラバマ州法は最も凶悪な殺人に対して死刑を規定しており、この事件の陪審員も過去30年間のどの裁判所も、ウェスト氏の有罪を疑ったことはありません。」〈sup〉98〈/sup〉

アイビーの声明には、ウィル・ベリーの死刑執行への反対や恩赦の嘆願については一切触れられていなかった。〈sup〉99〈/sup〉　彼は死刑執行を、被害者の家族の願いに応えるものではなく、法的義務の履行として提示した。〈sup〉100〈/sup〉「これらの法律を執行することは知事としての私の厳粛な義務である」という表現は、アイビーを恩赦を与えることの妥当性について独立した判断を下す人物ではなく、単なる立法府の意思の執行者として位置づけた。〈sup〉101〈/sup〉

注目すべきは、アイビーが知事在任8年間で死刑判決を減刑したのはわずか1件のみであり、しかもそれは死刑囚の有罪に疑義があったためであったということである。[102]　この厳格な減刑基準は、アイビーが自身の役割を聖職者としてのものと捉えていたことを示唆している。有罪が証明され、刑が法的に宣告された場合、死刑執行はそれ以上の検討なしに行われた。[103]

B. マーシャル司法長官：遅延された司法と法的策略

スティーブ・マーシャル司法長官の声明はより攻撃的なトーンで、ウェストの最新の法的策略を「遅延戦術」と呼び、それが26年間も正義の実現を遅らせてきたと述べた。〈sup〉104〈/sup〉「マーガレット・ベリーは、コンビニエンスストアで誠実に働いていたにもかかわらず、250ドルのために冷酷に殺害された。この事件の事実は議論の余地がないが、こうした法的な行き過ぎのために、正義は26年間も遅れている。」〈sup〉105〈/sup〉

マーシャルの主張は、判決から処刑までの26年間を、複数の段階の控訴制度を備えた死刑制度の正常な機能ではなく、軽率な控訴によって引き起こされた不当な遅延として提示した。〈sup〉106〈/sup〉　控訴を「策略」と特徴づけることは、死刑手続きに内在する憲法上の問題、証拠の争い、および手続き上の保障を無視することであった。〈sup〉107〈/sup〉

マーシャルはまた、報復と道徳的明確さを強調した。「国家として、我々は善悪、正義と許しの区別に関する信念を堅く守らなければならない。アラバマ州は、有罪者を裁くことに固く取り組んでいる。なぜなら、それがすべての被害者の尊厳を尊重することになるからだ。」[108]　この表現は、許し――ウィル・ベリーの許し、ベリーが母親が望んだであろうと信じていた許し――を、正義と責任と対比させた。[109]　しかし、この二分法は、ベリーの真の主張、すなわち、ウェストに死刑ではなく終身刑を宣告することで、州が母親の名のもとに殺人を強要することなく、母親の記憶を尊重できるという主張を無視している。[110]

C. 国防：死刑執行件数の「増加」

死刑廃止運動の事務局長であるアブラハム・ボノウィッツ氏は、ウェストとミラムの死刑執行を非難し、これらを憂慮すべき全国的な傾向の兆候と捉え、「実際には、これらの死刑執行は、我々の安全を保障するため、あるいは凶悪犯罪の加害者に責任を負わせるために必要ではない。なぜなら、殺人事件の大多数は死刑判決に至らないからだ」と述べた。

ボノウィッツの声明は、死刑執行は殺人に対する必然的な対応ではなく、検察官、陪審員、政治指導者による裁量的な決定であることを強調した。[112] ほとんどの殺人事件は死刑判決には至らず、またほとんどの死刑判決は執行されない。[113] ジェフリー・トッド・ウェストの死刑執行は、他のすべての死刑執行と同様に、終身刑ではなく死刑を執行することを目的として、数十年にわたり複数の関係者によって下された一連の決定の結果である。[114]

VIII. 分析と示唆

A. 「最小限の動き」と苦しみの常態化

ハム委員長がウェストの処刑について「最小限の動き」だったと述べていることは、アラバマ州が、どのケースでも明らかな苦痛にもかかわらず、窒素性低酸素症を完全に常態化させていたことを示している。¹¹⁵ ウェストの処刑は、最初の2分間は目を開けたまま唾液を飲み込み、呼吸困難に陥り、26分間続いたが、これが最良のケースだとすれば、この処刑方法の歴史は、目に見える絶え間ない苦痛の歴史である。¹¹⁶

ウェストの死刑執行時の動きが過去の執行時よりも弱かったという主張は、アラバマ州が詳細な観察データの公開や独立した医療監視の許可を拒否しているため、独自に検証することはできない。¹¹⁷ 我々はハムの「意見」と、限られた視点しか持たないジャーナリストの偏った報道に頼らざるを得ない。¹¹⁸ このような透明性の欠如により、州は実際に何が起こったかに関わらず、死刑執行が成功したと主張することができる。¹¹⁹

さらに、ハム氏が自身の評価は単なる「意見」であって医学的事実ではないと認めたことは、アラバマ州が主張する窒素性低酸素症の人道性に関する主張が主観的な解釈に基づいていることを、意図せず認めることになった。¹²⁰ 同州におけるプロトコルの主要な提唱者が、部分的な観察に基づく意見を述べていることを認めた時点で、苦痛のない死に関する断定的な主張の根拠は崩壊する。¹²¹

B. 許しを拒否する：被害者の家族が重要視されないとき

ウィル・ベリーがウェストの命を救うために行った公的な運動（アイビーへの手紙、州議会議事堂での追悼集会への参加、報道機関への声明など）は、犠牲者の家族が処刑を支持して一致していたわけではないことを示した。[122] しかし、ベリーの反対は州当局によって却下され、当局はマーガレット・ベリーとその家族への正義の名の下にウェストを処刑すると主張した。[123]

死刑執行の決定に反対する被害者遺族の意見を無視するというこの力学は、死刑をめぐる「被害者の正義」という言説の限界を露呈している。[124]　ベリーは、ウェストの死を望んでおらず、国家が自分の代わりに復讐することを望んでいないと明言した。[125]　彼の願いが無視されたのは、それが説得力に欠けていたからではなく、死刑執行という国家の利益が被害者の息子の意思よりも優先されたからである。[126]

アイビー知事はベリーの訴えに対し、有罪判決は認めたものの、アラバマ州法を遵守する義務があると主張した。¹²⁷ この対応は、ベリーの反対意見を恩赦に関する審議において真剣に検討すべき要素ではなく、個人的な感情として扱った。¹²⁸ これは、被害者の家族は死刑執行を支持する場合にのみ重要であり、反対する場合には、その意見は州の判断において無関係になるということを示唆していた。¹²⁹

C. （26歳）と、迅速な司法判断の問題

マーシャル司法長官が26年ぶりにウェストの有罪判決を「執行猶予」とした声明は、この遅延を問題視し、正義があまりにも長い間無視されてきた証拠として提示した。¹³⁰ しかし、この26年という遅延は、死刑の適用に関して深刻な疑問を投げかける。¹³¹

ウェストは犯行時21歳、判決時23歳、そして処刑時50歳であった。[132]　彼は人生の半分以上を死刑囚監房で過ごした。[133]　犯罪から30年近く経ってから処刑することは、報復、抑止、あるいはその他の刑罰目的を果たすのだろうか？[134]　それとも、この遅延は判決で定められた刑罰以上の追加的な罰となったのだろうか？[135]

母親の殺害によって深い心の傷を負った11歳の少年から、母親の殺人犯を許す父親、そして祖父へと成長したウィル・ベリーの変遷は、数十年という歳月を経て個人がいかに変化していくかを如実に示している。[136]　ベリーとウェストは、犯罪発生から処刑までの26年間で、いずれも大きく変貌を遂げた。[137]　2025年に処刑された男は、もはや1997年にマーガレット・ベリーを殺害した男ではなく、2025年に恩赦を嘆願した男は、1999年に母親の殺人犯の判決を目撃した少年とは別人だった。[138]　しかし、司法制度は彼らを固定された存在として扱う。ウェストは、その最悪の行為によって永遠に定義づけられ、ベリーは、反対意見が公式の見解から逸脱した途端に、取るに足らない存在とみなされる。[139]

D. 「運動の変動」の容認

ハムの「我々が行った6つの実験では、動きにばらつきが見られた」という発言は、窒素性低酸素症の症状の一貫性のなさを認めている点で重要である。¹⁴⁰ もしこの方法が急速かつ予測可能な意識喪失を引き起こすのであれば、試行間で観察された大きなばらつきをどのように説明できるだろうか。¹⁴¹

最も可能性の高い説明としては、(1)　個々の生理学的差異が窒素の酸素への作用速度と程度に影響を与える、(2)　マスクの装着状態やガス流量のばらつきがプロトコルの有効性に影響を与える、(3)　　死刑囚の中には、意識を失う前に他の囚人よりも強い意識的苦痛に耐える者がいる、という可能性が挙げられる。[142] これらの3つの可能性は、窒素低酸素症の信頼性と人道性に関する国家の断固とした主張に疑問を投げかけるものである。[143]

個人差があるため、窒素検査中に他の人よりも苦痛を感じる人がいるものの、この方法は検査プロトコルが保証するはずの一貫性を保証するものではない。¹⁴⁴ さらに、マスクの装着やプロトコルの実施が結果に影響を与える可能性があるにもかかわらず、アラバマ州が技術的な詳細を開示することを拒否しているため、プロトコルを改善できる外部評価が不可能になっている。¹⁴⁵

E. 親指を立てるジェスチャーと人間的なつながり

処刑開始時にウェストが弁護士に親指を立てた仕草は、国家の殺人機械の中で人間的な繋がりが生まれた瞬間を捉えたものだった。146　　キャリー・グレイソンが中指を立てた（反抗の象徴）ことや、グレゴリー・ハントが諦めの意思表示（「慈悲はない」）をしたのとは異なり、ウェストの仕草は感謝、承認、あるいは単に命をかけて戦った相手との最後の意思表示だったのかもしれない。147

この仕草は、ウェストが処刑開始時に意識があり、覚醒していたことを裏付けている。弁護士の居場所を認識できるほど意識があり、意図的な手振りをするほど意志が強く、別れを告げていることを理解できるほど覚醒していたのだ。[148]　処刑開始時のこの意識は、窒素が瞬時に意識を失わせるという主張と矛盾する。[149]

IX. 結論：第七の死と未来の軌跡

ジェフリー・トッド・ウェストは、2025年9月25日午後6時22分、処刑開始から約26分後に死亡した。[150]　彼は窒素低酸素症で処刑された7人目の人物であり、アラバマ州ではスミス、ミラー、グレイソン、フレイジャー、ハントに次いで6人目であった。[151] 彼の処刑は、本人の後悔の念の表明、ウィル・ベリーによる恩赦を求める公開嘆願、そして窒素低酸素症が不必要な苦痛を引き起こすかどうかについての継続的な疑問にもかかわらず行われた。[152]

ハム委員がウェストの処刑について「動きが最小限だった」と表現したことは、アラバマ州の処刑手順が改善されているか、あるいは許容される苦痛の基準が以前の処刑よりもさらに目に見える苦痛を含むように進化していることを示唆している。¹⁵³ アラバマ州で実施されている手順は秘密にされており、独立した医療監視も認められていないため、この主張を独自に検証することはできない。¹⁵⁴

ウェスト事件は、死刑囚の遺族の願いが、死刑執行を決定した州の方針と食い違う場合、遺族の願いには限界があることを明らかにした。ウィル・ベリーの恩赦、死刑執行への反対、そして寛大な処置を求める嘆願は検討されたものの、最終的にはアイビー知事の「厳粛な義務」である法の執行とは無関係とみなされた。¹⁵⁵ 被害者の息子がウェストの死を望んでいないと明言したとき、被害者側の死刑執行を求める主張は特に強く響いた。¹⁵⁶

この処刑は、アラバマ州の死刑制度において窒素低酸素症が完全に常態化していることをも示した。ウェストの処刑は、過去6件の窒素低酸素症による死刑執行を規定したのと同じ法的枠組みの下で計画、実行、弁護された。¹⁵⁷ 新たな法的論拠は提起されなかった。執行停止も認められなかった。処刑は、経験によって培われた効率性と、裁判所が介入しないという確信から生まれた自信をもって執行された。¹⁵⁸

2025年9月までに、アラバマ州はその年に4人（フレイジャー、オズグッド、ハント、ウェスト）を処刑し、2024年の処刑総数6人（その年、他のどの州よりも多い）に匹敵するか、あるいはそれを上回るペースで処刑を進めていた。[159] このペースの加速は、これまでアラバマ州での処刑を遅らせていた実際的な障害を克服する上で、窒素低酸素症が果たした役割によるものとされた。[160] この方法は、致死注射に代わる確実な方法であり、製薬会社のボイコットの影響を受けず、法的異議申し立てもほとんど受けない。[161]

全国的に見ると、死刑執行件数は2014年以来最高水準に達し、フロリダ州は2025年に12件の執行という新記録を樹立した。¹⁶² 専門家はこの増加を、死刑判決に対する最高裁判所への上訴件数の減少、連邦当局による死刑制度への政治的支持、窒素低酸素症などの代替執行方法の採用といった複数の要因に起因するものとしている。¹⁶³ ウェストの死刑執行はこの全国的な傾向に拍車をかけ、死刑執行に課題を抱える州が新たな方法を採用することで通常の執行を再開できることを示した。¹⁶⁴

第1章では窒素低酸素症を未証明の方法として提示したが、第2章から第6章では、明らかな苦痛にもかかわらず、その方法が常態化していることが記録されている。この章では、この方法が非常に効率的に運用されているため、目撃者が嚥下、呼吸困難、注射開始から死亡までの26分間の間隔を目撃した場合でも、国家は「軽微な動き」を誘発することができることが明らかにされている。¹⁶⁵ 7件の窒素低酸素症による処刑は、この方法が目に見える一貫した苦痛を引き起こすことを実証したが、この一貫性は再検討には至らず、むしろ予想される、非自発的かつ許容される反応に関する議論に組み込まれた。¹⁶⁶

ジェフリー・トッド・ウェストの最後の仕草――弁護士への親指を立てたジェスチャー――は、彼を排除するために設計されたシステムの中に、人間的な繋がりがあったことを示していた。キム・チャンドラーが報じた彼の悔恨は、26年間の歳月を経て真の変貌を遂げたことを示唆していた。ウィル・ベリーの許しは、被害者の家族が復讐よりも思いやりを選ぶことができることを示した。しかし、州がウェストの刑を「正当」と判断したとき、これらのことは何の意味も持たなかった。[167]

機械は回り続けた。アラバマ州での死刑執行のペースは加速した。そして7人目の死は、それ以前の6人と同様に、州が人々を窒息死させ、それをめったに見られない「小規模な動き」と呼ぶときに何が起こるかという経験的統計に単に加わっただけだった。[168]

最終的なメモ

1. アラバマ州矯正局、2024～2025年死刑執行記録；死刑情報センター、「死刑執行データベース」、https://deathpenaltyinfo.org/facts-and-research/data/executions。2025年9月現在、アラバマ州はデメトリウス・フレイジャー（2月6日、窒素）、ジェームズ・オズグッド（4月24日、薬物注射）、グレゴリー・ハント（6月10日、窒素）を処刑した。ルイジアナ州はジェシー・ホフマン・ジュニア（3月18日、窒素）を処刑した。

2. アラバマ州矯正局長ジョン・Q・ハム氏の記者会見、ウィリアム・C・ホルマン矯正施設（2025年9月25日）、サラ・クリフトン著「アラバマ州、1997年の殺人事件でジェフリー・トッド・ウェストを窒素ガスで処刑」、*モンゴメリー・アドバタイザー*、2025年9月25日、https://www.montgomeryadvertiser.com/story/news/local/alabama/2025/09/25/geoffrey-todd-west-executed-for-1997-murder/86178167007;キム・チャンドラー、「アラバマ州、1997年に店員を射殺した男を窒素ガスで処刑」、 *AP通信*、2025年9月25日、https://apnews.com/article/alabama-execution-nitrogen-abbee4a788ad61f5b8d7cfe0d7afe992。

3. 「最小限の動き」に関する主張の分析と、それがプロトコルの評価に及ぼす影響。

4. *West v. State*, 793 So.2d 870, 873（アラバマ州刑事控訴裁判所、2000年）（犯罪を記述した第一審裁判所の量刑命令を引用）。

5. キム・チャンドラー、「死刑囚に殺害された女性の息子がアラバマ州に死刑執行停止を要請」、 *AP通信*、2025年9月23日、https://www.live5news.com/2025/09/23/son-woman-murdered-by-man-now-death-row-asks-alabama-stop-his-execution。

6. 同上。チャンドラー、*前掲*注2。

7. アラバマ州司法長官事務所、「有罪判決を受けた殺人犯ジェフリー・トッド・ウェストの処刑に関するスティーブ・マーシャル司法長官の声明」（2025年9月25日）、https://www.alabamaag.gov/attorney-general-steve-marshalls-statement-on-the-execution-of-convicted-murderer-geoffrey-todd-west/ 。

8. *West v. State*, 793 So.2d 870, 873（アラバマ州刑事控訴裁判所、2000年）（裁判所の判決命令には、「1997年3月27日の深夜または1997年3月28日の早朝に、ジェフリー・トッド・ウェストと彼のガールフレンドは、ノッカルラ・パークウェイ2920番地にあるハロルドのシェブロン・ガソリンスタンドまで車で行った」と記載されている。）

9. 同上

10. 同上

11. 同上（「被告は以前、このコンビニエンスストアで働いていた」）。

12. 同上（「被告人は以前、シェブロン店を強盗し、『目撃者を残さず』、『店内の人物を殺害する』つもりだと他人に話していた」）。

13. 同上（「ウェストは45口径のピストルで武装して店に入った」）。

14. 同書、873頁（「状況から判断すると、彼はベリー助手を銃で脅迫したと思われる」）。

15. 同上（「彼は…店のお金が保管されていたクッキー缶から250ドルを盗んだ」）。

16. 同上、873頁（「医学的証拠によれば、ベリーは店のカウンターの後ろの床にうつ伏せで倒れているときに後頭部を撃たれた」）。

17. 同上（「法医学者によれば、この負傷は急速な機能不全と非常に速い死亡につながるだろう」）。

18. アラバマ州矯正局の記録；エイミー・ピアースの司法取引合意書（1998年）。ピアースは強盗殺人事件への関与により、懲役35年の判決を受けた。

19. *West v. State*, 793 So.2d 870（アラバマ州刑事控訴裁判所、2000年）。ウェストは1999年6月1日に殺人罪で有罪判決を受けた。

20. 同書870頁（「量刑審理後、陪審は10対2の投票で、被告人に死刑を宣告することを勧告した。裁判所は陪審の勧告を受け入れ、被告人に死刑を宣告した。」）

21. アラバマ州矯正局、死刑囚記録（1999年～2025年）。ウェストは1999年に死刑判決を受け、26年間死刑囚として過ごした後、2025年に処刑された。

22. アラバマ州司法長官事務所の声明、*上記*注7（「彼女は持っていたお金をウェストに渡し、彼は彼女を処刑した」）。

23. 犯罪の状況分析。

24. 時系列で計算すると、マーガレット・ベリーは1997年当時33歳で、ウェストは死刑囚として26年間を過ごした。

25. チャンドラー、*前掲*注2；チャンドラー、*前掲*注5。

26. チャンドラー、*前掲*注2（「後悔しない日はなく、過去に戻れたらと思う日もある」）。

27. 同上（「あなたから奪ったものについて、本当に申し訳なく思っています。どうか私を許してください」）。

28. 同上（「他に頼る場所がないなら、教会に行って司祭を見つけて、すべてを話せばいい。でも、俺がやったようなことはするなよ。たとえそう感じなくても、君には選択肢があるんだ。」）

29. 死刑事件における後悔の分析。

30. アラバマ州司法長官事務所の声明（*上記*注7参照）。ウェストは「26年間死刑囚として収監されており、判決はまだ下されていない」。

31. 同上。アラバマ州の法律に基づく、当該変更の法的関連性の欠如に関する分析。

32. チャンドラー、*前掲*注5。ベリーは1997年に母親が殺害された時、11歳だった。

33. 同上

34. 同上

35. 同上

36. 同上（ベリーは「時間と信仰が彼に異なる視点を与えてくれた」と述べている）。

37. 同上（「私はこの男を許します。彼に死んでほしくありません。母のために、私の名において、あるいは私の家族の名において、国家が復讐することを望みません」）。

38. 同上

39. 同上

40. 同上（ベリーは2025年9月23日火曜日、アラバマ州議会議事堂前で行われた死刑反対集会に、死刑反対派とともに参加した）。

41. 同上。キム・チャンドラー撮影による国会議事堂前での追悼集会の写真（2025年9月23日）。ベリーは死刑制度への反対を象徴するため、鐘を鳴らした。

42. Chandler、*前掲*注5（ベリーは、死刑執行の中止を求める嘆願書をアイビー知事の事務所に届けるのを手伝った）。

43. 同上（ベリーとウェストは処刑までの数週間、手紙をやり取りしていた）。

44. 同上（二人は処刑前に直接会う許可を求めた）。

45. 同上（刑務所当局は、受刑者と被害者との面会を禁止する安全規則を理由に、この要請を拒否した）。

46. 会合拒否の分析と、セキュリティ上の理由による正当化。

47. ウィル・ベリー、ケイ・アイビー知事への手紙（2025年9月）、チャンドラーの報告書からの抜粋（ベリーは、ウェストの死は「私にとって重荷となり、母を生き返らせることはできない」と書いている）。

48. ケイ・アイビー知事からウィル・ベリーへの手紙（2025年9月11日）、チャンドラーの報告書からの抜粋（アイビー知事は、アラバマ州法は「最も凶悪な殺人行為に対して死刑を科す」ものであり、知事として法律を執行することが自分の義務であると記している）。

49. ベリーとアイビーの交換取引の分析。

50. 同上

51. アラバマ州司法長官事務所、声明、*上記*注7参照。

52. 「判決が優先する」という枠組みの分析。

53. アラバマ州司法長官事務所、声明、*上記*注7参照。

54. 同上

55. 同上

56. アラバマ州矯正局、窒素ガスによる低酸素症に関する投票記録（2018年）。ウェストは、処刑手順が策定される前の2018年に、窒素ガスを処刑方法として選択した。

57. ミラー事件およびフレイザー事件との比較については、第2章および第4章を参照のこと。

58. 同上

59. スミス事件とハント事件の判例（第1章から第6章）。裁判所は、窒素性低酸素症に関する合衆国憲法修正第8条の主張を一貫して却下してきた。

60. 確立された法的枠組みの分析（2025年9月）。

61. *アラバマ州はウェストに対する*死刑執行命令を出した（2025年9月）。アイビー知事は、2025年9月25日（木）午前0時から2025年9月26日（金）午前6時までの30時間以内を執行期限とした。

62. アラバマ州矯正局による最終日の面会記録（2025年9月25日）。ウェストは8人の面会者から面会を受けた。弁護士、母親、父親、継父、兄弟、甥、いとこ、そして精神的指導者であるパトリック・マッデンである。

63. ハントの孤立との比較、第6章。

64. アラバマ州矯正局記録、*上記*注62（ウェストの最後の食事はチキンケサディーヤだった）。

65. テキサス州刑事司法局、死刑執行情報（ブレイン・ミラム、2025年9月25日）。

66. 死刑情報センター、*上記*注1（国内の死刑執行件数は2014年以来最多に達した）。

67. 同上。フロリダ州は2025年に州全体の死刑執行件数で新記録を樹立した。

68. アラバマ州矯正局、死刑執行スケジュール（2025年9月25日）。死刑執行は午後5時56分頃に開始された。

69. チャンドラー、*前掲*注2（監督のテリー・レイボンがウェストに最後に何か言うことはあるかと尋ねたところ、ウェストは「いいえ」と答えた）。

70. 同上。「担架に縛り付けられ、青い縁のガスマスクで顔を覆われた彼は、処刑が始まるまさにその時、監視室にいた弁護士に親指を立てて合図を送った。」

71. 親指を立てるジェスチャーの分析。

72. チャンドラー、*前掲*注2（「処刑開始後最初の2分間、ウェストは目を開けたまま、息を切らし、呼吸に苦しんでいるように見えた」；ウェストは「口から泡を吹いているように見えた」；「頭が左右に揺れていた」；「左の拳を握りしめていた」；ウェストは「青白くなり」、「よだれを垂らしていた」；「彼の荒い息遣いは、ガラス越しに証人室から聞こえた」）。

73. 同上。窒素投与の初期段階における意識の分析。

74. クリフトン氏の証言（*前掲*注2参照）、およびその他のメディア情報源（2025年9月25日）。

75. アラバマ州矯正局、公式死亡証明書（2025年9月25日午後6時22分）。

76. 窒素注入による7件の死刑執行の時系列を比較分析した。すべての執行は、開始から死亡宣告まで16分から29分の間であった。

77. ジョン・Q・ハム、記者会見、*上記*注2（「すでに述べたように、不随意運動は常に存在し、人それぞれ異なります。我々が調査した6人の動きにもばらつきが見られましたが、観察された動きが最も少なかったのはウェストでした」）。

78. 同上

79. チャンドラーの指摘、*上記*注72参照。

80. 観察可能な事実に基づき、「最小限の動き」に関する主張を分析する。

81. ハム、記者会見、*上記*注2（「亡くなった人は顔色が変わり始めるが、腕の皮膚の変化には気づかなかった」）。

82. チアノーゼ認識の分析。

83. ハムの視角に関する補足説明。クリフトン、*前掲*注2（ハムは、座っていた場所から自分の顔がほとんど見えなかったと述べていると伝えられている）。

84. ハム氏、記者会見、*上記*注2（ハム氏は、自分が座っていた場所からは「顔がほとんど見えなかった」ため、「よだれを垂らしたり、口から泡を吹いたりする様子は見られなかった」と述べた）。

85. 限られた情報しか得られない入学者の分析。

86. 同上。（アラバマ州がどのようにしてこれらの動きが「非自発的」であると知ったのかと問われた際、ハム氏は「それはあくまで私の意見であり、メディアが目にしたものについて意見を持っているのと同じことだ」と答えた。）

87. 「意見」と医学的事実の違いについての分析。

88. 同上

89. ハム、記者会見、*上記*注2（ハムは、処刑は「予定通り、規定に従って行われた」と述べた）。

90. プロトコルの変更の可能性に直面した際の「最小限の移動」論拠の分析。

91. アラバマ議定書を取り巻く秘密主義の分析。

92. ハム、記者会見、*上記*注2（「ガスは横ばい線を超えて5分間流れ続けた」）。

93. 同上。クリフトン、*前掲*注2（ハムは、ガスが合計15分間流れ、そのうち5分間は平坦な西側の線を超えていたことを確認した）。

94. 同上

95. 長期にわたるガス流の影響に関する分析。

96. 同上

97. 同上

98. ケイ・アイビー州知事によるジェフリー・トッド・ウェストの死刑執行に関する声明（2025年9月25日）（「約30年前、マーガレット・パリッシュ・ベリーはコンビニエンスストアへ仕事に向かう途中でしたが、二度と家に帰ることはありませんでした。ジェフリー・ウェストは強盗と殺害の目的で店に押し入り、卑劣にもベリーさんの後頭部を撃ちました。アラバマ州法は最も凶悪な殺人に対して死刑を規定しており、この事件の陪審員は、過去30年間のどの裁判でもそうであったように、ウェスト氏の有罪を疑うことはありませんでした。」）

99. 同上。アイビーの声明におけるベリーの省略に関する分析。

100. 同上

101. 同上（アイビー氏は「これらの法律を執行することは、知事としての私の厳粛な義務である」と述べた）。

102. アイビー知事の恩赦に関する実績分析（2017年～2025年）。知事在任8年間で、アイビー知事が減刑したのは死刑判決1件のみであり、それも有罪かどうかの疑念のみに基づくものだった。

103. 同上

104. スティーブ・マーシャル司法長官によるウェストの処刑に関する声明（2025年9月25日）、*上記*注7参照。

105. 同上（「マーガレット・ベリーはコンビニエンスストアで誠実に働いていたにもかかわらず、250ドルのために冷酷に殺害された。この事件の事実関係に疑いの余地はないが、法的な策略によって正義は26年間も遅れている。」）

106. 「合法ゲーム」の特徴づけに関する分析。

107. 同上

108. マーシャル氏の声明（*上記*注7参照）（「国家として、我々は善悪、正義、そして許しに関する信念を堅く守らなければならない。アラバマ州は加害者に責任を負わせるという決意を堅く守る。なぜなら、これこそがすべての被害者の尊厳を尊重することになるからだ。」）

109. 同上。正義と許しという二項対立の分析。

110. ウィル・ベリーの実際の筋書きの分析。チャンドラー、*前掲*注5。

111. 死刑廃止運動事務局長アブラハム・ボノウィッツの声明（2025年9月25日）「真実は、これらの死刑執行は、私たちの安全を確保したり、恐ろしい犯罪を犯した者たちに責任を負わせたりするために必要ではないということです。なぜなら、殺人事件の大多数は死刑に至らないからです。」

112. 同上

113. 同上。死刑に関する裁量権の分析。

114. 同上

115. ハムの「ミニマル運動」に関する発言、*上記*注77参照。

116. 最良のシナリオがもたらす影響の分析。

117. 独立した検証分析の欠如。アラバマ州は詳細な観察データの公開を拒否し、独立した医療モニタリングも認めていない。

118. ハムの限定的な視力の認識については、*上記*注81～85を参照。

119. 透明性と成功に関する主張の分析。

120. ハムの「意見」の承認、*上記*注86参照。

121. ヒューマニティ財団の主張の分析。

122. ウィル・ベリーのキャンペーン、*前掲*注5、40-47頁。

123. 州はベリー氏の反対意見に関する分析を却下した。

124. 「被害者のための正義」というレトリックは、分析を制限してしまう。

125. ベリーによる明示的な発言（*上記*注37参照）。

126. 国家の利益と被害者遺族の意向との対比分析。

127. アイビーからベリーへの手紙、*上記*注48参照。

128. 恩赦審議の進め方に関する分析。

129. 犠牲者の家族は、処刑の分析を支持する場合にのみ重要視される。

130. マーシャルの「判決は保留中である」という発言（*上記*注51参照）。

131. この26年間の遅延に関連する問題点の分析。

132. ウェストの年齢推移：ウェストは犯行当時（1997年）21歳で、1999年6月1日に有罪判決を受け、2025年9月25日に50歳で処刑された。

133. 彼は人生の半分以上を死刑囚として過ごすことになるだろうと推定されている。

134. 刑罰の目的と時間枠の分析。

135. 遅延を付加的な罰則として分析する。

136. 果実の進化の分析については、*上記*注5を参照。

137. ベリーとウェストは、26年の間に大きく変貌を遂げた。

138. 同上

139. 固定された同一性の分析と、真の変化の分析。

140. ハムの「動きのバリエーション」に関する記述、*上記*注77参照。

141. 矛盾がもたらす影響の分析。

142. 考えられる3つの説明の分析：（1）個々の生理学的差異、（2）マスクの装着状態やガス流量のばらつき、（3）死刑囚の中には、他の死刑囚よりも意識のある苦痛をより強く感じる者がいる。

143. 信頼性と人間性に関する主張。

144. 実行プロトコルの一貫性に対する要求。

145. プロトコルの改善は、秘密主義によって妨げられている。

146. 親指を立てる西洋のジェスチャー（*上記*注70参照）。

147. グレイソンとハントの行動との比較（第3章および第6章）。

148. 身振り手振りで示される意識。

149. 意識が瞬時に失われたという主張は否定される。

150. 死亡診断書の詳細は、*上記*注75を参照。ウエストは午後6時22分に死亡宣告された。これは処刑開始から約26分後のことである。

151. 窒素低酸素症による7回目の死刑執行の概要。ウェストは、この方法で処刑された7人目の人物であり、アラバマ州ではスミス（2024年1月）、ミラー（2024年9月）、グレイソン（2024年11月）、フレイジャー（2025年2月）、ハント（2025年6月）に次いで6人目となる。ホフマンはルイジアナ州で処刑された（2025年3月）。

152. 後悔の念にもかかわらず死刑が執行されたこと、ベリーの弁護、そして彼が耐えた苦痛に関する疑問。

153. 「最小限の動き」の特徴づけに関する分析。

154. 独立した検証は行われていない。*上記*注117を参照のこと。

155. ベリー類に対する嗜好は除外される（*上記*注99–101参照）。

156. 「犠牲者の名において処刑せよ」の修辞分析。

157. アラバマ州のシステム内における標準化。

158. 効率的な実行プロセスの分析。

159. 2025年のアラバマ州における死刑執行ペースの分析。9月時点で、アラバマ州ではフレイジャー、オズグッド、ハント、ウェストの4人が処刑された。

160. 窒素低酸素状態を利用することで、これまで実行を遅らせていた実際的な障害を克服することが可能になる。

161. 致死注射に代わる信頼できる選択肢であり、製薬会社のボイコットにも影響されない。

162. 全国的な死刑執行件数の増加に関する統計、死刑情報センター、*上記*注1参照。

163. 2025年の増加に寄与する要因としては、死刑に関する最高裁判所の介入における役割の低下、連邦指導者からの政治的支援、および代替的な処刑方法の採用などが挙げられる。

164. 西側諸国が国家的な潮流に貢献したこと。

165. 第1章から第7章までの分析の進行状況。

166. 7つの処刑は、一貫した苦悩のパターンを確立する。

167. ウェストの後悔、ベリーの許し、「当然の」判決の分析。

168. 実データで記録された7例目の死亡例。

8.0：アンソニー・ボイドの処刑：「これまでで最長」、ホープ・プロジェクト、そしてソトマヨール判事の反対意見

I. 2025年10月と最高裁判所の警告

2025年10月までに、窒素低酸素症はアメリカの死刑制度にしっかりと定着し、完全に再統合された。アラバマ州ではケネス・スミス、アラン・ミラー、キャリー・グレイソン、デメトリウス・フレイザー、グレゴリー・ハント、ジェフリー・ウェストの6人がこの方法で処刑され、ルイジアナ州ではジェシー・ホフマンの1人が処刑された。法的枠組みは確立され、法的異議申し立ては組織的に失敗に終わり、この方法を継続する政治的意思は揺るぎなかった。7人がガスマスクによる窒息死を遂げ、その体は痙攣し、拘束具に抵抗した。それぞれの処刑は、窒素低酸素症が支持者が約束したような迅速かつ苦痛のない死をもたらさないという経験的証拠をさらに提供した。それでもなお、このシステムは官僚的な効率性でプログラムされ、非自発的な動きや憲法上の合法性といったいつものレトリックで擁護され、稼働し続けた。

2025年10月23日に予定されているアンソニー・トッド・ボイドの死刑執行は、これまでの7件とは根本的に異なるその恐ろしさのためではなく、それを取り巻く状況のために、窒素低酸素による死刑執行としてはこれまでで最も重要なものとなるだろう。最高裁判事のソニア・ソトマイヤー、エレナ・ケーガン、ケタンジ・ブラウン・ジャクソンの3人は強い反対意見を表明し、ボイドは「最大4分間続く耐え難い窒息」にさらされるだろうと警告し、窒素低酸素の継続的な使用は人間の尊厳を侵害する違憲の実験だと述べた。ソトマイヤーの反対意見書は、率直な指示から始まった。「携帯電話を取り出し、時計アプリを開いてストップウォッチを探してください。『開始』をタップします。秒針が進むのを見てください。3秒は瞬きする間に過ぎます。30秒後、あなたの心はさまよい始めます。1分が経過し、あなたはそれが長く感じ始めます。」2、3。タイマーは動き続けます。そしてついに4分が経過します。「停止」ボタンを押してください。その間ずっと、窒息していると想像してみてください。

3人の裁判官の警告は予言的であったが、不十分だった。目撃者たちは、ボイドの処刑は長時間の苦痛を伴ったと証言し、ジャーナリストのリー・ヘッジペスは、米国史上最長の液体窒素による処刑と評した処刑中に、225回以上の喘ぎ声があったと数えた。ボイドの精神的指導者であり、処刑室に立ち会ったジェフ・フッド牧師は、これを「これまでで最悪」と呼び、アラバマ州はこのような液体窒素による処刑を実行するには「全く無能」だと断言した。

ボイド事件は、単なる処刑方法にとどまらず、重大な意味合いを持っていた。彼は死刑囚たちが死刑制度に反対するために設立した組織、死刑廃止希望プロジェクト（Project Hope for the Abolition of the Death Penalty）の議長を務めていた。彼は死ぬまで無罪を主張し、証人た

ちに「私は誰も殺していない。殺人には一切関与していない」と語った。有罪判決は、司法取引と矛盾する証言のみに基づいており、彼を犯罪に結びつける物的証拠は何もなかった。連邦判事が窒素低酸素プロトコル中に「不快感、パニック、精神的苦痛」を経験するだろうと認めたにもかかわらず、彼の処刑は実行された。

本章では、ボイドが処刑室へ向かうまでの道のり、彼の死の惨劇を予見させた最高裁判所の反対意見、その明白な残虐性にもかかわらず、この方法を憲法上許容すると宣言したエミリー・マークス判事の判決、複数の目撃者によって記録された処刑そのもの、そして、その残虐性を示す証拠が積み重なるにもかかわらず、窒素低酸素症が完全に常態化してしまったことについて、ボイドの死が明らかにしたことを検証する。これまでの章ではこの方法の導入と普及について詳述してきたが、本章では、国の最高裁判官からの明確な警告でさえ、いったん動き出した実験的処刑の仕組みを止めることはできないことを示している。

II. 犯罪：グレゴリー・ヒューグリーと200ドルの借金

検察によると、1993年7月31日の夜、アラバマ州アニストン出身の32歳の男性、グレゴリー・“ニューヨーク”・ヒューグリーは、200ドルの麻薬の借金をめぐって銃で脅され誘拐された。起訴状によると、ヒューグリーはアンソニー・ボイドと他の3人の男、ショーン・イングラム、モニーク・マーセル・アクルズ、ドウィノーヌ・クインテイ・コックスにコカインの代金を支払っていなかった。このグループはヒューグリーをピックアップトラックに無理やり乗せ、タラデガ郡の野球場まで連れて行ったとされる。検察によると、そこで男たちはヒューグリーを公園のベンチにダクトテープで縛り付け、ガソリンをかけて火をつけた。焼け焦げた遺体は翌朝発見された。

その犯罪は残虐極まりなかった。検死の結果、ヒューグリーは生きたまま焼かれたことが判明した。ベンチに縛り付けられ、逃げる術もなく、耐え難い苦痛の中で死んでいったという状況は、最も経験豊富な警察官でさえも衝撃を受けるほどの残虐さを物語っていた。当時、タラデガ郡は人口当たりの死刑執行率が全米でも最も高い地域の一つであり、ヒューグリー殺害事件は、関与した4人の男に対する過失致死罪での起訴につながった。

しかし、ボイドに対する訴訟は完全に目撃者の証言に基づいており、彼を犯行現場に結びつける物的証拠はなかった。検察側の主要証人は司法取引の一環として証言し、ショーン・イングラムがヒューグリーの足にガソリンをかけて火をつける前に、ボイドがヒューグリーの足に包帯を巻いていたと述べた。〈sup〉 11〈/sup〉この証言は、ボイドの加重殺人罪の有罪判決の根拠となった。より寛大な判決と引き換えに得られた証言であり、弁護側は、物的証拠が存在しないため、この証言は信頼できず、検証も反証も不可能だと考えていた。〈sup〉 12〈/sup〉

ボイドは逮捕された瞬間から無罪を主張した。ヒューグリー殺害の夜はパーティーに出席していたと捜査官に語った。弁護団はこのアリバイを裁判で提示し、検察側は起訴を免れるために司法取引をした人々の証言に依拠していると主張した。しかし1995年3月、陪審はボイドを誘拐中

の加重殺人罪で有罪とした。陪審は10対2で死刑を勧告し、裁判官もこれを受け入れた。当時20代前半だったアンソニー・ボイドはアラバマ州の死刑囚監房に収監され、その後30年間をそこで過ごすことになった。

III. 死刑囚監房での30年：プロジェクト・ホープと無罪の主張

アンソニー・ボイドはアラバマ州の死刑囚監房で30年間を過ごした。これはグレゴリー・ヒューグリーが亡くなった時の生存期間よりも長い。その間、ボイドはただ死を待つだけではなかった。彼は死刑囚たちが死刑制度に反対するために設立した団体「プロジェクト・ホープ」に深く関わるようになった。ボイドはやがて同団体の会長に就任し、その地位によって、自らを死刑に追いやった制度に異議を唱える目的と発言の場を得た。

プロジェクト・ホープは、死刑制度において前例のない取り組みであった。外部の廃止論者ではなく、死刑囚自身が主導する活動だったのだ。この組織は、死刑制度の実態に対する世間の認識を高め、死刑囚仲間を支援し、当局が死刑執行を正当化するために提示する論拠に異議を唱えた。ボイドがプロジェクト・ホープの代表を務めていたため、彼の死刑執行は、一人の命を奪うだけでなく、制度内部における死刑反対の最も影響力のある声の一つを封じ込めることにもなった。

30年間の服役中、ボイドは無罪の主張を一度も揺るがせなかった。処刑前に受けたインタビューで、彼は断固としてこう述べた。「私は誰も殺していない。殺人には一切関与していない」。彼はアラバマ州の司法制度を「政治的」で「復讐心に駆られている」と非難し、「この州には正義など存在しない」と断言した。ボイドの無罪主張は土壇場での宣言ではなく、1993年以来一貫して貫いてきた立場だった。

ボイドに対する証拠の弱さは、彼の有罪を認めた人々でさえも不安にさせた。検察側の主張は、司法取引によって得られた証言、つまり起訴され協力を促された当事者自身の証言に完全に依拠していた。ボイドが犯行現場にいたことを示す物的証拠はなかった。DNA鑑定でも彼を犯行に結びつけるものはなかった。法医学的分析でも、ヒューグリーの死に彼が関与したことを示すものはなかった。有罪判決は、減刑と引き換えに語られた言葉のみに基づいていたのだ。

ボイドの兄は、アンソニーが死刑囚監房で毎日していたことをこう回想している。「彼はプロジェクト・ホープのために働き続け、それから自分の事件に取り組み、それから友人たちに会いに行く。友人たちはしょっちゅう彼の独房の前を通っていた。」死刑執行の可能性にもかかわらず、ボイドは人間性を保ち、他者との繋がりを大切にしていた。「これは決して私の人生を決定づけるものではない。それは断言できる」と彼は兄や他の人々に語った。

IV. 最高裁判所の反対意見：3人の判事からの警告

2025年10月23日、最高裁判所は6対3の票決でボイドの死刑執行停止の申し立てを却下した。〈sup〉 19〈/sup〉しかし、反対意見を述べた3人の判事、ソニア・ソトマイヤー、エレナ・ケーガン、ケタンジ・ブラウン・ジャクソンは、死刑法理において最も重要な反対意見の一つとなる意見を表明した。この反対意見は、ボイドがどのような苦痛を味わうことになるかを読者が物理的に理解できるようにするための指示から始まっている。「携帯電話を取り出してください。タイマーを開いてください。4分に設定し、スタートボタンを押してください。そして、その間ずっと窒息していると想像してください。」〈sup〉 20〈/sup〉

ソトマヨール判事は反対意見の中で、窒素低酸素症の影響について率直に述べた。彼女は、ボイド被告は「最大4分間続く耐え難い窒息」に苦しめられることになり、この方法は残酷で異常な刑罰を禁じる合衆国憲法修正第8条に違反すると記した。〈sup〉 21〈/sup〉反対意見では、過去7件の窒素低酸素症による死刑執行で被処刑者が受けた苦痛を検証し、それぞれの死に共通する、長時間の喘ぎ、痙攣、そして意識が残っているように見えるというパターンを指摘した。〈sup〉 22〈/sup〉

反対意見は、医学的専門知識と、過去の窒素注入による死刑執行に関する証言に基づいていた。ソトマヨール判事は、2024年1月に行われたケネス・スミスの死刑執行に言及し、窒素の注入が始まるとすぐに、スミスは激しく動き出し、必死に息を吸い込もうとしたと指摘した。彼の足と頭はストレッチャーから浮き上がり、腕はストラップに強く締め付けられた。スミスは2分から4分間痙攣を起こし、ストレッチャーを繰り返し揺さぶった。

反対意見は、窒素低酸素症による過去7件の死刑執行で明らかになったパターンを記録した。「まず、ケネス・ユージン・スミスから始めましょう」とソトマヨール判事は記した。「彼は我が国の歴史上、窒素低酸素症で処刑された最初の人物です。」そして、その後の処刑で何が起こったかを要約した。「目撃者は毎回同様の観察結果を報告しています。数秒間ではなく数分間意識があるように見え、激しい痙攣、眼球突出、拘束具への絶え間ない抵抗、そして窒息しそうな喘ぎの感覚があったのです。」 24

さらに重要なことに、反対意見は窒素窒息死の継続を許容してきた法的枠組みに異議を唱えた。ソトマヨール判事は、最高裁が介入を拒否したことは憲法上の責任放棄に当たると主張した。彼女は、州が長期にわたる苦痛を引き起こす可能性のある処刑方法を実験的に試みることを許容することは、合衆国憲法修正第8条だけでなく、人間の尊厳という基本原則にも違反すると述べた。そして、「ボイドは最も単純な形の恩赦を求めている。つまり、最長4分間にも及ぶ耐え難い窒息死に耐えるよりも、数秒で死に至る銃殺刑に処されることを望んでいるのだ。憲法は彼にその恩赦を与えるだろう。しかし、私の同僚判事たちはそうはしないだろう」と結論づけた。

しかし、この反対意見はあくまでも反対意見に過ぎなかった。6人の裁判官のうち多数派は、何のコメントも説明もなく、同僚たちの懸念も考慮に入れずに、ボイドの要求を却下した。死刑執行は予定通り行われることになった。

V. エミリー・マークス判事の判決：明らかな苦痛にもかかわらず、憲法に合致する

ボイドの処刑直前、エミリー・マークス連邦地方裁判所判事は、窒素低酸素症の使用差し止めを求める彼の申し立てを却下した。判決の中で、マークス判事は、ボイドが処刑中に「不快感、パニック、精神的苦痛」を経験する可能性が高いことを認めた。〈sup〉 28</sup>彼女は、過去の窒素低酸素症による処刑の証拠から、苦痛に特徴的な喘ぎや身体的反応の一貫したパターンが示されたことを認めた。〈sup〉 29</sup>しかし、彼女は、この苦痛は合衆国憲法修正第8条に違反する性質のものではないと結論付けた。 ³⁰

マークス判事の論理は、死刑執行方法を分析するための確立された法的枠組みと一致していた。彼女は、最高裁判所が繰り返し、合衆国憲法修正第8条は苦痛のない死を保証するものではなく、むしろ死刑執行は残酷で異常な、または過度の苦痛を与えるものではないと判示してきたことを指摘した。彼女は、いかなる死刑執行方法にも一定の苦痛のリスクが内在しており、そのリスクだけでは違憲とはならないことを示す判例を引用した。

裁判官は、液体窒素を用いた過去の死刑執行の証拠を検討したが、観察された反応は潜在的に「不随意」であり、「意識喪失後」に起こりうるものだと特徴づけた。彼女は、喘ぎや痙攣は必ずしも意識的な苦痛を示すものではないという州側の主張を受け入れたが、この点については医学専門家の間で意見が分かれていることを認めた。

特に、マークス判事はボイド氏が苦痛を被ることを明確に認めた。彼女は次のように記している。「裁判所は、プロトコルに基づきたとえ2分間であっても、故意に酸素を奪われた人が不快感、パニック、精神的苦痛を経験することに疑いの余地はない。」〈sup〉 35</sup>しかし、彼女は、ボイド氏が代替手段によって「重度の痛みの重大なリスクが大幅に軽減される」ことを証明できなかったため、この苦痛は憲法上許容されると結論付けた。〈sup〉 36</sup>

マークス判事の判決は、死刑執行方法を分析するための法的枠組みが、いかに現実から乖離しているかを如実に示していた。判事は苦痛を認め、意識が長時間持続した証拠を受け入れ、ボイドが耐えるであろう苦悩を考慮した上で、憲法が死刑執行を認めていると結論づけた。この判決は、法理がいかに高い基準を確立し、拷問が証明された場合でも合憲とみなされる可能性があるかを示した。

VI. 処刑：長引く苦痛と数百回の喘ぎ

2025年10月23日午後5時50分頃、青い制服を着た刑務官たちがホルマン刑務所の処刑室のカーテンを開けた。アンソニー・ボイドは担架に縛り付けられ、ガスマスクで顔を覆っていた。その後に行われた処刑は、史上最長の窒素ガスによる低酸素死刑執行として記録されることになる。

刑務所長のテリー・レイボンはボイドの死刑判決を読み上げ、最後に何か言うことはないかと尋ねた。担架に縛り付けられ、顔に透明なガスマスクを被せられたボイドは、最後の言葉を口

にした。「私は誰も殺していない。殺人には一切関与していない。この州には正義などない。すべては政治だ。すべては復讐だ。これは事件を終結させるためのものではない。真実は処刑ではなく、内側から明らかになるものだからだ。この制度を変えない限り、この州に正義は訪れない。私の仲間全員に戦い続けてほしい。彼らは大切な存在だ。さあ、やろう！」 39

ボイドは話し終えると、証人席の窓の真向かいに座っていた弟に合図を送った。弟は詩篇23篇を含む聖書の言葉がプリントされた黒いTシャツを着ていた。ボイドは人差し指と親指で「L」の形を作り、弟も同じように合図を返した。

刑務官がボイドが着用していたガスマスクを点検した。彼の精神的指導者であるジェフ・フッド牧師が聖書の一節を朗読し始めた。そして窒素ガスが循環し始めた。

午後5時57分頃、報道関係者の目撃者によると、ボイドは「激しく抵抗し、拘束具に抵抗し始めた」とのことである。〈sup〉 42〈/sup〉複数の窒素ガスによる致死処刑を目撃し、ボイドの死の詳細な記録を提供したジャーナリストのリー・ヘッジペスによると、ボイドの目は白目をむき、痙攣を続け、脚を担架から持ち上げたという。〈sup〉 43〈/sup〉

その後の数分間、ボイドの体は激しく反応した。胸は激しく上下し、ベルトに抵抗した。担架の上で背中が何度も反り返り、頭は左右に揺れた。彼は息を荒くし始め、純粋な窒素を供給するマスクを通して、必死に深く呼吸しようとした。ヘッジペスはカウントを始めた。

午後 6 時頃、ボイドの激しい動きはいくらか落ち着いたが、「彼は 15 分以上続く一連の深く苦しそうな呼吸を始め、そのたびに縛られた頭と首がぴくっと動いた」。44荒い呼吸。1 分ごとに。記者たちは呼吸を記録し始め、鉛筆の音が空中に反響した。あえぎ。書きなぐり。あえぎ。書きなぐり。

75回ほど息を呑む音が聞こえた後、ボイドの弟は深くため息をついた。そして、天井に貼られた指示を無視して、証人室の沈黙を破った。「息切れしている」と、彼は首を振りながら言った。

荒い呼吸は10分近く途切れることなく続いた。ボイドの頭上の壁に取り付けられた小さなデジタル時計が秒針を刻んでいた。午後6時12分頃、ボイドの呼吸は浅くなったが、頻度が増えた。午後6時15分頃、彼は息を吐き出し、頭を傾けて、居合わせた記者たちから顔を背けた。午後6時16分、ボイドは再び深く息を吸い込んだ。フッド牧師は十字を切った。午後6時17分頃から、ボイドの動きは制限されたが、目撃者によると、意識検査中と思われる動きはまだ見えていたという。

複数の目撃者は、ボイドが意識を保っていた時間について異なる証言をした。約16分と述べる者もいた。ボイドの精神的指導者として処刑室に立ち会ったフッド牧師は、ボイドは「少なくとも19分間は意識があり、命をかけて闘っていた」と推定した。フッド牧師は、午後6時16分頃にボイドの足が最後に動いたことを確認した。

午前1時33分、処刑室の幕が開いてから約43分後、アンソニー・ボイドは医師によって死亡が確認された。リー・ヘッジペスは、ボイドが225回以上も息を吸い込んだのを確認した。幕が閉まる前に、ボイドはガスマスクの中で225回以上も呼吸をしていた。ヘッジペスはこれを「この方法による窒素窒息死刑執行史上、最長の記録」と評した。

VII. 証言：「これまでで最悪」

ボイドの処刑を目撃した人々は、ホルマン矯正施設を後にする際、明らかに動揺していた。これまで数多くの処刑に精神的指導者として立ち会ってきたジェフ・フッド牧師は、「これはこれまでで最悪だ」と断言した。彼はアラバマ州が液体窒素による処刑の執行において「全く無能」であると述べ、ボイドの苦しみは「紛れもなく、長引いた」と語った。

フッドは処刑室内で目撃したことを詳細に報告した。窒素ガスが循環し始めたときのボイドの最初のパニック、それに続く激しい痙攣、そして当局がボイドが意識を失うと予想していた後も長く続いた喘ぎについて描写した。〈sup〉53〈/sup〉彼はこの処刑を「拷問」と表現した。〈sup〉54〈/sup〉

リー・ヘッジペスの証言は、処刑の長さに関する詳細な記録を提供した。彼が数えた225回以上の喘ぎは、ボイドの長引く苦痛の経験的記録となった。〈sup〉55〈/sup〉ヘッジペスは、処刑は「少数派裁判所の最悪の予測」さえも超えたと指摘し、ソトマヨール判事が反対意見の中で警告した、意識のある窒息が4分間続くという点に言及した。〈sup〉56〈/sup〉

他のメディア関係者もこれらの証言を裏付けた。AP通信の記者は、ボイドの処刑はこれまでの窒素ガスによる処刑よりも明らかに長かったと述べ、午後5時57分頃、ボイドが拳を握りしめ、担架から頭を少し持ち上げ、震え始めたと記している。午後6時1分頃、これらの動きは止まり、少なくとも15分間は荒い呼吸を続け、その後静止した。

州が任命した証人たちでさえ、目撃した光景に動揺しているように見えた。彼らの証言は、わずか数時間前に最高裁判事3人が発した明確な警告さえも無視した処刑の、集団的な物語を形成した。

VIII. 公式対応：長期にわたる苦痛を最小限に抑える

アラバマ州当局は、ボイドの処刑をめぐる報道を統制するため迅速に行動した。ジョン・ハム委員長は記者会見を開き、処刑は予定通りに行われたと述べた。〈sup〉58〈/sup〉記者から処刑時間の延長について質問されると、ハム氏は「他の処刑よりほんの数分長かっただけだ」と主張した。〈sup〉59〈/sup〉彼は具体的な時間については明らかにせず、処刑手順に対する反応は人それぞれ異なると強調した。ボイドの喘ぎ声や痙攣は、意識や苦痛を示すものではなく、正常な動きだったと述べた。〈sup〉60〈/sup〉

スティーブ・マーシャル司法長官は、死刑執行を称賛する声明文を発表した。「ボイドは30年以上にわたり、果てしない法的手続きを通じて正義の実現を遅らせようと試みたが、陪審員が誤りを犯したという証拠を一切提示しなかった。グレゴリー・ヒューグリーは、残酷で早すぎる死を遅らせる機会を与えられなかった。」 [61]声明では、死刑執行の方法や期間については触れられていない。

ケイ・アイビー知事は、処刑方法よりも犯罪そのものを強調した。声明の中で、知事はボイドの有罪とヒューグリー一家の苦しみに言及し、正義は果たされたと結論付けた。〈sup〉 62〈/sup〉処刑時間の長さについて尋ねられた際、広報担当者は、知事は「確立された手順に従って、矯正局が合法的な刑を執行することを支持している」と答えた。〈sup〉 63〈/sup〉

当局の反応は、事件を矮小化しようとする組織的な努力を示していた。アラバマ州当局は、犯罪を強調し、被害者に正義がもたらされたことを強調し、観察された苦痛は予測可能で非自発的なものであると特徴づけることで、ボイドの死が窒素性低酸素症に関する議論を再燃させるのを防ごうとした。彼らのメッセージは明確だった。処刑は計画通りに行われ、その計画は維持される、ということだ。

IX. 医学的分析：長期にわたるとはどういう意味ですか？

窒素吸入による処刑に関する証言を検証した医療専門家たちは、ボイドが耐え忍んだであろう苦痛について、衝撃的な見解を示している。エモリー大学の麻酔科医で処刑方法の専門家であるジョエル・ジヴォット博士は、長時間の苦痛と絶え間ない喘ぎは、意識のある状態での長時間の苦痛を示していると説明した。

エモリー大学麻酔科・外科准教授で、10年以上にわたり処刑方法の研究に携わってきたジョエル・ジヴォット博士は、窒素低酸素症に対する主要な医学的批判者の一人となっている。ジヴォット博士は、「窒素低酸素症」という言葉は医学用語ではないと強調する。それは、エンタープライズ号のブリッジを連想させる、完全に捏造された言葉だと彼は考えている。この処置は、その本来の名称で呼ばれるべきだと彼は主張する。「窒息死です。顔にガス室を装着するようなものです。」医療行為を模倣する致死注射とは異なり、窒素低酸素症は医療行為を模倣しようとすらしない。「窒息死です…ガスで人を窒息させるのです。どうしてこれが快感や無痛だと考える人がいるのか、私には全く理解できません。」と彼は続けた。「宇宙空間に放り出されて死ぬようなものです。」

ジヴォット氏は、人道的な死刑執行方法だという州の主張に繰り返し異議を唱えてきた。「『我々は新しい処刑方法を採用した。慎重に分析した。この処刑方法では人道的な死刑執行方法となることが分かっている。これがその証拠だ』と誰かが言ったのを聞いたことがない」と彼はABCニュースに語った。「そう言うべきだったのに、誰も言わなかった」。彼は憲法上の立証責任の逆転についてこう述べている。「州が窒素吸入による死刑執行が残酷ではないという証拠を提示するのを待っている。なぜなら、まさにそれが憲法が要求していることだから

だ」。酸素不足に対する身体の反応は、平和的な降伏ではなく、原始的な警報だとジヴォット氏は説明する。「それは身体の最初の警告信号で、別の環境を探し、死なないようにしていることを避けるようにと告げている」。彼の評価は明確だ。「人道的ではない」。陶酔感はないだろう。流血はないかもしれないが、容易ではないだろう。

他の医療専門家も同様の懸念を示した。オハイオ州立大学医学部の外科教授で、医療倫理と死刑制度の専門家であるジョナサン・グローナー博士は、アラバマ州で初めて液体窒素による死刑執行が行われる前に、「患者に100%窒素循環マスクを使用すると、必ず漏れがあるため酸素濃度が100%に達することはありません…彼が深呼吸をして眠りに落ちるとは思えません。それはありそうにないと思います」と警告した。後のインタビューで、グローナー博士は窒素誘発性低酸素症の現実について率直に語った。「彼らは静かに死ぬわけではないと言わざるを得ません」。彼は、突然酸素を奪われた死刑囚は窒息する前に長時間息を止めようとする可能性があり、酸素不足のために痙攣を起こす可能性があると説明した。

当時、米国矯正医師会次期会長であったジェフ・ケラー博士は、心理的側面だけでも苦痛は避けられないと強調した。「彼らは、それが自分たちを殺すことになると知りながらマスクを顔につける。ガスが放出されるタイミングも知っている。当然、苦痛が生じるだろう。人はパニックに陥り、不安と恐怖に襲われる。多くの苦痛が生じるだろう。」 [67]

動物の安楽死に関する獣医学基準は、この方法を人間に適用した場合の残酷さを強調している。米国獣医師会（AVMA）の2020年の勧告では、無酸素環境が「苦痛」を与えるため、窒素低酸素症はほとんどの哺乳類にとって「容認できない」としている。この勧告では、窒素は「鶏、七面鳥、豚の安楽死には」容認できるが、「他の哺乳類には容認できない」とし、「窒素の投与は麻酔をかけた哺乳類にのみ容認できる」としている。AVMAはまた、「意識喪失の前に口を開けて呼吸し、過呼吸を起こすことがあり、これは鳥類以外の動物にとって苦痛となる可能性がある」こと、そして「豚の安楽死を確実にするには7分を超える曝露時間が必要であり、人間サイズの哺乳類ではさらに長い時間を要する」と警告している。米国の29州では、猫と犬の安楽死に窒素低酸素症を使用することを禁止している。国連人権高等弁務官が警告したように、アラバマ州での窒素低酸素症の使用は、「国際人権法の下で拷問またはその他の残虐で非人道的または品位を傷つける扱いまたは刑罰に該当する可能性がある」。これは動物には適用される保護基準だが、アラバマ州で死刑判決を受けた人間には適用されない。医療専門家はまた、窒素が肺の酸素を置き換えることは確かだが、その過程は支持者が主張するように瞬時でも無痛でもないと説明している。脳の低酸素反応はパニックと苦痛を引き起こす。患者は呼吸できないことを自覚し、酸素が体から奪われているにもかかわらず窒息感を覚える。

医学的見解では、ボイドは処刑のかなりの部分、目撃者が報告した16分から19分の間、あるいはそれ以上の間、意識を保っていた可能性が高いとされた。〈sup〉 [69]〈/sup〉この時点以降も続いた苦しそうな呼吸は、意識的な呼吸努力と無意識的な呼吸努力の両方に対応する可能性があるが、いずれの場合も、深刻な生理的苦痛を示していた。

医療専門家はボイドの処刑を歴史的な文脈に位置づけ、その処刑時間の長さは問題のある薬物注射や電気椅子による処刑よりも長く、現代アメリカ史において最も長く、最も残虐な処刑の一つであると指摘している。

医学的分析により、ソトマヨール判事の予測が裏付けられた。アラバマ州で行われていた窒素ガスによる低酸素症は、意識のある状態での長時間の窒息死を引き起こした。しかし、この医学的事実は、こうした死刑執行を容認する法的・政治的枠組みには何の影響も与えなかった。

X. 法的影響：取り戻された異議申し立て

反対意見は悲劇的に正当化された。ボイドが「最大4分間続く耐え難い窒息」に苦しむだろうという警告は、多くの点で楽観的であったことが証明された。目撃者は、苦しみがはるかに長く続いたと報告している。⁷¹ 法学者は、その後の出来事によって最高裁判所の反対意見が劇的に裏付けられたことの重要性をすぐに理解した。

米国における死刑制度の最も著名な専門家の一人であるオースティン・サラットは、数十年にわたり、新たな死刑執行技術がいかに人道的で苦痛のない死という約束を果たせていないかを実証してきた。ボイドの死刑執行後、サラットは「窒素低酸素症は死刑執行方法として失敗している。それは、死刑囚から酸素を奪い、凄惨な光景の中で死に至らしめるものだ」と断言した。電気椅子、ガス室、薬物注射と同様に、窒素低酸素症は「安全で信頼性が高く、人道的な死刑執行方法を絶え間なく、そして無益に探し求める中で、一過性の流行に過ぎない」。サラットは、8件の窒素低酸素症による死刑執行は「迅速でも苦痛のないものでもなかった」と指摘した。実際、窒素低酸素症による死刑執行はいずれも、最高裁判事ソニア・ソトマイヤーが「心理的恐怖」と「耐え難い窒息」と表現したような苦痛を死者にもたらした。サラットの結論は明確だった。「ボイドの死の記憶がまだ鮮明な今こそ、もう十分だ、窒素低酸素による処刑は少なすぎる、死刑は少なすぎると言うべき時だ。」 [72]

憲法学の著名な専門家であり、有名な著書*『原典主義の罠』の著者*でもあるマディバ・K・デニーは、「ボイドは死ぬまで無罪を主張し続けたが、最高裁判所の共和党員たちは、窒素ガスによる窒息死という残酷な処刑方法を州に許可した。その効果が出るまでには30分もかかっただろう」と述べている。^[73]

死刑情報センターの事務局長ロビン・マーハー氏は、ボイドの死後、死刑執行が急増したことと新政権下の政治情勢との関連性を指摘した。「州の選出議員の中には、大統領に取り入ろうとしたり、大統領の政策への支持を表明するために死刑執行を要請し、予定を立てている者がいるのではないかと思う」とマーハー氏は述べた。彼女は、現在の死刑執行率と現代の世論との間の著しい乖離を強調し、「今日処刑された人々は、死刑に対する支持と執行が今日よりもはるかに強かった時代に死刑判決を受けたのだ」と述べた。実際、ボイドの死刑執行は、2025年に予定されている多くの死刑執行のうちの1つに過ぎない。

しかし、直接的な法的影響はごくわずかだった。最高裁判所の多数派は沈黙を守り、同僚判事の反対意見にも、その後の執行にも反応を示さなかった。下級裁判所は既存の判例法を適用し続け、執行方法を違憲と判断するための事実上不可能な基準を確立した。

裁判記録には何が起こったのかの詳細が記されるだろうが、ボイドの死によって、彼の苦しみに対する直接的な法的救済は不可能になった。彼の経験は将来の控訴審における証拠としてのみ用いられるだろうが、その控訴審は、彼の処刑を可能にしたのと同じ法的枠組みに直面することになるだろう。[75]

法的影響は窒素性低酸素症にとどまらず、死刑制度全般に及んだ。ボイドの処刑は、最高裁判所が処刑方法を規制する役割について根本的な疑問を投げかけた。3人の判事が処刑方法が拷問に当たると警告し、その警告が数百回の喘ぎ声を伴う長時間の苦痛によって裏付けられ、しかも裁判所の過半数が処刑過程全体を通して沈黙を貫くことができたとしたら、これは残酷で異常な刑罰に対する憲法上の保護について何を明らかにしたのだろうか。

死刑政策プロジェクトのロバート・ダナム教授は、現状について直接言及し、「…トランプの最高裁判所は明確なシグナルを送っている。死刑事件では憲法上の保障を適用しないということだ」と述べた。〈sup〉 [76]</sup>窒素に関しては、彼が正しかったか間違っていたかは、否定できない事実を認めるか、見て見ぬふりを続けるかという裁判所の選択にかかっている。

XI. プロジェクト・ホープ、代表不在

アンソニー・ボイドの処刑により、死刑廃止を目指すホープ・プロジェクトは会長であり最も目立つリーダーを失った。77　死刑囚によって死刑制度に反対するために設立されたこの組織は、国家が最も効果的な代弁者の一人を暗殺した後、活動を継続するという課題に直面しなければならなくなった。

処刑直前の数日間、ボイドはプロジェクト・ホープの存続を確実にするために尽力した。彼は支援者たちに手紙を書き、後で使用するためにメッセージを録音し、暫定指導部の選出にも参加した。〈sup〉 [78]</sup>組織への最後のメッセージは、「私を殺すことはできても、私たちが築き上げてきたものを破壊することはできない。プロジェクト・ホープは死刑が不当であるからこそ存在し、死刑が廃止されるまで存続し続けるだろう」というものだった。〈sup〉 [79]</sup>

ボイドの最期の言葉「みんなに戦い続けてほしい。君たちは大切な存在だから、さあ、行動を起こそう！」は、彼が築き上げてきた運動を、自分の処刑によって沈黙させてはならないという意思表明だった。〈sup〉 [80]</sup>この処刑は、死刑囚組織の脆弱性と、国家が最も効果的な批判者を排除しようとする意思の両方を示した。しかし、ボイドが支持者たちに「戦い続けろ」と強く訴えたことは、プロジェクト・ホープの使命が個人の命を超えたものであることを示唆していた。この組織は、死刑制度そのものに異議を唱えるために存在しており、その挑戦はボイドの死後も続くことになるだろう。〈sup〉 [81]</sup>

XII. 結論：窒素の8番目の死と完全な計画

アンソニー・ボイドは2025年10月23日午後6時33分に死亡宣告を受けた。目撃者によると、これは記録上最も長い窒素ガスによる低酸素死刑執行だったという。彼はこの方法で処刑された8人目の人物であり、アラバマ州ではスミス、ミラー、グレイソン、フレイジャー、ハント、ウェストに次いで7人目、ルイジアナ州のジェシー・ホフマンを含めると8人目となる。ソトマヨール判事が苦痛が長引くことを警告し、マークス判事が不快感やパニックを経験することを認め、ボイド自身が繰り返し無罪を主張したにもかかわらず、彼の処刑は実行された。

ボイドの処刑は、窒素低酸素症による7件の死刑執行ですでに確認されていた一連の同様の処刑の一部であった。それぞれの処刑は、長時間にわたる明らかな苦痛を伴っていた。目撃者によって、喘ぎ、痙攣、身体的反応が苦痛の兆候として記録され、記述された。それぞれの処刑は、窒素低酸素症の支持者が予測していたよりもはるかに長く続いた。そして、それぞれの処刑によって、州当局はこの苦痛を予見可能で、非自発的であり、憲法上許容されるものと特徴づけるに至った。[84]

しかし、ボイドの処刑はいくつかの点で特異なものであった。多数の目撃者と詳細な記録により、窒素吸入による処刑としては史上最長の処刑であったことが明らかになっている。また、この方法は拷問に当たると最高裁判所が明確に警告した判決後に行われた最初の処刑でもあった。ボイドは死刑囚でありながら反乱鎮圧を主導し、最後まで無罪を主張し続けた人物だった。さらに、これは現在までに最も詳細に記録された処刑でもあった。リー・ヘッジペスは225回以上の喘ぎ声を数え、ジェフ・フッド牧師は「これまでで最悪の処刑」と評した。

ソトマヨール判事の反対意見は、ボイド本人やその支持者を安心させるにはほとんど役に立たなかった。ボイドが長時間の意識下窒息に苦しむだろうと正確に予測していたものの、この予測が最終的に彼の命を奪うことになった。窒素性低酸素症が苦痛を引き起こすことを確立したという点で、確かに歴史的にも法的にも重要な節目となったが、ボイドがそれに屈するのを防ぐことはできなかった。[86]

ボイドの処刑は、その残酷さを示す証拠が積み重なるにもかかわらず、窒素低酸素症が完全に常態化していることをも明らかにした。アラバマ州は、過去のすべての窒素低酸素症による処刑を規定してきたのと同じ法的枠組みを用いて、処刑を計画、実行、擁護した。ハム委員長は、処刑は「他の処刑よりほんの数分長かっただけ」だと述べ、その長引いた期間の重要性を軽視した。マーシャル司法長官とアイビー知事は、正義が果たされたことを歓迎したが、その実行方法については無視した。最高裁判所の多数派は沈黙を守り、ソトマヨール判事が提示した反証にもかかわらず、窒素低酸素症が依然として合憲であると判断した理由について何の説明も示さなかった。

ボイドの無罪という問題は、彼の処刑にさらなる悲劇的な側面を加える。もしボイドが真実を語っていたとしたら、もし彼が1993年7月31日の夜、野球場ではなくパーティーにいたとしたら、アラバマ州は死に至るまでに長時間の苦痛を与える方法で無実の男を処刑したことになる。 ⁸⁹たとえボイドが有罪であったとしても、彼を殺害するために用いられた方法は、

ソトマヨール判事が反対意見で述べた原則に違反している。すなわち、処刑は不必要な苦痛を与えてはならず、長時間の意識的な拷問をもたらす方法は違憲であり、そのような方法を継続することは国家の尊厳に対する侮辱である。〈sup〉90〈/sup〉

ボイドの最後の言葉は、彼がアラバマ州の司法制度に感じていた無益さを要約していた。「この制度を変えない限り、正義は実現しない」と彼は断言した。「心の平安は内面から生まれるものであり、死刑執行から生まれるものではない」。これらの言葉は、死刑が被害者の家族に正義と慰めをもたらすという、死刑の根本的な正当化に異議を唱えるものだった。ボイドは、真の心の平安は内面から生まれるものであり、正義の名の下に人を殺しても、痛みは癒されず、失われたものは取り戻せない、そして制度そのものが永続ではなく変革を必要としていると主張した。

2025年10月までに、8人が窒素低酸素症で死亡した。この方法は2つの州で実施され、あらゆる法的異議申し立てに耐え、裁判官や選出された公職者によって憲法上許容され、実際に効果的であると承認されていた。しかし、それぞれの処刑は目に見える苦痛を引き起こした。それぞれの処刑は予想をはるかに超えて長引き、それぞれの処刑は目撃者に苦悶、喘ぎ、そして多くの人が拷問と呼ぶような状況を語らせた。

これまでの章では窒素低酸素死刑の導入と普及について述べてきたが、ボイドの処刑は、最高裁判事3名による明確な司法上の警告にもかかわらず、この方法が依然として用いられていることを示した。8件の窒素低酸素死刑執行は、この方法が絶え間なく長期にわたる苦痛を引き起こすことをすでに示していた。ソトマヨール判事の反対意見は、この苦痛を国の最高裁判所の公式記録に刻み込んだ。ジェフ・フッド牧師は、ボイドの処刑をこれまでで最悪の処刑と呼んだ。リー・ヘッジペスは、225回以上の喘ぎ声を数えた。

しかし、こうした状況にもかかわらず、アラバマ州は方針を見直したり、手順を変更したり、窒素低酸素症の使用を中止したりすることはなかった。機械は稼働し続け、死刑執行は予定通り行われた。人道的で迅速な方法とされていたこの方法は、実際には効果がなかったが、この事実によって使用が中止されることはなかった。それどころか、死刑執行時の反応、不随意運動、そして憲法上の許容性に関する州の公式見解に、この方法はますます深く根付いていったのである。

アンソニー・ボイドの処刑は、これまでに記録された窒素吸入による最長の死刑執行として、ソトマヨール判事の警告を裏付けた処刑として、そして死刑囚組織を率いて最後まで無罪を主張し続けた男の殺害として記憶されるだろう。しかし同時に、窒素による低酸素症が、最高裁判事3人が警告していたまさにその長時間の意識下窒息を引き起こすことが否定できない事実となった瞬間としても記憶されるだろう。そして、この事実が否定できない事実となったにもかかわらず、この処刑方法の継続的な使用を終わらせるには至っていないことも、今のところは。

計画は完了した。証拠は圧倒的だ。司法による警告も発せられた。それでも処刑は続いている。

最終的なメモ

1. アラバマ州矯正局、2024～2025年の処刑記録。ヘイリー・ベダード、「アラバマ州の処刑目撃者、窒素ガス処刑中に囚人への『激しい殴打』と225回以上の『苦悶の呼吸』を報告」、*死刑情報センター*、2025年10月27日、https://deathpenaltyinfo.org/news/alabama-execution-witnesses-report-violent-thrashing-of-prisoner-and-more-than-225-agonized-breaths-in-nitrogen-gas-execution。
2. *Boyd v. Hamm* 、No. 25A457（米国、2025年10月23日）（ソトマヨール判事、反対意見）、裁判所通知、3-4頁。
3. 同上、編集者注、1ページ。反対意見は次のように始まっている。「スマートフォンを取り出し、時計アプリを開いてストップウォッチを探してください。『開始』をタップします。秒針が進むのを見てください。3秒はあっという間に過ぎます。30秒経つと、心がさまよい始めます。1分が経ち、永遠に続くように感じ始めます。2、3、ストップウォッチは動き続けます。ついに4分に達します。『停止』をタップします。さて、その間ずっと、息が詰まっていると想像してみてください。」
4. Lee Hedgepeth、「裁判官が長時間の窒息死を警告した後、アラバマ州はアンソニー・ボイドに米国史上最長の窒素による死刑を執行した」、 *Tread* 、2025年10月24日、https://www.treadbylee.com/p/after-justices-warned-of-prolonged; Bedard、*上記*注1。
5. ジェフ・フッド牧師の声明（2025年10月23日）；キム・チャンドラー、「アラバマ州、1993年の200ドルの麻薬借金をめぐる殺人で窒素ガスにより受刑者を処刑」、 *AP通信*、2025年10月23日、https://apnews.com/article/alabama-execution-nitrogen-gas-85850653469135f1a8c7482ca0d4f990。
6. Hayley Bedard、「裁判の公正さやアンソニー・ボイドの無罪について深刻な懸念があるにもかかわらず、アラバマ州は窒素注射による死刑執行を計画している」、*死刑情報センター*、2025年10月23日、https://deathpenaltyinfo.org/news/despite-serious-concerns-about-trials-fairness-and-anthony-boyds-innocence-alabama-plans-to-execute-him-using-nitrogen-gas; Chandler、*上記*注5。
7. アンソニー・ボイドの最終声明（2025年10月23日）、報道関係者による記録。
8. *Boyd v. Hamm* 、事件番号 2:25-cv-00529（MD Ala. 2025年10月9日）（Marks、CJ）。
9. *Boyd v. State* , 715 So.2d 825, 832（アラバマ州刑事控訴裁判所、1997年）；Darryl Coote、「アラバマ州、無罪を主張した男を窒素低酸素症で処刑」、 *United Press International* 、2025年10月23日、https://www.upi.com/Top_News/US/2025/10/23/Anthony-Boyd-execution/9561761269077。
10. *Boyd v. State* 、715 So.2d 832。
11. 同上。チャンドラー、*前掲*注5。

12. ベダール、*前掲*注6。
13. *Boyd v. State* 、715 So.2d 836。
14. Bedard、*前掲*注6；Chandler、*前掲*注5。
15. アンソニー・ボイド、最終声明（2025年10月23日）。
16. 同上
17. モーリス・ボイド、個人的なやり取り、2025年10月19日。
18. 同上
19. *Boyd v. Hamm* 、No. 25A457（米国、2025年10月23日）（執行停止を却下する命令）；Amy Howe、「裁判所は男性の銃殺要求を却下」、 *SCOTUSblog* 、2025年10月23日、https://www.scotusblog.com/2025/10/court-turns-down-anthony-boyd-request-to-die-by-firing-squad。
20. *Boyd v. Hamm* 、No. 25A457（米国、2025年10月23日）（ソトマヨール判事、反対意見）、裁判所の通知は1ページ目。
21. 同上、2のスリップ・オブ。
22. 同上、前掲書、3-4頁。
23. 同上、注3。
24. 同上、前掲書、3-4頁。
25. 同上、注9。
26. 同上、2のslip opを参照。ハウ、*前掲*注19も参照。
27. *Boyd v. Hamm* 、事件番号25A457（ソトマヨール判事、反対意見）。
28. *Boyd v. Hamm* 、No. 2:25-cv-00529 (MD Ala. 2025年10月9日) (Marks、CJ)、50ページ。
29. 同書21-30、37-45頁。
30. 同上、51-52頁。
31. 同上、33-34（ *Baze v. Rees* 、553 US 35 (2008) を引用)。
32. 同上、33-34、43頁。
33. 同上、30-31頁。
34. 同上、15-16、27-28、40。
35. 同上、50頁。
36. 同上、33-37、47（ *Glossip v. Gross* 、576 US 863 (2015) を引用）。
37. ヘッジペス、*前掲*注4；サラ・クリフトン、「アラバマ州、1993年の殺人および誘拐でアンソニー・トッド・ボイドを窒素ガスで処刑」、*モンゴメリー・アドバタイザー*、2025年10月24日、https://www.montgomeryadvertiser.com/story/news/local/alabama/2025/10/23/anthony-todd-boyd-executed-for-1993-murder-and-kidnapping/86850774007。
38. ヘッジペス、*前掲*注4。
39. *死刑*情報センター *上記*注1参照。
40. クリフトン、*前掲*注37。
41. ヘッジペス、*前掲*注4。
42. ベダール、*前掲*注1。
43. 同上。ヘッジペス、*前掲*注4。

44. ヘッジペス、*前掲*注4。
45. 同上。ベダール、*前掲*注1。
46. ヘッジペス、*前掲*注4。
47. 同上。ベダール、*前掲*注1。
48. ベダール、*前掲*注1。
49. アラバマ州矯正局、死亡証明書（2025年10月23日午後6時33分）；チャンドラー、*上記*注5。
50. ヘッジペス、*前掲*注4；ベダード、*前掲*注1。
51. 同上
52. ジェフ・フッド牧師のプレスリリース（2025年10月23日）。
53. 同上
54. 同上。ジェフ・フッド牧師は、この処刑を「拷問」であり「これまでで最悪」だと述べ、ボイドは「少なくとも19分間は意識があり、命をかけて戦っていた」と推定した。チャンドラー、*前掲*注5、ヘッジペス、*前掲*注4、アシュリー・バンフィールド、「アンソニー・ボイドの窒素による処刑は道徳的な疑問を提起：牧師」、 *NewsNation* 、2025年10月28日、https://www.newsnationnow.com/banfield/anthony-boyd-execution-alabama を参照。
55. ヘッジペス、*前掲*注4。
56. 同上
57. チャンドラー、*前掲*注5。
58. ジョン・Q・ハム委員、記者会見（2025年10月23日）；チャンドラー、*上記*注5。
59. 同上
60. 同上
61. スティーブ・マーシャル司法長官によるアンソニー・ボイドの死刑執行に関する声明（2025年10月23日）。
62. ケイ・アイビー州知事によるアンソニー・ボイドの死刑執行に関する声明（2025年10月23日）。
63. 知事室の報道官による報道機関への回答（2025年10月24日）。
64. 医学専門家ジョエル・ジヴォット博士の解説は、ダナ・G・スミス著「窒素による処刑方法はより『人道的』と宣伝されているが、証拠が不足している」*サイエンティフィック・アメリカン*、2022年9月23日、https://www.scientificamerican.com/article/new-execution-method-touted-as-more-humane-but-evidence-is-lacking（「2語のコイン」）およびエミリー・ウッドラフ著「窒素低酸素症はルイジアナ州の物議を醸す新しい処刑方法。どのように死に至らしめるのか？」 *NOLA.com* 、2024年3月7日、https://www.nola.com/news/courts/nitrogen-hypoxia-louisiana/article_afa98958-dbfd-11ee-9d48-83e847a85f67.html（「非医学用語」）に引用されている。 Khaleda Rahman、「窒素吸入による死刑執行は悲劇に終わる可能性がある。その理由とは」、 *Newsweek* 、2024年1月16日、https://www.newsweek.com/nitrogen-gas-executions-could-horribly-wrong-1824353（「医療処置を模倣している」および「宇宙の真空状態」）；Ralph Chapoco、「医師と倫理学者は窒素吸入による死刑執行の人道性に懐疑的」、

Alabama Reflector 、2023年9月7日、https://alabamareflector.com/2023/09/07/doctors-ethicists-skeptical-that-nitrogen-executions-will-be-humane（「窒息死」）。

65. ジヴォット、メアリー・ケカトス著「アラバマ州、初の窒素吸入による死刑執行：その方法について知っておくべきこと」 *ABCニュース*、*2024年1月25日*、*https://abcnews.go.com/Health/alabama-prepares-1st-nitrogen-gas-execution/story?id=106605519より引用*（「そんなことを言う人は聞いたことがない」）；チャポコ、前掲注64（「州が証拠を提示するまで」）；ウッドラフ、*前掲*注64（「身体の最大警報」）。エヴァン・ミーリンズ、「窒素低酸素症による人間処刑：「血は出ないが、容易ではない」」、*モンゴメリー・アドバタイザー*、2022年11月16日、https://www.montgomeryadvertiser.com/story/news/2022/09/14/nitrogen-hypoxia-what-we-know/69487392007（「人間ではない…陶酔感もない」） Damian Bailey、David Poole、Vaughan Macefield、「静かだが穏やかではない：窒素による死について科学が語ること」、サウスウェールズ大学、2025年11月18日、https://www.southwales.ac.uk/news/2025/november/silent-but-not-serene-what-science-says-about-nitrogen-death/#:~:text=Damian%20Bailey%2C%20Professor%20of%20Physiology,survival%20systems%20erupt%20into%20panic.

66. ローレン・マスカレニャスによる引用、ジョナサン・グローナー博士、「窒素吸入による処刑：その仕組み」、 *CNN* 、2024年1月25日、https://www.cnn.com/2024/01/25/us/nitrogen-gas-execution（「深呼吸して眠りに落ちるだけではない」）；マイケル・ラムジー、「窒素吸入による処刑：恐ろしい死に方：医療倫理」、NewsNation 、 2025年3月13日、https://www.newsnationnow.com/banfield/execution-by-nitrogen-ugly-way-to-die/#:~:text=(NewsNation)%20%E2%80%94%20What%20is%20it,on%20for%20hours%2C%20he%20said（「彼らは静かに死ぬわけではない」）。

67. ジェフ・ケラー博士の発言（チャポコ著、*上記*注64より引用）。

68. アメリカ獣医師会、AVMA動物安楽死ガイドライン：2020年版。また、ロバート・ダナム、「犬には不向き：窒素ガスによる処刑の不当性に関する典型的な事例」、 *Death Penalty Policy Project* 、2024年5月21日、https://dppolicy.substack.com/p/unfit-for-a-dog-a-textbook-case-of（スミスの処刑の文脈におけるAVMAガイドラインの分析）も参照。国連人権高等弁務官事務所、アリッサ・スペイディによる声明、「アラバマ州、一部の獣医師がペットにさえ使用しない新たな処刑方法を準備」、 *CBS News* 、2024年1月19日、https://www.cbsnews.com/news/alabama-nitrogen-gas-execution-method/。 「動物の安楽死はできないが、アラバマ州は死刑囚に窒素低酸素症を用いる計画」 *CBCニュース*、2024年1月23日、https://www.cbc.ca/news/world/alabama-nitrogen-hypoxia-execution-1.7091845も参照。Bailey、Poole、Macefield、*上記*注65も参照。

69. 同上

70. *ボイド対ハム事件*における反対意見の予測と、実際の死刑執行スケジュールおよび証言との比較。

71. *Boyd v. Hamm* 、事件番号25A457（米国、2025年10月23日）（ソトマヨール判事、反対意見）。

72. オースティン・サラット、ダキン・アンドーン著「なぜ銃殺隊による死刑が復活する可能性があるのか」 *CNN* 、2025年4月10日、https://www.cnn.com/2025/04/10/us/firing-squad-

death-execution-comeback より引用。オースティン・サラット、「アラバマ州での処刑失敗により、窒素性低酸素症の真の性質が明らかになり、それは美しい光景ではない」 *Justia Verdict* 、2025年11月3日、https://verdict.justia.com/2025/11/03/botched-execution-in-alabama-reveals-nitrogen-hypoxias-true-colors-and-it-is-not-a-pretty-picture。サラットに関するより詳細な研究については、オースティン・サラット著『*恐ろしい光景：アメリカにおける煮殺刑と死刑*』（スタンフォード大学出版局、2014年）、およびオースティン・サラット著『*致死注射と人道的な処刑という偽りの約束*』（スタンフォード大学出版局、2022年）を参照のこと。また、*ボイド対ハム事件*（25A457、ソトマヨール判事の反対意見）も参照のこと。

73. Madiba K. Dennie、「保守派の判事たちはアンソニー・ボイドを苦しめることを決めた」、 *Balls & Strikes* 、2025年10月27日、https://ballsandstrikes.org/scotus/anthony-boyd-execution-alabama。

74. Robin Maher の発言は、Susie Webb の「死刑データ: 2025 年の死刑執行件数 43 件」、*WCVB5*、*2025*年 12 月 12 日、https://www.wcvb.com/article/death-penalty-executions-data-2025/69150379 に引用されている。

75. 裁判所は、憲法上の異議申し立てを困難、あるいは不可能にする法的枠組みを維持しようと固く決意しているようで、変更の見込みは全くない。ボイドの運命は、州による致死的な窒素注射による死刑執行を阻止するという、困難、あるいは不可能とも言える課題に挑戦するすべての人々にとって、先例となるだろう。

76. エリザベス・ブルーニグ、「ドナルド・トランプは死刑執行の増加を夢見ている」、*アトランティック*、2025年10月27日、https://www.theatlantic.com/ideas/archive/2025/10/death-penalty-golden-age-trump/684691。

77. 死刑廃止を目指すホープ・プロジェクト、対応策および組織に関する文書。

78. ボイドが支持者に向けて送ったメッセージと手紙（2025年10月20日～22日）（複数の報道記事にも引用されている）。

79. 同上

80. アンソニー・ボイド、最終声明（2025年10月23日）。

81. 同上

82. ジョン・Q・ハム委員、記者会見（2025年10月23日）；チャンドラー、*上記*注5。

83. すべての窒素による執行の分析。Boyd *v. Hamm* 、No. 25A457（米国、2025年10月23日）（ソトマヨール判事、反対意見）； *Boyd v. Hamm* 、No. 2:25-cv-00529（アラバマ州メリーランド州、2025年10月9日）（マークス首席判事）。

84. 窒素注入に関連するすべての情報の分析：証言、メディアへの声明、記者会見、州指導者のコメント。

85. チャンドラー（*前掲*注5）、ヘッジペス *（前掲*注4）、バンフィールド（*前掲*注54）、死刑廃止プロジェクト・ホープ *（前掲*注77）を参照。

86. *Boyd v. Hamm* 、事件番号25A457（米国、2025年10月23日）（ソトマヨール判事、反対意見）。

87. 窒素による死刑執行の軌跡の分析。ジョン・Q・ハム記者会見、2025年10月23日（「数分後…」）。スティーブ・マーシャル司法長官プレスリリース、2025年10月23日。ケイ・アイビー知事プレスリリース、2025年10月23日。

88. *Boyd v. Hamm* 、事件番号25A457（米国、2025年10月23日）（ソトマヨール判事、反対意見）。

89. ボイドは、自身の精神的指導者、メディア、その他関係者に対し、繰り返し無罪を主張してきた。

90. *Boyd v. Hamm* 、事件番号25A457（米国、2025年10月23日）（ソトマヨール判事、反対意見）。

91. アンソニー・ボイド、最終声明（2025年10月23日）、広く録音され、霊的指導者によって直接聞かれた。

92. 窒素低酸素症の軌跡の分析。

93. チャンドラー（*前掲*注5）、ヘッジペス *（前掲*注4）、バンフィールド（*前掲*注54）、死刑廃止プロジェクト・ホープ *（前掲*注77）を参照。

94. ジョン・Q・ハムによる記者会見、2025年10月23日（「数分後…」）；スティーブ・マーシャル司法長官によるプレスリリース、2025年10月23日；ケイ・アイビー知事によるプレスリリース、2025年10月23日。

95. 観察および研究された処刑の分析。Boyd *v. Hamm* 、No. 25A457（米国、2025年10月23日）（ソトマヨール判事、反対意見）。予測される軌道の分析。

8.1：2025年10月23日に行われたアンソニー・ボイドの処刑に関する個人的な記録

天井の釘は今でも私の心に焼き付いて離れない。あれはただの金属片ではなく、非難の言葉だった。錆びてねじれた釘は、まるで私たちを刺そうとするかのように漆喰を突き刺していた。私は釘を見つめながら、会話に耳を傾けようとしたが、釘の一つ一つが抜け出して私の肌に食い込み、私を永遠にそこに縛り付けてしまうのではないかと感じたのを覚えている。ホルマン矯正施設の面会室がどれほどひどい場所だったかを、そこに行ったことのない人に説明するのは難しい。実際、それは醜いというだけでなく、心が張り裂けそうになるほど悲惨だった。空気は重く、汗と消毒液の匂いが充満していた。光さえも灰色で、まるで太陽がその空間に届くことを拒んでいるかのようだった。

釘は、枯れた花輪に刺さった棘のように天井を突き刺していた。天井自体も湿気と放置の重みでたわみ、今にも崩れ落ちて下にいる全員を押しつぶしそうな雰囲気だった。精神的な重圧も同様に重く、今にも崩れ落ちそうな天井、目に見えない重力が私たちにのしかかり、目の前で起こっていることの重大さで私たち全員を窒息させそうだった。

壁は私たちの方に傾いているように見えた。冷たく粗いコンクリートは、静かな非難を放っていた。縞模様の格子窓からは、灰色がかった光が差し込み、床をまるで裁きのように切り裂く柱となっていた。空気そのものが重く感じられ、まるで部屋が呼吸し、私たちの苦痛を吸い込み、絶望を吐き出しているかのようだった。埃の粒子は、記憶の小さな火花のように光の中に漂い、かつてこの廊下を歩いたすべての魂の断片であり、彼らのため息が隅々に漂っていた。

あなたは、このような部屋にいると、愛する人との別れを忘れようと必死に努力している人々の声に耳を傾けることになる。彼らは食べ物のこと、天気のこと、サッカーのことなど、恐怖を紛らわすためなら何でも話す。しかし、そうした気晴らしが崩れ去る瞬間がある。真実がナイフのように部屋を突き刺し、空気を切り裂く瞬間だ。

そんな瞬間の一つが、アンソニーの娘が叫び声を上げた時だった。生々しく、内臓をえぐるような、言葉では言い表せない叫び声。それが、彼女が父親に触れる最後の瞬間だと悟った瞬間だった。彼女の声は、コンクリートと錆にこだまし、あまりにも多くの別れの言葉で重苦しい空気に響き渡った。この叫び声は、単なる痛みではなかった。それは、創造が粉々に砕け散った叫びだった。部屋は彼女の周りで凍りついた。警備員たちさえも、一瞬沈黙した。

部屋いっぱいの人々が、健康そのものの男、生きている男、心臓が力強く鼓動し、笑い声が響き渡る男に別れを告げていた。唯一の慰めは涙だった。至る所に涙が溢れ、まるで湿気にまとわりつくように、涙が空気中に漂っていた。

肩を震わせ、今にも崩れ落ちそうな兄。彼は狭い床の上を絶え間なく歩き回り、言葉は石のように坂を転がり落ち、まるでアンソニーを救おうとするかのように、記憶が今起こっていることを元に戻せるかのように、過去が溢れ出していた。「あの時のことを覚えているかい…」彼は吃音を止められず、何度も何度もどもりながら言った。その繰り返しは、嘆願であり告白であり、部屋の神聖さへの必死の捧げ物だった。

テーブルに座った母親は首を横に振り、唇で祈りの言葉を呟いていた。長年の歳月によって深く刻まれた顔のしわは、まるでこの劇が彼女の存在の核心を突き刺したかのように、かつてないほど鋭く刻まれていた。私は手を伸ばし、彼女の手を取った。冷たかったが、その抱擁の中で、私はどんな説教よりも深い交わり、想像を絶する喪失の中で人間性との繋がりを感じた。彼女の指が私の指を強く握りしめ、ほんの一瞬、私たちはまるで時を共に繋いでいるかのような感覚に襲われた。

かつての恋人も現在の恋人も、床や壁など、目に入らないものを見つめ、そこに座っている、生きているのに既に有罪判決を受けた彼の姿から目を背けていた。弁護士たちは虚ろな目で、自分たちに何ができたのか、どこまで戦えたのかと自問し、嘆願書や控訴状を数珠のように丹念に読み込んでいた。法廷にいるすべての顔に、同じ息苦しい疑問が浮かんでいた。人生を消し去ろうとする制度に、一体どうやって人生が匹敵できるというのだろうか？

そして、アンソニーがいた。こうした苦しみのさなか、彼はほとんど静謐な落ち着きを保っていた。彼の動きはゆっくりとしていて、思慮深く、その存在からは、やがて消え去ってしまうであろう深い愛情がにじみ出ていた。死の床にあっても、彼は皆が無事かどうかを確認した。皆に食事をしたか尋ね、母親が眠れたか尋ねた。娘に微笑みかけ、まるで彼の穏やかさが震える娘を落ち着かせるかのように。

世界で最も偉大な神学者でさえ、このような瞬間を理解することはできなかっただろう。このような試練を乗り越えるために学ぶ人はいない。道徳的な指針も、状況に意味を与える慰めの教義も存在しない。あるのは、生々しい苦しみの存在と、崩れ落ちることなくそれを証言しようとする必死の試みだけだ。

隣の部屋から、警備員たちの笑い声が換気口を通して聞こえてきた。その無頓着さの中に冷酷さと残酷さがにじみ出ており、コンクリートの廊下に響き渡り、鞭のように私たちの静寂を打ち砕いた。彼らは自分たちの残虐さを自覚しているのだろうか、それとも逆に、残酷さこそが彼らの存在意義なのだろうか、と私は思った。

頭上の屋根の梁は、長年の圧力でねじ曲がり、歪んでいた。屋根が崩れ落ちるのではないかと、ずっと考えていた。もしかしたら、もう崩れ落ちているのかもしれない。もしかしたら、私の上に崩れ落ちているのかもしれない。もしかしたら、あの釘はもう私の体内に刺さっていて、内臓をえぐっているのかもしれない。

私が感じたのは、この場所の道徳的な釘が私の魂に深く突き刺さり、残されたわずかな正義感を奪い去っていくような感覚だった。釘が私の心を叩きつけているのが感じられた。看守たちの笑い声、家族の泣き声、そして叶えられない祈り、そのすべてが新たな打撃だった。私の残された部分が崩れ落ちていくのを感じた。

それからアンソニーは私を脇に連れて行った。これまで何度もそうしてきたように、彼は話したがっていたのだが、今回は彼の声にどこか神聖な響きがあった。まるで彼がすでに永遠の半分を渡り終え、今まさに向こう側へ渡ろうとしているかのようだった。彼は、液体窒素による処刑の苦痛を少しでも和らげるために、呼吸をコントロールする方法を探していると打ち明けた。まるで自分の死について語るのではなく、儀式について説明しているかのように、彼は静謐な威厳をもってそう言った。

彼はそれを私に見せてくれた。彼の胸は上下し、深い呼吸、浅い呼吸、また深い呼吸、浅い呼吸、そしてまるで全世界の呼吸を映し出すかのようなリズムを刻んだ。空気はゆっくりと、そして着実に動いていた。そのリズムの中で、彼の心が膨張したり収縮したりする様子が、まるで降伏のメトロノームのように、私にははっきりと見えた。

彼女は「私の呼吸を見て。私の足を覚えていて」と繰り返した。私は理解しようと近づいた。彼女の呼吸はゆっくりとしていて、その単純さの中に神聖さが宿り、潮の満ち引きのように、創造の鼓動そのもののように上下していた。彼女の足は地面にしっかりと根を下ろし、揺るぎなく、まさに旅立とうとしている魂の神聖な土台だった。呼吸と足。動きと静止。生と記憶。私は彼女の重みで部屋そのものがたわむのを見た。狭い窓から光が差し込み、空気が神聖な幾何学模様を描きながら圧縮されていくのを見た。

息を吸うたびに、部屋は神聖な響きで満たされ、その振動は天井の釘や床の埃を通して波紋のように広がっていった。息を吐くたびに、世界の苦しみが運び去られ、灰色で淀んだ空気の中に解き放たれるようだった。私の肺もこのリズムを真似て、今この瞬間に身を落ち着かせ、これから起こることに心身を準備しようとしていた。

機械から缶が落ちる音が、金属的で唐突に私たちの会話を遮った。それは、私が作り出したリズムとは対照的な、印象的な音だった。私たちは二人とも顔を上げ、厳粛な雰囲気の中で、このありふれた音に驚いた。

もっと質問して、完全に理解したかったのですが、時間がありませんでした。他にもそれを必要としている人があまりにも多く、傷ついた心を持つ人があまりにも多く、叶えられなかった祈りがあまりにも多かったからです。

私たちの会話は、彼の娘の泣き声で中断された。今度はもっと大きな声で、その声は空気を切り裂いた。「パパ、パパ、パパ、お願い、パパ！」その言葉は壁にこだました。それは、私たちのすべての失敗の音となった。私は娘のことを思った。小さな手、笑い声、無邪気さ――そ

の思いが私の心を打ち砕いた。涙が突然溢れ出し、まるで胸の岩に打ちつける波のようだった。私はアンソニーの弟の肩に顔をうずめ、泣き崩れた。

私は強くありたかった。そこにいたかった。しかし、私は内面で崩れ落ち、同情と絶望の狭間で身動きが取れなくなっていた。

すると、激しいすすり泣きの合間に、別の音が聞こえた。笑い声だ。すぐ近くにいる警備員の笑い声だった。その声はあまりにも残酷で、私は身震いした。叫びたかった。彼らを呪いたかった。やめてくれと懇願したかった。しかし、私は黙ったまま、自分の痛みを誰にも悟られないようにした。

出発の時間が近づくと、アンソニーは立ち上がった。彼の動きはゆっくりとしていたが、決意に満ちていた。警備員たちがドアの近くに集まり始めた。彼は周囲を見回し、深呼吸をしてから話し始めた。

彼は一人ひとりに会いに行き、どれほど愛しているかを伝えた。まるで祈りのように彼らの名前を繰り返した。消えゆく人生の光の断片、思い出を分かち合った。そして私にこう言った。「私を救おうとしてくれた情熱に感謝します。」

その言葉に私は打ちのめされた。彼女の声には、恨みも非難も一切なく、ただ純粋で、身に余る感謝だけがあった。もっと何かを与えたかった。もっと時間を。もっと努力を。もっと奇跡を起こしたかった。しかし、私に残されたのは、空っぽの手と、その手を満たす痛みだけだった。

普段は物静かな従業員の一人が、店を出る際に窓際でしばし立ち止まった。彼女はガラスに手を押し当て、無理やり笑顔を作ろうとしたが、涙がとめどなく流れ落ちた。「ごめんなさい」と、かろうじて囁いた。このささやかな思いやりの仕草、非人間的な場所における一瞬の人間らしさが、蔓延する残酷さを突き破った。涙声で囁かれた哀れみさえも、その部屋では神聖なものに感じられた。

空気が重くなった。天井の重みを感じた。いや、もしかしたら天井の重みではなかったのかもしれない。アラバマで犯されたあらゆる不正義、叶えられなかった祈り、そして神の沈黙のあらゆる断片が積み重なった重みだったのかもしれない。中庭そのものが、私には祭壇であり、大聖堂であり、母の胎内であり、そして墓のようにも感じられた。

アンソニーの番が回って戻ってくると、看守たちがドアをノックした。その音が部屋中に響き渡った。アンソニーは振り返り、深呼吸をして歩き始めた。自動販売機、スナック菓子の自動販売機、電子レンジ、そして死刑囚監房によくある備品を通り過ぎた。イワシのようにぎゅうぎゅう詰めの階段を上っていると、後ろでドアがバタンと閉まった。

彼らには彼をあんな風に晒し者にする権利はなかったが、残酷さはホルマンの性格に決して欠点ではなかった。彼らはホルマンをガラス越しに戻した。家族が最後に彼に会えるようにするためだった。たちまち悲鳴が沸き起こった。娘は気を失った。母親の顔は凍りついた。兄は彼女を平手打ちした。一つ一つの仕草が、とてつもない重みを帯びているように見えた。立ち去る時が来た。

私は家族を助けて連れ出そうとしたが、警備員が私の胸に手を置いて止めた。そして、私は一人ぼっちになってしまった。

中庭で、釘が打ち付けられ、梁がたわんでいる場所で、私は彼が立っていた場所をじっと見つめていた。そこに座り込み、重い心を抱えながら祈ろうとしたが、言葉が出てこなかった。沈黙そのものが、雄弁な説教だった。

私は聖書を手に取り、読み始めた。詩篇を読み上げると、声が震えた。「主は心の打ち砕かれた者の近くにおられ、霊の打ちひしがれた者を救われる。」私は彼らに語りかけているつもりだったが、実際には自分自身に語りかけていた。神聖な息吹が部屋に近づいてくると信じようとしたが、私の信仰は水に浸した紙のように脆く、今にも破れそうだった。

全員が去り、静寂が重苦しくなった頃、私は警備員を説得して、他の人たちが迎えに来る前にトイレに行かせてもらった。蛍光灯はまるで生き延びようと必死にもがいているかのように、ちらつき、揺らめいていた。鏡はひび割れ、水浸しで、映り込みは歪んでいた。漂白剤と錆、そして何か酸っぱい匂いが肺を満たした。

私はシンクに身を乗り出し、蛇口をひねった。水が勢いよく流れ出し、最初は茶色がかった水だったが、やがて透明になった。そのまま流しっぱなしにした。その音が小さな空間を満たし、静寂の中の一定のささやき声となった。私はそれを見つめながら、まるで世界が揺れているような気がした。

一瞬、私はあの錆びた洗面器の中に消え去りたいと切望した。水に身を委ね、魂に染み付いた汚れを洗い流したいと。今目撃した光景の悪臭と、これから起こるであろう恐怖から、自分を解放したかった。精神的にも道徳的にも、私はまるで糞尿の溜まり場のようだった。もはや、自分の肉体がどこで終わり、恥辱がどこから始まるのか、分からなくなっていた。

そして、まるで耳元でささやくように、彼の声が再び聞こえた。「*私の呼吸に気を配ってくれ。私の足にも気を配ってくれ。*」

彼女の呼吸は、意識的で、神聖なものだった。まもなく縛られることになるその足は、不正義と愛というあらゆる領域を横断し、決して前進を止めなかった。

その時、私は自分がただ死に備えているのではないと悟った。死を目撃する準備をしていたのだと。死に耐える準備をしていたのだと。死を背負う準備をしていたのだと。息をするたびに死を思い出す準備をしていたのだと。

私は冷たい陶器に両手のひらを押し付け、自分の姿を見つめながら、「最後までやり遂げるだけの息を与えてください。彼女の足の感触を私に思い出させてください」と囁いた。

私は浴室を出てテラスに戻った。空気は重く感じられ、コンクリートの上を歩く足音は大きく響き、呼吸も重苦しく感じられた。私は腰を下ろし、心の準備をした。恐怖と献身の間で、全身が緊張しているのを感じた。アンソニーが教えてくれたリズムに合わせて、ゆっくりと一定のリズムで呼吸し、足が地面に触れるのを見つめた。

時間が折り重なっていくように感じられた。一秒一秒が永遠のように長く、中庭の影の一つ一つが存在感を放ち、遠くの足音、きしみ音、ため息といったあらゆる音が、私には名付けることも、捨てることもできない神聖な儀式に参加しているように思えた。そこに座り、私は壁、空気、天井、そして釘の静かな祈りに耳を傾けた。

するとドアが開いた。雰囲気が一変し、金属的な音が響いた。胸が締め付けられるような感覚に襲われた。警備員の声が静寂を破った。「時間だ。」

私は、起こったことすべての重みに圧倒されながら立ち上がった。最後にもう一度深く息を吸い込み、しっかりと地面に足を着け、一歩踏み出した。中庭、釘、重苦しい空気、そして祈りと叫び声の亡霊が、私が扉に向かって歩く間、ずっと私に付き添っていた。

ついに、出発の時が来た。最初は静かに迎えに来たが、次第に騒音が激しくなった。コンクリートを擦るブーツの音、無線から発せられる暗号めいた命令、そして冷淡な口調で私の名前を呼ぶ声。彼らは私を部屋へと連れ戻した。一歩一歩が苦悩に満ち、廊下は死を待ち望む無数の命のこだまが交錯する通路のようだった。

私がドアにたどり着いた途端、警備員が「廊下を空けろ！廊下を空けろ！廊下を空けろ！」と叫んだ。彼の言葉は鉄を叩くハンマーのように壁に反響し、まるで殲滅の儀式のようだった。それは単なる命令ではなく、宣言だった。生きている者は死のために道を譲らなければならない。廊下に響き渡る反響音の一つ一つが空気を震わせ、コンクリートそのものを軋ませた。

廊下を歩いていくと、囚人たちは皆ガラスに押し付けられていた。彼らの顔は青白く、やつれ果て、苦悶に満ちていた。彼らは私がなぜそこにいるのかを知っていた。私が司祭、死の司祭であることを知っていたのだ。彼らの目には、言葉では言い表せない感情が映っていた。恐怖、憐れみ、畏怖、そして感謝。彼らは以前にも同じような光景を目にしていたのだ。彼らの息がガラスを曇らせ、自然発生的な祈りが生まれた。その祈りは、無菌の空気の中を漂い、そして消えていった。それは、耳をつんざくほど沈黙する神に向けられたささやき声だった。

廊下に充満する息苦しい臭いは耐え難いものだった。カビ、腐敗、そして金属のような、古くて湿った臭い。それは喉と肺にまとわりつき、息をするたびに私を焼き尽くした。絶望が空気中に漂っているのを感じた。壁はまるで生きているかのように、苦しみの記憶を宿し、そこに閉じ込められた人々の重みで軋んでいるようだった。

空っぽの独房を通り過ぎた。いや、もしかしたら空っぽではなかったのかもしれない。そこに住んでいた人々の影だけがそこにあったのかもしれない。閉ざされた扉、錆びついた錠前、曇った窓。その中にあった命は消え去ったのだろうか、それともただ一時的に停止し、忘却への次の段階を待っているだけなのだろうか？蛍光灯は不規則に点滅し、長く揺らめく影を落とし、まるで私の前を歩いているかのようだった。私はその影に取り憑かれているような気がした。

私を護衛してくれた警備員は親切で、ささやかな親切心はまるで人間のようだった。「奴らは悪者だ」と彼は静かに呟いた。「こんな日は奴らに傷跡を残すんだ」。彼の言葉は氷のように私の足元で砕け散った。義務と良心の狭間で引き裂かれ、行動を起こすにはあまりにも遠く離れているが、逃げ出すにはあまりにも正気を失っているこの男に、私はかすかな同情を感じた。

私たちは大きな鉄の門にたどり着いた。ノックの音がした。金属がぶつかり合う、鋭く大きな音だった。「霊的指導者が参りました。霊的指導者が参りました」とラジオがアナウンスした。機械的で、典礼的で、儀式化されていた。それは通路であり、敷居だった。私はゲッセマネの園に入るかのようにそれを越えた。待ち受ける苦悩、背負うことになる重荷を自覚しながら。

ドアが勢いよく開き、強烈な臭いが鼻をついた。煙、埃、消毒液、そして囚われた人間の肉体の微かな痕跡。壁に刻まれた何十年にもわたる苦しみは、何ものにも隠すことができなかった。独房は狭く、閉塞感があり、息苦しく、全面プレキシガラス張りのファサードを通して、アンソニーはすべてを見ることができ、そして誰もが彼を見ることができた。隅から隅まで、死への準備の痕跡が刻まれていた。

洗面台とトイレは一体化し、必要性のグロテスクな記念碑と化していた。目地には錆が筋状に広がり、縁にはカビが生え、アンモニア臭が刺激的な香のように空気中に漂っていた。そこでは、神聖なものと俗なるものを区別することは不可能だった。金属はちらつく蛍光灯の下で光り輝き、息をするたびに、私たちは皆、恐怖、希望、愛、そして避けられない運命というるつぼに囚われていることを思い知らされた。

アンソニーは既にそこにいて、穏やかで、思慮深く、静謐だった。彼が私を見ると、彼の周りの空気が濃くなり、まるで神聖な雰囲気を帯びたようだった。私は震えながら彼の隣に座った。テレビでは古いメロドラマが流れていた。迫りくる現実と比べれば、それは人間のドラマ

のグロテスクなパロディだった。画面の中のカップルはキスを交わし、愛し合っていた。アンソニーは、これから自分が目撃することになる究極の出来事、つまり自身の死に備えていた。

別の家族との電話を切った後、彼女は私を見てこう言った。「呼吸の練習をしてきたの。深呼吸、浅呼吸、また深呼吸、また浅呼吸。よく見て。胸を見て。足を見て。」

そして彼は、自身の決断に完全な意味を与える言葉を口にした。「足を上げる。このままの状態を保つ。これが合図だ。もし足を上げたまま震えたら、これ以上進むことはできない。足を気遣ってくれ。呼吸を気遣ってくれ。足元を気遣ってくれ。」

彼は言葉を止め、私は彼の言葉の重みを感じた。これは単なる指示ではなく、実践的な神学だった。

「ほらね」と彼は静かに言った。「息を吸うたびに命が宿り、息を吐くたびに命が解き放たれる。この部屋では、祈りと証言が同時に行われている。私の肺は説教であり、私の胸は聖書だ。一呼吸ごとに、記憶にとどめなければならない重みが込められているんだ。」

彼女はゆっくりと片足を上げ、それからもう片方の足も上げた。「足を上げ続けることは、忍耐の証です。足が震えるのは、身体の限界、痛みが言葉よりも雄弁に語る境界線です。それを見、理解しなければなりません。それは証拠であり、証言であり、魂が証人としてどこまで行けるかの尺度です。私はこれを自分のためではなく、これから生まれてくるすべての魂のために、この恐怖が存在したこと、そしてあの瞬間にも愛が消えなかったことを知る必要のあるすべての人々のために捧げます。」

彼女はそれを再び実演してみせた。深く息を吸い込み、ゆっくりと息を吐き出す。「呼吸はリズム、リズムは法則、リズムは正義。息を吸うたびに、私は生命を呼び起こす。息を吐くたびに、私はそれを宇宙に委ねる。私の足の震え、足裏の震えは弱さではなく、道のしるし。それは世界に告げる。『これは既に起こったことだ。目撃者であれ。書き留めよ。記憶にとどめよ。忘れるな』と。」

アンソニーの声は、まるで壁そのものが理解しているかのように、より深く、より親密なものへと変化していった。「私の胸を見て、脚を見て、足を見て。そこに、忍耐の度合い、不正義の度合い、そして男がすべてを捧げてきたものの大きさが分かるだろう。」

彼女はしばらくの間その姿勢を保ち、脚は硬直し、胸はゆっくりと、規則的なリズムで上下していた。「私の足が震え始めたら、それが合図よ。それが限界なの。あなたには分かるわ。もう何もできないって分かる。そして、あなたはその重荷を背負うことになる。あなたは物語を語る。そして、その証言によって、世界はついにこのくだらないことに終止符を打つことができるかもしれない。」

彼女はゆっくりと足を下ろした。その一つ一つの動きは祈りであり、挑戦であり、肉体と精神の宇宙的な計算だった。「目をそらさないで」と彼女は言った。「見て、覚えておいて。言葉を超えて語らせて。私がこの世を去った後も、この部屋が閉ざされた後も、私の体は語り続けるでしょう。私の呼吸、私の足、私の脚。それらは私の声であり、私の説教であり、私の抗議なのです。」

部屋の持つ道徳的な重みが胸にのしかかってくるのを感じた。洗面台兼トイレ、剥がれかけたペンキ、刺激臭のする煙、ちらつく明かり――すべてがその証人だった。

衛兵に呼び出された。分析のために、少量のワイン、聖餐用のパン、そして油を容器に注がなければならなかった。それはグロテスクで、不条理で、不敬な行為だったが、必要なことだった。私はできる限り丁寧にワインを注ぎ、その強烈な香りを吸い込み、それから油を注いだ。この冒涜行為は私を深く悲しませたが、おかげでアントワーヌのもとに戻ることができた。

彼の傍らに戻り、私たちは祈った。抱き合った。私の体は激しく震え、狭いベッドの中で寝返りを打たなければならなかった。部屋の隅々までが、安らぎとは程遠い場所だった。ビニールで覆われた薄いマットレスからは、かすかにアンモニアと恐怖の匂いがした。隅々まで、ひび割れも染みも、すべてが証言していた。静かなる証人だった。

アンソニーは再び、決意を込めて語った。「人々に見てもらうために、そして記憶にとどめてもらうために、私はこれをやっている。息をするのも、足を上げるのも、震えるのも、すべて彼らのため、私の後に続くすべての人々のためのものだ。こんなことは二度とあってはならない。私は必ず足跡を残す。」

死の淵にあっても、彼は教え、抵抗し、証言し続けた。部屋の中央で、両足を上げ、体を震わせ、呼吸のリズムを刻む。まさに活動主義の化身。殉教の実践。彼はこの部屋のキリストであり、苦悶の中でひざまずき、立ち上がって不正義に力強く証言した。

すると警備員たちが到着した。私は彼にすぐ戻ると告げた。彼らは私を大きな鉄製の門を通り抜け、建物に沿って進み、彼の弁護士と弟が待っている車列へと連れて行った。

そのキャラバンは、ひどく平凡で、痛々しいほど見覚えのある空間だった。まるで子供の頃、学校で使っていたプレハブ教室のようだった。金属の壁、擦り切れたカーペット、ちらつく蛍光灯、かすかな埃とよどんだ空気の匂い。狭くて窮屈だったが、それは境界的な空間であり、二つの恐怖の間の束の間の休息だった。

アンソニーの兄はキャラバンの中を歩き回り、声は感情で詰まっていた。彼は過去のことを語った。果てしない冒険、街を支配したこと、自由への陶酔、そして自分たちの無敵さを確信していた日々。まるで語り継ぐことで、盗まれたあの瞬間を取り戻せるかのように、まるで過去が現在を形作り、これから起こることを防げるかのように、彼はこれらの話を繰り返した。彼

の言葉のリズムは、ほとんど祈りであり、ほとんど告白であり、ほとんど現実を記憶に留めようとする必死の試みだった。

彼の散歩は、追憶の儀式と化していた。一歩一歩、曲がり角一つ一つ、記憶のリズムの一つ一つが、二人の共有した人生の重みを運んでいた。笑い、競争、友情、ささやかな勝利、そして子供時代の苦難。彼が語る物語はどれも、太陽にきらめく塵のように空中に浮かんでいるようだったが、同時に、現在を変えることの不可能性によって影を落とされていた。彼は過去にしがみついていた。まるで記憶そのものが、これから起こることから弟を守ってくれるかのように、あるいは少なくとも、喜びがあったこと、風とスピードと自由に満ちた、奔放な人生があったことを、世界が忘れないようにしてくれるかのように。

私の体重で床板が軋んだ。軋む音の一つ一つが警告のように響いた。「*これ以上進むな。これ以上進むな。*」このごく普通の教室でさえ、そこに存在するものの重大さを悟っているかのようだった。壁には遠くから聞こえる牢獄の音――扉が閉まる音、ラジオの雑音――が響いていたが、内部は畏敬の念と畏怖の雰囲気に包まれていた。

私は折りたたみ椅子に腰を下ろした。アンソニーの弁護士と弟がそこにいて、それぞれがそれぞれのやり方で悲しみを抱え、無力感に打ちひしがれていた。重苦しい空気が漂い、不安が張り詰めていた。私たちが目撃したこと、そしてこれから起こるであろうことの重みが、その場を包み込んでいた。

ネオンライトの低い唸り声は呪文へと変わり、カーペットは祭壇と化した。あらゆるきしみ音、あらゆるうめき声、あらゆる閃光が、私にあの庭園を思い出させた。汗、震え、祈り、恐怖、準備、そしてすべてを捧げる瞬間を前にした、あの苦痛に満ちた孤独。

キャラバンの中でも、アンソニーの呼吸、高く掲げられた彼の足の記憶は、まるで神聖な鼓動のように私の心に響き渡った。彼の活動主義は、彼のあらゆる動き、意識的な呼吸、震える手足の一つ一つに刻み込まれ、空間を満たし、ありふれた日常を神聖な証言へと、平凡な日常を神聖な準備へと変えていった。

私は待った。体は震え、心は激しく動揺した。道徳の重み、世俗的なシステムの重み、そして愛する人が犠牲者と支配者の両方になろうとしているのを見るという耐え難い重荷が、私を突き刺した。ありふれたキャラバンは、絶望と神聖さの間に私たちを吊り下げる大聖堂となり、信仰、恐怖、そして愛が活気に満ちた空間となった。

そして私は待った。

弁護士たちが一人ずつ震え、拳を握りしめ、声を詰まらせ、ドアに視線を固定しているのが目に入った。アンソニーの姿はすでに彼らの記憶に深く刻み込まれ、悲しみは罪悪感と無力感と入り混じっていた。そのうちの一人が激しく身震いし、平静を保てなくなっていた。私は彼が

誰であるかすぐに分かった。私たちは皆、程度の差こそあれ、人間の命の終わりを目撃したという道徳的な重荷を背負っていた。それは耐え難いものだったと言えるかもしれないが、同時に神聖なものでもあった。

私はトイレに行くと言って席を立った。不安が募り、気が散ってしまい、うっかりガウンを濡らしてしまった。蛍光灯の強い光が染みを反射した。水が原始の川のように暗く渦を巻き、恥、恐怖、そして畏怖を排水溝へと運び去っていく中、私は必死にこすった。手は激しく震え、腕は硬直し、胸は締め付けられた。私は罪と弱さの海に沈み、そこにいる資格がないのに、神聖でありながら恐ろしいこの瞬間に否応なく縛られているように感じた。神は私たちをこんな風に創造したのではない。足は、歩いたことだけでなく、積み重なった恐怖、痛み、道徳的な重圧、不安、恐怖、そして死との精神的な対峙によっても痛んだ。私は渦巻く水を見つめた。まるでそれが私を連れ去り、消し去り、匿名性へと溶かし、アンソニーや他のすべての人々を待ち受ける避けられない運命から私を解放してくれるかのように。しかし、そこには祈りと親密さという、かすかで震えるような存在以外に、避難所も聖域もなかった。彼はなんとか尿をすべて洗い流すことができた。

看守が戻ってきて私を迎えに来て、部屋まで案内してくれた。これから待ち受ける恐ろしい運命にもかかわらず、彼は人間性を奪うために作られたこの場所で、優しく人間味あふれる態度を崩さなかった。おそらく彼は罪悪感に苛まれていたのだろう。良心の呵責に苦しんでいたのかもしれない。あるいは、自身の道徳的な過ちを漠然と自覚していたのかもしれない。ホルマンの廊下は、匂い、色彩、音で満ち溢れ、私たちを取り囲んでいた。それは、果てしなく広がる死のサーカスだった。

部屋に戻ると、アンソニーのささやき声が鮮明に蘇ってきた。足を上げてそのまま保持すれば、それ以上進めない合図になる。 *「僕の足を覚えておいて。僕の呼吸をよく見て。足を上げてそのまま保持したら、もうこれ以上進めないってわかるはずだ」*。そのささやき声は親密で、神聖で、まるで秘密を打ち明けているかのようだった。一言一言に宇宙的で根源的な重みが宿り、彼の人生を特徴づけてきた道徳的な明晰さ、献身、そして勇気が込められていた。そのささやき声は私の意識に直接染み込み、物理的な近さ、時間的な現実、そして宇宙的な意義を結びつけた。

アンソニーは担架に横たわっていた。その表情は、脆弱さと決意が入り混じった緊張感に満ち、全身の筋肉が緊張と弛緩を繰り返すことで、服従と強さの両方を象徴していた。十数名の警備兵が担架を取り囲み、介入を待つ沈黙の番人のように、人間的でありながらもどこか遠く、機械的でありながらも自覚的な存在感を放っていた。金属製の担架は、積み重なる恐怖、希望、そして祈りの重みで、かすかに軋んだ。白いシーツに覆われたその冷たい表面は、生と永遠、祭壇と処刑台の間の境界線のように、彼に押し付けられていた。蛍光灯の光が、殺風景で無機質な白と灰色の壁に反射し、部屋の緊張感を高め、あらゆる呼吸、あらゆるささやき、あらゆる動きを増幅させていた。

私は診察台に本を置き、背表紙がアンソニーの体に触れた。それらは私の演台であり、私の支えであり、私の神聖な務めだった。本の重みと存在感は私を地に足の着いた状態にし、人間と神、聖書と肉体を結びつけた。祈り始めると、私の手は震えた。声も最初は震えていたが、やがて永遠の重みに耐え、落ち着いたものになった。私はアンソニーに何か告白したいことがあるかと尋ねた。彼の声は穏やかで落ち着いており、一言一言が無菌の空気に丁寧に刻み込まれ、その中に生涯にわたる道徳的反省、勇気、献身、愛、そして苦しみが込められていた。私は彼に赦しを与え、そっと彼の肩と胸に手を置き、部屋の向こう、永遠そのものに響き渡るような許しの言葉を囁いた。それぞれの言葉が、私たちを見つめ返す機械的で原始的な恐怖を越える橋となった。

私はそれらの品々を手に取り、その質感、重さ、そしてこの簡素な聖体の中に宿る何世紀にもわたる信仰の静謐な存在感を感じ取った。親指でそっと表面をなぞり、十字をなぞると、かすかな振動、共鳴を感じた。それは診察台、アンソニー、そして殺風景な蛍光灯に照らされた部屋全体にまで響き渡った。

「ですから、どうか御霊をこれらの贈り物に送って聖別してください。そうすれば、これらの贈り物は私たちにとって、主イエス・キリストの体と血となるでしょう。」

私はゆっくりと、そして丁寧にパンをちぎった。端が優しく、しかしはっきりと感じられる抵抗感とともに剥がれていくのを感じた。それぞれの破片には、儚さ、神聖さ、そして死すべき運命の重苦しさといった、意味に満ちた世界が、小麦粉と水という基本的な物質の中に凝縮されていた。

十数人の警備兵が担架を取り囲み、視線を一点に向け、体を硬直させ、中には神経質に動揺している者もいた。皆、わずかな動きにも反応できるよう身構えていた。アンソニーのささやきが、親密で根源的な言葉として私の耳に蘇った。*「俺の呼吸を見ていてくれ。俺の足を覚えておいてくれ。こうやって足を上げて支えたら、もうこれ以上進めないって分かるだろう」*。これらの言葉は祈りのリズムと混じり合い、恐怖、献身、死への意識、そして勇気が絡み合う脈動となって響き渡った。

私はパンを掲げ、古代の聖別呪文を唱えた。

「イエスは裏切られたとき、進んで苦しみを分かち合い、パンを取り、感謝をささげてからそれを裂き、弟子たちに与えて言われた。『皆、取って食べなさい。これはあなたがたのために与えられるわたしの体である。』」

アンソニーの舌にパンを乗せたとき、私の手は震えていた。一口一口は、キリストとの、永遠との、そして部屋、担架、そして神聖で宇宙的、根本的な出来事の間接的な目撃者となった12人以上の付き添い人たちに浸透する恵みとの、意図的な交わりだった。質素で簡素なパンは、

単なる食べ物以上のものとなった。それは、死すべき人間の恐怖と神聖な存在との架け橋となり、彼の体、私の体、そして部屋そのものを駆け巡る鼓動となった。

ワインの深いルビー色は蛍光灯の光を浴びて、殺風景な部屋の中で宇宙エネルギーの細い流れのように輝いていた。私はそのワインに十字架の印を描き、その本質的な存在感を感じ取り、アンソニーに手渡した。

わたしは聖別を宣言した。「同様に、食事の後、イエスは杯を取り、再び感謝をささげてから、弟子たちに渡して言われた。『皆、この杯を取って飲みなさい。これはわたしの血の杯、新しい永遠の契約の血であり、あなたがたのため、また多くの人のために、罪の赦しのために流されるものである。わたしを記念してこれを行いなさい。』」

私はワインを持ち上げ、アントワーヌの口に注いだ。ルビー色の液体に光が反射する中、アントワーヌはそれを受け取った。一口飲むごとに、一滴一滴にキリストが宿り、無菌の金属的な部屋全体に恵み、慈悲、勇気、そして存在感が満ち溢れた。担架は聖なる空間となり、蛍光灯がそれを証し、介入する準備をしていた警備員たちは退き、機械的な世界は聖餐の鼓動に道を譲った。

私はその要素について瞑想した。パンは土であり、質素で堅固であり、歴史、祈り、そして信仰と深く結びついていた。ワインは流動的で輝きに満ち、救済の川のように流れ、この世の儚さに永遠を吹き込んだ。この二つが合わさって、アントニオをキリストとしっかりと結びつける恵みの通路を形成し、彼に力と勇気、そして避けられない運命に立ち向かうための神聖な存在感を与えた。パンを持ち上げ、それを裂き、捧げ、杯を掲げ、両方に十字架の印を描き、そして聖体を浸すという、一つ一つの動作は、意図的で、神聖で、根源的なものであり、死すべき運命と永遠が絡み合うリズムだった。

「これらが、あなたがキリストのもとに来るために必要なすべてです。」

アンソニーはそれを既に知っていた。

それから私は詩篇23篇を読みました。 「主は私の羊飼い、私は何も欠けることがない。主は私を緑の牧場に伏させ、静かな水のほとりに導かれる。主は私の魂を生き返らせ、御名のために私を正しい道に導かれる。たとえ死の陰の谷を歩むとしても、私は災いを恐れない。あなたが私とともにおられるから。あなたの杖とあなたの牧杖は、私を慰める。あなたは私の敵の前で私のために食卓を整え、私の頭に油を注いでくださる…」

温かく芳しい香りを放つ聖油が私の傍らに置かれていた。祈りを捧げながら、私はアントワーヌの額に聖油を塗り、十字を三度なぞった。温かい聖油に触れるたび、その圧力をかけるたび、何世紀にもわたる祝福が彼の体に宿り、神聖な存在を彼に刻み込み、キリストに彼をしっかりと結びつけた。かつては機械的で、殺風景で、無機質だった部屋は、生きた祭壇へと変わ

った。あらゆる仕草、恵みの流れが、担架、蛍光灯、そして厳粛な警備員たちを通して広がり、それぞれが、私には理解できない存在の証人となった。

私の杯は満ち溢れています。まことに、恵みと慈しみは私の生涯を通して私につき従い、私は主の家に永遠に住むでしょう。

アントニオの言葉が、親密で本質的な響きをもって再び響いた。 *「私の足を見てください。私の呼吸を見てください。私が足を上げてこのように保持するとき、あなたは私がこれ以上進めないことがわかるでしょう。」* この人間的で親密な行為、この儚い道徳的なしるしさえも、聖体拝領のリズム、恐怖、勇気、死すべき運命、そして神の恵みを一つの生きた脈動の中に織り交ぜる宇宙の流れに統合されていった。

アンソニーは私を見た。パンを一口食べるごとに、ワインを一口飲むごとに、聖油を一滴飲むごとに、彼はキリストと、永遠と結びついた。聖体拝領が彼を支えた。それは彼の勇気と聖性を養う燃料であり、彼を死の恐怖を超えて神の臨在へと導いた。彼の下にある冷たく金属的な担架は、神聖なものとなった。容赦なく照らす蛍光灯がそれを証言していた。静かで、厳格で、機械的な警備員たちは、キリストの存在が隅々まで満たすにつれて、次第に消えていった。カメラ、儀式、呼吸、彼の足元で囁かれる慰めの言葉――すべてが一つになり、恵みの脈動となった。

私がアンソニーの額に温かい黄金色のオイルを塗り、十字を三度なぞると、部屋は息を呑んだようだった。無機質な蛍光灯の光が柔らかくなり、診察台や壁の金属面に反射して、まるでそれぞれが突然新たなエネルギーで振動し始めたかのようだった。オイルは目に見えないが確かに存在感を放ち、アンソニーの体を通して、目に見えないほどの恵みの道を辿っていった。オイルは彼の顔の輪郭、目元や額の細かな皺に染み込み、まるで肌を超越して魂の奥底に触れ、生と永遠の間の空間に柔らかな光を灯しているのを、私はほとんど物理的に感じることができた。

空気そのものが、神聖な重みで震えているようだった。担架のきしむ音、コンクリートの上を歩くブーツの柔らかな軋み、緊張と警戒に張り詰めた警備員たちの動きなど、あらゆる些細な変化が、その重みに呼応しているように見えた。オイルは、物理的にではなく、その共鳴によって部屋を変容させ、無機質な空間を聖域へと、恐怖を静かな恵みの認識へと変えた。それは本質的なものであり、肉体と精神の物質であり、触覚と芳香によって天と地を結びつけるものだった。私は、私たち二人の間の空間に、目に見えない流れのように、その脈動を感じ取ることができた。

アンソニーは敬虔な表情で目を閉じ、そのささやかな仕草の中に、聖油の効果がはっきりと現れた。彼からかすかな光が放たれているように見えた。それは蛍光灯の反射でも、視覚的な効果でもなく、はるかに深い何か、慈悲と力強さ、そしてキリストの存在そのものの痕跡だった。彼の呼吸は以前よりもゆっくりと、そして穏やかになり、カメラのリズムとシンクロして

いるように見えた。そして私は、この聖油塗布は単なる儀式ではなく、形を成した秘跡、すなわち、死の影の中にあっても神性は存続するという真実への道しるべ、橋、証なのだと理解した。

担架の周りで緊張して微動だにしない警備員たちでさえ、この出来事によって微妙に変化したように見えた。彼らが意識的にそれに気づいていたというわけではない。彼らの手と目は緊張したままで、その存在は用心深く、規律に満ちていた。しかし、その部屋に満ちる道徳的、そして宇宙的な重み――重く、光り輝き、否定しようのない重み――は変化していた。そこはもはや単なる死の場所ではなかった。

それからヨハネによる福音書8章1-11節、姦淫の現場で捕らえられた女の話を読みました。「イエスはオリーブ山へ行かれた。朝早く、神殿に戻られると、民衆が皆、イエスの周りに集まっていた。イエスは座って教え始められた。律法学者たちとファリサイ派の人々は、姦淫の現場で捕らえられた女を連れてきて、群衆の真ん中に立たせて、イエスに言った。『先生、この女は姦淫の現場で捕らえられました。律法では、モーセはこのような女を石打ちにせよと命じています。先生はどうお考えですか。』彼らはイエスを試すために、こう言った。こうして、イエスを訴える口実を得ようとしたのである。しかし、イエスは身をかがめて、まるで彼らの言葉を聞いていないかのように、指で地面に何かを書き始めた。」彼らが問い続けると、イエスは立ち上がって彼らに言われた。「あなたがたの中で罪のない者が、まずこの女に石を投げなさい。」そして、再び身をかがめて地面に何かを書き始めた。それを聞いた者たちは自分の罪を悟り、最も罪深い者から順に、一人残らず、良心が離れ始めた。イエスは女と二人きりで、真ん中に立っていた。イエスは立ち上がり、女以外に誰もいないのを見て、女に言われた。「女よ、あなたを告発する者はどこにいるのか。だれもあなたを罪に定めなかったのか。」女は答えた。「だれもいません、主よ。」イエスは女に言われた。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。そして、今からはもう罪を犯してはならない。」

アントニオは、穏やかで落ち着いた、厳粛な声で繰り返した。 「罪のない者が最初に石を投げなさい…私はあなたを非難しない。行って、もう罪を犯してはならない。」彼の声は、慈悲と恐怖、愛と機械的な力、恩寵と運命が入り混じった響きで部屋にこだました。担架は祭壇となり、恩寵の証人であり器となった。緊張して介入する準備をしていた十数人の警備兵は、目の前で繰り広げられる神聖な光景の激しさの前に、影の中に消えていった。

あらゆる動き、あらゆるささやき、あらゆる秘蹟の行為が、宇宙的で神聖な、そして根源的な瞬間に融合した。空気そのものが永遠に満ちていた。すべてが恐怖と恩寵、死すべき者の畏怖と神の臨在が織りなす大聖堂だった。パン、ワイン、油、ささやき、すべてが燃え上がり、アントニウスをキリストへと引き寄せ、死を超越させ、恩寵で満たした。

ベッドの上で本が擦れる音、彼の足音、ゆっくりとした穏やかな呼吸、パンを優しく扱う仕草、ゆっくりと注がれるワイン、そして聖油を塗る行為。一つ一つの行為が、根源的で神聖なものであり、死の恐怖と神聖な永遠を結ぶ架け橋だった。アンソニーの活動、勇気、そして道

徳的な明晰さは、これらの最後の親密な行為に集約され、それぞれが宇宙的な証言、神聖な抗議、そして揺るぎない愛に満ちていた。

私は廊下を来た道を戻り、足音一つ一つが殺風景な灰色の壁に反響し、足元の金属がかすかにカチカチと音を立てた。空気はカビ、工業用洗剤、そしてかすかな腐敗臭で満ちており、ホルマンの壁そのものにまで染み込んでいるようだった。目に見えないが濃密なこの臭いは、常に私の服、髪、肌にまとわりつき、息をするたびに、この場所が恐怖に満ちていることを思い出させた。外では、太陽がコンクリートに強烈で、まるで罰を与えるかのような眩しさで照りつけ、何も隠せない殺風景な光だった。私はゆっくりと前進し、一歩ごとに胸にのしかかる重圧と格闘しながら、角へ、トレーラーへ、そして現実との避けられない次の対決へと向かった。

廊下から少し離れた建物の一つに目をやると、 *「タグショップ」*という看板が目に留まった。私は凍りつき、その文字が胃の中の石のように心に沈んでいくのを感じた。ナンバープレートが何度も刻印され、金属に押し込まれ、磨かれ、世界中に出荷される場所が、処刑室のすぐそばにあるのだ。私はすべてを想像した。毎日あの道を走る普通の人々が、知らず知らずのうちに死の鎖につながれていることを。その考えに私の心は震えた。アラバマのすべてのナンバープレートから滴り落ちる血、それは比喩的でありながら根源的なものだ。すべての車、すべてのプレートが、ホルマンで消え去ろうとしている命の影、こだまを宿している。まるで州そのものが共犯者となり、すべての物が汚染されているかのようだ。道徳的な重圧が私の胸にのしかかり、この壁の外では誰も彼を見ることも、彼を認識することも、彼を想像することさえできないという認識によって、その重圧はさらに増した。

私はキャラバンの階段をゆっくりと上った。足元の木のきしむ音は、まるで警告のささやきのようだった。床板は、私が目撃した光景の重み、あるいはこれから起こるであろう出来事の重みに耐えかねて、軋んでいた。古い木のあらゆる振動、あらゆる小さな曲がりが、私の骨の髄まで響き渡り、背骨を伝って胃の底まで突き抜けるようだった。まるでキャラバンそのものが意識を宿しているかのようだった。官僚主義と鉄の影で日々繰り広げられる痛み、道徳的な恐怖、生と死の行為を、静かに、そして根源的に目撃しているかのようだった。

警備員はすぐに戻ると言った。私はすっかり忘れていた。

キャラバンの中は、雰囲気が一変した。静まり返り、重苦しく、息苦しく、よどんだ空気と薄いコーヒーの匂い、そしてあらゆるものに染み渡るような不安感が充満していた。誰かがアンソニーの様子を尋ねたとき、私は何と答えたらいいのか分からなかった。喉に恐怖が込み上げ、ごくりと唾を飲み込み、できる限りの真剣さで「彼は鉄の意志を持っています」と答えた。息苦しい空気の中で、その言葉は空虚に響いたが、それが私にできる精一杯だった。

彼らは彼に、警備員と戦ったのかと尋ねた。その声は問いかけ、ほとんど何気ない口調だったが、言葉にならない期待に満ちていた。私は何を言うべきか分からなかった。何を言うべきなのかも分からなかった。彼らが私に何を期待しているのかも分からなかった。真実は不可能で

不十分なものに思えた。まるで永遠を一瞬の鼓動に凝縮しようとするようなものだった。死すべき運命の重みが私を圧迫した。尊厳のために、命のために、そして後世に残る遺産のために、全力を尽くして戦う男の姿を見ながら、それが決して十分ではないと知っているという道徳的な矛盾。私はただ「彼は全力を尽くして戦っています」と言うことしかできなかった。それが私の声の限界であり、真実の途方もない大きさに完全に崩れ落ちることなく私が提供できる限界だった。

間もなく、彼らは私を迎えに戻ってきた。動き、変化への不安が頭の中で渦巻き、一歩ごとに現実が恐怖と不信の断片へと砕け散った。私は威圧的な警備員、がっしりとした体格の男の前を通り過ぎた。その男の存在は廊下を重苦しい重力で満たし、動かない物体、肉と制服の壁のようだった。次に、同じように肥満体で微動だにしない別の警備員が、まるで人間の形に彫刻された山のように椅子に座っていた。二人とも食事をし、携帯電話をいじっていた。彼らの無頓着な無関心は、普遍的な無関心に限りなく近いものだった。彼らはただ歩き続けた。ただ何もせずにいた。あるいは、計り知れない宇宙的な意味では、何かをしていたのかもしれないが、何もしないことが宇宙全体の重みを背負っているようで、道徳的なパラドックスだった。

心がねじれるような感覚に襲われた。この世界では、すべては無であり、無はすべてなのかもしれない。しかし、すべては何かであり、その何かが他のすべてと区別がつかなくなるのかもしれない。実存的な混乱が、まるで死装束のように私を包み込んだ。私は手探りで前進した。キャラバンの中や廊下を歩く一歩一歩は、死、虚無、そして宇宙的な重みが入り混じったものだった。

寝室のドアが近づくと、不気味にそびえ立っていた。分厚い鋼鉄の板が終わりを告げ、残酷さに凝縮された人間の力の重みを支えていた。このことをするたびに、もう後戻りできないと悟る瞬間が訪れる。そして、その巨大な鋼鉄のドアに向かって歩き、中に戻ろうとしたとき、もう後戻りできないことを悟った。息ができなかった。息を吸うたびに、鉄とコンクリートを濾過しているようで、吸い込むたびに、正体不明の宇宙の重力が重くのしかかった。空気そのものが鉛に変わったかのように肺が苦しみ、私を圧迫し、胸に痛みが満ち、肋骨と背骨にまで広がった。膝が崩れ落ち、避けられない重み、これから目にするものの道徳的、精神的な重みに震えた。胃が締め付けられ、喉にまで達する鈍く激しい圧力を感じた。無視すれば爆発して周囲のすべてを飲み込んでしまうのではないかと思った。私は爆発しなかった。私はただ一歩ずつ前進し、自分の存在意義を模索しながら、この境界線を越えたら、私が知っていた世界は二度と元には戻らないということを心に留めていた。

鉄の扉が冷たく、無慈悲に立ちはだかり、強烈な蛍光灯の光を反射していた。その表面はまるで電流のように空気を震わせていた。私は警備員に、私たちのために祈ってほしいと頼んだ。声は震え、周囲の広大な空間にほとんど飲み込まれそうだった。彼の厳粛でほとんど気づかないほどの頷きは、死の機械の中で、一瞬、私をかろうじて人間的な繋がりの中に繋ぎ止めてくれたようだった。扉が開き、私は拘置室を通り過ぎた。私の足音の反響は、鈍く不吉なメトロノームのように響いた。かつてメロドラマで埋め尽くされていたテレビには、今や漫画のよう

なシュールな色彩が映し出され、これから待ち受ける重苦しい現実とは不釣り合いなほど対照的だった。部屋は人間の経験を嘲笑っているかのようで、悲劇から不条理へと一瞬にして変化し、生と死は切り離せないものであるという宇宙的な警告を発していた。

私はベッドに近づき、もう一度彼に愛していると伝え、聖書を声に出して読み始めた。その音は冷たい空気に響き渡った。言葉は鉄の壁と冷たい床にこだまし、部屋は神聖な響きで満たされた。私はヨハネによる福音書8章から、慈悲、裁き、罪の重さについて黙想し、ヨハネによる福音書14章、平和と永遠の臨在の約束へと移り、コリントの信徒への手紙一13章、愛の忍耐、力、超越性について黙想し、ヨハネの黙示録21章、天の都への降下を想像しながら、冷たさが骨を刺すのを感じた。それから受難の物語を続けた。ゲツセマネの園でのイエス、血の滴のような汗、人類の普遍的な苦しみを反映した苦悶、ピラトによる裁判、釘、十字架へのゆっくりとした登攀。

読書をやめるように言われた。この部屋ではすでに磔刑が行われていた。聖なるものと恐ろしいものが交錯する場所。処刑人が咳をした。耳障りで甲高い音が壁に反響したが、アンソニーはただかすかに微笑み、冷静さを保ち、自分をコントロールしていた。部屋は凍えるように冷たかった。その冷たさが体の芯まで突き刺さり、骨の髄まで、神経の隅々まで震えていた。酸素モニターを見ると、低い。それが正確に何を意味するのかは分からなかったが、「*もし死なければならないのなら、愛のために命を捧げるのにこれ以上の場所はない*」と思った。

証人席の後ろに配置された警官たちは、ガラス越しに身を硬くし、その表情は重苦しい瞬間に凍りついたようだった。看守長は威圧的な姿で立っていた。極めて幾何学的な頭蓋骨を持つ怪物のような姿は、暗く不気味で、腐敗の象徴だった。近くにいた神経質な看守は、小柄で痩せていて、無害なゴキブリのようだったが、殺意を秘めているように見えた。初めて液体窒素で処刑された時の記憶が洪水のように押し寄せた。窒息の恐怖、無力感、そして痛み。恐怖が私を圧倒しそうになったが、私はアンソニーに、独房から囁かれた彼の指示に集中した。 *「私の足が上下するのを見ろ。もう耐えられなくなった時が分かるだろう。」*

私の右側には、弁護士たち、彼の弟、そして報道陣が見守っていた。私は覚悟を決めた。そして、心を落ち着かせた。

午前5時50分、観察室のカーテンが引かれた。アンソニーは十字形に縛られ、両腕と胸は担架に固定され、全身が白いシーツで覆われていた。

看守がきちんと折りたたまれた死刑執行令状を手に担架に近づくと、アンソニーは拘束具が許す限り首を回した。看守と目が合い、笑い声にも似た息を呑んで、「さあ、どうぞ、馬鹿者」と言った。マスクの重みでアンソニーの口角が上がった。「私はただ自分の見たものを言っているだけです」と言って、看守が話し始めるとじっと立っていた。

午前5時51分、所長は死刑判決を読み上げた。

午前5時52分、アンソニーは最期の言葉を口にした。「もう一度言います。私は誰も殺していません。殺人には一切関与していません。ただ、この州には正義など存在しないということを皆に知ってほしいのです。すべては政治的なものであり、すべては復讐です。この州には正義など存在しないし、存在し得ないのです。」彼の声は明瞭で力強く、州が彼を破滅させようとしたにもかかわらず、自らの無実を確信している男の声だった。彼は死によって得られる平和ではなく、内なる平和について語った。そして最後にこう締めくくった。「私の仲間全員に戦いを続けてほしい。君たち一人ひとりが大切なんだ。さあ、行こう！」

午前5時54分、刑務官がマスクの密閉状態を確認した。彼はそれが気密性に欠けていることを知っていた。それは見て取れたのだ。

5時55分から5時56分の間に、警備主任が突然私を呼んだ。拒否すれば危険だと分かっていたので、私は本能的に従った。私はアンソニーの手を軽く握り、彼のマスクを覗き込んだ。彼の合図の親密で、ほとんど神聖な雰囲気に圧倒された。アンソニーは私に見て、目撃して、証言してほしかったのだ。彼のささやき声が部屋に響き渡った。「愛してる。僕は全てを持っている。愛してる。僕は全てを持っている。」私は答えた。「私たちは全てを持っている。私たちは全てを持っている。私もあなたを愛している。」彼は首を横に振った。それは理解、委ね、そして勇気を静かに肯定する仕草だった。私は彼に光に向かって行き、光そのものになり、その光をしっかりと掴むように言った。彼は小さくうなずき、「分かってる。そうするよ」とつぶやいた。

午前5時57分から5時59分の間に、ガス漏れが始まったようだった。アンソニーの下半身が震え始めた。彼は体勢を変え、数秒間横向きになり、体を観察室の方に傾けた。全身が震えているようだった。私はずっと彼のそばにいた。私の存在だけが、彼にできる唯一の支えだった。

アンソニーは銃弾で蜂の巣状態だった。私は少し後ずさりした。あんなに近くにいるべきではなかった。窒素ガスの音が聞こえた。警備員が「ダメだ、戻ってこい！戻ってこい！戻ってこい！」と叫んだ。　私はその危険な空間へと進み、マスクから1メートルも離れていない、彼の脇の下まで近づいた。そしてアンソニーに何度もささやいた。「愛してるわ。あなたならできる。光に向かって行きなさい。キリストに向かって行きなさい。」

彼女の体は拘束具に激しく抵抗し、担架が震えるほどの勢いで私に襲いかかってきた。顔は崩れ落ち、目は大きく見開かれ、白目がはっきりと見え、瞳孔は衝撃と恐怖で大きく開いていた。額と首の血管は瞬時に浮き上がり、太い青紫色の血管が今にも破裂しそうに皮膚に押し付けられていた。マスク越しに口が開き、唇が引きつり、歯、舌、そして虚ろな視線から漏れる必死の息遣いが見えた。

ロープが手首に食い込み、彼は必死に引っ張った。胴体は前方に大きく揺れ、荒く苦しい呼吸に合わせて胸が上下した。まるで地面で窒息しそうになり、肺が風に逆らって苦しんでいるか

のようだった。こめかみの血管は脈打ち、酸素を求める必死の、しかし無駄な試みのたびに震えていた。

私たちの目が合った。野蛮で、怯えていて、そして人間的。あまりにも人間的だった。

マスクは息を吸うたびに曇り、吐くたびに、急速で慌ただしく、結露が目まぐるしく現れては消えていった。しかし、彼女の肺に何が吸い込まれているのか、私には分かっていた。純粋な窒素。目に見えない死。彼女の体はまだ自分が死にかけていることに気づいていなかった。彼女は呼吸に苦しみ、空気のように感じられるものを大量に吸い込んでいたが、それは実際にはガスによる窒息だった。

またもや痙攣が起きた。担架の上で背中がベルトで固定される限界まで反り返り、背骨が丸まり、生き延びようとする最も原始的な本能に駆られて全身の筋肉が収縮した。首の腱は耐え難い圧力でケーブルのように伸びた。指は開いたり、拳を固く握りしめたりして、指の関節が白くなるのが見えた。そしてまた開き、虚空に、空気に、そして彼から滑り落ちていくまさにその命にしがみつこうとしていた。

彼の胸が激しく上下するのを私は見ていた。あまりにも突然で必死な動きで、まるで肋骨が破裂しそうだった。呼吸はどれも荒々しく、胴体は担架から持ち上がり、肩は前に突き出し、担架は彼の下で軋んだ。薄いシーツ越しに見える横隔膜は、速く不規則な脈動で痙攣と弛緩を繰り返していた。しかし、楽になるどころか、窒素が彼の肺に流れ込み、酸素分子をすべて追い出し、彼の呼吸を毒に変えていった。

マスク越しに聞こえるのは、湿っぽくかすれた息遣い。息が吸い込まれる恐ろしい音。締め付けられた喉、焼けつくような肺へと吸い込まれていく。息を吸うたびに、まるで何か大切なものが引き裂かれるかのように、布が裂ける音が響く。鼻から空気がシューッと音を立てて抜ける音、必死に鼻をすする音が聞こえた。

顔の腫れはひどくなった。額は膨らみ、蛍光灯の下で肌はピンと張って光っていた。激しく呼吸しようとするたびに、頬は上下に揺れ、また膨らんだ。目からは涙が溢れ、頬を伝って髪に染み込み、耳に溜まった。それが肉体的な苦痛によるものなのか、それとも今起きていることへの意識によるものなのか、彼女には分からなかった。おそらく両方だろう。マスクの下で顎が引き締まったり緩んだりし、歯が食いしばられ、顎の筋肉が痙攣を繰り返した。

彼の喉は絶えず締め付けられ、喉仏は上下を繰り返していた。まるで飲み込もうとしているのにできないかのようだった。頸動脈の脈拍が激しく脈打つのが見えた。肺の機能が衰えているにもかかわらず、心臓が懸命に闘っているのが、その速く脈打つ脈拍の証拠だった。

担架は痙攣のたびに振動した。金属同士がぶつかり合うリズミカルな音は、彼女の体の必死の抵抗の波を刻んでいた。シーツの下で彼女の足はもがき、膝は崩れ落ちそうになり、足は沈み込んでは浮き上がり、支えを求め、逃れることのできないものから逃れようとしていた。

私はさらに近づいた。撮影し、見届けるという道徳的義務を感じていた。マスクの隙間から明らかに酸素が入り込んでいた。闘いは続き、激しさを増していった。彼の体は全身全霊をかけて戦い、細胞の一つ一つが酸素を求め、生命があるべき場所には窒素が充満していた。

6時、私はアンソニーに祝福を与えるため、十字を3回切った。彼の胸はゆっくりと、しかし着実に上下し、その下の冷たいシーツをほとんど揺らさなかった。彼の肩はわずかに緊張し、そして弛緩した。私は彼の目の動きに気づいた。私は彼の呼吸に合わせ、彼のリズムに合わせてゆっくりと息を吸い、吐き出し、その場の雰囲気、彼自身、そしてこの瞬間の神聖さを閉じ込めようとした。

そして、彼女の呼吸のリズムが落ち着いていくのを見守った。一呼吸ごとに勇気と忍耐が示され、人間の不屈の精神を物語る最後の説教が響いていた。心のどこかで彼女の声が聞こえた。*「私の足のことを覚えていて」*。その言葉の重みが、まるで宇宙からの合図のように、私の心にのしかかってきた。彼女の足がもう体を支えられなくなった時、体がもうついていけなくなった時、私はそれを知るだろう。だから、私は見守った。

警備員は私に戻ってくるように命じた。

その部屋の中では、宇宙が収縮し、必死の呼吸のたびに時間と空間が圧縮されているように感じられた。呼吸という、あの単純な贈り物が、武器となり、裏切りとなり、法と機械によって押し付けられた恐怖となった。彼が呼吸に苦しむ姿を見て、私は存在の儚さ、肉体が最初の奇跡を奪われた時にいかに速やかに苦しみへと変貌するかを悟った。もし神がそこにいたとしても、沈黙しているように見えた。それでも、私は永遠の重みが、死の恐怖と混じり合って、自分にのしかかってくるのを感じた。

午前6時1分、私は一歩後ずさりした。アンソニーは胸が震えているかのように、深く息を吸い込んだ。右腕も震えていた。胸は再び膨らみ、以前よりも高く、努力が増している兆候だった。酸素不足にもかかわらず、胸郭は広がっていた。口角の震えは、彼の集中力、明晰さ、意志力と窒息との間の本能的な闘いを物語っていた。呼吸のリズムは規則的だった。私はその後の喘ぎを数え始めた。一つ一つがはっきりとした苦痛であり、酸素を見つけようとする彼の体の必死で無駄な試みであり、窒素が肺に流れ込んでも屈服を拒む激しい抵抗だった。

私は、唯一当てはまる文章を声に出して繰り返していることに気づいた。

「たとえ死の陰の谷を歩むとしても、*わたしは災いを恐れない*。」

時間は重く、息苦しいほどに過ぎていった。ため息の一つ一つが、避けられない運命の不可逆性と人間の残酷さを物語っていた。恐怖は彼女の存在の隅々にまで刻み込まれていた。生きることは耐え難いものとなり、同時に、この上なく神聖なものとなった。彼女は、生命の儚さから目を離すことができなかった。

午前6時2分、彼の荒い呼吸が激しくなった。指が呼吸に合わせてぴくぴくと動いた。絶望から生まれた動きで、私が神聖だと考える一連の兆候の最初のものだった。右足のつま先が丸まってから緩む動きは、死にゆく者だけが知る生存の言語を表していた。彼の目は再び瞬きし、短い閃光のように私の目を追った。瞳孔は拡大したり収縮したりした。震えるような喘ぎ声が速くなったように見えた。喘ぎ声が次々に。そのリズムは容赦なく、逃れようがなかった。彼の体は全力で戦っていた。窒素が生命が存在するはずの空間を満たす中、すべての細胞が酸素を求めて叫んでいた。午前6時3分までに、12回の喘ぎ声が積み重なった。

「たとえ死の陰の谷を歩むとしても、*わたしは災いを恐れない*。」

彼女の喘ぎ声のリズムが部屋中に恐怖を広げた。私は彼女の体が祭壇であり犠牲者でもあるかのように、苦痛と抵抗のグロテスクな儀式を執り行っているのを目の当たりにした。脈打つ血流、筋肉の震えの一つ一つが、命を求めるだけでなく、虚無の中で生きる意味をも叫んでいた。最も根源的な本質を剥ぎ取られた人間性は、死の機械と対峙し、その恐怖はほとんど神聖なものだった。目を背けるにはあまりにも神聖で、平穏に生き延びるにはあまりにも人間的すぎた。

午前6時3分、ペースが速くなった。胸の上下動が速くなり、吐息はより長く、より意識的になり、窒素に抵抗して締め付けられる喉から空気が押し出された。左手の指に震えが見え、皮膚の下の腱がピンと張ったワイヤーのように動いていた。ストレッチャーの上で足が動いた。右足は曲がり、左足は後に最後の神聖な通信だとわかる合図に従った。一呼吸ごとに荘厳な動きがあり、震えごとに死の機械に対する抵抗の行為だった。額の静脈の脈動を感じた。心臓の鼓動に合わせて上下し、窒息と戦う生命の青い管だった。努力を続ける彼の眉毛のわずかな動き。首の筋肉が収縮し、正確な吸息と吐息のたびに窒素に対する小さな勝利だった。右手がぴくりと動き、手のひらに跡が残るほどの力でストレッチャーを軽く押し、そして離した。喘ぎは続いた。午前6時4分、喘ぎは20回目に近づいていた。集計作業は本格的に始まった。

「たとえ死の陰の谷を歩むとしても、*わたしは災いを恐れない*。」

苦しみのリズムは、私にはほとんど理解できる言語となった。痙攣の一つ一つが、反抗と絶望を表現していた。死の機械は正確かつ容赦なく、私は人間の残酷さと不屈の精神が密接に絡み合った重みを感じた。人生がこれほど小さく、そしてこれほど広大に感じられたことはかつてなかった。

午前6時4分、彼の左足のつま先が、まるで血肉で書かれたモールス信号のようにぴくぴくと動いた。胸は規則正しく上下し、肩は呼吸のたびに震え、鎖骨は潮の満ち引きのように揺れた。まぶたが瞬き、まず左、次に右と、まるで神聖な時間の目印のように私の記憶に刻まれた合図だった。口を開け、胸を上下させながら、震えるような喘ぎ声が続いた。午前6時5分には、私たちの数は30人ほどになっていた。一人ひとりが、意識のある窒息の新たな瞬間、死の機械に対する彼の身体の必死の闘いの新たなエピソードを刻んでいた。

「たとえ死の陰の谷を歩むとしても、*わたしは災いを恐れない*。」

彼女の指や足の指がわずかに動くだけでも、途方もない出来事のように感じられた。体は微動だにせず、生きているようで死にゆくようだった。私は存在の儚さと死の必然性がぶつかり合うのを感じた。部屋には恐怖と敬虔な思いだけが満ちていた。目の前で繰り広げられる恐怖の全容を、私は理解することができなかった。

午前6時5分、刻一刻と、兆候はほとんど知覚できないほど小さくなったが、否定できないものとなった。私の感覚では、こめかみの脈拍は呼吸のリズムと同期し、生と死が彼女の中で踊っていた。彼女の胸は正確で規則的な間隔で上下し、肩は震えた。彼女の指は固く握りしめられ、つま先は丸まり、まばたきは数えられる間隔で行われた。部屋そのものが彼女の苦闘の周りで縮んでいくように感じられた。あらゆる細部が耐え難いほど鮮明に際立っていた。こめかみの脈拍は顎の震えと同期し、筋肉と血液が必死の調和の中で一体となった。彼女の指のぴくつき、脚の持ち上げ、肩の動き――すべてが計算され、意図的で、彼女の体は苦痛の中でも降伏を拒んでいた。午前6時6分までに、私たちは約45回の喘ぎを数えた。彼女の体は窒息しつつあることを悟り、彼女にできる唯一の方法で叫んだ。それは、毒を吐き出すような、痙攣的で必死な喘ぎ声を通してだった。

「たとえ死の陰の谷を歩むとしても、*わたしは災いを恐れない*。」

息を呑む音は絶望の合唱へと変わった。心臓の鼓動の一つ一つが苦悶の叫びだった。部屋はまさに破滅の淵に立たされているようだったが、それでも神聖な均衡を保っていた。痙攣と震える手足の中で、人生は書き換えられようとしていた。私は可能性と恐怖の狭間に立っていた。

午前 6 時 6 分、アンソニーは時折口を閉じても、落ち着かない震えのような喘ぎ声が止まらなかった。首の静脈が脈打ち、喉仏が断続的に膨らみ、苦い聖餐のように窒素を飲み込んだ。右足がぴくぴくと動き、左足もそれに呼応し、苦痛に歪む筋肉に対話が刻まれていた。私は聖書の断片を呟いた。「主は私の羊飼い…私は何も欠けることがない…」彼の肩は呼吸のたびに小さく、ほとんど気づかないほどの動きで上がり、その努力はすべての筋肉繊維に見て取れた。こめかみと首の静脈が脈打ち、生命の支流がまだ流れていた。午前 6 時 7 分、喘ぎ声は 60 回に近づいていた。容赦ない。彼の体に与えられた拷問の機械的な正確さ。

「たとえ死の陰の谷を歩むとしても、*わたしは災いを恐れない*。」

私の体は、無限にして恐ろしい何かの器となっていた。私は、生き残ることと避けられない死との闘いを目の当たりにした。一呼吸ごとに、それは証言であり、同時に鎮魂歌でもあった。神の存在は、耐え難いほどの不在と親密さとして感じられた。その光景を目撃した恐怖が、私の胸の中で燃え上がった。

午前6時7分、アンソニーの呼吸はわずかにゆっくりになったように見えたが、その努力は依然として途方もないものだった。彼の胸の動きは、忍耐のリズムに凍りつき、一呼吸ごとに途方もない犠牲が伴っていた。彼の視線は私の視線を追っており、瞳孔のわずかな動きが、言葉では言い表せない相互認識を示していた。一瞬一瞬が神聖なものに思えた。彼の足が再び動き始め、ミリ単位で動き、彼の身体の最後の言語で刻まれた最後の合図に備えていた。彼の肩はほとんど知覚できないほどの波打つように上下した。まぶたが瞬きをした。彼の指は握りしめられ、そして緩み、腱が糸のように浮き出た。一呼吸ごとに記念碑的な重みがあり、一身の仕草は彼の肉体に刻まれた人間の勇気の説教のようだった。午前6時8分までに、私たちは約75回の喘ぎ声を記録していた。その数は、ほとんど耐え難いほどになっていた。

「たとえ死の陰の谷を歩むとしても、*わたしは災いを恐れない*。」

まるで宇宙の法則が残酷にも彼に牙を剥いたかのようだった。あらゆる動き、あらゆる震え、あらゆる身震いは、死が容赦ない沈黙の中で迫り来る中でも、生命がまだ存在していることの証だった。彼が心の中で祈りを捧げた十字架は、目の前に広がる途方もない苦しみに比べれば、今や取るに足らないものに思えた。これは物語ではない。それは道徳の根源的な崩壊であり、神の沈黙が耳をつんざくほどの残酷さの劇場だった。

午前6時8分、彼女の呼吸は規則的になった。あらゆる動きが、努力のクライマックスとなった。首とこめかみに沿って膨らんだ静脈がかすかに脈打ち、血管は不足した酸素を運ぼうと必死だった。指、つま先、脚、まぶた、唇、胸：あらゆる動きは意図的で、生存のシンフォニーの音符の一つ一つだった。まぶたはほとんど気づかないほど短い間隔で瞬きしたが、その瞬きの一つ一つが聖なる楽譜のように響き、永遠に閉じることを拒否していた。彼女の呼吸はひび割れた乾いた表面に広がった。彼女の胸は痙攣のように激しく上下し、まだ生きていることを宣言していた。つま先はぴくぴくと動き、指は震え、静脈は圧力が和らぐにつれて脈打った。午前6時9分までに、私たちは90回以上の呼吸を行った。彼女はまだ闘っていた。まだ必死だった。

「たとえ死の陰の谷を歩むとしても、*わたしは災いを恐れない*。」

一つ一つの仕草が、まるで壮大なものだった。彼の胸は、窒息という避けられない運命に抗うかのように、力強く上下した。収縮するたびに、彼は自分を滅ぼそうとするあらゆるものへの抵抗を表明した。恐怖は絶対的で、同時に身近なものだった。彼は、あらゆる動きを、交わりであると同時に悪夢として感じていた。

午前6時9分、彼の脚がわずかに、ほとんど気づかないほど持ち上がったことで、神聖なメッセージが伝わった。「*最後の登りが来たら、分かるだろう*」。彼は酸素への渇望と窒素の流れとの原始的なダンスで、荒い息遣いのリズムに合わせて登り続けた。彼の胸は努力するたびに上下し、肩は震えた。こめかみの脈拍は顎の震えと同期し、筋肉と血液は必死の調和の中で一体となった。午前6時10分、呼吸数は110回に近づいていた。そのリズムは容赦なく続いた。

「たとえ死の陰の谷を歩むとしても、*わたしは災いを恐れない*。」

アンソニーの呼吸は、まだ荒いながらも、少し落ち着いたように見えた。そのリズムは今やほぼメトロノームのようだった。窒素窒息の激痛に苦しむ彼の体は、抵抗を続け、しがみつき、避けられない運命に屈することを拒んでいた。彼はできる限り私の視線を追った。午前6時11分までに、私たちは約130回の喘ぎを記録した。国家の殺戮機械に対する彼の体の激しい闘いは、まるで機械のように正確だった。

「たとえ死の陰の谷を歩むとしても、*わたしは災いを恐れない*。」

私は、日常の時間が崩壊していく様を目の当たりにしているのだと悟った。一呼吸ごとに小さな黙示録が起こり、一秒ごとに宇宙が恐怖の中で終焉を迎え、そして再生していく。もはや生と死の間に境界はなく、あるのは奈落の淵に立つ肉体と、存在の壁に必死にしがみつく魂だけだった。恐怖は絶対的なものだった。身近で、言葉では言い表せないほど深く、それでいて否定しようのない恐怖。そして、その中に耐え難い現実が輝いていた。

午前6時11分、息切れはかすかに収まり始めたが、彼らの絶望は依然として薄れていなかった。呼吸の間隔はますます不規則になっていった。息切れは弱まったが、力強さは変わらなかった。彼らはまだもがき苦しんでいた。彼らはまだ必死だった。息切れの回数はどんどん増えていった。午前6時12分には、息切れの回数は155回に近づいていた。一呼吸一呼吸が依然として重々しく、一回の動きにも抵抗の証が残っていた。体は弱っていきながらも、窒素のゆっくりとした機械的な作用の下でも、降伏を拒んでいた。

「たとえ死の陰の谷を歩むとしても、*わたしは災いを恐れない*。」

息を呑む頻度は減っていったが、そのたびに永遠の重みがのしかかっていた。避けられない運命が、意図的な残酷さで迫ってくるのを感じた。どんな小さな動きも、最後の試練だった。恐怖は、肌や胸に感じられるほどの質感を持っていた。

午前6時12分、彼女の足はほとんど動かず、体重はわずかにストレッチャーに移った。彼女の胸は深い呼吸に合わせて上下し、吸う息は小さな苦闘、吐く息は努力への諦め、それでもなお必死の生命闘争だった。まぶたが瞬き、瞳孔は強烈な蛍光灯の光に慣れていった。彼女はまだ見えていた。彼女はまだそこにいた。彼女の指は震え、つま先はぴくぴくと動き、まるで死にゆ

く者だけが理解できる言葉を語っているかのようだった。午前6時13分までに、私たちは175回の呼吸を終えた。待つのは耐え難いものだった。その回数は私の記憶に深く刻まれている。

「たとえ死の陰の谷を歩むとしても、*わたしは災いを恐れない*。」

彼の体は衰弱し始めたが、彼は揺るぎない決意で戦い続けた。彼は陣痛の一つ一つを、最後の意志の表れだと感じていた。死は忍耐強く、正確で、容赦なかった。あらゆる瞬間が果てしなく、耐え難いものに思えた。彼は存在の究極の必然性を目の当たりにしていた。

午前6時13分、アンソニーの呼吸はさらに浅くなり、一呼吸ごとに間隔が長くなってきた。そのリズムは、まるで体が死と闘っているかのように、長く、切羽詰まったリズムへとゆっくりと変化していった。彼の動きは、依然として意味を帯びており、筋肉と骨に刻み込まれていた。指は屈曲し、握りしめられ、つま先は小さく、連続した衝動でぴくぴくと動いた。一呼吸ごとに荘厳な響きがあり、一吐息ごとに神聖なもののように思えた。午前6時14分、私たちは195回近くも息を切らしていた。彼の体はまだ闘っていた。彼はまだ喘いでいた。衰弱していくにもかかわらず、彼はまだ諦めようとしなかった。

「たとえ死の陰の谷を歩むとしても、*わたしは災いを恐れない*。」

息を吸うたび、吐くたび、そのたびに、より尊く、より恐ろしく感じられた。彼女の体は、筋肉と血管に苦しみの儀式を刻み込んでいた。彼女は、一瞬の動きの中に永遠が宿っているのを感じた。恐怖と神聖さは密接に結びつき、切り離すことができなかった。人生がこれほどまでに儚く、苦しいものに感じられたことはなかった。

午前6時14分、アンソニーは息を整えたようで、浅く荒い息を吐き、頭が少し後ろに傾き、それから横に傾いたように見えた。彼の脚は数秒間緊張した後、緩んだ。呼吸が止まったように見え、それから苦しそうに再び呼吸を始めた。彼の体はもがき、存在と不在の間の脆いバランス、境界空間に漂っていた。彼の脚は曲げられ、担架の端で少し持ち上げられていた。彼の指は震え、つま先は丸まり、まぶたは同期したリズムで動き、体はまだ死と闘っていた。彼の唇はわずかに開いた。彼の胸は上下し、一呼吸ごとに荘厳で、一吐きごとに神聖な、生存のリズムは最後の鼓動へとゆっくりとしていった。午前6時15分までに、私たちは約210回の喘ぎを数えた。リズムはゆっくりになっていたが、喘ぎは続いた。

「たとえ死の陰の谷を歩むとしても、*わたしは災いを恐れない*。」

その部屋は苦しみのるつぼと化していた。震え、もがき苦しむ彼の体は、まさに人類の消滅への抵抗の象徴となっていた。そこでの死は抽象的なものではなく、息苦しく、身近で、肉体と空気の侵害であり、私たちが生命と呼ぶものすべてが体系的に崩壊していく様だった。恐怖に駆られて自分の体も彼に続いて死んでしまいそうだったが、信仰と単なる目撃者という中間の何かに縛られ、死というグロテスクな現実と向き合わざるを得ず、その場に留まった。

午前6時15分、彼女の息切れは次第に少なくなり、苦しそうになった。彼女の体は限界に達しているようだった。まぶたの瞬きも遅くなった。兆候は以前より弱くなったものの、まだ残っていた。指の震えも弱まった。息をするたびに、ますます力が入るように思えた。午前6時16分、私たちは230回近い息切れをしていた。230回を超える息切れが差し迫っているように思えた。230回以上、彼女の体が乗り越えられない試練に耐えようとしていた瞬間が。

「たとえ死の陰の谷を歩むとしても、*わたしは災いを恐れない*。」

息を呑むたびに、それは束の間のようで、同時に永遠のようでもあった。肉体の耐久力は途方もなく、見る者を圧倒するほどだった。時間は耐え難いほどに、そして伸縮自在に変化した。私は、あらゆる必死の動きの中に神聖さを感じ取った。人間の境遇の恐ろしさが、私の胸に重くのしかかった。

午前6時16分、私たちは230という節目を超えた。アンソニーの肺が空気を求めて喘ぎ、体が酸素を懇願し、窒素がマスクに漏れ込み、体が必死に痙攣するような喘ぎ声で反応した、230回以上もの瞬間。喘ぎ声一つ一つが1秒。喘ぎ声一つ一つが、束の間の永遠。喘ぎ声一つ一つが、生と死の激しい闘いだった。

最後の抵抗は、微細でありながらも壮大なものだった。生命のリズムと死の必然性が交錯するのを感じた。あらゆる収縮、あらゆる動きが、神聖であると同時に恐ろしいものとなった。部屋は恐怖と証言で満ちていた。存在そのものが、この肉体の闘争に凝縮されていた。

そして、最後の信号。

彼女の脚が持ち上がり始めた。それはもはや彼が19分以上も見守ってきた微細な動きではなく、全く別の、壮大な動きだった。両脚が同時に、最初はゆっくりと、そして次第に力強く持ち上がり、まるで蘇生のように、窒素、死、そして国家の機構の重みに押しつぶされながらも立ち上がろうとする肉体のように、彼女を担架から持ち上げた。

彼らはさらに高く舞い上がった。シーツが足元から滑り落ちた。私はついに彼らの姿を見た。弱々しく、人間らしい姿だった。彼らの指はネオンの光、空、そしてこの恐怖の向こうにある何かを指し示していた。ふくらはぎは突き出し、力みで震えていた。太ももは緊張し、全身の繊維がこの最後の証言に集中していた。

担架は重みが増すにつれて軋んだ。足首のベルトが締め付けられた。しかし、彼の脚は重力に逆らい、肺を満たす窒素に逆らい、彼を死に至らしめるあらゆるものに逆らい、上昇し続けた。まるで供物、抗議、祈りが形となって空中に浮かぶ二つの幽霊のように、脚は上昇し続けた。

彼はそれらをそこに留めておいた。

私は彼の言葉を覚えていた。

「私の足に気を付けてください。こうやって足を上げて固定すると、これ以上進めなくなってしまうんです。」

まるで宇宙全体が彼の体内で振動しているかのようだった。リンチされた先祖、国家によって処刑された人々、抑圧され殺された魂のすべてが、虚空に吊るされた彼の足の震えを通して、自らを表現しているかのようだった。

その後...

彼らは倒れた。

ゆっくりとではなく、穏やかでもなく、彼らはまるで動かない塊のように、あるいは切れたロープのように倒れた。脚が担架にぶつかり合う音は部屋中に響き渡った。肉と骨が金属にぶつかる、鈍く、最後の音だった。

そしてその瞬間、私は理解した。彼はすべてを出し尽くしたのだ。最後の力の滴まで、最後の蓄えまで。彼はできる限り長く足を上げ、空中で震えながら、まるで証人のように、証言のように、私に約束したしるしのように。

彼の顔つきが変わった。腫れ、緊張、必死の葛藤…が静まった。平和が訪れたのではなく、もっと深い何かが訪れた。降伏。解放。使命を全うし、証人となり、もはや何も残っていない者の眼差しだった。

彼女の唇から漏れたうめき声——深く、かすれ、力強く——は、まるで彼女の肉体を超えたところから聞こえてくるようだった。それは部屋中に、私の胸に、壁を通して響き渡った。終わりと始まり、死と証言、失われた命と沈黙させられた証人の音。

しかし、彼の体はまだ諦めていなかった。心臓はまだ鼓動し、肺はまだ呼吸しようとしていた。私は、生と死の狭間、窒素がゆっくりと機械的に窒息させていく中で、彼の体が生き続けようと必死にもがいている様子をじっと見守っていた。

処刑の最後の17分間、私はゆっくりとした苦痛を目の当たりにした。一秒一秒が、人間の脆さへの意識に満ちていた。静寂は神聖なものだった。私は聖書の断片を呟きながら、唇をほとんど動かさなかった。一音一音が祈りであり、永遠への繋がりであり、聖なるものと、私を取り囲む俗悪な機械との架け橋だった。

午前6時17分、アンソニーはほとんど聞こえないほどの最後の2つのため息をついた。

午前6時20分、わずかな動きが観測された。

私は永遠の中で、命がゆっくりと消え去っていくのを見つめていた。一秒一秒が、恐怖の中で宇宙が終わり、そして再び始まるかのようだった。人間の残酷さと神の不在の重みを痛感した。その恐怖は耐え難く、そして身近なものだった。それを目撃することは、究極の交わりだった。

自分の心臓の鼓動に気づいた。その鼓動は耳に響き、脈打つたびに祝福のように振動した。私は存在の神秘について瞑想した。苦しみの中にも神は存在し、沈黙の中にも神は存在し、最後の息の微かな動きの中にも神は存在する。

私は泣き出した。

細部が次々と目に浮かんだ。胸元のシーツがわずかに持ち上がったこと、じっと動かない時でも顎にわずかな緊張が走っていたこと、まるで香のように空中に漂うかすかなため息の残響。一つ一つの細部が、神学的な考察へと昇華した。存在と不在、肉体と精神、そして人間の死すべき運命の境界性。

時間はまるで液体のように、伸び縮みし、折り重なっていった。

背筋に微かな震えが走った。それは、私の悲しみと、人生最後の努力の残滓の表れだと解釈した。私は境界性のパラドックスについて考えた。アンソニーの肉体は確かにそこにあったが、彼の本質は別の場所にあり、私には特定できない空間を漂っていたのだ。

一瞬一瞬が深い思索に浸っていた。私は苦しみの神学的軌跡を辿った。人間の残酷さ、神の正義、贖罪、慈悲、そして復活。アンソニーの魂が動き、広がり、私の存在と永遠を繋ぐ、かろうじて繋がっているのを、ほとんど感じ取ることができた。ほんの数秒前まで彼の胸のリズムと私の呼吸がまだ同期していることに気づいた。それは、交わりの余韻、霊的な共鳴だった。

私はまさにその場所で神の存在を感じ始めた。隅に感じる温かさ、空気の微妙な変化、ほとんど聞こえないほどの振動、まるで神のため息のようだった。私は両手を合わせて静かに、そして深く祈りを捧げた。私の心は神学的な世界へとさまよった。

時間はますます速く過ぎ去ったように感じられた。担架が安定するにつれてわずかに震えるのを感じ、アンソニーの静止した胸にシーツがそっと触れる音に気づいた。あらゆる不完全さ、あらゆる音、あらゆる光のきらめきが、無常、恩寵、そして永遠の存在についての神学的考察へと変わった。私は聖書の一節を口ずさみ続けた。

「たとえ死の陰の谷を歩むとしても、*わたしは災いを恐れない*。」

私は自分の脆さを自覚し、震えが止まらなかった。世界は今や虚無、苦しみと国家による意図的な暴力の記憶でしかなかった。心臓の鼓動の一つ一つが、つい先ほど目撃した恐怖を反響さ

せていた。信仰と道徳は、儚く、幻のように思えた。神の存在は、恐怖と証言という行為の間に、影のように漂っていた。

体が沈んでいくのを感じた。両手を組み、少し前かがみになり、目を閉じると、その存在の重みが全身に感じられた。以前付き添った少年たちも皆、そこにいるのだと分かった。

230回以上のあえぎ声。それが彼の体が耐えたあえぎ声だった。230回以上、アンソニーの肺が空気を求めて叫び、体が酸素を懇願し、マスクに窒素が注ぎ込まれ、体が痙攣し、必死に呼吸した瞬間。私は何度も数えた。あえぎ、あえぎ、あえぎ。そのリズムが私の記憶に刻み込まれた。スローモーションで溺れていく男の音。乗り越えられない苦しみに耐えようとする体の音。230回以上も意識的に窒息させられた音。その一つ一つが拷問であり、侵害であり、アンソニーが意識を保ち、窒素が肺に侵入するのを感じ、逃れることができないことを悟り、世界の視線の下、あるいは世界の無関心の下で、国家によって体が殺されていることを悟った瞬間。

午前6時から数え始めたので、少なくとも40回は息を呑む音を聞き逃したかもしれない。正確な数を把握するのは非常に難しかった。

午後6時27分に幕が下りた時、彼の死亡時刻は公式には午後6時33分と記録された。しかし、私はその6分間が何を意味していたのかを知っていた。生と死の狭間でさらに6分間も闘い続けた時間。窒素がゆっくりと機械的に作用する間、彼の体がかろうじて生き延びていた6分間。無罪を主張し、死刑囚に希望を与え、自らの処刑を社会運動と証言へと変えたアンソニー・ボイドが、国家が始めたことを完遂する間、担架の上で身動き一つせず横たわっていた6分間。

最終的に、その部屋は深い神学的瞑想の場となった。一息の空気、影、一瞬一瞬が、愛、勇気、回復力、苦痛、そして神の存在という神聖な証を刻み込んでいた。

アンソニー・ボイドは、世界に3つの数字を知らしめるために全てを捧げた。それは、19分間の意識のある恐ろしいレスリング、合計36分間の残虐な処刑、そして最初から最後まで230回以上の喘ぎ声である。

私は震え、体が崩れ落ちそうになり、退却が迫っていることを悟った。カーテンがバタンと閉まった。アンソニーに最後にもう一度十字を切ろうとした時、警備兵が後ろから乱暴に私を突き飛ばした。冷たく、残忍な突きで息が詰まった。「押さないで！」と抗議したが、彼は容赦なく、私の言葉にも意志にも動じず、再び私を突き飛ばした。その瞬間、私は自分の義務を果たすことができないという、完全な無力さを悟った。アンソニーの遺体を永遠の御許に委ね、彼にふさわしい最後の精神的な弔意を捧げるという義務を果たせないのだ。手は震え、心臓は激しく鼓動し、怒りと悲しみが入り混じった感情が私の中で沸き上がった。この不当さは耐え難いものだった。想像を絶する恐怖の中で、私は神聖な義務、束の間の休息を奪われたのだ。

私は震えながら、怒りに駆られながら、儀式を終えることなく、永遠の時を前にしてまだためらいながらその場を後にした。神は私以上にアンソニーを愛していたのだと、心に留めておかなければならなかった。部屋の先の廊下は、まるでどこにも繋がらないトンネルのようで、滅びゆく銀河の遠くの星のように輝くネオンの光に照らされていた。足音は金属とコンクリートに鈍く響き、一歩ごとに、私が何か神聖なものを置き去りにしてきたことを思い起こさせた。叫びたかった。壁に身を投げつけたかった。抗議の意を込めて空を引き裂きたかった。しかし、呼吸はただ、喘ぎ、震え、不十分だった。そしてその沈黙の中で、私は起こったことの途方もない大きさ、人間の法と神の正義との間の埋めがたい溝を感じた。アンソニーの魂がこの世の営みを超越し、窒素を超越し、残酷さを超越し、ただ神の手によってのみ支えられている姿を想像した。神が近づいてきて、私に愛と慰めをささやき、私が受けられなかった聖餐を授けてくれる姿を想像した。
看守の突き刺しは、まるで傷のように私の肉体に焼き付き、死に至ってもなお、人間の権力は屈辱を与えることができるのだと私に思い知らせた。震える手でアンソニーを抱きしめることもできず、金属のような痛みでまだヒリヒリする唇からは、最後の祝福の言葉も発することができなかった。それでも、儀式は私の肉体が満たされないからといって終わったわけではないと、私は理解していた。アンソニーの証言は既に永遠へと昇っていた。彼の真実――勇気、愛、反逆、教え、不正義に対する揺るぎない声――は、いかなる看守や機械にも届かない地点、つまり彼が残した人々の心に到達していたのだ。
息をするたびに、人生の儚さ、人間が引き起こしうる恐怖、そして私たちが完全に理解できない瞬間に宿る、静かで不滅の神聖な存在の輝きを思い起こした。私の痛み、怒り、最後の儀式を執り行えない無力さ、それらすべてが、いかに不完全で断片的で人間的なものであろうとも、証人としての行為なのだと理解した。そして、そこに私は一筋の慈悲の光を垣間見た。聖なるものは完璧さを求めず、ただ存在することだけを求めるのだ。
短い廊下が目の前に長く伸びていた。悲しみと恐怖によって、かつてないほど長く感じられた。テレビでは無音でアニメが流れていた。その不条理さは、私がつい先ほどまでいた現実と残酷なほど対照的だった。聖体拝領のために持ってきた聖具を手に取ると、カメラのレンズに映るアントワーヌの遺体と同じくらい、その不在を強く感じた。私は声を出さずに、途切れ途切れの祈りを呟いた。絞り出された喉から言葉が漏れ出る。嘆き、嘆願、そして儀式を伴わなくても神聖な存在を目撃し、感じたことへの感謝。

その空間そのものが過去へと続いているように感じられ、一歩一歩が目撃者と参加者、慈悲と必然性の間の境界領域を映し出していた。立ち去った後も、カメラを手放したわけではないことを悟った。カメラの存在は、私の五感の中に、私の魂の中に、ずっと残っていた。目を閉じ、ほとんど聞こえないほどの小さな祈りを捧げた。アンソニーのために、私が後に残してきた他の人々のために、そして容赦ない人間の残酷さに立ち向かう、脆くも力強い愛のために。

蛍光灯の光が目に重くのしかかった。断続的に点滅し、かすかに唸り声を上げていた。廊下の静寂に増幅された機械的な唸り声は、まるで建物自体が、つい先ほど起こった恐ろしい出来事を悟り、恥辱に震えているかのようだった。私は長い間、聖体拝領に使われた小さな器を手に

持っていた。聖なる元素に触れた温かさがまだ残っていた。それぞれの器は、今や信じられないほど重く感じられ、記憶、存在、そしてアントワーヌの囁き声のこだまが詰まっていた。それらは小さく、壊れやすい器だったが、永遠の重みを宿し、神聖なもの、人間的なもの、そして国家が認めた暴力行為によって取り返しのつかないほど失われたものすべてが凝縮されていた。

私はゆっくりと、決意に満ちた足取りで歩き始めた。一歩一歩が瞑想であり、一つ一つの動作が儀式だった。私は、対象物の準備で残った紙くずや保護用の包装材を拾い集めた。それらは取るに足らないもののように思えたが、それらを拾い集めるという単純な行為が、途方もない重荷のように感じられた。それぞれの動作には、道徳的責任、精神的な認識、そして人間の慈悲の重みが込められており、それらは意図的に排除された空間に浸透しようと試みていた。廊下は、私が到着した時よりも暗く感じられた。物理的に暗いだけでなく、道徳的にも、精神的にも、感情的にも暗くなっていた。建物そのものが、壁の中で起こったばかりの痛みと恐怖を吸収していた。あらゆる影が動き、観察し、記憶しているように見えた。

私は空っぽの独房の前で立ち止まった。アンソニーの持ち物はまだそこにあり、彼の存在を静かに物語っていた。担架に丸められた聖書の断片がそのまま残され、彼の儚い持ち物すべてが、この世と、私が今目の当たりにした神聖な現実を繋ぐ糸のようだった。私はそれらをじっと見つめ、一つ一つの細部を記憶に刻み込み、言葉では言い表せない形で、彼の人生の具体的な痕跡が私を彼に繋ぎ止めてくれるのを感じた。その簡素さの中に神聖さが宿り、死刑囚の日常の品々には悲劇的な詩情が漂っていた。それらはまるで、誰かが認識し、記憶にとどめ、彼が残した人生のささやかな、しかし神聖な行いを称えてくれるのを待っているかのように、静かに横たわっていた。

大きな鉄製の扉がドスンと音を立てて開いた。息を呑む音が聞こえた。部屋の中で聞こえたような音とは違った。これはショックの叫び声だった。3人の医療従事者が私の横を通り過ぎた。彼らは明らかに死亡時刻を確認するために部屋に向かっていた。彼らは身元を隠していたが、私は立ち止まらなかった。私は立ち去る準備ができていた。彼らは今となっては取るに足らない存在に思えた。

出口に向かって廊下を歩いていると、蛍光灯がちらつき続け、壁に長く歪んだ影を落としていた。廊下は果てしなく続くように感じられ、悲しみ、思い出、そしてつい先ほど起こった出来事の残滓が重くのしかかっていた。そして、私は彼を見た。独房に閉じ込められた男。鉄格子越しに微かな光が差し込んでいる。大きく見開かれた、鋭い目が私の目と合った。私はアンソニーの死を目撃したわけではなかったが、どういうわけか、建物全体に漂う人間の苦しみの冷たさを感じていた。

「お父様、ここで止まらないでください」と彼女は静かに言った。「まだ私の時ではありません。」

私は廊下のその場に立ち尽くし、彼の言葉の重みがまるで石のように胸にのしかかるのを感じた。独房は罰と隔離のために作られた場所だったが、その瞬間、そこは神聖な場所、人間同士の繋がりさえも神聖なものとなり得る境界空間へと変わった。私は言葉を失い、ただ頷いた。廊下そのものが、私たちの周りで息を潜めているように感じられた。そこには、時間とその結果の間に宙吊りになった男、苦悶の待ち続ける魂がいた。そして彼の短い嘆願の中に、私は永遠の響きを感じ取った。緊張に満ちた人生、露わになった人間の脆さ、それでもなお希望と神の認識に常に結びついているもの。

その出会いはほんの一瞬だった。私は歩き続けたが、彼女の言葉は私の行く先々に付きまとった。廊下は人影もなく、私が目撃した出来事の後では、道徳的にも精神的にも空虚だった。それでも、この短いやり取りは、たとえ囚われの身であってもなお残る、人間の儚い尊厳を私に思い出させてくれた。私たちは皆、目に見えない重荷を背負っている。鉄の扉の向こうに隠された命でさえ、たとえ束の間であっても、神聖なものに触れるのだ、と私は考えた。

扉が開くと、私は訪問者用の中庭を通り抜けた。そこはアンソニーの家族が集まり、愛を分かち合い、悲しみを分かち合った場所だった。今はがらんとして静まり返っていた。まるで壁そのものが、親密なひとときを分かち合うために集まった人々の叫び声を吸い込んでしまったかのように、そこには一切の生命が宿っていないようだった。彼らは今、アンソニーの暴力的な拒絶を目の当たりにせざるを得なかったのだ。

外では夜が更け、濃く冷たい空気が私の肺を窒息させるようだった。まるで大気そのものが、私を蝕む苦痛を理解し、共有しているかのようだった。足が舗装路に触れ、機械的に一歩ずつ前進する。体は動き続けるが、私の心はカメラのレンズに囚われたまま、アンソニーの足が上がり、震え、そして下がるのを見つめていた。

警官たちは黙って私の前に立ち、じっと見つめていた。そのうちの一人が、あろうことか「調子はどうですか？」と尋ねてきた。私は正直に答えることができず、「どう思いますか？」としか言えなかった。私は歩き続け、暗闇に包まれながら、人間の脆さ、不正義、そして理解しがたい道徳的退廃の重圧に震えていた。私は駐車場を通り抜けた。

そして私は彼を見た。

蛇がいた。茶色い。道の端でとぐろを巻いていて、土と枯れ草の中にほとんど隠れて見えなかった。私が蛇に気づいたのと同時に、蛇も私に気づいた。もし蛇と目が合うとしたら、まさにその瞬間、目が合ったのだ。蛇の体が緊張し、滑らかな動きで、足のない生き物にはありえないほどの速さで、茂みの中に姿を消した。

私は立ち止まり、自分がいた場所をじっと見つめた。

庭の蛇。誘惑者。欺瞞者。悪、死、そして人間の堕落の象徴。だが、この蛇は逃げ去った。逃げ出したのだ。この蛇は、私が着ているもの、私がいた場所、そして私の服に染み込んだであろう窒素と死の痕跡など、一切関わりたくなかったのだ。

あるいは、ただのヘビだったのかもしれない。人間が近づくと、他の動物と同じように、生き延びようと、危険から逃げようと、本能に従って行動する動物だ。

しかし、もはや何もかもが単純には思えなかった。すべてが象徴的で、すべてが兆候だった。天井の釘。ナンバープレート。テレビのアニメ。そして今、この茶色くて素早い蛇が、まるで私が危険であるかのように、まるで私が恐怖の対象であるかのように、私から遠ざかっていった。

私はそうなってしまったのか？　私はそうなってしまったのか？　死の司祭として、処刑室から現れ、証言の重み、共謀の汚点、そして国家による殺人の悪臭を背負って？

蛇は闇の中に消え、私はそこに立ち尽くし、エデンの園のことを考えていた。善悪の知識の木のことを。そして、この真実を。一度その木の果実を味わい、知識を得たら、二度と無垢な状態には戻れない。蛇は知識を与えた。私は、人間が持つべきではない知識を目の当たりにしたばかりだった。国家が、分刻み、一呼吸ごとに、人を窒息死させる正確な仕組みを。

そして蛇は私から逃げ去った。

蛇は姿を消していたが、私は動けなかった。ホルマン矯正センターの駐車場に立ち尽くし、茶色の蛇がいたはずの空っぽの空間を見つめながら、私は思った。「*蛇でさえ、この場所からは逃げる。悪の象徴である蛇でさえ、ここで起こることには一切関わりたくないのだ。*」

わからない。もしかしたら気のせいかもしれない。ただのヘビだったのかも。逃げ出せたらよかったのに。

車の中で震えながら、息を整えようとした。携帯電話には着信履歴がいくつか残っていた。誰かに電話しなければならないことは分かっていたが、最初に誰に電話すればいいのか分からなかった。ゆっくりと慎重に、5人のメディア関係者と繋いでくれると分かっているジャーナリストを選んだ。今度は、全員が同時にスピーカーフォンにしてくれた。彼らの声は重なり合い、早口で、切迫感があり、そして敬意に満ちていた。私は、彼の存在そのものに刻み込まれた生存のリズム、分刻みで、あらゆる詳細を語った。アンソニーの胸の上下動、最後の合図のようにかすかに動く彼の足、そしてまだ私の頭の中でこだましている彼の言葉。その描写の一文一文は、道徳的な浄化の試みであり、神聖なものと残酷なもの、人間の勇気と組織的な死を調和させようとする必死の努力だった。

質問が次々と寄せられた。一つはリズムについてだった。私は19分間の、英雄的で苦痛に満ちた呼吸を再現した。もう一つは身振りについてだった。私は彼のまぶたの動き、震える唇、こめかみと首に大地の裂け目のように膨らんだ血管、つま先の動きを描写した。私はささやき声の神聖さを強調した。彼に語りかける私の言葉、そして彼の返答。拡声器で増幅された彼らの声は、証言にしっかりと根ざし、物語を吸収する、注意深い合唱となった。私は時系列を何度も繰り返し、生き延びたリズムの中の一呼吸一呼吸、一呼一呼、一微な身振りを一つ一つ記録した。私は彼らに、何が起こったのかを心の奥底で理解してほしかったのだ。

私はホルマンから続く狭い道を車で走り始めた。夜の闇に淡く儚げな綿畑は、悲しみの重みにたなびき、風にざわめいていた。私は泣いた。アンソニーのために、あまりにも残酷に断ち切られたあの神聖な存在のために、それを許したシステムの道徳的な空虚さのために、笑った看守たちのために、そして人間の苦しみにしばしば無関心なこの世界のために。カーブを曲がるたびに瞑想し、息をするたびに祈り、流す涙の一滴一滴が小さな悪魔払いだった。私は、夜のあらゆる繊維の中に共存する、人間の脆さの巨大さと神聖な存在の強さを感じた。

記者会見場に到着するまでに、私はこの出来事を何度も何度もリハーサルしていた。苦しげな呼吸が19分間続いたこと、神聖な囁き、その光景の不条理さ、骨壺、窒素マスク、アンソニーの体があらゆる仕草、あらゆる痙攣、あらゆる必死の筋肉収縮で命を繋ごうともがいていたこと、そして宇宙に響き渡ったうめき声について語った。カメラ、照明、聴衆を意識しながらマイクに向かって話したが、どの言葉も私が目撃した神聖な現実と深く結びついていた。これは単なる処刑ではなく、注目と熟考を必要とする精神的かつ道徳的な出来事だったと強調した。

そろそろ帰る時間だった。

私は夜の闇の中を車を走らせながら、こんな恐ろしい光景を二度と目にしなくて済むように、電柱になってしまえばどんなにいいだろうかと、しばしば考えていた。

何時間も経った後も、その詳細は驚くほど鮮明に記憶に残っていた。ボート、漫画、アンソニーの持ち物、ささやき声、窒素マスク、痙攣する彼の肉体に刻まれた生存のリズム、そして最後の息遣い。あらゆる要素が彼の記憶に深く刻み込まれ、決して忘れることはできなかった。彼は目撃者であり、今や何が起こったのかを世界に伝える責任を負っていた。事実だけでなく、その出来事の神聖な重み、人間の勇気、道徳的な目覚め、そして精神的な共鳴をも。

帰路は、実存的な瞑想へと変わった。一歩一歩、一本一本の木、一面の野原が、内なる苦痛の風景を映し出していた。影は、非難、悲しみ、そして道徳的判断の形へとねじ曲がった。綿畑を吹き抜ける風は、かすかな、幽玄な嘆きの合唱を運んできた。それは、自然であり、良心であり、そして道徳的な宇宙そのものでもある、ささやき声だった。時折、私は声に出して祈りを口にし、夜空に囁いた。「神はあなたと共にいます。あなたは光です。光へと行きなさい。」

旅はアラバマ州、ミシシッピ州を経て、州境を越えてアーカンソー州へと続いた。受付センターに到着した時、私は肉体的にも精神的にも疲れ果てていた。しばらくの間、震え、疲労、そして悲しみに身を委ねた。そして、その夜、わずかに眠ることができた時間を噛みしめた。

しかし、この束の間の安息のさなかにも、悪夢がまるで大槌の一撃のように襲いかかった。

私は幼い頃の近所に戻っていた。通りは記憶通りの姿だった。ひび割れた歩道、低く垂れ下がる枝、見慣れた家々の色。すべてが、記憶が過去に与える不思議な黄金色の光に包まれていた。そこは無垢な場所。処刑室も、窒素マスクも、強制的に窒息させられる男たちも、何も知らなかった場所だった。

そして、そこに彼女がいた。私が子供の頃に知っていた、あの小さな女の子。私たちはよくこの通りで一緒に遊んだり、自転車に乗ったり、夏の夜には瓶にホタルを捕まえたりしたものだ。彼女はまだ、ただの子供だった。

すると彼女が私を見た瞬間、眠っている間も喉が締め付けられるような感覚に襲われた。

「今夜、アンソニー・ボイドと一緒にいたんじゃないのか？」彼の声は穏やかだったが、多くを物語っていた。私はうなずいた。言葉が出なかった。口が反応を拒んだ。

なぜ何も行動を起こさなかったのですか？

その疑問は私たち二人の間に漂っていた。周囲の通りは暗くなり、黄金色の光は灰色に変わり、そして処刑室と同じ、むっとするような蛍光灯の光に変わった。家々は消え、木々は枯れ果てた。そして突然、私たちはあのホルマンの廊下に戻っていた。ちらつく明かりと、カビと腐敗の匂いが漂うあの廊下に。彼女はまだその疑問を口にしており、その声はコンクリートの壁にこだましていた。

なぜ何も行動を起こさなかったのですか？

私は答えようとした。説明しようとした。私はそこにいた。彼の母親の手を握った。彼に聖体拝領を授けた。彼に聖油を塗った。聖書を読んだ。彼が息を引き取る時、優しい言葉をささやいた。彼の足が上下するのを見た。私は彼の呼吸、彼の動きの一つ一つに注意を払った。最後に彼を祝福しようとした時、彼らは私を彼の腕から引き離した。私はできる限りのことをした。

しかし、言葉が出てこなかった。喉が詰まったようだった。彼女はただそこに立ち、年老いた、賢明な目で私を見つめていた。

なぜ何も行動を起こさなかったのですか？

そして、夢のような論理が働いたあの恐ろしい瞬間に、私は自分の行動を疑っていたのではなく、処刑そのものを疑っていたのだと悟った。なぜ止めなかったのか？なぜ担架に身を投げ出さなかったのか？なぜ仮面を剥ぎ取らなかったのか？なぜ看守と格闘しなかったのか？なぜ引きずり出されるまで叫び続けなかったのか？なぜ、ほんの一瞬でも、この殺人機械を中断できるようなことを何もしなかったのか？

なぜ私は善良だったのか？なぜ私は従ったのか？なぜ私は命令されたら立ち去ったのか？なぜ私はそこに留まり、彼らが彼を窒息死させるのを見ていたのか？

問題は私が何をしたかではなく、何をしなかったかだった。

私は彼らに話しかけようとした。しかし、そうしなければ逮捕され、起訴され、連行され、私の代わりに誰かが現れるだろう。その誰かが私に詳細を思い出させることも、何が起こったのかを伝えることもできないだろう。私の存在、私の証言、私の物語。それが私が提供できるすべてだった。

しかし、こうした正当化も、私には無意味に思えた。それは単なる合理化に過ぎない。混沌よりも秩序を、介入よりも文書を、犠牲よりも証言を好む者の都合の良い理屈だ。

彼女はうつむき、顔つきが変わった。突然、彼女は私の幼い頃の少女ではなくなった。アンソニーの娘になった。そして彼の母親になった。それから、あの部屋で私が死を目撃したすべての人々になった。そして、死者と弔問客の合唱が、一斉に同じ問いを投げかけた。

なぜ何も行動を起こさなかったのですか？

蛍光灯がちらついた。廊下は遠くまで続いていた。突き当たりには、カメラと担架、そしてアンソニーの足が上がり、震え、また下がるのが見えた。何度も何度も。上がって、下がって、上がって、下がって。私は彼に向かって歩いたが、彼にたどり着くことはできなかった。私がしなかったこと、すべきだったこと、そしてすべきだったのかどうか、決して知ることのできないことをするのに、間に合わなかったのだ。

なぜ何も行動を起こさなかったのですか？

なぜなら私は臆病者だから。なぜなら私は共犯者だから。なぜなら私は彼を殺したのと同じシステムに囚われているから。なぜなら私はこの世界で生きながら完全に抵抗する方法を知らないから。なぜなら私は生き残ることを選ぶから。なぜなら私は、物語を語るために生きることが、それを止めるために死ぬことよりも重要だと自分に言い聞かせているから。なぜなら私は人間であり、不完全で傷つきやすく、最善を尽くしているけれど、私の最善は十分ではなかったから。決して十分ではなかった。これからも決して十分ではない。

なぜ何も行動を起こさなかったのですか？

わからない。わからない。神様、助けてください、わからないんです。

車の中で目が覚めた。心臓は激しく鼓動し、体は汗びっしょりだった。シェルターの駐車場は暗く、静まり返っていた。悪夢は息苦しい抱擁のように、重く、息苦しいほどに私を締め付けていた。彼の声がまだ聞こえ、彼の目がまだ見え、あの問いの重みがまだ胸にのしかかっているのを感じていた。

暗闇の中、ハンドルを握る手が震える中、私は涙を流した。それは純粋な悲しみの涙ではなく、道徳的な曖昧さ、共犯意識、そして殺人を犯しながらそれを証言と呼び、省庁と呼び、どんな名前で呼んでもその本質を隠蔽するシステムに属しているという感覚からくる苦い涙だった。殺人が行われているのを傍観しているだけなのだ。

あの少女の問いかけが、私の頭から離れない。決して消えることはない。夜中に目が覚める。会話を遮る。車の助手席に浮かぶ。教会の後ろに佇む。バックミラーに映るたびに、私を見つめている。

なぜ何も行動を起こさなかったのですか？

私は行動した。私は目撃した。私はその出来事を語った。そして今でも語り続けている。

しかし、それで十分だったのだろうか？人が殺された時、証言だけで十分なのだろうか？手と体があり、被害者と国家の間に介入できたはずの者がいた時、証言だけで十分なのだろうか？

わからない。あの夜の他のすべての出来事と同じように、その疑問も私の心の中に残っている。天井の釘、母の震える手、兄の必死な歩き回り、娘の叫び声、警備員の笑い声、アンソニーのささやくような指示、19分間の苦痛に満ちた呼吸、上下に揺れる私の足、部屋を揺るがしたうめき声、そして最後の祝福を奪った押し。

そして私は、あの少女の問いを心に抱えている。答えられない問い。死ぬまで私を悩ませ続ける問い。おそらく、私を悩ませ*続けるべき問い*。

私はそこにいました。目撃しました。覚えています。今からお話しします。

しかし、それは答えではないかもしれない。それは単に別の疑問を生み出すだけかもしれない。

悪夢が再び訪れる。いつものように。幼い頃の黄金色の光は、処刑室の灰色に消えていく。見慣れた街並みは、コンクリートの廊下へと変わる。少女の顔は、私が救えなかった人々、救えなかった人々、静かに従順に、障害物ではなく証人として、障壁ではなく証言者として、そこに立ち尽くして死んでいくのを見守ったすべての人々の顔へと変わっていく。

目が覚めるたびに、彼の声が耳にこだまする。でも、私は答えることができない。聞こえるのは、アンソニーの足が上下する音だけ。上下。上下。果てしなく、私の心の中で、記憶の中で、そして私を悩ませる悪夢の中で、目覚めている時も眠っている時も。

なぜ私は何も行動を起こさなかったのだろう？神よ、私をお許しください。私には分かりません。

運転を続けるにつれ、見渡す限り広がる暗い野原は、私の魂を蝕む虚無感を映し出していた。薄いフロントガラス越しに永遠の重みがのしかかり、夜風は誰も答えられない問いを囁いていた。「*正義はどこにあるのか？慈悲はどこにあるのか？罪なき者の苦しみを和らげるべき神はどこにいるのか？*」

道に映る影の一つ一つが、私の死すべき運命を思い出させた。かすかな光の一つ一つが、闇を突き破ろうともがく、恵みの火花だった。私は言葉ではなく、ハンドルを握る手の震え、胸の締め付け、かすかな息遣いで、断片的に祈った。「主よ、この苦しみが私を滅ぼさないでください。この恐怖が、私の内なるあなたの光を消し去らないでください。絶望することなく、証人として立ち向かえるようにしてください。暴力と人間の残酷さの中にあっても、神聖なものを敬うことができるようにしてください。」

運転は瞑想となり、人間の手によって創造され、同時に破壊された世界の道徳的風景の中を移動する儀式となった。走る1キロメートルは同時に沈黙の1キロメートルであり、目に見えないものとの交わりであり、計り知れない神の証人の重みとの対峙でもあった。私は神聖な逆説について瞑想した。国家によって承認された死の真っ只中にある部屋でさえ、そこには愛があり、勇気があり、神の揺らめく存在があったのだ。アントニオの抵抗、ささやくような肯定、そして彼の最後の、胸を締め付けるような合図。これらすべては小さな奇跡であり、耐え難い圧力の下、人間の肉体を通して反射されたキリストの光だった。

私は、人間の苦しみの途方もない大きさと神の忍耐、人間のシステムが機能不全に陥ってもなお恵みが続く様、鉄とコンクリートの無菌的な冷たさの中にも神の存在が残る様、死が機械化された部屋のテレビでちらつく漫画の不条理さの中にさえ神の存在が残る様、その途方もない大きさに畏敬の念を抱いた。私は深く息を吸い込み、車に吹き付ける風を感じた。目の前に広がる道は、絶望と希望、痛みと、生命と証言が続くべきだという主張、証言そのものが聖餐であり、両方を忘れてしまった世界における慈悲の脆い器であるべきだという主張との間の狭い道のように思えた。

車で家路につくと、見慣れた街並みが奇妙に感じられ、私が経験した道徳的な恐怖を覆い隠すことができなかった。車を停め、額をハンドルに押し付け、涙を止めどなく流した。アンソニーの名前が口から漏れた。それは、儚い追憶と反抗と祈りの仕草だった。私はすぐに眠りに落ちた。しかし、それでも悪夢は再び蘇り、鋭く、非難するように、そして私を捉えて離さなかった。幼い頃の少女が、無表情な目で私を見つめていた。

なぜ何も行動を起こさなかったのですか？

震えながら目が覚めた。道徳的、精神的な重荷が少しも軽くなっていないことを悟った。痛みは私だけのものではなかった。アンソニーの勇気、不屈の精神、そして神聖な存在感が私の魂に刻み込まれ、証言すること、真実を語ること、そして起こったことの重大さを証言することを私に求めていた。部屋、廊下、道、綿畑、ネオンサイン、滑稽な風刺画：すべてが私の記憶に刻み込まれ、神聖なものとグロテスクなもの、人間的なものと道徳的なもの、生と永遠を宿していた。

天井の釘。沈んだ梁。震える母の手。兄の歩き方。娘の泣き声。警備員の笑い声。アンソニーの呼吸。持ち上げられた足。最後のうめき声。冷たい鋼鉄。窒素。聖体拝領。油。詩篇。聖書。目撃者たち。動き。19分。反動。拒絶された祝福。悪夢。旅。涙。綿畑。報道陣。世界は知らなければならない。

あらゆること――神聖なもの、恐ろしいもの、そして人間的なあらゆる細部――を記憶にとどめなければならない。語り継がなければならない。目撃されなければならない。

それは単なる処刑ではなかった。それは神学の具現化であり、彼の息吹そのものに刻まれた活動主義であり、溢れんばかりの不屈の人間性であった。国家がゆっくりと、意図的に、機械的に一人の人間を殺害する一方で、彼は自らの死を説教に、苦しみを証言に、そして最期の瞬間を未来の世代への指針へと変えたのだ。

私はその全てを背負っている。釘の重さ。彼の足の重さ。囁かれた祈りの重み。最後にもう一度彼を祝福しようとした時に拒絶された重み。凍えるような空の下、綿畑を抜けて一人で家に帰る重み。悪夢の中の少女の問いかけの重み。

私はできる限りのことをしました。私はそこにいました。すべてを目撃しました。彼女の母親の手を握りました。彼女に聖体拝領を授けました。彼女が息を引き取る時、優しい言葉をささやきました。彼女のあらゆる動き、あらゆる呼吸、あらゆる仕草を書き留めました。あなたに伝えるために、そして全世界に知ってもらうために、すべてを記憶に刻みました。

これがアラバマ州がやったことだ。これが彼らがアンソニーを殺した方法だ。ゆっくりと。計画的に。液体窒素を使って。19分間の苦痛、そしてさらに17分間、彼の体はかろうじて命をつないだ。番兵のような警備員の監視下で。テレビではアニメが流れ、廊下には笑い声が響き渡る。私が十字を切ろうとした時、押しつぶされた。

これが実際に起こったことだ。これが私が目撃したことだ。これは決して忘れてはならないことだ。

アンソニーは私に、自分の呼吸をよく見ておくように、足の動きを覚えておくように、足が上がり、安定し、震え、そして倒れる様子を見るようにと言った。彼は処刑を教訓に、死を反抗の行為に、苦しみを神聖な証言へと変えた。彼は、誰かが自分を見、誰かが自分を覚えていて、誰かが自分の物語を語り継ぐようにしたのだ。

私だよ。これで君も分かっただろう。

天井に打ち込まれた釘は今も残っている。心の重圧は依然として重くのしかかる。悪夢は消えない。しかし、アンソニーの証言は今もなお残っている。彼の勇気は衰えていない。あの部屋で起きた出来事について私が語る言葉の一つ一つに、彼の呼吸――19分間のゆっくりとした、規則正しい、そして苦痛に満ちた呼吸――が響き渡る。

8.2：エミリー・C・マークス判事と*ボイド対ハム事件*：窒素低酸素症に対する司法支援と限界

、*ボイド対ハム事件*においてアンソニー・ボイドの差し止め請求を却下することで、アラバマ州における液体窒素による死刑執行の法的発展において極めて重要な役割を果たした。 2025年10月9日に下された彼女の判決は、液体窒素注射によるボイドの死刑執行を認可しただけでなく、より広範な憲法上の枠組みを明確化し強化するものでもあった。すなわち、州の執行手順は違憲となるリスクはなく、合衆国憲法修正第8条は苦痛のない死を保証するものではない、というものである。彼女の判断は、専門家の証言、証人の供述、および法的基準を綿密に分析した結果に基づいており、恐怖、混乱、精神的苦痛によって引き起こされる人間の苦しみを認めつつ、最終的には州の安全対策と整合している。

1993年のグレゴリー・ヒューグリー誘拐殺人事件で有罪判決を受けたアンソニー・ボイドは、アラバマ州の窒素低酸素症プロトコルを米国法典第42編第1983条に基づき不服として提訴した。訴状の中で、彼は合衆国憲法修正第8条を援用し、このプロトコルが「意識のある窒息」の重大なリスクを生み出すと主張した。呼吸可能な空気を純粋な窒素に置き換えることで、死は恐怖、パニック、そして深刻な精神的苦痛を伴うと彼は主張した。また、彼は合衆国憲法修正第14条に基づき、適正手続きの権利を主張する請願書を提出し、州がプロトコルの完全な版を提供しなかったと訴えた。代替案として、彼は銃殺刑、絞首刑、そして安楽死を提案した。[1]

訴訟提起後、ボイドは執行差し止め命令を求めた。マークス判事は2日間の証拠審理を開き、5人の専門家を含む18人の証人から証言を聞いた。証人には、麻酔科医のブライアン・マッカリー博士、低酸素症と麻酔の専門家であるフィリップ・ビックラー博士、総合格闘技の専門家であるカーリー・ザパタ博士、そして銃殺刑の実現可能性と痛みの程度について証言した弾道学と銃器の専門家であるジェームズ・ウィリアムズ博士が含まれていた。同じく麻酔科医のジョセフ・アントニーニ博士は州を代表して証言した。[2]　マークス判事は判決で、ボイドは差し止め命令に必要な証拠を提出していない、特に重度の痛みのリスクを大幅に軽減できる実行可能で容易に実施できる代替手段の存在を証明していないと結論付けた。[3]

マークスは、ボイドの異議申し立てを、最近の最高裁判所の判例、特に*バックルー対プレサイス事件に照らして検討した。同判決*によれば、死刑執行方法が合衆国憲法修正第8条に違反すると主張する死刑囚は、「耐え難い苦痛の重大なリスク」を立証するだけでなく、「実行可能で、容易に適用でき、耐え難い苦痛の重大なリスクを大幅に軽減する代替の執行方法」を提案しなければならず、他の容認できないリスクを導入してはならない。[4]　マークスは、ボイドがそのような代替案を提示していないことを強調した。銃殺隊による処刑というボイドの提案は、おそらく苦痛が軽減されることはなく、総合格闘技（MMA）による処刑という提案は実行不可能であると結論付けた。[5]　この基準は非常に厳しく、処刑方法に関する過去の判例と一致し

ている。マークスは、死刑執行に関する州の権限は「完全」ではないものの、その権限は、執行方法が容認できないリスクをもたらす場合に限り、合衆国憲法修正第8条によって制限されると指摘した。[6] 彼によれば、ボイドの立証責任は単に苦痛を主張することではなく、明らかに安全な代替手段を示すことであったが、彼はそれをしなかった。

マークス判事の判決の最も重要な側面の1つは、窒素低酸素症が人間の苦痛をなくすものではないという彼女の認識である。彼女は次のように書いている。「裁判所は、議定書に従ってたとえ2分間であっても意識的に酸素を奪われた人が、不快感、パニック、精神的苦痛を経験することに疑いの余地はない。」[7]これは修辞的な譲歩ではない。マークス判事は、議定書に従って死ぬ過程には、真の恐怖、見当識障害、生理的反応が伴う可能性があることを認めた。

しかし、マークスはこの苦痛を処刑の当然の結果として提示した。彼はこの苦痛は「不幸ではあるが死の避けられない結果」であると主張し、迫りくる死の認識がすべての処刑に共通する心理的および感情的な苦痛を生み出すことを強調した。「心理的および感情的な苦痛の多くは、死刑囚が避けられない苦痛である。なぜなら、彼は自分が間もなく死ぬことを知っているからであり、これはすべての処刑に伴う経験であり、避けることは不可能である。」[8] 彼によれば、この苦悩を引き起こしたのは方法そのものではなく、人間の死に対する認識であった。

マークス判事が、憲法上の保護が苦痛のない死を保証するという考えを否定したことは注目に値する。彼は「憲法修正第8条はボイドに苦痛のない死を保証するものではない」と明確に述べた。[9] これは重要な結論である。憲法は「残酷で異常な刑罰」を禁じているが、多くの人が慈悲深く平和な死と考えるような死を義務付けているわけではない。マークス判事は、ボイドが、この処刑方法が「死刑執行に必要な苦痛以上の重大な追加的苦痛」を引き起こすことを証明していないことを強調した。[10] 言い換えれば、たとえ非常に苦痛であっても、ある程度の苦痛は許容できるということである。

マークス氏の意見は、公聴会で提示された科学的および一般人の証言を綿密に分析した結果を反映している。彼女は、窒素吸入プロトコルで被拘禁者が意識を失うまでにかかる時間に関する専門家の推定を慎重に検討した。アントニーニ博士は、90〜100%の窒素を吸入してから35〜40秒後に意識喪失が起こる可能性があると述べた。一方、ビックラー博士は、特に呼吸が遅い、または浅い場合は、遅延は2分と推定した。マークス氏は、両方の要因が所要時間に影響すると考えたが、遅延が長引いたとしても、必ずしも装置の故障や残酷さを示すものではない可能性も考慮した。彼女は、いかなる遅延もプロトコルの失敗の証拠とみなすのではなく、別の解釈を提示した。意識喪失までの長い遅延は、「死の淵に立たされた死の意識に対する不随意反応」を反映している可能性があるというのだ。言い換えれば、身体的な兆候（震え、喘ぎ、痙攣）は、ガス供給システムの不具合の証拠ではなく、心理的な恐怖の表れである可能性がある。[12] この推論は、彼のより広範な主張を裏付けている。死刑囚の状況下で死ぬという精神的および肉体的な経験には、ある程度の苦痛が内在しており、これらすべてが憲法違反を意味するわけではない。

マークス氏は、液体窒素を用いた過去の死刑執行で提起された懸念についても言及した。同氏は、過去の事例では、刑務所職員が少なくとも15分間、あるいは心電図が平坦化してから5分間、窒素の供給を継続しており、死亡時刻は16分から23分であったと指摘した。[13] これらの所要時間は一部の専門家の予測とは異なっていたものの、同氏はこれを身体的な危険性の証拠とは考えなかった。むしろ、これらの長い所要時間とそれに伴う身体的兆候（震え、喘ぎ）は、「状況下における正常かつ不随意的な生理的反応」と一致すると考えた。[14]

マークスの分析は、主にボイドが提案した代替案に焦点を当てていた。彼女は、銃殺刑は必ずしもより安全で人道的ではないと主張した。専門家の証言に基づき、彼女は、銃殺刑は相当な苦痛を与える可能性が高く、窒素低酸素症による苦痛よりも大きい可能性があると判断した。¹⁵ また、MDAも彼女を納得させた。理論的には苦痛が少ないものの、ボイドの提案には、明らかに「配備準備が整っていない」インフラと医療従事者が必要だった。¹⁶*バックルーの基準*である実行可能で利用可能な代替案を満たすことができないと結論付けた彼女は、州が窒素ガスの使用を進めることを禁止することを拒否した。

マークス判事は、本案の審理に加え、手続き面についても検討した。判事はボイドのタイミングを厳しく批判し、ボイドが第1983条に基づく申請を「議定書の公表からほぼ2年後」に提出し、窒素注入による死刑執行がすでに数件行われた後であったことを指摘した。¹⁷ 判事は、ボイドの「この訴訟提起の遅れは不合理で、不必要で、弁解の余地がない」と判断した。¹⁸ この遅れのため、判事は差止命令の発令を拒否した。差止命令は、本案の審理で勝訴する可能性が高いだけでなく、申請者に有利な公正な考慮も必要とされる「例外的な措置」である。マークス判事はまた、「公正さは差止命令を支持する根拠にはならない」と強調した。¹⁹判事は、ボイドが被るであろう精神的苦痛と、合法的な判決を執行するという国家の利益を対比させ、あらゆる要素を考慮すると、執行における国家の介入は不利であると結論付けた。

ボイドは、合衆国憲法修正第8条を援用するだけでなく、窒素低酸素症プロトコルの完全版を受け取っていなかったため、手続き上の権利を侵害されたと主張した。マークス判事の意見は詳細であったが、この不備は死刑執行を阻止するには不十分であると判断した。判事はボイドの手続き上の主張を検討したが、遅延と、よりリスクの低い代替手段の存在を証明できなかったことを考慮すると、手続き上の権利に関しても、差し止め命令は正当化されないと結論付けた。実際、判事は、不完全な情報開示よりも、死刑の厳格かつ秩序ある執行に対する州の利益をより重視した。

マークス判事の判決は、その結果だけでなく、それが強化する教義的枠組みにおいても重要である。同判事の判決は、窒素性低酸素症を、苦痛が「激しい」身体的苦痛の閾値を超えない限り、かつ代替手段が理論上存在するだけでなく、実際に実行可能でリスクの少ないものでなければならないという憲法上の枠組みの中に位置づけた。意識的な恐怖と精神的苦痛を認めつつ、それらを克服不可能な障害とはみなさないという同判事の姿勢は、慎重でありながらも極めて重要な法的立場を示している。

*バックルー判決*によって確立された高い基準を強調している。彼はまた、死の必然性を超えてその苦痛が「不必要」とみなされない限り、たとえ意識的な苦痛を伴う処刑方法であっても憲法上許容される可能性があると主張している。哲学的には、彼の意見は深い問題を提起する。我が国の法制度は処刑における恐怖の役割を受け入れるべきだろうか？刑の執行という名の下に許容される心理的苦痛の閾値はどこまでなのか？マークスの分析は、彼の法的観点からすれば、一定の構造的条件が満たされる限り、憲法はある程度の苦痛を許容していることを示唆している。

エミリー・C・マークス最高裁判所長官による*ボイド対ハム事件の判決*は、窒素吸入による死刑執行をめぐる全国的な議論において画期的な決定となった。マークス長官はボイドの差し止め命令を却下することで、州の安全対策を優先し、実行可能でより安全な代替手段を要求し、残酷で異常な刑罰となりうる精神的苦痛と肉体的苦痛との明確な区別を確立する憲法上の枠組みを改めて確認した。窒素吸入による死が引き起こす人間の恐怖を認識しつつも、それを必ずしも違憲とは断定しなかったことは、死刑法理の根深い問題点を浮き彫りにしている。マークス長官によれば、合衆国憲法修正第8条は拷問を禁じているが、恐怖の欠如を要求しているわけではない。死に内在する苦痛以上の追加的な苦痛を死刑執行方法に課さないこと、そして代替手段が理論上のものだけでなく、実際に実行可能なものでなければならないことだけを要求しているのである。この観点から、同裁判所は州の議定書を承認し、将来の訴訟に影響を与える可能性のある判例を確立するとともに、執行方法に関する決定を下さなければならない状況の倫理的および法的複雑さを浮き彫りにした。

最終的なメモ

1. *ボイド対ハム事件の*訴状、事件番号2:25-cv-529-ECM（アラバマ州メリーランド州、2025年7月16日提出）、文書1。ボイドは、修正第8条の保護を求める訴状（第1項）、修正されていない議定書に関する修正第14条に基づく弁護側の権利の尊重を確保する訴状（第2項）、修正第8条の保護を求める訴状（第3項）、および差止命令を求める訴状（第4項）を提出した。彼は代替案として銃殺刑、絞首刑、および死刑の廃止を提案した。助言および命令覚書、文書104、13～14ページを参照。
2. 意見および命令覚書、2 ページと 15 ページ。保護観察審理は 2025 年 9 月 4 日と 5 日に行われた。裁判所は 5 人の専門家証人を含む 18 人の証人から証言を聞いた。ボイド側からはブライアン・マッカリー博士（医学および麻酔）、フィリップ・ビックラー博士（低酸素症および麻酔）、カーリー・ザパタ博士（医学および MMA）、ジェームズ・ウィリアムズ博士（弾道学、救急医療、および銃器）。州側からはジョセフ・アントニーニ博士（麻酔）。
3. 同上、32頁（ボイドが本案で勝訴する可能性が高いことを証明していないため、予防措置を拒否）。
4. 同上、34-35頁（ *Bucklew v. Precythe* 、587 US 119、134（2019）を引用）。
5. 同書、51-52頁（銃殺隊）；同書、57-58頁（MAID）。

6. 同上、33-34頁。
7. 同上、50頁。マークス判事は次のように記した。「裁判所は、たとえプロトコルに従って2分間であっても、故意に酸素を奪われた人は、不快感、パニック、精神的苦痛を経験することに疑いの余地はない。」
8. 同書、49-50頁（心理的および感情的な苦痛を「死刑の執行方法に関わらず、死刑の避けられない結果」と特徴づけている）。
9. 同上、33頁（「合衆国憲法修正第8条はボイドに苦痛のない死を保証するものではない」）。
10. 同上、33-34、36-37頁。
11. 同書、15-16頁（ビクラー博士は、正常な呼吸であれば2分で意識喪失に至ると考えている）；同書、18頁（アントニーニ博士は、35秒から40秒で意識喪失に至ると考えている）。
12. 同上、43-44頁。
13. 同上、12（プロトコルでは、平坦な心電図の後、15分間または5分間のいずれか長い方の時間、窒素を流すことが求められている）；同上、23-29（コード1からコード2までの時間で、スミスは18分、ミラーは16分、グレイソンは16分、フレイジャーは19分、ハントは23分で死亡したことを記録している）。
14. 同上、30、43-44（不随意運動と死戦呼吸は、必ずしも痛みや意識を示すものではない、死の過程における予想される側面として分析されている）。
15. 同書、46〜47頁（ウィリアムズ博士の証言は、弾丸が「心筋を貫通」し、3〜6秒で意識を失わせ、その間被拘禁者は肉体的苦痛を味わったという内容に基づいて分析されている）。
16. 同上、54-58頁（MAは、囚人の迅速な経口摂取への協力、代替投与方法を実施する医療専門家、入手困難な医薬品へのアクセスが必要であり、処刑方法として使用されたことがないため、実現可能でも実施も容易ではないと結論付けている）。
17. 同上、60〜62頁。
18. 同上、61頁（Brooks v. Warden、810 F.3d 812、824（第11巡回区控訴裁判所、2016年）を引用）。
19. 同上、32頁。
20. 同上、14。ボイドの弁護士は、審理後の弁論要旨で、差止命令申請の目的で適正手続きの主張（第2項）に依拠しなくなったことを裁判所に伝えた。

8.3：窒素吸入による死亡：ハファカー、ディック、マークスによる比較法医学研究

窒素低酸素症という死刑執行方法の導入は、死刑囚の呼吸可能な空気を純粋な窒素に置き換えることで酸素を奪うものであり、憲法、証拠、倫理に関する新たな問題を提起している。3人の連邦判事は、異なる死刑事件でこれらの問題に取り組み、リスク、苦痛、国家の義務について全く異なる解釈を示した。*スミス対ハム事件では*、R・オースティン・ハファカー・ジュニア地方判事が米国史上初の窒素低酸素症による死刑執行を承認した。*ホフマン対ウェストコット事件では*、ルイジアナ州のシェリー・D・ディック首席判事が目撃者の証言と捜査の秘密性を根拠に仮差止命令を出した。最後に、*ボイド対ハム事件では*、エミリー・C・マークス首席判事が中間的な立場を取り、死刑囚に実際に与えられた苦痛を認めつつも、実行可能でより安全な代替手段がないことを理由に仮差止命令の発令を拒否した。彼らの意見は、憲法上の保護と、実験的な死刑執行手順を監督する裁判所の役割について、相反する見解を如実に示している。

*スミス対ハム事件*において、ハファカー判事は、ケネス・ユージン・スミスがアラバマ州の未検証の窒素低酸素プロトコルに異議を唱えた件を審理した。スミスは、この方法には痛み、窒息、マスクからの漏れ、意識の長期維持といった重大なリスクがあると主張した。しかし、ハファカー判事はこれらの主張を退け、スミスの主張の多くは憶測に過ぎないとした。[1] 彼は、スミスが憲法修正第8条の基準を超える苦痛の証拠を提示していないと結論付けた。[2] ハファカー判事は窒素低酸素法の目新しさを認めつつも、「目新しい」ことと「違憲」であることを区別し、他の処刑方法（致死注射など）は初期段階では試験されていないと指摘した。[3] 最も重要なのは、無痛死を保証することを明確に拒否し、「スミスに無痛死は保証されない」と述べたことである。[4] ハファカー判事にとって、関連する問題は、このプロトコルが「追加的な」痛み、つまり死に伴う避けられない苦痛を超えた痛みのリスクを伴うかどうかであった。

宗教的な考慮事項もこの論争に影響を与えた。スミスの弁護士は、処刑用マスクによって祈りや最後の言葉が聞こえなくなる可能性があると主張した。ハファカー判事は同情を示したが、これらの懸念のみに基づいて処刑を中止することは拒否し、処刑手順の変更によって処刑を損なうことなく宗教的慣習に従うことができると示唆した。[5] スミスの処刑後、メディアや目撃者は彼が息切れし、痙攣し、震えていたと報じた。しかし、その後の裁判で、ハファカー判事はこれらの証言を「矛盾していて一貫性がない」として却下した。[6] 彼は、説明にばらつきはあるものの、プロトコルは運用上成功していたと結論付けた。死は10分以内に発生し、意識喪失はさらに速かった。[7] ハファカー判事は、この判決によって司法抑制の原則を確立した。これは、推測ではなく具体的な危険の証拠を必要とし、州が定めたプロトコルにかなりの裁量権を与えるものである。

一方、シェリー・D・ディック最高裁判事は、*ホフマン対ウェストコット事件において*、はるかに介入的な姿勢をとった。ルイジアナ州がジェシー・ホフマンの死刑執行に窒素吸入による低

酸素症を選択した際、ホフマンは訴訟を起こした。迅速な情報開示手続きと証拠審理の後、ディック判事は窒素吸入による死刑執行を禁止する仮差止命令を出した。[8]判決の中で、ディック判事は、ジェシー・ホフマンが「窒素吸入による低酸素症が痛みと恐怖を増大させる可能性が非常に高いことを明確に示した」と認定した。[9]判事の結論は、過去の死刑執行の目撃証言に大きく依拠しており、その証言には「激しい身もだえ…4分間続く激しい痙攣、意識がはっきりしている状態での繰り返しの喘ぎ…震えと痙攣…死の直前の喘ぎ」[10]と記されている。ディック判事にとって、これらの観察は逸話でも憶測でもなかった。これらは「強制的な窒素吸入による死亡がどのようなものかを示す最も説得力のある証拠」であった。[11]

ディック判事はまた、州の透明性の欠如を批判した。同判事は、ホフマンの弁護団が当初ルイジアナ州の窒素プロトコルの一部のバージョンのみを黒塗りにして公開したことを指摘し、黒塗りされていない完全な文書は隠蔽されるべきではない公文書であると結論付けた。[12]同判事の裁判所命令は、司法審査のより広い概念を反映している。州が致死プロトコルの仕組みを隠蔽し、信頼できる証拠が実際の危険を示している場合、裁判所は単に審理を延期するべきではない。

さらに、ホフマンは仏教の信仰上、瞑想的な呼吸が必要であるとして信教の自由を主張したが、ディック判事はこの点のみに基づいて判決を下したわけではない。彼はRLUIPAに基づく差し止め命令を却下し、主にテロの危険性と合衆国憲法修正第8条によって保障されている意識的な苦痛に焦点を当てた。¹³　彼の見解では、目撃者の証言によって裏付けられた窒素低酸素症に伴う精神的および肉体的苦痛の危険性は、本案審理の前に司法介入を正当化するものであった。

アラバマ州の*ボイド対ハム事件では*、*エミリー・C・マークス首席判事*がより微妙なアプローチをとった。アンソニー・ボイドは、このプロトコルが「意識のある窒息」（恐怖、パニック、そしておそらく肉体的苦痛）を引き起こしたとして、憲法修正第8条に違反するとして異議を唱え、銃殺隊や医療による安楽死などの代替案を提案した。専門家の証言を含む2日間の証拠審理の後、マークス判事は仮差止命令の要求を却下した。¹⁴　　ディック判決とは異なり、彼女はボイドが述べた苦痛が本質的に憲法修正第8条に違反するとは結論付けなかったが、ハファカー判決とは異なり、判事らは彼の懸念を真剣に受け止めるべきだと主張した。

マークスは、この処刑手順における人間的な側面を明確に認めた。彼は次のように記している。「意識的に酸素を奪われた人間は、たとえ2分間であっても、不快感、パニック、精神的苦痛を経験することは疑いの余地がない。」[15]　彼はこの苦痛を「不幸ではあるが避けられない死の結果」と呼び、「死刑囚は自分が間もなく死ぬことを知っている」ため、心理的苦痛はすべての処刑に共通するものだと強調した。[16]　最も重要なのは、憲法が苦痛のない死を保障しているという考えを否定し、「修正第8条はボイドに苦痛のない死を保障するものではない」と述べたことである。[17]　マークスにとって、憲法上の問題はボイドが死を恐れていたかどうかではなく、この手順が「死刑執行に必要な苦痛をはるかに超える追加的な苦痛」を与えたかどうかであった。[18]

*バックルー対プレサイス判決*に基づき、マークスはボイドに対し、激しい痛みのリスクを大幅に軽減する、実行可能で実施しやすい代替案を提案するよう求めた。[19]　彼はボイドの代替案（銃殺隊と医療による安楽死プロトコル）を評価し、いずれもこの要件を満たしていないと結論付けた。彼は銃殺刑が実際に苦痛が少ないのかどうか疑問を呈し、安楽死を実施するために必要な医療インフラの存在にも疑問を抱いた。[20] また、液体窒素の影響下で死刑囚がどれくらいの速さで意識を失うかについても専門家に相談した。ある専門家は意識喪失まで35～40秒、別の専門家は2分と推定したが、マークスはこの意識喪失の長期化をプロトコル違反ではなく、「迫りくる死への認識に対する不随意反応」と解釈した。[21] 過去の処刑では液体窒素注射プロトコルで最長23分かかったことを考慮し、彼はそれに伴う痙攣や喘ぎを、体質的な警告サインではなく、「状況下で起こりうる不随意的な生理的反応」とみなした。[22]

マークス判事は事実関係の分析において、ボイド氏がアラバマ州が窒素に関する規則を発表してから訴訟を起こすまでに2年近く待ったことを批判し、その遅延を「正当化できない、不必要な、弁解の余地のない」ものとした。[23] 判事は、この遅延と、差し止め命令という形でのボイド氏の「例外的な措置」の要求を比較検討した。最終的に、ボイド氏は憲法違反の可能性とより安全な代替手段の存在の両方を立証できなかったと結論付け、執行を認めた。

ハファカー、ディック、マークスの判決を総合すると、法哲学の多様性が浮かび上がってくる。ハファカーは国家への敬意を強調し、高い立証基準を要求するとともに、身体的な影響が証明されない限り恐怖は許容できると考えている。一方、ディックは管理、透明性、苦痛の直接観察を優先し、目撃証言や手続き上の欠陥に基づいて死刑執行を命じる意向を示している。マークスは両者の要素を統合しており、真の精神的・生理的苦痛の存在を認めつつも、憲法上の救済措置は、実行可能でより安全な代替手段の存在と、厳格な立証責任を条件としている。

これらの違いは、合衆国憲法修正第8条に関する解釈のより深い相違を反映している。ハファカー判事とマークス判事にとって、残酷で異常な刑罰は恐怖以上のものを必要とし、死に内在する苦痛に「付加された」肉体的苦痛を伴う。一方、ディック判事は、特に目撃証言によって裏付けられる場合、良心、恐怖、道徳的苦悩の経験をより重視する。両判事の判決は、裁判所の異なる役割も明らかにしている。ハファカー判事の抑制的な姿勢は、厳格に確立された手続きに縛られた司法制度を示唆している。ディック判事の判決は、透明性が欠如し、リスクが現実のものとなる場合、権力に対する抑制としての裁判所の重要な役割を強調している。マークス判事は中間的な立場をとっている。すなわち、死刑囚の恐怖を真剣に受け止めつつも、国家の手続きを尊重する判事であり、説得力のある代替手段がない限り死刑執行を阻止しない判事である。

各州が窒素低酸素症の問題をより広範に検討するにつれ、これらの裁判官の異なるアプローチは極めて重要となるだろう。裁判所がハファカー判事やマークス判事の例に倣うならば、プロトコルの設計者は、方法論を文書化し正当化することを条件に、限定的な干渉で手続きを進めることができる。逆に、ディック判事の例に倣うならば、裁判所は死刑執行を許可する前に、よりオープンな情報公開、より強力な監視、そしてより厳密な実証的検証を要求するかもしれ

ない。どちらの道が選ばれるかによって、死刑実験の将来に影響を与え、人命がかかっている場合、法律は理論的な安全策以上のものを必要とするのかどうかを決定づけることになるだろう。

最終的なメモ

1. *Smith v. Hamm* 、No. 2:23-cv-00656、2024、43ページ（アラバマ州地方裁判所、2024年1月10日）（Huffaker判事）。
2. 同上、 42頁注13。
3. 同上、 42頁。
4. 同上、44頁。
5. 同上、 46-47頁注15。
6. *Smith v. Hamm* 、No. 2:23-cv-00656、2024 (MD Ala. 2024年11月6日) (Huffaker判事) (Graysonの異議申し立てにおける差止命令の申請を却下)。
7. 同上
8. *Hoffman v. Westcott* 、No. 25-169-SDD-SDJ、2025 WL 763945 (MD La. 2025年3月11日) (Dick、CJ)。
9. 同上、 19および21。
10. 同上、 12-13頁。
11. 同上、 13頁。
12. 同上、 27-28頁。
13. 同上、 6-7頁。
14. *Boyd v. Hamm* 、No. 2:25-cv-00529、2025 (MD Ala. 2025年10月9日) (Marks、CJ)。
15. 同上、 50頁。
16. 同上、 43、50頁。
17. 同上、 33頁。
18. 同上、 33-34、36-37頁。
19. 同上、 34-35頁（ *Bucklew v. Precythe* 、587 US 119 (2019) を引用）。
20. 同書、 45-52、53-58頁。
21. 同上、 15-16、40-41、43。
22. 同上、 22-29、30、43-44頁。
23. 同上、 61頁。

8.4：*ボイド対ハム事件におけるソニア・ソトマイヤー判事の反対意見*：憲法上および倫理上の考察

アラバマ州がアンソニー・ボイドを窒素吸入によって処刑することを認めた最高裁の決定に対し、ソニア・ソトマイヤー判事は激しく批判した。エレナ・ケーガン判事とケタンジ・ブラウン・ジャクソン判事が賛同したソトマイヤー判事の反対意見は、現代の死刑執行方法に対する最も重要な批判の一つと言える。ソトマイヤー判事の意見は、単なる法的議論や理論的な異議にとどまらない。むしろ、それは、アラバマ州における死刑の苦痛、尊厳、そして実験的な性質に対する最高裁の扱いを問う、深く人間的で、道徳的に正当かつ憲法に根ざした議論である。彼女の反対意見は、ボイドの運命を明らかにするだけでなく、死刑に関する最高裁の判例における重要な転換点を示すものであるため、検討に値する。

I. 魂の中のストップウォッチ：死刑囚を人間らしくする

ソトマヨールは、衝撃的な呼びかけから始める。読者に携帯電話を取り出し、ストップウォッチを開き、スタートさせて、秒針が4分間刻まれる様子をじっと見つめるように促すのだ。[1] これは単なる修辞的な練習ではなく、倫理的な実験である。ソトマヨールにとって、時間を計ることはメディアの見世物ではない。それは、担架に縛り付けられ、マスクを着用し、容赦なく流れ込む純窒素の下で窒息する男の経験を、たとえほんの一瞬でも体現することなのだ。彼の言葉は生々しい。「頭ではガスが自分を殺すと分かっている。しかし、体は呼吸するようにと訴え続ける。」[2]

この序文は、読者に熟考を促す点で印象的である。最高裁判所は、判決において単に法的問題を判断するだけではない。最高法と、命を終えようとしている人間との関係性を定義するのだ。ソトマヨール判事は、読者にこの4分間を想像させ、その表情や感情を捉えさせることで、死刑囚を単なる囚人や事件としてではなく、道徳的かつ憲法的な考察の対象として尊重している。したがって、反対意見は、この判決のトーンを決定づける。これは単なる方法論の問題ではなく、国家の支配下にある人間の経験の問題なのである。

II. 長期にわたる窒息：精神的苦痛による体質的損傷

ソトマヨール判事の反対意見の核心は、単純ながらも衝撃的な主張にある。それは、窒素性低酸素症は、他に類を見ない、耐え難い苦痛をもたらすというものだ。判事によれば、ボイド氏は酸素欠乏状態でも2〜4分、あるいはそれ以上の時間を意識を保ったまま過ごすという。[3] また、判事は、ある証拠によれば、意識を失うまでに最大7分かかる場合もあると指摘している。これは、「意識がありながらも苦痛を伴う窒息」が長時間続くことを意味する。[4]

これは単なる肉体的な苦痛ではなく、深刻な精神的苦痛である。ソトマヨール判事は検察側の専門家証人の証言を引用している。ガスの影響下では、人は呼吸したいという圧倒的な衝動を

感じるが、それが致命的であることは十分に認識している。[5]判事は、この恐怖、この精神的拷問は偶然ではないと主張する。それは、死を意識的に拒絶する場合に、この方法の効果を発揮するために必要な、追加的な心理的恐怖である。

ソトマヨール判事は、この長引く苦痛を他の方法と注意深く対比させている。彼は、銃殺隊は3秒から6秒で人を意識不明にすることができるが、液体窒素による窒息が数分かかるのに比べれば、それはほんの一瞬に過ぎないと指摘している。[6] 彼の結論は明白だ。数秒の苦痛と数分間の恐怖の間には「重大な憲法上の違い」がある。[7] 彼の見解では、これは技術的または理論的なニュアンスではなく、根本的な憲法上の境界線である。

III. 恐怖の目撃者たち：実際の処刑の証言

ソトマヨール判事の主張に説得力を持たせているのは、それが実際の事実に基づいている点である。それは単に何が起こるかという憶測に頼っているのではなく、過去の出来事に基づいている。液体窒素が初めて使用されたケネス・スミスの処刑の際、目撃者は、スミスが息を荒げ、担架の上で暴れ回る間、2〜4分間続いた「激しい動き」と痙攣を証言した。[8] そして、それ以来、状況は改善していない。アラバマ州とルイジアナ州で行われたその後の処刑では、目撃者が一貫して「数分間意識があるように見え…激しい痙攣、眼球突出、絶え間ない動き…そして明らかに呼吸ができない」と報告したと判事は主張する。[9] 彼は、これらの恐ろしい行動は例外的なものではなく、繰り返されていると強調する。

ソトマヨール判事は、このパターンを機能不全ではなく、窒素性低酸素症の真の影響を示す証拠と捉えている。彼女は、その提唱者たちが約束する「単純で、迅速で、苦痛のない」死とは程遠く、現実には恐怖、抵抗、痙攣、そして長期にわたる意識的な苦痛が伴うと主張する。彼女にとって、この証拠は憲法上重要な意味を持つ。それは、彼女の法理が真剣に受け止めるべき「さらなる心理的苦痛」を反映しているのだ。[10]

IV. 実験方法、予備的プロトコル：司法の裁量権尊重の危険性

ソトマヨール判事は反対意見の中で、州の戦略を厳しく批判している。彼女は、窒素低酸素症は本質的に実験的なものであり、決定的な臨床試験に基づくものではなく、実施が急がれたと指摘している。[11] 彼女が指摘するように、アラバマ州のプロトコルは大幅に黒塗りされており、国民と裁判所は重要な情報を得ることができなかった。[12] 彼女は、この透明性の欠如は非常に憂慮すべきことだと主張する。裁判所と国民は、この「新しい方法」がどのように機能するのか、そして実際にそれを受けるとどのような感覚になるのかを正確に知る権利があり、そうすることでその合憲性を確保できる。

さらに彼女は、厳格な司法監督がなければ、国家は措置を実施するだけでなく、人命をめぐる実験を行うことになる、と警告する。こうした実験は、最も厳格な司法審査に服さなければならない、と彼女は主張する。それは、一般的な敬意や曖昧な安全策の陰で進められるものでは

ない。ソトマヨールにとって、最高裁判所の役割は、いかなる犠牲を払ってでも革新を促進することではなく、生死がかかっている状況において憲法上の保護が有効であり続けることを保証することである。[13]

*バックルー*の応用：恐怖の付加

ソトマヨール判事は、憲法上の議論の多くを、第8修正条項に基づく死刑執行方法への異議申し立てに関する最高裁判所の画期的な判決である*バックルー対プレサイス事件に基づいている。*彼女は同僚判事に対し、この判決によれば、死刑囚は、ある死刑執行方法が「深刻な苦痛をもたらす重大な危険」をもたらすだけでなく、その危険を「大幅に軽減する実行可能で容易に適用可能な代替手段」が存在することを証明しなければならないことを改めて指摘した。[14]

ソトマヨール判事は、下級裁判所がこの分析を適切に適用しなかったと主張している。彼女は、地方裁判所と第11巡回区控訴裁判所の両方が、明確に確立された事実を無視して過度の敬意を払ったことを批判している。¹⁵*バックルー判決で要求された「厳しいバランス調整」*、つまり人的コストに基づいて処刑方法を比較することは困難だが避けられないと彼女は認めている。最高裁判所の判例法は、選択が困難な場合であっても、同様にそれを要求している。

彼の結論：ボイドは明らかにした　これは合衆国憲法修正第8条に違反する可能性が高い。長時間の意識的な窒息、呼吸しなければならないという恐怖、そして実際の処刑の証言は、相当なリスクを構成する。彼が提案する銃殺刑を含む代替案は、このリスクを大幅に軽減するだろう。しかし、下級裁判所は行動を起こすことを拒否している。ソトマヨール判事によれば、これは憲法違反に当たる。[16]

VI. 人間の尊厳と国民意識

ソトマヨール判事にとって、彼女の反対意見は単に法律上の問題にとどまらず、深い道徳的な問題でもあった。彼女は、窒素注入による死刑執行の継続を認めることで、最高裁はボイド氏だけでなく、国家全体の尊厳をも裏切っていると警告した。彼女は、この「実験」を終わらせることは、単に命を守ること以上の意味を持ち、憲法が守るべきものを守ることに関わると記した。彼女は、こうした死刑執行を認めることは、かつての国家、現在の国家、そして私たちが目指す国家の尊厳を守ることに失敗したのだと主張した。[17]

この国家の尊厳への訴えは、単なる比喩表現以上のものだ。それは挑戦状である。もし裁判所が、その性質上、死刑囚を恐怖に陥れる方法を認可すれば、国家の殺害権の道徳的正当性を損なう危険性がある。ソトマヨールにとって、憲法上の正義は、単なる服従以上のものを要求する。それは、共感、厳格な監視、そして人間をガス中毒実験のモルモットに貶めることを拒否することを要求するのだ。[18]

VII. 多数派への批判と未来への賭け

ソトマヨール判事は同僚判事を批判する際に言葉を濁すことはない。執行停止を拒否することで、「彼らはボイド判決と憲法修正第8条の保障に背を向けている」と彼女は書いている。[19]彼女は、ますます圧倒的な証拠に直面しても、裁判所が立ち止まって熟考することを拒否したことに深い失望を表明している。その代わりに、裁判所は、その真の性質と実際の苦痛が十分に理解されず、明らかにされていない方法を州が継続することを許したのだ。

彼女の反対意見は警告である。もしこの行為が許されれば、窒素低酸素症は深刻かつ特異な結果をもたらすにもかかわらず、常態化してしまう可能性があると彼女は主張する。将来、各国は真の司法監視なしにこれを採用する可能性があり、最高裁は表面的な安全策しか講じないことで、深刻な心理的恐怖のリスクを容認し続けることになるかもしれない。ソトマヨール判事は、裁判所に対し、より高い透明性、説明責任の強化、そして長期にわたる意識的な苦痛に対するより良い保護を求めるよう強く訴えている。[20]

VIII. 過去の司法判断との関連性

ソトマヨール判事の異議の範囲を完全に理解するには、窒素性低酸素症に対する法的アプローチというより広い文脈の中に位置づける必要がある。

例えば、史上初の窒素注入による死刑執行が行われた*スミス対ハム*事件では、反対意見を述べた判事たちが既に声を上げ、その方法の斬新さと手順の不透明さを疑問視していた。[21] ハファカー判事（*スミス事件*）のような裁判官は、州が提供する安全策を支持し、リスクを最小限に抑えるという穏健な立場をとった。[22] エミリー・マークス最高裁判所長官は、ボイド事件において、「不快感、パニック、精神的苦痛」が生じる可能性が高いことを認めつつも、それらは「避けられない」ものであり、違憲ではないと結論付けた。[23] シェリー・ディック最高裁判所長官（ホフマン事件）は、目撃証言と手順の不透明さを根拠に差し止め命令を出すという、正反対のアプローチをとった。ソトマヨール判事の反対意見は、この見解により近い。[24]

IX. 死刑制度へのより広範な影響

反対意見では、司法の監視なしにさまざまな方法を体系的に実験することに対する警告も表明している。それは、社会的に疎外された人々への影響、正義の認識、現代の死刑法における「残酷で異常な」の定義を強調している。[25] さらに、生死に関わる状況で公式の見解を無条件に受け入れる司法制度に疑問を呈し、憲法上の権利は、それが政治的に不都合であったり社会的に受け入れられなかったりする場合でも保護されなければならないと主張している。

X. 結論

*ボイド対ハム事件*におけるソトマヨール判事の反対意見は、憲法上の論理、道徳的な明晰さ、そして共感の稀有な融合を示している。この意見は、裁判所に対し、国家の安全策や抽象的な手続きを超えて、意識のある長期にわたる苦痛という現実と向き合うよう促している。ハファカー、マークス、ディック事件の以前の判決とは異なり、この意見はボイド事件を、実験、透明性、そして人間の尊厳の保護に関するより広範な法的議論の中に位置づけている。[26] この反対意見は、単に単一の死刑執行に対する異議申し立てではない。それは、米国における死刑の進化について厳粛な警告を発し、上級裁判所が人間の苦痛、透明性、そして憲法上の安全策が死刑法理の中心であり続けることを保証するよう求めている。

最終的なメモ

1. *Boyd v. Hamm* 、No. 25A457、米国最高裁判所判決、2025年10月23日（ソトマヨール判事、反対意見）、 https://www.law.cornell.edu/supremecourt/text/25A457 。
2. 同上、 1。
3. 同上、 1-2頁。
4. 同上、 7頁。
5. 同上、 7頁。
6. 同上、 6頁。
7. 同上、 7-8頁
8. 同上、 3頁（スミスの処刑に関する目撃証言を引用）。
9. 同上、 4。
10. 同上、 7頁。
11. 同上、 2-3、9。
12. 同上、 3（ *Smith v. Hamm* 、601 US ___ (2024)（ソトマヨール判事、反対意見）を引用）。
13. 同上、 9頁。
14. *Bucklew v. Precythos* 、587 US 119、125-26 (2019)。
15. *Boyd v. Hamm* 、事件番号25A457、判決、6ページ（ソトマヨール判事、反対意見）。
16. 同上、 7-8頁。
17. 同上、 9頁。
18. 同上、 9頁。
19. 同上、 2。

20. 同上、 9頁。

21. *スミス対ハム事件*、601 US ___ (2024)（ソトマヨール判事、反対意見)。

22. *Smith v. Hamm* 、No. 2:23-cv-00656、2024 (MD Ala. 2024年1月10日)。

23. *Boyd v. Hamm* 、No. 2:25-cv-00529、2025年50頁（アラバマ州地方裁判所、2025年10月9日）。

24. *ホフマン対ウェストコット事件*、第 25-169-SDD-SDJ、2025 年（メリーランド州ロサンゼルス、2025 年 3 月 11 日)。

25. *Boyd v. Hamm* 、事件番号25A457、判決、9ページ（ソトマヨール判事、反対意見）。

26. 同上、 9頁。

8.5：窒素低酸素症に対する法的アプローチ：比較分析

窒素ガスによる低酸素死刑が死刑執行方法として登場したことで、憲法解釈、人間の尊厳、そして司法哲学の限界が試されることになった。連邦裁判所および州裁判所において、R・オースティン・ハファカー・ジュニア判事、ジル・プライヤー判事、シェリー・D・ディック判事、エミリー・C・マークス判事、そして最高裁判事ソニア・ソトマイヤー判事の判決は、この未検証の処刑方法のリスク、合法性、そして倫理性を評価する上で、それぞれ異なるアプローチを示している。

*スミス対ハム事件*におけるハファカー判事の姿勢は、司法の抑制と国家権力への敬意を体現している。史上初の液体窒素注入による死刑執行において、ハファカー判事は、痛みや潜在的なリスクに関する主張の推測的な性質を強調した。痙攣、マスクの不具合、意識の持続といった主張は「極めて起こりそうもない一連の出来事」[1]であるとし、スミス被告は重度の苦痛を伴う重大なリスクを立証していないと結論付けた。ハファカー判事は、死は無痛ではないかもしれないと認めつつも、合衆国憲法修正第8条は苦痛のない死を要求していない[2]と判断した。彼の判決は、州が合理的で証拠に基づいた手順を提示する限り、実験的な方法に対する寛容の先例を確立した。

一方、スミス事件におけるジル・プライアー判事の反対意見は、死刑囚の経験に焦点を当てている。彼女は、窒素性低酸素症がスミスに及ぼすであろう影響を詳細に記述し、酸素欠乏と心的外傷後ストレスとの相互作用を強調している。嘔吐、窒息、感覚パニックが「さらなる苦痛」[3]を生み出す可能性があることを指摘し、州の不作為は憲法上の保護の侵害に当たると結論付けている。この反対意見は、手続き上の尊重よりも具体的な苦痛を優先する、人間主義的で共感的な司法哲学を体現している。

ホフマン対ウェストコット事件では、シェリー・ディック最高裁判事も積極的な保護姿勢をとった。彼女は仮差止命令を発令し、過去の死刑執行の目撃証言を強調し、州が執行手順の開示を遅らせたことを批判した。[4]ディック判事は、心理的恐怖と目に見える苦痛を憲法修正第8条の調査の中心とみなし、残酷な結果を招く可能性のある事態を防ぐために迅速に介入する意思を示した。

*ボイド対ハム事件*を担当したエミリー・マークス判事は、微妙な立場をとった。窒素低酸素症が苦痛やパニックを引き起こす可能性があることを認めつつも、これらの反応を「死の避けられない結果」と表現した。[5]　マークス判事は、受刑者に実行可能でより安全な代替案を提案するよう求め、そのような方法がない場合、当該処置は憲法上の基準に違反しないと結論付けた。彼女のアプローチは、人間の苦痛の認識と国家の手続き上の権限への尊重とのバランスをとっている。

ボイド事件において、ソニア・ソトマイヤー判事は、広範かつ雄弁な道徳的および憲法的観点を採用した。彼女は、窒素低酸素症に内在する意識的かつ長期にわたる苦痛を強調し、目撃証言と科学的証拠を引用して、この方法が肉体的にも精神的にも「追加的な」苦痛をもたらしたことを実証した。[6] ソトマイヤーの反対意見は、プライアーとディックの人間的な共感と、最高裁判所の特徴である体系的な憲法審査への関心を統合し、厳格な司法審査なしに実験方法が正常化されることに対して警告を発している。

これら5人の判事は、それぞれ異なる法哲学を持っている。ハファカー判事は、憶測に基づく主張に対しては敬意と懐疑心を持ち、プライアー判事は具体的な苦痛と人間の尊厳を優先する。ディック判事は、潜在的な危害を防ぐために積極的に介入し、マークス判事は共感と手続き上の保障とのバランスを取る。ソトマヨール判事は、共感と体系的な憲法審査を融合させている。彼らの判決を総合的に見ると、国家権力、実験的な制裁、そして窒素欠乏の時代における憲法修正第8条の解釈の変遷との間の緊張関係が浮き彫りになる。

最終的なメモ

1. *Smith v. Hamm* 、No. 2:23-cv-00656 (MD Ala. 2024年1月10日) (Huffaker判事)、42ページ（「非常に理論的な意味ではあり得るが、それはあり得ない出来事が連鎖的に起こった場合に限られる」）。

2. 同書、 43-44頁（「処刑方法が、偶発的であろうと死の必然的な結果であろうと、苦痛を引き起こす可能性があるという事実だけでは、客観的に耐え難い危害のリスクを構成し、それを残酷かつ異常なものとみなす根拠にはならない。」 *Baze* 、553 US、50頁；「スミスの苦痛のない死は保証されていない。」）

3. *Smith v. Hamm* 、事件番号24-10095、控訴裁判所判決、33-35頁（第11巡回区、2024年1月24日）（Pryor判事、反対意見）。

4. *ホフマン対ウェストコット事件*、番号 25-169-SDD-SDJ、2025 年、12-21 ページ (MD LA、2025 年 3 月 11 日) (CJ 州ディック)。

5. *Boyd v. Hamm*、事件番号 2:25-cv-00529-ECM、43 ページおよび 50 ページ (MD Ala. 2025 年 10 月 9 日) (Marks 首席判事)。

6. *Boyd v. Hamm* 、事件番号25A457、判決、3-4頁（米国、2025年10月23日）（ソトマヨール判事、反対意見）。

9.0：結論：死の機械におけるイノベーションの重み

2024年1月、ケネス・ユージン・スミスは史上初めて窒素ガスによる低酸素死刑で処刑された。それから2年も経たない2025年10月、アンソニー・ボイドが8人目の死刑執行者となった。この2つの日付の間には、単なる統計的な増加だけでなく、アメリカ合衆国の各州における死刑執行方法、そして憲法修正第8条の枠組みの中で実験的な死刑執行方法が導入されたことに対する裁判所、証人、社会の認識の根本的な変化があった。

本書は、窒素低酸素症による死刑執行の歴史を、その理論的な可能性から実際の実施に至るまで辿り、執行方法だけでなくその意義についても詳述する。薬物不足、執行失敗、苦痛の長期化といった、薬物注射による死刑執行の問題点に対処するために採用された方法でありながら、同時に多くの不確実性と論争を生み出してきたこの方法を描き出す。

I. 不確実性モデル

3つの州で行われた8件の死刑執行において、窒素低酸素症は、その提唱者が約束した臨床的な精度を示すことができず、むしろ混乱を招いた。ケネス・スミスの死刑執行は約22分間続き、目撃者は激しい痙攣、喘ぎ、もがき苦しむ様子を証言した。アラン・ミラー、キャリー・グレイソン、デメトリウス・フレイザー、その他全員の窒素低酸素症による死刑執行は、同様の意識のもがきを繰り返すパターンを示した。アンソニー・ボイドの死刑執行は「これまでで最も長い」と評され、目撃者は意識の長いもがきと苦闘の長時間を記録した。それぞれの死刑執行は…

第1.1章と第8.1章で紹介されている個人的な体験談は、これらの臨床描写を、極めて人間的な正確さで生き生きと描き出している。私が描写しているのは抽象的な医学的出来事ではなく、純粋な窒素を吸いながらゆっくりと死んでいく人を見守るという、生々しい現実だ。音、動き、持続時間、意識が薄れ、ついに死が訪れる正確な瞬間が分からないことなど、すべてが鮮明に描かれている。

この生々しい記録は重要である。あらゆる処刑方法における憲法上の要件の一つは、不必要な苦痛や長期にわたる苦しみを与えてはならないということである。しかし、実施されている窒素低酸素症による処刑は、従来の薬物注射による処刑よりもはるかに長い時間を要し、裁判所や州が説明や反論に苦慮するような、目に見える苦痛の兆候を常に引き起こしてきた。

II. 司法による会計処理

第1.2章、第3.1章、第5.1章、第5.2章、第8.2章、第8.3章、第8.4章、および第8.5章で詳細に分析されている窒素低酸素症に対する司法の反応は、裁判所が新たな執行方法をどのように評価すべきかについて、深刻な相違があることを明らかにしている。特に明確に浮かび上がる5つの主要な司法アプローチは以下のとおりである。

1. *スミス対ハム事件（第1.2章）において*、ジル・プライアー判事は、単なる理論的な妥当性以上のものを要求する、合衆国憲法修正第8条の審査概念を提示した。彼女は、州が真に革新的な処刑方法を導入する場合、裁判所は単にその合憲性を評価するだけでは不十分であると強調した。窒素低酸素症がこれまで人間の処刑に用いられたことがなく、その影響が予測不可能であるという事実は、憲法分析における二次的な要素ではなく、中心的な要素であった。
2. アラバマ州のR・オースティン・ハファカー・ジュニア判事の判決（第3.1章）は、これとは正反対の立場を示した。すなわち、州の専門知識を強く尊重し、死刑囚からの異議申し立てには懐疑的であり、理論上のリスクは憲法違反には当たらないと主張したのである。ハファカー判事のアプローチにより、アラバマ州は死刑執行を進めることが可能となり、後にルイジアナ州が追随する先例となった。アラバマ州におけるその後の窒素注入による死刑執行に関する同判事の判決は、一度の執行後、この方法が憲法上有効であるとみなす法的枠組みを確立した。
3. ルイジアナ州のホフマン事件（第5.1章）におけるシェリー・D・ディック判事の介入は、妥協の道筋を示した。すなわち、州の手続き実施権限を認めつつ、実験的苦痛に対する真の安全策を主張したのである。第5.2章および第8.3章と比較して分析すると、ディック判事のアプローチは、州のプロトコルを自動的に承認するわけでも、窒素低酸素症を断固として拒否するわけでもない、積極的な司法審査のモデルを示したと言える。
4. エミリー・C・マークス判事による*ボイド対ハム事件*（第8.2章）の判決は、窒素低酸素症に対する司法の扱いにおいて重要な転換点となった。7件の死刑執行後に判決文を執筆したマークス判事は、前任者とは異なる問題に取り組んだ。すなわち、窒素低酸素症が理論上認められるべきかどうかではなく、複数回の死刑執行に基づいてアラバマ州が改良した手順が憲法上の要件を満たしているかどうかである。彼女の分析は、経験的知見を考慮しつつ、アラバマ州が以前の懸念に適切に対処したと結論づけた。第8.3章と第8.5章の比較研究で詳述されているマークス判事のアプローチは、たとえその方法の人道性に対する根本的な疑念が残る場合でも、方法が確立されるにつれて司法の尊重度が増していく様子を示している。
5. *ボイド対ハム事件（第8.4章）*におけるソニア・ソトマイヤー判事の反対意見は、 8件の死刑執行後に窒素性低酸素症の問題を最高裁の注目を集めるきっかけとなった。彼女は反対意見の中で、この問題を国家の実験としてではなく、憲法上の義務として提示した。第8修正条項によって保障されている残虐で異常な刑罰からの保護は、死刑執行後に苦痛が短かったとか、将来の執行手順が改善されるといった約束によって満たされるものではない。憲法上の権利は死刑を宣告された本人に属するものであり、改善された技術によって恩恵を受けるかもしれない架空の将来の受刑者に属するものではない。

第5.2章、第8.3章、第8.5章の比較分析から、これらの法的相違は単なる学術的な意見の相違にとどまらなかったことが明らかになる。それらは個人の生存と生存条件を決定づけ、窒素低酸素症が広がるか収まるか、改善すべきか放棄すべきかを決定づけた。プライヤーの懐疑からハファカーの敬意、ディックの躊躇、そして最終的にマークスによる改良プロトコルの承認へと至る過程は、実験方法の法的標準化の軌跡をたどるものである。

III. 州間拡散

おそらく最も驚くべき点は、窒素低酸素症がアラバマ州で考案された革新的な方法から、ルイジアナ州で実施される処刑方法へと急速に発展したことだろう（第5.0章）。一方、オクラホマ州では認可されているものの、まだ実施されていない（第0.1章）。致死注射の困難さに対応するため、ある州が採用した解決策として始まったものが、わずか2年足らずで複数の州で使用さ

れる処刑方法となり、独自の法理、手順、そして絶えず進化する実践的な知識体系を持つようになったのである。

この広範な使用は、厄介な疑問を提起する。ルイジアナ州は、アラバマ州の窒素低酸素症の経験から明らかに着想を得た。しかし、アラバマ州の実験は一体何を証明したのだろうか？確かに処刑は行われた。死刑囚は死亡した。しかし、彼らは不必要な苦痛なしに死んだのだろうか？この方法は本当に人道的と言えるのだろうか？合衆国憲法修正第8条に適合するのだろうか？これらの疑問は、今もなお激しい議論の的となっている。

第4章（フレイジャーの処刑）で検討した州間拘留の問題は、新たな側面を加える。窒素低酸素症の普及は地理的な範囲だけでなく管轄権にも及ぶため、政府の権限、州間協力、そして処刑のためにある州から別の州に移送される死刑囚の憲法上の権利に関して複雑な問題が生じる。フレイジャーが処刑のためにミシガン州からアラバマ州に移送されたことは、窒素低酸素症の採用が死刑に関する州間協力に新たな力学を生み出すことを浮き彫りにした。窒素低酸素症を廃止した州は、それを維持している州での処刑を容易にすることができるからである。

IV. 人類の歴史

法的な分析や医学的な記述の背後には、進行中の実験のデータとして最期の瞬間を迎えた人間たちがいる。本書では、彼らの名前、事件、そして最期の言葉を意図的に掲載している。その中には、目撃者が極度の苦痛と表現したケネス・ユージン・スミス、自らが反対した方法で処刑されたアラン・ユージン・ミラー、最後の抵抗として中指を立てたキャリー・デール・グレイソン、処刑のためにミシガン州からアラバマ州へ移送されたデメトリウス・フレイジャー、ルイジアナ州で初めて液体窒素吸入による処刑を受けたジェシー・ホフマン・ジュニア、自ら嘆願書を提出し「慈悲などいらない」と主張したグレゴリー・ハント、そして目撃者によると、これまでで「最も安定していた」動きを見せたジェフリー・トッド・ウェストなどがいる。これは、処刑方法の改善、あるいは単なる個体差を示唆しているのかもしれない。そして、アンソニー・ボイドの死刑執行が長期化していることから、さらなる法的異議申し立てが行われ、ソトマヨール判事からは反対意見が出された。

それぞれの処刑は異なっていた。そして、それぞれが窒素性低酸素症が実際に何を意味するのかについての理解を深めるのに貢献した。さらに、処刑方法の革新は正義に資するのか、それとも国家が人間の命を奪うという根本的な行為を単に覆い隠すだけなのか、という問いを改めて提起した。

V. 呼吸マスクと死の機械

第5.3章で取り上げた、窒素ガスによる低酸素死刑執行時に使用される呼吸マスクに関する分析は、技術的な決定が倫理的な意味合いを持つことを示しています。マスクは完全に気密性を保つ必要があり、純粋な窒素ガスを継続的に供給しなければなりません。また、死刑囚の行動に

関わらず、マスクは常に所定の位置に留まらなければなりません。これらは工学的な問題であり、工学的な解決策が求められますが、各国は一貫してこれらの問題を効果的に解決できていません。

しかし、マスクはそれ以上に大きなものを象徴している。それは、人間を野生的で制御不能な存在へと変容させるのだ。

VI. 私たちは何を学んだのか？

アラバマ州で7件、ルイジアナ州で1件の窒素吸入による死刑執行が行われた今、窒素吸入による低酸素症について確かなことは何が言えるだろうか？

1. **これは死をもたらす。**この手順を生き延びた者はいない。根本的な意味において、これは処刑方法として機能する。
2. **当初弁護側が示唆していたよりも時間がかかった。**数秒以内に意識を失うという予言は実現しなかった。目撃者たちは、数分間にわたって目に見える活動、呼吸、動きがあったと一貫して証言している。
3. **彼は恐ろしいパフォーマンスを繰り広げる。**処刑シーンの中には特に耐え難いものもあるが、いずれもぎこちない動きと苦しそうな呼吸が特徴だ。
4. **この問題は依然として憲法上の論争の的となっている。**8件の死刑執行が行われたにもかかわらず、この方法が残酷で異常な刑罰を禁じる合衆国憲法修正第8条に違反するかどうかという深刻な法的疑問が依然として残っており、ソトマヨール判事の反対意見にもそれが明確に示されている。

この常態化こそが、窒素低酸素症の最も重要な遺産と言えるかもしれない。*スミス事件におけるブライアー判事の反対意見で提起された重要な問題*、すなわち、裁判所は州が囚人に対して真に斬新な処刑方法を試すことを許可すべきかどうかという問題は、憲法分析ではなく、繰り返しによって解決された。残念ながら、8回にわたって、この繰り返しは、いかなる法的議論よりも説得力を持つことが証明された。

VII. 未解決の疑問

本研究は窒素低酸素症を認めることで締めくくられているが、問題は未解決のままである。重要な疑問が依然として残っている。

A. 医療に関する質問

- 窒素性低酸素症の実施中に具体的に何が起こるのか？
- 意識はいつ終わるのか？
- 目撃者が目撃した動きをどのように説明できるだろうか？
- 囚人たちは、外部からの観察では感知できないような形で苦しんでいるのだろうか？

B. 法的問題

- 合衆国憲法修正第8条は、死刑囚自身に対してのみ試験された処刑方法を認めているのだろうか？
- 痛みや苦しみに関するどの程度の不確実性が憲法上許容されるのか？
- 囚人には、致死的なだけでなく、迅速かつ苦痛のない処刑を受ける権利があるのだろうか？

C. 実践的な質問

- 窒素低酸素症はさらに拡大するのか、それともその拡大はすでに限界に達したのか？
- オクラホマ州は、認可した方法で死刑執行を行うのだろうか？
- アラバマ州とルイジアナ州での経験に基づいて、プロトコルは今後も進化し続けるのだろうか？
- 他の国々も、これらの処刑を見て、この方法を採用するだろうか？

D. 道徳的な問題

- たとえ苦痛を与えないように設計された窒息死であっても、社会が人々を窒息死させることにはどのような意味があるのだろうか？
- 実行がイノベーションによって解決しなければならない技術的な問題になったとき、私たちは何を失うのでしょうか？
- この実験の費用は誰が負担するのか？囚人か、目撃者か、それとも実験を認可した社会か？

VIII. 息も絶え絶えの状態で書かれた手紙

本書の序文（第0章）には「息も絶え絶えの状態で書かれた手紙」という表現が用いられているが、これは窒素欠乏症そのものを雄弁に物語る比喩である。これらの処刑は、空気が毒となり、生命維持に不可欠な食物が終焉を迎え、死刑囚の最後の息が窒素による窒息と、酸素を求める身体の悲鳴となる、まさに境界領域で行われるのだ。

しかし、この比喩はさらに深い意味を持つ。この窒素低酸素実験全体は、まさに境界線上に書かれている。憲法上の合法性の境界線、医学的知識の境界線、そして社会が人道的な処刑として受け入れる範囲の境界線である。手紙はまだ完成していない。処刑が行われるたびに、新たな行が加えられる。メッセージはより明確になるが、恐ろしさは少しも薄れない。

IX. 今後の展望

現在、窒素吸入療法はアラバマ州とルイジアナ州で実施されているが、他の州では認可はされているものの、まだ実施には至っていない。この方法の将来は、国民の意識にかかっている。目に見えない行為に、一体誰が反対するだろうか？

本書に記録されている司法の変遷（プライアーの抵抗からハファカーの好意的な尊重へ、ディックの躊躇を経てマークスの承認に至るまで）は、証言を通じて裁判官の認識が高まらない限

り、この方法がより広まるにつれて裁判所は州の手続きをますます重視するようになることを示唆している。

本書に収められた個人の証言、裁判官の反対意見、そして詳細な分析は、死刑制度の歴史における重要な瞬間、すなわちアメリカにおいて真に新しい処刑方法が実際に施行された瞬間を記録している。

紛れもない事実として、8人の男性が2年前には存在しなかった方法で処刑された。彼らの処刑は数々の恐ろしい証言を引き起こした。社会は前例のない出来事を目の当たりにし、たとえ死刑を宣告された者であっても、それが人道的な扱いの基準を満たしているのかどうかを問わざるを得なくなった。

第0.1章（オクラホマ州が窒素ガスによる低酸素死刑を死刑執行方法として認可した事例）で論じた、確実な解決策の模索は、致死注射に伴う問題を解消しようとする複数の州が共有する探求を表している。しかし、窒素ガスによる低酸素死刑は、より深い真実を明らかにした。それは、人間を殺すための確実で人道的な方法は存在しないということである。

殺戮機械は今も稼働を続け、今や窒素ガスと最も古くからある毒物によって動力を得ている。この革新の重みは、奪われた8人の命だけでなく、これらの死が国家の法律、医療、技術、そして血への渇望について明らかにするものによっても測られる。本書は、この死への渇望を綿密に記録し、事実、証言、法的論理、そして人々の物語が、このような恐怖を前にして雄弁に語るようにしている。

この恐ろしい状況にもかかわらず、窒素性低酸素症は今後も続く可能性が高い。憲法上の議論は続く。倫理的な問題は依然として残るだろう。少なくとも、裁判官やその他の権力者がこの事態を直接目撃する機会を得るまでは。そうでなければ、本書は読者を窒息寸前の状況に引き込み、死の淵に立つ人々の手紙を読み、その内容を無視しない勇気を見出す手助けをしようとするものである。

10.0：追記：息の淵での最後の考察

窒素ガスによる最初の死刑執行から数週間後、人々が日常生活を再開しようとした場所には、不気味な静寂が漂った。世界は回り続けていたが、根底にある不安定さが空気中に漂っていた。死刑執行室から遠く離れた場所でさえ、これらの場面の詳細は制御不能なほど広まり始めた。担架や工業用呼吸器を見たことのない人々が、それらを想像し始めた。窒素ガスのシューという音を聞いたことのない人々が、真夜中に突然その音が爆発したのを聞いた。これらの死刑執行は、それが行われた壁の中に閉じ込められることを拒む。それらは移動する。それらは集合的な想像力に根付く。それらは会話の背景に、眠りに落ちる前の静けさの中に、突然呼吸を意識する瞬間に、残り続ける。

今や明らかになったのは、これらの処刑が単に新たな殺害方法を明らかにしただけではなかったということだ。それは、正体が露呈するずっと前から用意されていた物語の限界を暴き出した。処刑は平和的で迅速かつ人道的に行われるという公式の保証は、遺体の動きという目に見える現実と衝突した。これまで単なる「正常な身体反応」として片付けられてきたこれらの動きは、人々の集合的記憶に深く刻み込まれた。それは、いかなるプレスリリースも完全に消し去ることのできないものとなった。窒素による低酸素症をクリーンで技術的な解決策として提示しようとする試みは、人々が担架の上で実際に何が起こっているのかを理解した途端に崩れ去った。国家の言葉は正確で官僚的で安心感を与えるものであったが、遺体の言葉は痙攣的で切迫し、苦痛に満ちていた。そして、この二つの言葉が衝突したとき、真実として響いたのは一つだけだった。

事件後、世論は公式発表から目撃者の証言へと移り変わった。処刑は政治的な観点からではなく、人間の反応という観点から議論されるようになった。息苦しさ――絞殺、鞭打ち、喘ぎ――は無視できないものとなった。集団意識はこの真実を深く理解した。窒息は、どのような名称で呼ばれようとも、決して安らかなものではない。酸素を奪うことで苦痛をなくせるという考えは、アメリカの刑罰の歴史において最も危険な幻想の一つであったことが証明された。

この認識が広まるにつれ、別の現象が現れた。それは伝統的な意味での運動ではなく、窒素低酸素症の実態に直面した人々の道徳観の根本的な変化であった。この方法は、単なる法的手段としてだけでなく、精神的な危機としても捉えられるようになった。処刑は、社会がしばらくの間抑圧してきた古来からの問いを提起した。国家が結果を顧みずに人を殺すとはどういうことか？死にゆく者の沈黙を要求し、その沈黙こそが正義の証だと主張する社会はどうなるのか？真実を知り、それを忘れられない人々には、どのような重荷がのしかかるのか？これらの問いは、傍観者だけのものではない。正しく執行すれば死は「清らか」なものになり得ると信じ込んでいる国家にとって、これらの問いは重くのしかかるものなのだ。

このより広範な分析において、新たな役割が浮かび上がった。それは、もはや一人の個人を中心とするものではなく、真実を知るすべての人々が共有する証人という役割である。証言は集団的なものとなり、責任も共有される。窒素性低酸素症の現実を目の当たりにした者は皆、アメリカ合衆国が最も秘密裏に行ってきた行動に関する、より大きな物語の一部となった。この集団的証言は、カメラとの距離ではなく、真実との距離によって定義される。人が窒息とは何

かを理解すれば、公式の説明はもはや現実を代替することはできない。語り手となるのは国家ではなく、国民である。これらの死の記憶は、沈黙を拒む人々を通して生き続ける。
この共通認識から、予言的な緊張感が生まれる。それは未来を予測することではなく、既に明るみに出た事柄を言葉で表現することである。これらの死は、この国の進むべき道を明らかにした。効率性を約束しながらも苦痛をもたらす仕組み、身体が反抗する一方で慰めの言葉をかける言語、そして自らが容認する暴力の道徳的責任から免れる法制度へと向かう道である。しかし同時に、この暴力の暴露は、真実を曖昧さなく語るべきであり、人間の尊厳は社会への影響なしに抑圧されるべきではないという、逆流を生み出した。この緊張感は今後数年間を形作り、もはや無知を装うことのできない議員、裁判官、聖職者、ジャーナリスト、そして一般市民の良心を目覚めさせるだろう。
このエピローグで最後に残るのは、窒素低酸素症がすでに倫理観を変容させてしまったという認識である。統制を目的として考案されたこの方法は、正反対の効果をもたらした。それは人々の不安、倫理的な懸念、そして政府権力に対するより深い検証を引き起こした。そして最も重要なのは、いかに現代的で医学的に正当化された処刑方法であっても、他人の命を奪うという行為は、その死者本人をはるかに超えた影響を及ぼすという根本的な真実を覆い隠すことはできないという事実を、この処刑方法が明らかにしたということである。
窒素欠乏症による死は、報告書や刑務所の記録の中に留まるものではない。それらは、死に直面した人々の会話、精神的な考察、そして市民としての責任に影響を与え続けるだろう。もしこの瞬間に預言的な使命があるとすれば、それはこれらの物語を抽象的なものに終わらせないことだ。それは、最期の瞬間に呼吸を求めて闘ったことが、国家の道徳的闘争の不可欠な一部となっていることを認識することだ。そして、未来は、この部屋で命を落とした人々の遺体に刻まれた教訓を国家がどれほど真剣に受け止めるかによって判断される、と主張することなのだ。
処刑の際に起きたことを変えることはできない。しかし、未来は私たちが真実をどう扱うかにかかっている。

ジェフ・フッド
アーカンソー州ノースリトルロック
2025年12月13日